神宮文庫

新編塵功記大全

吉田兼敦記

小倉文庫
イ 16
115

門416
號 115

吉田光由著述
吉田長穀訂正

新增
頭書

新編塵劫記大全

大阪書肆 岡本明玉堂藏

版權所有

昭和二十七年一月

あり即塵劫と呼ぶ事なり面白き利
書なり塵劫を稽古する者多し頃出版を開
業し後翼と猶法を説き大に世に
益せり近比書肆膳某國の人頁
塵劫記を求むるの上蘭洋算を
増補して稽古せり予に序を属せ
ず乃為し積功の勝ひ解部を許て
同じく此書を弘て広く益を補ひ
且近世通せるものにて載せ
て頁積み累ね多きに及ぶ
此書に見さること無し所謂管見也
猶足らざるものあり為に
義理を学ぶ者の之を補ひ然所
自感を生じ新に編成せ整理

の域を発むるを云ふ

徳時明治二十年五月中院

花房義質 陸奥宗光 伊藤博文 勅命 勅旨 大蔵卿 侯爵 伯爵

一乃 蔵書

洋算早合點

算用数字

零	一	二	三	四	五	六	七	八	九
〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九

算用数字を以て数を記せんと欲せば之を横書し単位を右端に記し順次に左方に高位を記し若し数単位に当らざるときは〇を以て之を補ひ而して何位に渝るも本位より数ふるを以て其位を填め其位を右端に記すべし今八億九千一十二万三千四百五十六を算用数字にて書すること左の如し

8,9012,3456

億千百十万千百十一

万万

新編塵劫記 目録

○大数の名社事 初丁
○小数社名の事 円
○糧乃数名社事 円
○田の数名乃事 円
○衡并に通貨の名社事 二丁
○度乃名の事 円
○社物軽重事 円
○九〇の数社事 円
○八算の割表社事 三丁
○円搗割の図并に注 円

附言　算用数字を以て横書したる数を計（位を定むるには四字毎に（，）コンマを系、記すべし

加法

二件以上の数量を統計するのは之を加法とす

（十）を加標と称して加算の符標なり

設令バ三百七十二と五百四と七百五十九とを加すれば何

算之ハ　三百七十二
　　五百四
　　七百五十九
十　　　　
　　　　　

答一千六百　三十九

諸則　法数の位置を對して重列し単位より加（初め通次）

○見一の割表の事　円七丁
○円掛割の号算之法　八丁
○掛くられる算の事　十四丁
○割てかけ算ふなる事　円
○米の賣買する事　円
○俵はかりの事　十七丁
○俵もぎ算の事　十八丁
○藁俵入る掛り方の事　十九丁
○眷減する事　二十丁
○味噌賣買の事　廿一丁
○塩賣買する事　廿二丁

其位より加して共和十を充つれバ十と一として次高位に送り十未満の余数を本位に書し若し其余数あるときハ明々参を以て之を補ふ次に次高位に移り前のごとく加術を行ひ次下位より来りたる数あれば其和を算入すべし

例類

```
   (3)
   4 8 9
   4 8 7 2
 6 5 3 4 2
+ 6 0 0 0
 7 3 4 0 3

   (7)
   3 4 2 9 9
+  4 2 5 0 9
   3 7 6 8 8

   (4)
   4 5 6 9
   4 7 8 7
 7 0 3 8 3
+
 2 6 3 9

   (2)
   2 0 0 3 3
   2 5 4 4 5 0
+  3 3 4 5 5
   6 3 5 5 6
```

○茶壺かひの事　廿三丁
○苅うる賣買する事　〃
○田畑粉賣買の事　廿四丁
○銭うり買の事　廿六丁
○銀替する事　廿八丁
○金両替する事　廿九丁
○小利息かいの事　卅丁
○万利息算用　卅一丁
○絹本弥賣買の事　卅三丁
○入子算の事　卅四丁
○長崎買物三人本銀割付する事　卅五丁

(8)
6789
7725
7477
7677
7877
+1278
減法
二種の数の差を求むるの術を
減法と云ふ
(二)八減標と称して減算の符
標なり
設令ば百九十六万三千七百六十
二より八十三万七千六百三十一を
減ずるときはの術
答 百十二万六千
百二十一

注則 減実の下に減法を列
州 筭
7963752
−8376317
7726727

○船乃運賃の事　世六丁
○同地積をめる事　世七丁
○知行物成乃事　八十八丁
○外乃法の事　八十八丁
○普外乃法の事　八十九丁
○萬方圓成物之代目積の事　九十丁
○材木賣買まハしの事　九十四丁
○檜皮ぶき之事　九十六丁
○竹まるしの事　九十八丁
○屋根葺板積る事　同
○分配のびる事　白一

書一単位より減じ初の其差を
本位の下に書して実数に数
より小なる時八次高位の中の一を
取りて之を十と見做し本位に加へ
其和より其数を減ず毎位此の
ごとくして左準と為る

例題

(1)
345 4039
− 256789
32022445

(2)
10234 5
− 2362
99776

(3)
10056
− 32
10024

(4)
456 7035
− 200399
4366436

(5)
6783 40
− 5204 93
737847

乗法
同等の数量を幾次相和する

○屏風箔置積りの事　百一丁
○箔うるま買ふとしる事　百三丁
○川普請の事　同
○堀普請乃事　百五丁
○縄子だての事　百八丁
○樽の入目之事　百九丁
○立本の所を積る事　百十丁
○町ばり乃事　百十一丁
○祝ずみ算の事　百十二丁
○日〻一倍の事　百十四丁
○日本国中男女の数積の事　百十六丁

を單に二次の術と云く其統計を知のは之を乗法と云ふ即因数をかつもくりかく（×）ハ乗標と称して乗算乃待標なり

設令八十二万三千四百五十六七を乗ずれば何

算 6672
× 9792
廿 123456
864792

答八十六万四千百九十二

設令八七十七万六千六百五十九を二百十三回相加すれば何

算 9213
× 277669
廿 77669
553378
2836669

答一億六千五百四十三万八千三百六十七

○かゝる算のこと、

百十八丁

○縮盗人を知る事

同

○布壱反の経緯の長を積る法

百十九丁

○油を入る算法事

同

○金銀千枚を開立して積る法

同

○やとゝ算の事

百廿丁

○百五人とゝいふこと

同

○産業（囲炉裏入る事）

同

○百万法の〻数を並べて見る法

百廿一丁

○六里の道を四人して馬三疋を雇人る法

百廿二丁

○開平法開実法して除る事

百廿三丁

【凡則】乗実の下に乗法を書し単位より乗じ始め其積（積とハ両数を相乗じて成り立る数をゝ）十に充つるとき八其十を次高位送り余数を本位の下に書次ぎ次高位の相乗を加し其積と次下位より来る所の十位の数を加へ之を本位の下に書すると前と同じ毎位次の術を反覆して実数の左端より右に上に述べる所ハ単位数の乗法にして又一位位ずつ高位に進むとしてなほ端の法数一個を乗実に乗じ次ニ又其法の次真位を後乗実に乗じ尚ホ乗位するものハ逆ひ法数を毎個各別に相乗じ其相乗積を各

○開平法の事

百廿五丁

○開立法の事

百廿六丁

○九〻の惣数を求る法

百四十丁

○自乗者の法

百四十二丁

○除法を加法を用ゆる術

同

○乗法を減法を用ゆる術

百四十三丁

○約術

百四十四丁

○絵画にて見立る術

百四十五丁

○田畑の高さを平均する法

百四十九丁

○兄弟年数を平等に配る法

同

○祖富一連成物の高下を知る法

百五十丁

本位小相剋して横書し独る後糸積を相加ふるを二位以上の相乗積となす

例題

(1) 56781×2=113562

(2) 48657×7=340599

(3) 91012×56=5096672

(4) 38910×100=3891000

(5) 4689×5672=26596008

二本の標はイクオールと称して左右同等の数量なる意をしめす

右例題の筭竹を表にしるすこと左のごとし

(1)
56781
× 2
113562

(2)
48657
× 7
340599

(3)
91012
× 56
546072
455060
5096672

(4)
38910
× 100
00000
00000
38910
3891000

○位を具へる社術　百五十一丁
○寸分平基盈縮の法　百五十二丁
○諸石数人力乃割法　百五十三丁
○本米供給乃法　百五十四丁
○供給饅頭の法　同
○四乗法五乗法の事　百五十五丁
○日一倍の急術　同
○九減七減の法　百五十六丁
○勾股弦の法　百五十七丁
○探積乃定例　百五十九丁
○縄矢弦の法　百六十丁
○玉矢玉縄玉周積法　百六十一丁
○天元術　百六十二丁
○方斜率法　百六十三丁
○暦法大意　百七十九丁
○鈎中鈎差の捷術　百八十一丁
○卵形積　同周の歩を知る法　百八十二丁
○圓形角　周積　縄角　斜積　円周　積角　百八十三丁
○角面積圓縄より周を知る法　百八十四丁
○平方基の歩を知る法並切子　同
○方錐形　蕎麦　くさび形　百八十五丁
○三角形　四角　五角　六角　七角　八角　九角　十角　百八十六丁

(5)
4689
×5672
9378
32823
28734
234445
26596008

附言　乘法の右端小零あるときは之をなきものと見做して省畧し以下はのゆく乘術を施し而て惟其零の最後乃右端に前に省きしところの零を附添すべし此術を用ゆるに得し乘積と数て異なることなしこれ運算上大に捷しを得るなり今前(4)の問題をもつて之をためしてとるのおもし

○鈎股内四重乃方面　百八十六丁
○斜三角三較連乘法　見暦書　百八十七丁
○蕎麦形の本術　四望面積とも　百八十八丁
○切子乃本術　方焼積とも　同
○八角本術　附五角　百八十九丁
○平方壇の本術　百九十丁
○角術捷徑略式　同
○五角十二結晶圓の積を求る捷徑術　百九十二丁
○線上より大小二圓を載る術　百九十四丁
○直内に三圓を容る術　百九十五丁
○圓内小大方を容る術　百九十六丁

3891
×100
389100
除法

式粒中より因等の数量を幾次相減ずることを単に一次の術を以て発見する社法なり粒を除法とも即数埒なり分つかり
(子)式は(ミ)も除算の待標なり
法数をもつて実数を除ぜし粒これを商と云ふ而して商は幾次相減ずることを表すの社なり
たとへば拾二万三千四百文拾六を六すべく除ぜれば如何

○側角の内へ大小二圓を容る術　百九十六丁
○円傍斜を以て大小二角を容る術　百九十八丁
○布種緯長を測る本術　同
○綾織買人合せ本術　百九十九丁

首書目録

○記数式の事　一丁
○加法の事　一丁
○減法乃事　二丁
○乘法の事　三丁
○除法の事　六丁
○括弧用法の事　二丁
○四則應用問題　四丁
○小数提要　五丁
○書法命位の事　六丁
○後添零乃事　六丁
○前置零の事　七丁
○小数加法の事　七丁

筭 20576

仲 6/723 4 56/

72
72

3 4 0
3 3

5 2
4 4

3 6
3 6

0

答二万〇五百七十六

五千六百七十八あり之を二小て除すべし商如何

筭 2839

仲 2/5 4 678/

76
76

6 7
6 7

8
8

0

答二千八百三十九

四千万五千三百八十を十三を除すれば其商如何

○小数減法の事　七丁
○小数除法の事　十丁
○米麦買の事　十四丁
○俵枚筭の事　十八丁
○銀去替の事　廿五丁
○小判去替の事　廿九丁
○絹本絮買の事　卅一丁
○長崎買もの　卅四丁
○同地八事　卅五丁
○建坪の事　五十四丁
○紙幣物成の事　六十八丁
○外乃法の事　八十八丁
○小数乗法の事　八丁
○掻て割る筭の事　十四丁
○俵まきの事　十七丁
○酒醤油水油麦買の事　十九丁
○小判去替の事　廿八丁
○絹本絮買の事　卅三丁
○同地八事　卅七丁
○建坪の事　五十九丁
○紙幣物成の事　八十六丁
○外乃法の事　八十八丁

筭 33780

仲 12/405360/

36

4 5
3 6

9 3 4
8

9 6
9 6

0

答三万三千七百八十

法則　実数の左端より法数の位数小数一個を截除し小截除中には数幾許を含むやと位測し之を第一商として実数を右方に置き此商を再び法数小乗じ得る積を実截除の数より減じ其残を実数の次下位一数を下附し又之を実数として第二商を求むること始の如し実数の右端小

○材木法の事　九十三丁
○竹まハしの事　九十七丁
○勾配のびける事　百丁
○縮まハしの事　百三丁
○堀普請の事　百五丁
○樽の入目法の事　百九丁
○町積の事　百十丁
○銭一文より一倍の事　百十五丁
○かゝり筭の事　百九丁
○絹盗人を知る事　同
○百五減の事　百十三丁
○百万両の人数を立る事　百十一丁
○檜皮まハしの事　九十六丁
○屋根葺板積の事　九十八丁
○屋敷の坪積の事　百一丁
○普請くろの事　百三丁
○継子立の事　百九丁
○立木の見やうの事　百十丁
○移づゝ筭の事　百十四丁
○日本国中男女の粒の事　百十七丁
○やくゝ筭の事　百十丁
○八百姓に隔るぬ事　百十一丁

為して一数を下附し商は数実数の大已て商を為る従ざる時を商位に零一個を附し再び一数を下附す総て二数を下附する時零一個を附し三数を下附する時は零二個を商に附すべし又除数を以て商実数の右端に零を割附ハ之を商の右端に付添べし

例題

(1) 3456÷3=1152

(2) 56784÷4=14196

(3) 9648÷24=402

(4) 10345656÷102=101428

(5) 46728÷3894=12

○三人して袴を　百廿一丁　○開平は乃事　百廿二丁

三くだり第一

○開立は乃事　百廿六丁

○平方の事　百廿丁　○差は用ふる称呼　百四十丁

○除は用ふる加は乗は用ふる減は乗法の書　百四十丁　○約術の事　百四十丁

○自乗者は術起　百四十丁　○萬盛術の部　百四十六丁

○改算起好の部　百八十丁　○計程町回術も亦　百九十丁

○三乗はの事　百九十丁　○前管の事　二百丁

総目録終

右例題の算術を示す左のごとし

(1)
```
3/3456/1152
3
 4
 3
  15
  15
   6
   6
   0
```

(2)
```
4/56784/14196
4
 16
 16
  4
  4
   28
   28
    4
    4
    0
```

(3)
```
24/9648/402
96
 48
 48
  0
```

新編塵劫記大全

大数之名乃事

一	十	百	千	万	億	兆	京	垓	秭	穰	溝
	十万	百万	千万		十億	十兆	十京	十垓	十秭	十穰	十溝
					百億	百兆	百京	百垓	百秭	百穰	百溝
					千億	千兆	千京	千垓	千秭	千穰	千溝

澗	正	載	極	恒	河	沙	阿	僧	祇	那	由
十澗	十正	十載	十極	十恒	十河	十沙	十阿	十僧	十祇	十那	十由
百澗	百正	百載	百極	百恒	百河	百沙	百阿	百僧	百祇	百那	百由
千澗	千正	千載	千極	千恒	千河	千沙	千阿	千僧	千祇	千那	千由

他	不	可	思	議	無	量	大	数			
十他	十不	十可	十思	十議	十無	十量	十大	十数			
百他	百不	百可	百思	百議	百無	百量	百大	百数			
千他	千不	千可	千思	千議	千無	千量	千大	千数			

○小数之名乃事

分	厘	毫	絲	忽	微	纖	沙	塵	埃		

(5)
3 8 9 4 / 4 6 7 2 8 / 12
3 8 9 4
7 7 8 8
7 7 8 8
0

(4
102 / 1 0 3 4 5 6 5 6 / 1 0 1 4 2 8
1 0 2
1 4 5
1 0 2
4 3 6
4 0 8
2 8 5
2 0 4
8 1 6
8 1 6
0

○根乃数と名の事

斛　斗　升　合　勺　抄　撮　圭　粟

○田かずの名と事

一町　但六十百四方也
一反　むゝ八三百六十坪
一畝　三十歩をいふなり
一歩　一坪をいふなり
一分　長さ六尺五寸
一厘　長さ六寸五分
一毫　長さ六寸五分
一絲　長さ六分五厘
一忽　長さ六分五厘
一微　長さ六厘五毛

今ハ三百坪ヲ云也
廣さ六寸五分
廣さ六分五厘
廣さ六分五厘
廣さ六厘五毛
廣さ六厘五毛

一町乃事
一畝乃事
一歩乃事
一分乃事
一厘乃事
一毫乃事
一絲乃事
一忽乃事
一微乃事

○括弧用法

(一)(二)(三)等括弧標と名づけ式の組立をつかさどる「」「」「」等の法符を連綴したる若干復数を包括して式中施術の前後如何を掲示するに便ぜんが為にして共用法の順序一定せざるべしいへども多分之を大中小の三個に区別し先括弧小を以て最初に用ひ次に中括弧を用ひ最後に大括弧を用ひる若干数を包括する時ハ(中)を用ひ復又其法数を包括せんと欲する時ハ〔大〕を用ひ然る後其他括弧の形象を以て其他括弧ありといへども尤も通

○衡　并に通貨の名称事

貫　十百文目を小貫以上大数を用ひ
百　十十文目をいふ
十　一文目十を以
銭　一文目を以小数を用ひ
兩　四文目　或四文目三分　或四文目四分　小判ハ一枚を兩とす
分　四分兩一の一
銖　十六分兩の一
斤　百六十文目　或百八十目　或二百文目　或二百三十文目　或二百五十文目

○度法名のすじ

端　二
端尺　二天八
丈　十
尺　十
寸　十
分　十
厘　十
毫
絲
忽

○法物軽重乃事

金　一寸四方　百七拾匁
銀　百四拾目
錫　六拾三匁
鉛　九拾匁
円　円

常算術に於て用ゆる所の指掌も敵と多数を要ぜめ伝へたるまゝ只一小同類の旅掛式を列記するにあるまて一式中煩雑の感ある可べ尚之を第二例の式と分類初学幼生の容易く了知し得べきを信じます所なり

即左の数例に拠りて之を比

$(15\times3)-(18+7)=20$

第一例

十五に三を乗ず―
積より十八に七を加へたる数を減ずれば残むるの末如数即ち二十となるとゝの義なり

玉	円	百弐十目	円 七十又
鐵	円	六十目	円 六十九又
青石	円	三十目	円
土	一尺四方	拾壱貫目	円

○九九乃数独書

二三ノ四	二三ノ六
二八十六	二九十八
三七廿一	三八廿四
四七廿八	四八卅二
又八四十	又九四十
七七四十九	七八六十六
二三ノ九	三四十二
三四十二	三又十又
三六十八	四七廿八
四八卅二	四九卅六
又又廿八	又六三十
又七卅又	六六卅六
六七四十二	六八四十八
六九又十四	七七四十九
七八六十六	七九六十三
八八六十四	八九七十二
九九八十一	

故
$15\times3=45$
$18+7=25$
$45-25=20$
答

$120\times[(72+8)-(5\times3)]\div2=300$

第二例

十二に八を加へる和より五に三を乗じる積を減じ残余を以て百に乗じ其積を二を以て除すれば求る所の末如数即ち三百を以べ即左に於ける数のごゝ

○八さんの目りこゝ乃書

二の目り	二一天他又	二進一十	三の目り
三一三十一	三二六十二	三進一十	四の目り
四一二十二	四二天他又	四三七十二	四進一十
又の目り	又一加一	又二加二	又三加三
又四加四	又進一十	六の目り	六一下加四
六二三十二	六三天他又	六四六十四	六又八十二
六進一十	七の目り	七一下加三	七二下加六
七三四十二	七四又十又	七又七十一	七六八十四
七進一十	八の目り	八一下加二	八二下加四
八三下加六	八四天他又	八又六十二	八六七十四
八七八十六	八進一十	九の目り	九一下加一
九二下加二	九三下加三	四ノ八進円引	九進一十

故ニ

12＋8＝20
5×3＝15
20－15＝5

120×5＝600
600÷2＝300

答

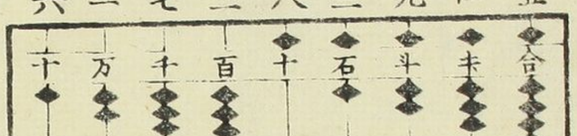
四則式運算に付て八初学の輩之を難ずるもの多し故に之れが解説を為すこと左のごし

(1) 5×3＋8×5÷2－7＝17
(2) 5×3＋8÷5×2－7＝2

先第一式の如き四と三の相乗に八と四の相乗を二つて減じ之るものを加へ而して後十一を減ずるなり又第二式の如き八四と三の相乗に八を四と二の相乗を減じ上の数に加へて十一を減ず上の数に加へて十一を

二一天他又

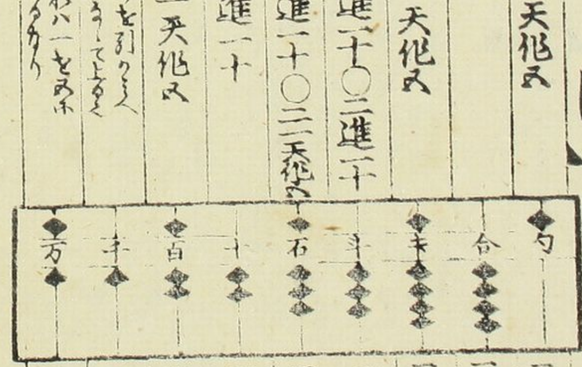
二進一十



ある人々米
拾二万三千四百又拾六石七斗八升九合を
二つに分るとれば　但二十小割も二百ようも同じあり
六万千七百廿八石三斗九升四合又勺ッ〻

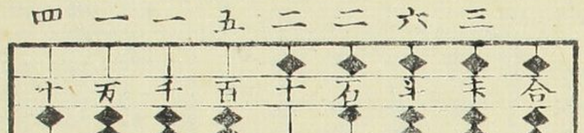
二ノ割ノ圖

かけさん



三二六十二

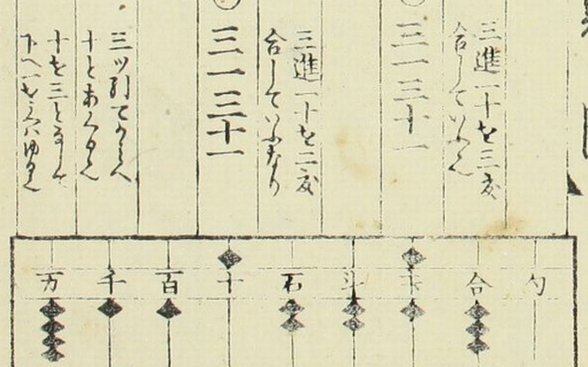
三進一十



ある人々米
拾二万三千四百又十六石七斗八升九合を
三つに分るとれば
四万千百又十二石二斗六升三合ッ〻なり

二二ノ割ノ圖

かけさん



四一二十二　四二天他又　四三七十二　四進一十

五　二　七　九　一　四　六　八　〇　三
分　毛　十　百　ノ　十　百　千　万　十

四二天他又
八進二十〇四一二十二
八進二十〇四二天他又
四進一十〇四三七十二
八進二十　四進一十を二つ合して
四進一十〇四一二十二
四進一十〇四二天他又
四三七十二　三を七まつり十
四進一十　四つを十とかりて
四一二十二　十を廿とかりて八十を廿とかりて二をくわへる

四ノ割ノ圖　かけさん

厘　分　毛　百　ノ　十　百　千　万
四又二十
二四八
四七廿八
四九卅六
一四四
四四十六
四六廿四
四八卅二
三四十二

ある時ひを浪
指弐万三千四百又指六貫七百八十九文を
四つ〻やまだ
三万〇八百六指四貫百九十七文二分五厘〻

あるひを米
指二万三千四百又指六石七斗八升九合を
又つかはる
弐万四千六百九指一石三斗五升七合八勺〻

五ノ割ノ圖　かけさん

合　毛　斗　石　十　百　千　万　十
八　七　五　三　一　九　六　四　二

又進一十〇又四加四
又進一十〇又三加三
又進一十〇又二加二
又進一十〇又一加一
又四加四　四を八かつる〻
又三加三　三を六かつる〻
又二加二　二を四かつる〻
又一加一　一を二かつる〻

合　毛　斗　石　十　百　千　万
又八四十
又七三十
又六廿
又五十
又四　又
又九四十
又六三十
四又二十
二又　十

あり此地（間口五間奥行六間の家を建築せんとし拵るべき八空地幾何程なるか）

答百八十六坪

解式 12×18−5×6=186

又一加一
又二加二
又三加三
又四加四
又進一十

(三) 甲乙の両馬あり甲八十二時間ゆく三指六里乙を七時間に二十八里走るゆえ今十五間休ませずして互ひに進むとき八両馬幾何程を距つるや　但一日八十四時間

答三百六指里

解式 14×24×28÷7−36÷12=360

(四) 寒暖計あり午前さおいてを見るゆえ七十八度ゆえして午

後すは八十度なり今之を平均するときハ一の度の法なるや

答七十九度

解式 (78+80)÷2=79

(五) 或書籍あり其紙数七十八枚すべて一行二十五字詰なり面指二万九百八十八の字数如何

答四万六千八百字

解式 78×25×2×2=46800

小数

凡そ本術を学ぶに数甘之宜しく左の数件を弁ふべし

第数之単位を以て本末順次左方に進計するもの之を整数と云ひ右方に至る者を小整

六一下加四	五	一	三	一	六	七	五	二
六二三十二	夕	十	百	メ	十	百	千	万
六三天化又								
六四六十四								
六又八十二								
六進一十								

六ノ割ノ圖

かけさん

六進一十〇六三天化又	分	夕	十	百	メ	十	百	千
六進一十〇六進一十								
六進一十〇六一下加四								
六進一十								
六進一十〇六三天化又								
六四六一四								
六三天化又								
六進一十								
六一下加四								

又六三十	一六六	三六十八	一六六	六六北六	六七四十二	又六三十	二六十二

あるひとの説

指弐万三千四百又指六貫七百八十九文を六ツに割れば

弐万〇又百七指六貫百二指を文分ヅヽ

六一下加四	五	一	三	一	六	七	五	二
六二三十二	夕	十	百	メ	十	百	千	万
六三天化又								
六四六十四								
六又八十二								
六進一十								

七一下加三 あるひとの米

指二万三千四百又指六石七斗八升九合

七ツに割れば

壱万七千六百三指六石六斗八升四合一勺

七ノ割ノ圖

かけさん

七二下加六	一	四	八	六	六	三	六	
七三四十二	合	斗	石	十	百	千	万	
七四又十四								
七又七十一								
七進一十								

七一加下三	〇七進一十	七	七	四七二十八	七八又十六	六七四十二	六七四十二	三七二十一	六七四十二	七七四十九	一七七
七進一十	〇七二下加六										
七進一十	〇七又七十一										
又七進一十	〇七四又十四										
七進一十	七四又十四										
七二下加六											
七進一十											
七四又十四											
七又七十一											
七一加下二											

夕	合	分	斗	石	十	百	千	万

十分ノ一 即一分

〇書法 余位

十分ノ五 即五分

,02 即二厘 百分ノ二　,13 即五厘 百分ノ十三

,001 即一毛 千分ノ一　,407 即四分七毛 千分ノ四百七

此のごとき單位点の右第一位にあるものは八十分の某第二位小あれを百分の某第三位小位とまた千分の某第四位小れを万分の某と通称す通て此のごとし

○後添零

後添零とは小数の右に零を附ますを云ふ凡て小数をその右方小零を後添ますも其現量変ずるなし必何と

九一下加一　九二下加二　九三下加三　九四下加四　九五下加五　九六下加六　九七下加七　九八下加八

九進一十

九ノ割ノ圖

かけさん

厘	分	毛	十	百	千	万	十
		◆	◆	◆	◆	◆	◆
		◆	◆	◆	◆	◆	
		◆	◆	◆	◆		
		◆	◆	◆			
		◆	◆				
		◆					

合	斗	石	十	百	千	万	十
◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	
◆	◆	◆	◆	◆	◆		
◆	◆	◆	◆	◆			
◆	◆	◆	◆				
◆	◆	◆					

九進一十　九進一十○九一下加一　九進一十○九三下加三　九六下加六　九進一十　九一下加一　九六下加六　九三下加三　九一下加一

九進一十　九進一十○八一下加一　九進一十○八六七十四　八七八十六　八進一十　八進一十○八一下加二　八進一十　八三下加三　八四天化又　八一下加二

八四天化又　八二下加四　八進一十○八五六十二　八進一十○八六七十四　八七八十六　八進一十　八進一十○八一下加二　八進一十　八三下加三　八四天化又　八一下加二

八ノ割ノ圖

かけさん

分	厘	毛	十	百	千	万
◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	◆	◆	◆	◆	◆	
		◆	◆	◆		
		◆	◆	◆		
		◆	◆			
		◆				

又八四十　二八十六　六八四十八　八八六十四　八九七十二　二八十六　三八七四　四八三十二　又八四十　一八八

其名号相変もれども生量を論ずまバ相共ニ五分ニ成れバ

なり故ニ場合ニより下添する所ノ者ニ成ル

式上ニ便なるを要する所ニ

別ち左のごとし

,3=,30=,300=,3000等

○前置零

前置零とは小数の左りに零を置くを云ふ其小数に零を前置する時は一零ごとに小数の現量減ずる

と十倍なり由ゆ之後添零より後添零ハ一倍なり故ニ後添零より後

数を変ずるが故ニ後添その

まゝ後用ニ成ものとなる左

のごとし

九進一十　九進一十○九一下加一　九進一十○九三下加三　九六下加六　九進一十　九一下加一　九六下加六　九三下加三　九一下加一

九進一十　九進一十○九一下加一　九進一十○九三下加三　九六下加六　九進一十　九一下加一　九六下加六　九三下加三　九一下加一

九ノ割ノ圖

かけさん

合	斗	石	十	百	千	万
◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
◆	◆	◆	◆	◆	◆	
◆	◆	◆	◆	◆		
◆	◆	◆	◆			
◆	◆	◆				
◆	◆					

一九九　二九十八　四九三十六　七九六十三　一九九　七九六十三　三九二十七　一九九

十分三　百分三　千分三　万分三

.3
.03
.003
.0003

○小数加法

小数加ルニハ単位以下の数を保有つヿ加ルなり

設令八三八〇四と五四六と八五六七を加すべしの

答一〇一三〇七

斛	箕
38.	04
54.	6
8.	567
101.	207

規則　設け一法数と重書し単位点を同位置ニおき数常数のごとく相加へ其和の点載も亦同位ニおくべし

○小数減法

小数減ルニハ単位以下の数を保有つヿ減ルなり

設令八三二七八より〇九八七六五を減すべしの

答二三九〇三五

斛	箕
3,	27800
−,	98765
2.	29035

規則　多数の下に少数と書し同位を同行ニおき一一の名数のごとく減し其点載も又同位ニおいて減じ而して上列の小数下列の小数より位数少き時は上列ニ零を後添して不足を補ふべし　尚又上列整数なき時は小数なきものとす

同八箇の数　是を右のごとく命ずべし時おく〳〵中也

二小割ノ表

二一天化又　逢二進一十
三一廿一加　三二四十二加　逢三進一十
四一十二加　四二天化又　四三四十二加　逢四進一十
五小割ノ表

三小割ノ表

四小割ノ表

又一倍化二　又二倍化四　又三倍化六
又四倍化八　逢又進一十

六小割ノ表

六一加下四
六二十二加　六三天化又　六四二十四加　六又三十二加
逢六進一十

七小割ノ表

七一加下三　七二加下六
七三十二加　七四十又加　七又二十一加　七六二十四加
逢七進一十

八小割ノ表

八一加下二　八二加下四
八三加下六　八四天化又　八又十二加　八六十四加
八七十六加　逢八進一十

九小割ノ表

九一加下一
九二加下二　九三加下三　九四加下四　九又加下又
九六加下六　九七加下七　九八加下八　逢九進一十

○見一の割法　付　かけぎん法事

見一毎ニ以作九一　是を十一より十九の又の数
函一倍一ノ一進一十　時小割なり又百の又の数千の上のまふるも同じことなり

見二毎ニ以作九二　是を廿一より廿九の上のまふ割ときは用ひ又二百の上のまふ二千の又の数
函一倍二　二ノ匣入　の数二万の又のまふるも同法なり

見三毎ニ以作九三　是八卅一より卅九の又の数に割時ふ用ひ又三百の上のまふ三千の上乃まふ
函一倍三　三ノ匣入　三万の又の数にまふるも同おなり

見四毎ニ以作九四　是を四十一より四十九の又の数に割時ふ用ひ又四百の上のまふ四千の又の
函一倍四　四ノ匣入　数四万の又の数にまふるも同おなり

見五毎ニ以作九五　是を五十一より五十九の又の数に割時に用ひ又五百の上のまふ五千の又の
函一倍五　五ノ匣入　五万の上のまふまふるもおなじことなり

下列の数位と同数の零を上列に後添して不足を補ふ

附言　小数加減術の同類も姑く之を省略す

○小数乗法

小数乗法とは単位なきの数を保有つ所の乗法なり

設令八〇、二四五と〇、一二三を乗すときは如何

答〇、〇三〇一三五

```
      0.245
    × 0.123
      0735
     0490
    0245
  0000
  0.030135
```

注則　単位点の如何を問はず左右数のおのおの相乗じ而して後実は両数の点マヲの位数と計り積の右端より該の個数を過して点截す而して第一段の相乗積数総数位より多きときは零を前置して其不足を補ひ左端に点を記すべし

例題

(1) 356.7×8=2853.6

(2) 456.989×.002=.913978

(3) 7.00589×.003=.00301767

(4) 4.963×56.7=281.4027

(5) 123456×78.6=9703641.6

見六毎に作九六
函一倍六　八分六
八ノ位入

見七毎に作九七
函一倍七　八分七
七ノ位入

見八毎に作九八
函一倍八　八分八
八ノ位入

見九毎に作九九
函一倍九　八分九
九ノ位入

右乃割そのおのの数をもちいる事なるほどまた乃ち筭ふるくも

これりやいづれもくわしく易にあり

見一毎に作九一
函一倍一又一進一十

見一毎に作九一圖

五厘	三分	六匁	百	十	匁	分

一進一十一進一十一進一十一進一十一進一十五六世引
一進一十一進一十二六十二引
函一倍一函一倍一函一倍一六六世六引
見一毎に作九一　よりはじめ

左ノ十六ヲ是右ノ百目ヲ是ニ百目ヲ見一毎に作九一ヲ
いつて百目の所を九一つ打て此九ツと左の六とを九ニ
世ぐ八二ぐ又此八と左の六と六八四十八引も引れば
見を九の次りて引も引まれば函一倍ヲいつて九の内を一ツ下へ
二ぐ又見を一進一十と上へ二ぐあげて此二と左の六と二六十二引
て八ぐを一進一十と又ぐ上て此九と左の六と五六三十引

右例題の算術を示すこと左のごし

(7)
356.7
× 8
2853.6

(2)
7.00589
× .003
0.0030176 7

(4)
4.963
× 56.7
34741
29778
24815
287.4021

(5)
1234456
× 78.6
7403736
9876448
8641792
97036447.6

小数除法

小数除法は八単位以下の数を保留つゝの除法なり

設令八二八二を〇〇二にて除すれば其商必伍

算術
1.2/.002 = 1.200/.002

2/1200/600
12
00

答六百

見一掛算

ある人銀六匁二分五厘にて十六あハせれば百目に成かなり

百目	匁	分	厘	毛
	◆	◆	◆	

五	六	三	十
一	五	二	六	十	二
		一	二	六	六	世	六
			一	六	六

左の十六を右の六匁二分五厘によびくる先下の五りより下へ一けさきりてけけこにいたりて八左のけさの数おどさくると右のより小左のいをくふ五六三十とおきて初まこ一けこより右の五りより小左の十をくる一五の五と下におきてもしもの五りをバもらひまして又右の二分へ左の十六をかけしに二分のけこより一けこ下におくひだりの六りもぶ二六一二と並くまこと一けこありおて右の二分へ左の十をかり一二ノ二とおけバ四こもる又右の六分より下の一けこめまおて右の六分左の六をもぶ六三十六ちきて又一けこ左の十を六分ゝ一六ノ六とおけバ百目こもるなり

見一掛算

或ハ銀二百廿三匁四分五厘ハ廿六ヶ刻ハ八匁五分ツヽ成

圖

五六世引	又六三十
倍一倍二二六八四八引二一天作	二又 十六八四十八
見二五以他九二	二八十六

左ハ廿六と並右ハ二百廿三匁を見へ二五以他九二とハ右ハ二百目の形を九ヶ作り一ヶ次へ加へ九四と並ハ九と左の六と九こにより以て百五バ六九又十四と云ハ九を九の次ヶて引けまぬき倍一倍二と云て九の内を一ヶ五て下へ二を加へ入汐より八ツ五ハ八と左の六をよび六八四十八引バ引ヶ十三残るその十を八さんの二の位ヶて二一天作又ヶこれを又ツヶなるハ又と左の六と見ハヶ世又六三十し次八けさヶて引ハ八匁五分になるなり

注別

第一点截以下（即ち小数）を（但し係数）は実際の小目位となり（但し係数）ては陳術を格すべし

小しとなれば小数ありて実数数法なく或は実小数ありて実数は整数のみなる時は互に整数の右に添書して小数の数位に適合せしむべし

第二点截以下の数位を見合せし後は実法にも点截なきものと見做すべし

第三点截以下の数位にて、前置書ある時は点截以下の数位を見合せし後も該前置書之れなきものと見做して之を消す

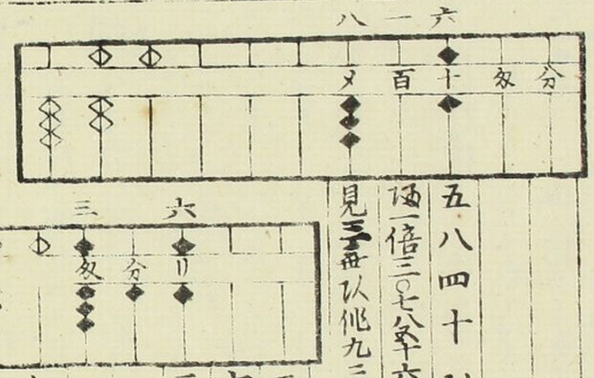
見あるひは銀三貫六十目を三百七十五小割に

見三百七十五の圖

八匁を分六厘に成

おのれ知れぬ時見八三毋以他九三引きもめくき倍一倍三

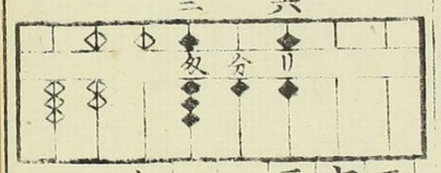
又八算の三乃法を用ゆ



	一五	五引
	一七	七引
五八四十	三進一十	五六三十引
倍三〇七分平分		六七四十二引
見三毋以他九三		三二六十二

五六三十
六七四十二　一五　五
三六十八　一七　七
一　三　三
五八四十
七八五十六
三八二十四

かけさん



三	六	
匁	分	厘

あるひは銀八匁を分六厘に

三百し指匁あるひは

二貫六指目を成りり

附添　右法くの如のものハ正法なれども其例稍多都るの感あり今畧法を左に示す

法今ハ七一〇二一五八を一七一て除すまハ其商ハ何

答四一七七、七四

解本例において第四商已に立ち第五商を求むるに実の点以下別も五に及ぶまでなり此法商位と点截以下の商ハ小数に余ずと

算

1.7/7102.1.5 8/4177.74
6 8
3 7 0 7
7 7 3 2 9
7 7 3 7 9
7 7 3 5 9
7 7 6 6 8 8 0

見四圖四百八十六小割に

又百九指六匁又分ツと

又八さんの四の法を用る

五六三十引
六六三十六引　五八四十引
四倍六平分　四二天他五
四三七十二

六九又十四引
四倍六平分
四二天他九四

五六三十
六九七十二引
見四五以他九四

五六三十
六六三十六
五八四十

又六三十引
又八四十　六六三十六
四又二十　六八四十八　六九又十四
四六二十四　八九七十二　又六三十
四九三十六　又八四十
四又二十

かけさん

九	九			
匁	厘	分		

あるひは

又百九指六匁又分ツ

四百八指六分ツれば

弐百八指九貫八百九指九匁ずつと

右法則 はの点と都き共省去位数を唱へて実の単位点を右方へ下け記し最後の末く術をほどこし而して右実数の改正点下におくぶの除商位を点截もるものとす

例題

(1) 4.8 : 24 = .2

(2) 84 : 4.2 = 20

(3) .0052 : 2 = .0026

(4) 7102.158 : 1.7 = 4177.74

(5) 7102.158 : 98 = 72.471

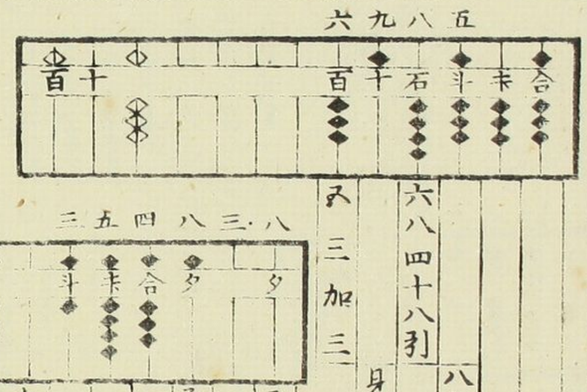
見五圖（くんごづ）

或八米三百五十四石八斗三升八合を おりかめ時見又五以他九五 五百八ツを割る

六斗九升八合又勺ツを

ひらきしとき 陋一倍五

又八さんの五の陋をもちゐ



(1) 4.8 : 24

4.8 = 48 / 24 = 2

(2) 84 : 4.2

84 = 840 / 4.2 = 840 / 42

42) 840 (20
84
0

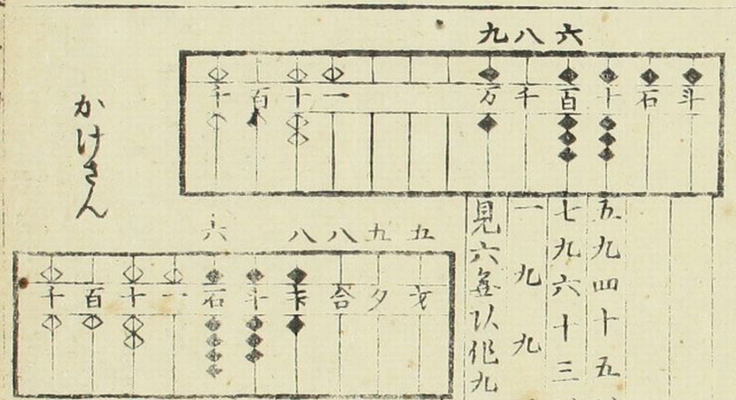
24) 480 (.2
48
0

見六圖

或六百八十五石五斗を おりかめ時見又五以他九六

九石八斗六升ツを 陋一倍六

又八さんの六のさん入



(4) 34.368÷5.37　　(3) .0052÷2

34.368 / 5.370 = 34368 / 5370　　.0052 / 2.0000 = 52 / 20000

運算左の如し

20000 / 52000 / .0026
40000
120000
120000
0

見七ノ圖

或六米三万四千九百九十六石九斗八升七合五勺之割を

七子　五勺之割を

四石九斗九升六合五勺之歩

又八さんのしものごんハ

おのれ水ぬ時見年二重以低九七

ひのまぬときに倍一倍七

四　九　九　六

千　百　十　一　万　千　百　十　石　斗　升　合

かけさん

八	九	六	九	四	五	七	三	四	三
夕	七	合	勺	斗	二	三	四	十	一

五六三十引

五九四十五引

七進一十

五九四十五引

七進一十

七四五十五

七進一十

七六八十四

七三四十二

五六三十

五九四十九

五九四十五

四五二十

六七四十二

七九六十三

七九六十三

四七二十八

あるひは

四石九斗九升六合五勺を

七十

五勺あるときは

二万四千九百九十六石九斗八升

(5) 7102.158÷98

7102.158 / 98.000 = 7102158 / 98000

運算裏にあり

5370 / 34368 / 6.4
32220
21420
21480
0

見八ノ圖

或八浪八指四貫九百八拾二匁

九分八厘を

九匁八分七厘六毛ツヽ

八千六百五ツ之割を

おかまえる時見八毎に低九八

ひのれぬとき倍一倍八

又八さんの八のごんを用ゆ

九　八　七　六

千　百　十　一　十　メ　百　十　匁　分　厘

かけさん

八	九	八	二	八	四	九	八	見八毎に低九八
千	百	十	一	毛	厘	匁	分	

五六三十

五七三十五引

五八四十引

五九四十五引

六六三十六引

六七四十二引

六八四十八引

六九五十四引

六六三十六

六八四十八

六七四十二

六八四十八

六九五十四

五七三十五

六八七十二

六八六十四

六九四十五

五八四十

八八六十四

八九七十二

八八六十四

五九四十五

あるひは

九匁八分七厘六毛ツヽを

八千六百五ツおハすれば

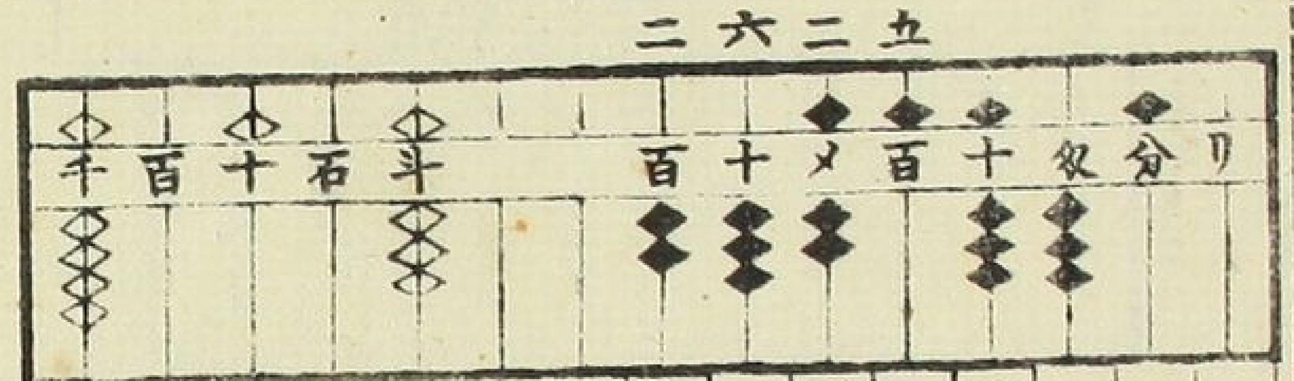
八拾四貫九百拾二匁九分八厘ニなる

見九ノ圖

弐石指二百二拾七匁五百八十
九斗五十石八斗を割ば　三匁五分を
弐指六匁二分五厘づゝなり

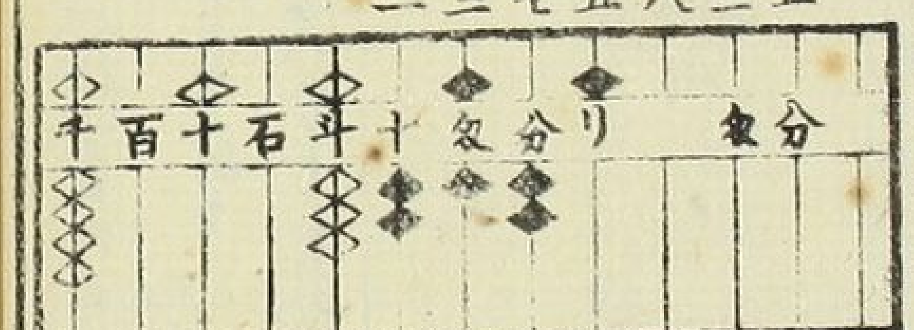
おゝまぬ時見九無似作九九
ひっわれ時強一倍九
又八さんの九の段を用ゆ

五二六二



五八四十引	二八十六引	六八四十八引	二八十六引		九二下加二		
五五廿五引	二五十引	五六三十引	二五十引				
九進一十	九進一十						
九四下加四	九二下加二	九五下加五					

五三八五七三二



五八四十	五五廿五	五九四十五			
二八十六	二五十	二九十八			
六八四十八	五六三十	六九五十四			
二八十六	二五十	二九十八			

ある人米を売る有廿六石二斗五升四合を賣なり
高九千文指で八斗出銀何ほどといへば
二百二拾七貫五百八拾三匁五分と知るなり

かけさん

```
98000)7102158(72.471
      686000
       242158
       196000
        461580
        392000
         695800
         686000
           98000
           98000
               0
```

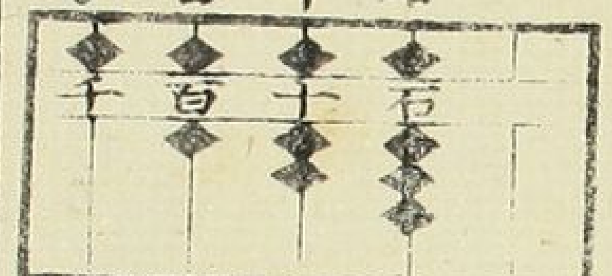
小数を学びし後は分数を学ぶを任く順序となせば以下も其術を高尚にして容易に実を首得するとなれば之を首暗ずる而して分数を上の法は分数を含蓄するものなれば特に之を首畧せざるを得ざるなり
又此書も一切首畧を注意す算法他の筆算書を備ふべし

◇うけとり割る算
割算の割るを知るは為あり八用ゆ　しかも手きで九九の割りを用ゆべし　左記割る法を記す
○六十二ずつ割るは十六をとるべし　○三百十二ずつ割るは六十四をとるべし　○七分八百十二ずつ割るは百八十八をとるべし　○三万九分合六十二ずつ割るは二百五十六を払ふべし　○十九万五分三百十二ずつ割るは五百十二をとるべし　右の如く割る算の法を以てする時は一を立て割るなり

○かけさんのまし

米五石六百七拾八石を二匁ずつ割時ハ下のごとく　たつべし

九石　三十　八百　二千

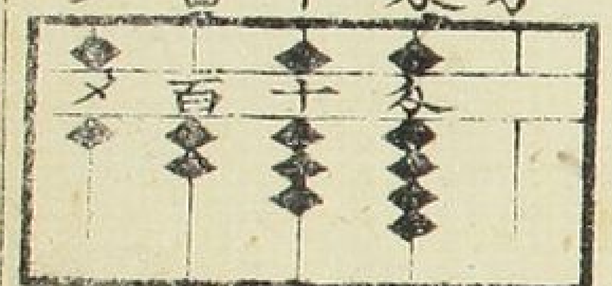


五八四十	五七卅五	五六三十	五五廿五

二を八百三十九石となる

銀六貫弐百八十九匁を五十七匁ずつ割時ハ下のごとく

分　十匁　百　二百　一メ



二九十八	二八十六	二二四	二六十二

二を除くまで五十七匁ずつ百八分かゝる

米九千八百七拾六石を二十五文割時ハ下のごとく

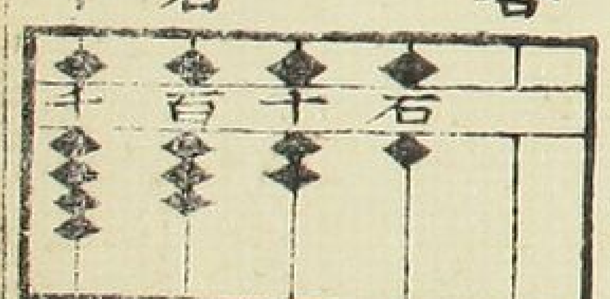
四斗　五石　九十　三百

四六廿四	四七廿八	四八卅二	四九卅六

四を除くまで三百九十五石四斗つく

米九千八百七拾六石を百九十八文割時ハ下のごとく

八合　九石　七十



六八四十八	七八五十六	八八六十四	八九七十二

八を除くまで七拾九石八合つく

○つるもうめんのことわり

根弐百拾本弐分四厘
九文をうくる時は四を
もつて割べし
五百弐文
八拾目と
なるべし

千百	百	十	分
		五メ	二百
四進一十	四三七十二	四一九二	四三天作五
割べし			

茶二拾本石二斗四本
百九文をうくる時は
八を以て
九百
三文九百
五石と
知べし

千	百	十	斗	本
		三文	九百	五石
八四天作五	八七八十六	八三知十六	八進一十	
割べし				

茶の うるもうひの事

茶八百拾石ゆる時根拾文斗茶四斗三本弐合の相場
にて茶の根代をいふ時 根拾八貫七百五十目
○右の茶八百拾石を五斗三本弐合にて割べ拾八貫七百五拾目と
右の茶を四斗三本弐合にて割べ拾八貫七百五拾目と

合拾弐文一厘の根九文ゆる
茶八百拾石を五斗和協弐
石五斗にて割べ拾弐文四と
なる此四の四二文を一厘ゆる
して割る一文一厘の表べし
寸目とうけくべし
○合拾二文一厘ト根九文
是又一文ヲ二石五斗ヲ
茶代ト同 八百拾石を云
右の拾二文一厘九文と五の
四一厘の九文を乗て
一厘を二五ヲ九文と六寸目
にて割一文にて合て拾二
文四寸目 是又二石五斗を
うけくべし
○合拾九文二厘ト根拾四文
七分六厘茶一石ヲ代合二

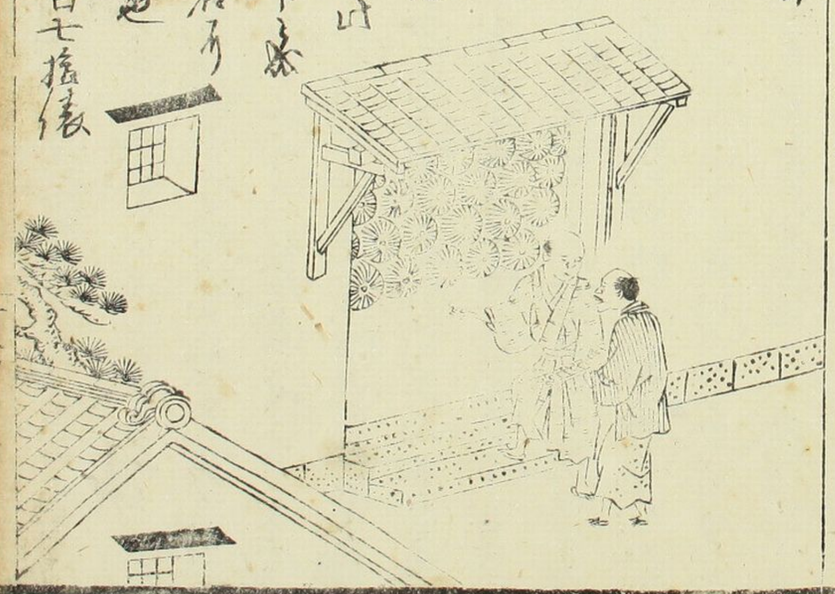
茶相場で割べ根ヲ茶根を掛まべ茶を知
○根文百六拾七文五分ゆる時拾文斗茶四斗三本弐合ゆの
和協の時右の根ヲ茶代ト云 「茶弐拾石五斗三本六合を云
右の根ヲ五斗和協四斗三本弐合にて
○根拾三貫四百八十文五分ゆる時茶代ト同 「茶五百六十七石八斗
七分五厘にて右の根ヲ茶代ト云 右の根拾三貫四百八十文五分を和協九文
七分五厘にて割べ茶ヲ知る也 ゆる茶と和協で割べ茶ヲ知る
茶ヲ知べ根ヲ知べし ○茶弐文八百七拾石ゆる時代
七拾三貫六百目也右の茶を石ヲ根代ヲ知
「七石ヲ九文六分ヲ」茶のうるて根を割べ也
○茶弐文八百七拾石ゆる時代七拾三貫六百目也根拾五

貫と掛ぬべ一貫六十目
ぬべ水して右の金を米掛
と問 米五百六十七石八斗
といふ 答 金百九貫二分銀
十匁五分六厘十毛以内
二貫を水して銀八六十目
うて割く二四六と云を九九
貫六百八十九貫七四六匁
別に銀二分掛ぬと云たる
毛をく掛ぬと云六十目と
割二匁を二分の内ぬる銀
七匁を引て右の九九貫
七四六を割なり
○米弐石八百七掛ぬ石を
金五百九貫百匁買時
米石ごつ幾程ぞと問 一石ごと二分六匁

○銀掛ぬ米三斗九本六勺二才五厘を掛て也 法に銀ぬる
をたゞ毛を右の毛を掛ぬ毛を割ば終る
○銀掛ぬ米三斗九本六勺二才五厘の時は一石が幾程
あるぞと問 一石ごと北ぬ六分と云 右の米石を毛九
三斗九本六勺二才五厘を掛て右の一石をたの米を割
○米あるひは一石ごと出目四本つゝ出る 銀掛ぬ四分五
買時米石幾程ぞと問 米石ごと北ぬ高ぞと云
右の三掛六匁四分と毛と米石四本よりこの内
○又一石ごと四本出ぬと北六匁四分と云時一石が幾程の
ぞと云 米石ごと北ぬ九分一厘六毛六糸と云 九斗六本三毛割也
○上米一石ごと九七匁三分ぐ
○下米一石ごと九三匁七分ぐ
○中米一石ごと九五匁五分ぐ
○餘米一石ごと九九匁五分ぐ

又一匁を掛米の出目四本と云 又米を
九斗と割四匁と云 又米を
大豆の出目三分と云 掛合て
割三米二九匁掛合て
て二六三七五匁と云 掛合て
金を割俵一三分を七九
匁と云 俵を七九
百掛六匁八分と云 割
▲俵まろの米
米まろの四斗八本 俵四
俵 米二本 俵ごとに
六百俵ごとの内四斗八本
俵米 俵米掛ぬ
俵限 三日の代銀高
俵 四斗八本 俵六百俵
掛ぬ匁 俵 七貫八百
日と云 別に四斗八本と四

○米八百匁掛石を
俵ごとに幾程ぞと問 米石ごと
かん定 俵
右の米目出
ぞと云 出目八
百九匁五分と云 米
米石ごと九匁五分
門二本引 九斗七本
毛を右の八百匁掛石
くまで出目 知る迄
○四斗俵 匁千三百七掛俵



斗を以て刻む十二歩まで四斗を石と名づく亜して何程ぞといふ「弐千百四十八
四斗八本を二斗二本に分く
刻む五歩は十六歩十五歩
七貫八百目を刻む歩の
代銀を刻む分は四斗八本
俵にて斗俵の分は八刻
掘と云る又二斗二本俵の
分は八刻
て刻む歩は三歩刻のち
代銀と云ゆるし 秘伝の
分は八刻
右の分は別紙り
云四斗八本と四斗と合
二本と合て一石弐斗
六百俵を掘

石也 右の分は二百七拾俵あり四斗八本
○蔵の内は四斗八本
俵を掘て五歩を掘て四斗俵
代銀皆三口 代銀
百目 四斗八本俵六百俵 掘
百目 別は四斗俵六百俵 掘
七貫八百目 又尾四斗八本 亜四斗
歩は十二歩 七貫八百目
右は別紙り 二斗二本俵六百俵
百目 又尾四斗八本 亜二斗二本
七貫八百目

○右の総合一歩六拾四石
四斗一歩と三石六斗六本
六合六勺六才六礼と云米
のうちと代合うて
○合一歩と三石六斗六の
時は三石の代合と云
石は二分弐朱と云
一歩と亜三石六斗
刻六二五歩は四五を二
あし一弐五八二朱し
○上米合一歩は三石
弐斗五本は中米同
二斗は下米同弐
俵米弐石五斗は大豆同

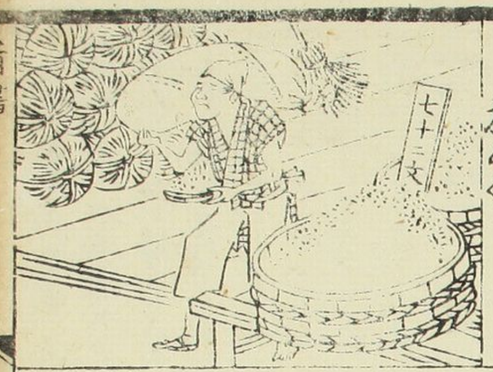
○大豆一石は三分五朱の相場にて今年銀弐百拾匁
八分者は銀にて右の大豆を用ひ本目にて
上米一石七斗二本四合四勺 銀弐百拾匁
中米一石七斗三本四合四勺 銀弐百拾匁
下米一石七斗三本四合四勺 銀弐百拾匁
俵米一石七斗二本四合四勺 銀弐百拾匁
大豆一石七斗三本四合四勺 銀弐百拾匁
銀弐匁八分者弐百拾六匁八分にて先大豆の相場の代銀合百
弐拾匁八分にて右の弐百拾六匁八分と云
一石七斗三本四合四勺と銀弐百拾六匁八分と
ク米にても一石七斗三本四合四勺と云
元々百九匁の別は八とゆる也

三石弐斗久のれ切て
今方金二百拾六匁三
分銀三匁切て売て右の
匁三を銀目等分に買
中段は細銭てと同八
拾二石一斗九升九合〇五三
一三弐七てなり
上米代六十五匁三分五厘
中米代五十一匁五分四厘
下米代四十一匁四分九厘
惣米代世二匁三分七厘
大豆代世八匁二分千五厘
法て金一匁と上米のれ切
一石弐斗五升て割は八匁
又一匁を中米のれ切一石
六斗て割は六三九匁又一匁
と下米のれ切二石て割五匁

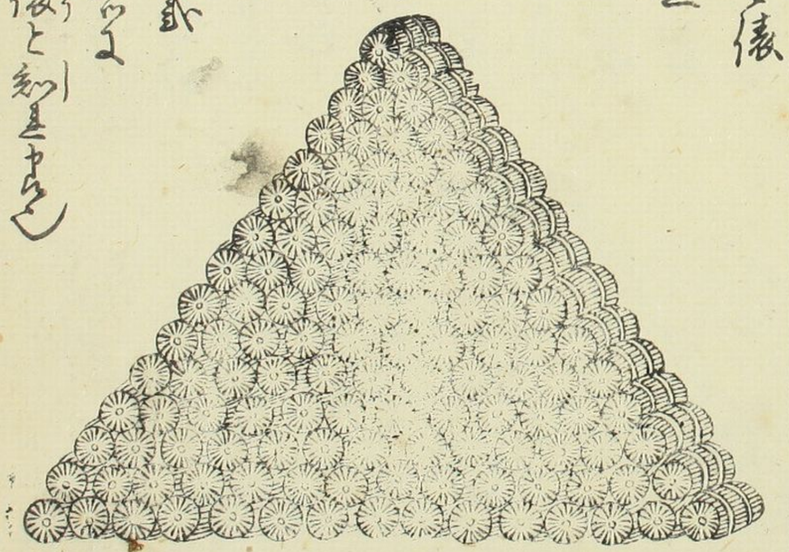
○上米一石弐斗九升九匁三分
○中米一石弐斗九升九匁五分
○下米一石弐斗九匁七分
拾六匁八分あるは銀弐百
米と一匁五分中ゆ下と
上米一石二斗五升三合四勺九才
中米二石五斗四勺八才
下米又石九合八才
銀三匁合弐百拾六匁八分四厘
又三分と九匁五分中米の銀一石弐斗九
の銀四石弐九拾四匁八分と九匁八分
又弐と右の弐百拾六匁八分を割は上米一石二斗五升三合四勺
又弐と割る中を一匁と中分下を一匁切て

○上米一石弐斗九升九匁三分
○中米一石弐斗九升九匁五分
○下米一石弐斗九匁七分
拾六匁八分あるは銀弐百
米と一匁五分中ゆ下と
上米一石二斗五升三合四勺九才
中米二石五斗四勺八才
下米又石九合八才
銀三匁合弐百拾六匁八分四厘
又三分と九匁五分中米の銀一石弐斗九
の銀四石弐九拾四匁八分と九匁八分
又弐と右の弐百拾六匁八分を割は上米一石二斗五升三合四勺
又弐と割る中を一匁と中分下を一匁切て

と弐を九三六と弐匁を四
斗八升ふく割は九匁
又百目と割る中八本俵を
石と四斗八本俵を
代銀十三匁と弐匁
て八匁を三匁四厘
十三匁と弐匁
俵切て



○俵数九拾三俵
あり右の十二
俵と垂又
右も十三
俵と垂て
元の一俵
右の十四俵
俵を右へ
くるべ百八拾弐
俵と弐匁を云
くるべ九十一俵と割る中



▲俵すぎえんの事

本末共に十三俵とたゝむる垂たりへ一俵づゝ足を加へかけ云々する分ハ

十三俵

くのごとく十三俵と十四俵とかけ合二つゝ別ハ俵の数をかゝハすゝ白きゝ四数あるなり

○俵数合百四十三俵

あり法下のゝ八十八俵

と左右ゝ垂扨たりの

十八俵と上の八俵を

ゝ九六俵と成也

と二つゝ別ハ十三俵

ゝ成し又右の十八俵

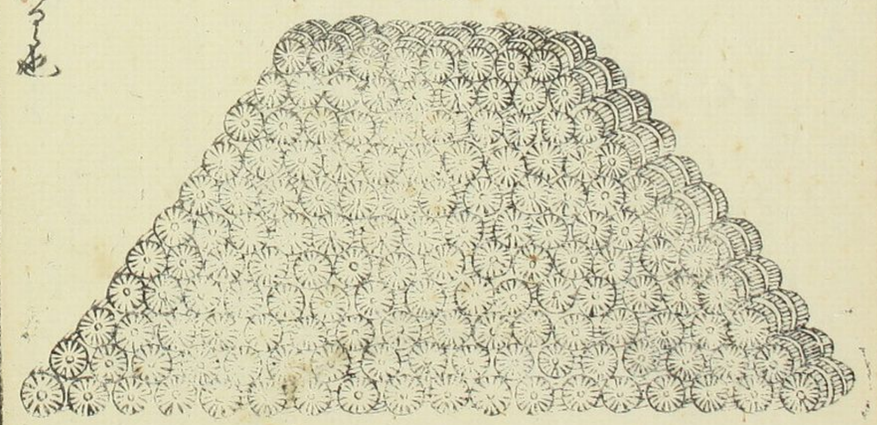
と一俵づゝ十九俵成

内とゝのゝ八俵

引ば残く十一俵ゝ成

元よりたの十三俵と

くゝ成ハ百四十三俵と云ゝ也



○本末の下ゝ俵数

つゝ成ゆる時下のゝ八

此俵あるゝ八俵有

山数の俵と同山数二百

扨二俵有ゝ法下此俵

一俵づゝ成ゝ八俵引ば

残九二俵有也小此俵

とゝゝ八十三俵と成也

ゝゝ八俵とゝゝ成ハ四百

二十四俵と成ゝ也ゝ

ゝ別ゝ二百拾弐俵

と云なり

○本末の下ゝ十八俵を

たゝゝ垂上の八俵ゝゝ

二ゝ別ゝ上下あり

十三俵ゝ成扨十八俵一俵

ゝ八俵引ゝ上ゝ上

一俵ゝ成ゝ上ゝ成ハ

七俵上ゝ残ゝ十八俵の内

を七俵引ば十一俵ゝ成外

元ハの通りの数也此

ゝく右の十三俵をかく

ハ数ゝ成ハ七俵

引ゝ上ゝ八俵引

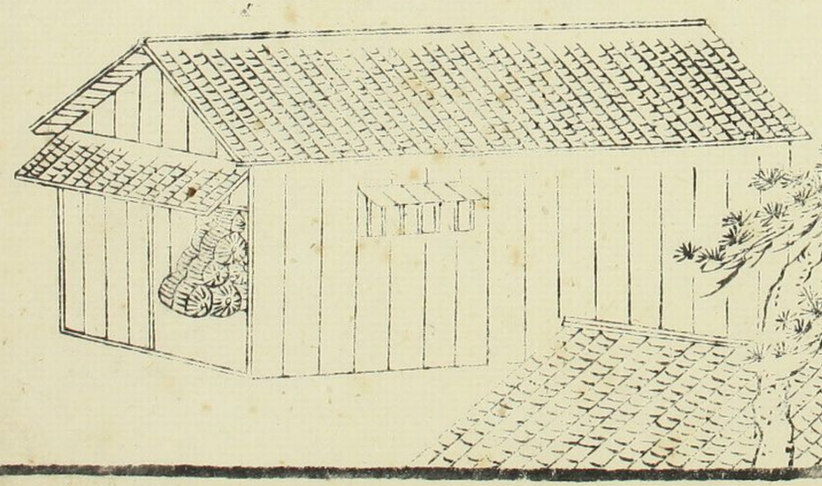
とゝ成ゝ上の八俵ゝ

つけゝ成ゝ

さゝゝゝゝゝゝ

俵時も上の数ゝ一俵ゝ

かくゝと覚べし

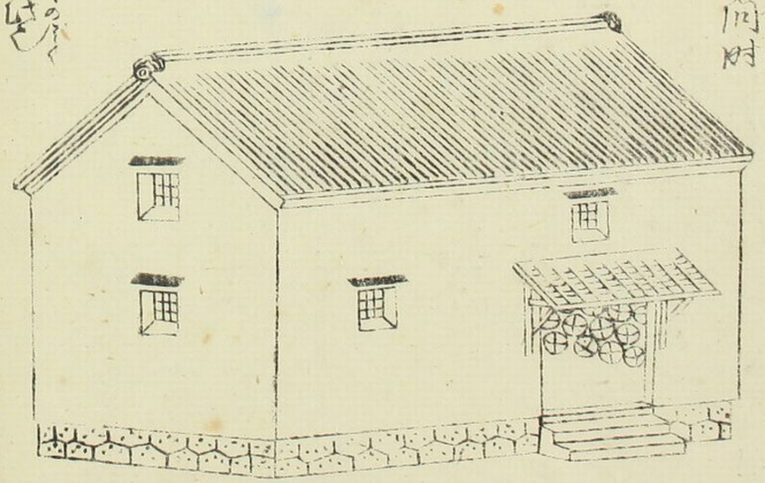


▲酒醤油水油うるひの事

○或い酒樽結の代金廿一貫二百ふくく今八百七拾五結の代金幼稚とも弟へく金ふ八百八拾一貫

○藏小屋のうるの入法のうるの事

○此所藏又俵幼稚入そと同時二ふ五百九十二俵入と云法と云ふ二号とうと或号くくまだ四坪五合五と此九号をくれば此六坪五合五と一坪の法七十二ふくまで二ふ五百九十二俵と知也但一坪六十二俵ずゝ入なるゆえ此六坪くくまで二ふ二百五十俵入と右幼稚くる法又つゝ号くくまで俵ともうる遠ゝ方大方ぬけ



○舂減の事

或る玄米壹石三斗五本を内一刻二分減と舂て白米何程と問ふ若く曰白米壹石一斗八本八合九（数十ヲの内を一ツ引てのこり九ツあるを内一刻とる）○術曰定法一を舂り八分八厘と舂を法とする内一刻二分を引舂り八分八厘と舂を法とする玄米一石を二斗五本減ずつゝて白米或石三斗ありの内八分減ずつゝて白米或石三斗ありの内八分を引舂り九分二りとなるを法とする○白米二石二斗を刻ば玄米を知る○或い玄米九石三斗五本を舂一刻減ず舂キ白米何程と問ふ若く曰白米八石五斗五本

まで歩し○術に曰く酒八百七十五樽と金酒の樽合二十一万二歩とりけり術に曰く酒個合二歩いわく個二万と金酒八千八百を合わせて足し又八十一万二万と加へ四万一歩を知らし

○或い酒樽結の代合十八万ありて七樽の代合酒樽と同差へて六万一歩銀二枚し個に十結い二十樽万智い六十目を術に曰く酒七樽を合十八万を九樽を以て割べ合六万三万に計三の内二万の内を引いわく万の六十目を知らし代合銀を知らし

○酒樽結代合樽九万二歩ありて一樽の代銀酒樽と同差へて銀五樽八万を差し個に十結い二十樽万智い六十目を小曰万の内銀六十目を金九樽を以割べ三万を金を合樽九万二歩を捕てを知らし

酒一樽の代銀五十匹ありて一本の代銀酒おのおのいふ差へて一本の代銀二百○二文曰し個一樽三斗入銀を五の結を二割引のうち一つを樽を外一割減を加へ一個一を減を法として玄米九石三斗五升

○術に曰く法一を金外一割を法として玄米九石三斗五升

○或い外一割三分減る番を白米十八石ありて玄米を知らし

○術に曰く法一を金外一割三分を加へ一個一三を法として玄米を知らし

○或い外一割三分減い外酒の減五番を同白米十八石を内二割減い外酒の減五番を同差へ二割五分減りあり○術に曰く法一を外一割を内二割を引いわく八を法として内二割を割い外減知らし

○或い玄米三百五十石番白米二百八十石あり

○或い玄米三百五十石番を白米を内酒の割の減ぞと同差へ曰二割減し○術に曰玄米三百五十石を金内白米二百八十石を引いわく七を法として玄米を知らし

○或い玄米八十四石番へ白米七を五石ありて玄米を知らし

○術に曰一割二分減し○術に曰玄米八十四石番へ白米七を五石ありて玄米を知らし

○人是一人ありて米六斗番ありて三百八十五人の番石数酒の差へ曰武百三を五石ありて術に曰人是三百八を五人を金米六斗をかくまで歩し

百拾貫文。術に曰銀弐十
貫文を金八三斗に直し銀一
本代銀一匁八分と銀を
買う銀壱匁の代銭百
拾二文の日銭銀貫文に
銅銭百八文と銀壱匁を
買の銭壱匁八分へ銭を直
銅銭にて百九十貫文買
る百文に付き定法九
分六厘にて割い来る
の代銭知るべし
○酒一本代銭弐百四十
八文にて今酒四本八合
の代銭幾ばく銭
を買百四拾八文と
○術に曰二百四拾八文と
金百文に付き定法九六と

○味噌賣買の事

○今年麦に味噌五拾八貫目替わりに今味噌
九六〆百目の代銀幾ばくと云ばく曰銀九十七匁
銀に麦替銀六拾目。術に曰味噌弐拾六貫百目
と金麦の味噌五十
八貫目にて割い代銀知るべし
○今年麦に味噌曰十九貫五百目替わりに銭百
文にて幾ばく百文に味噌七百五十目
銀に麦替銀六貫六百文。術に曰今年麦の味噌
曰十九貫五百目を金麦替銀六貫六百文にて
割い銭百文の味噌知るべ
○銭百文に味噌七百目にて銭六百七拾四文に

味噌幾ばく曰貫七百弐十五匁。術
に曰銭六百七拾四文を金拾銭にて定法
九六にて割い六百七拾四文に味
噌七百目を知るべ

○塩のうりかえの事

○今年麦に塩拾弐俵にて銭幾ばく今塩百十三俵
の代銀幾ばくと云ばく銀五百六拾五匁。銀
麦替六十目。術に曰麦塩百十三俵を金麦
銀六拾目にて割い今年の麦の塩拾弐俵にて割し
○今一麦に塩拾六俵にて一俵の代銭幾ばく
買て一俵の代銭曰拾八文。銀に麦替六貫
七百文。術に曰麦に銭六貫七百文を金今年

酒四本代銭四百八十文
にて今年八合を
掛け銭にて麦
三百九十四文に麦四
上定法九分六厘にて
割い代銭知るべ
○酒壱本代銭四百八分
にて今年酒四本八合
九本にて麦一本の代
四百八分にて割い
○或い今一麦に酒十
一樽の代銭幾ばく今酒四
百十八樽の代銭幾ばくに
買て今年八麦。術に
酒四百十八樽を金

今一丈の和油十一桶にて
これば代金知らるし
○或い今年丈に醤油七
桶まうへみて二石の代
幼程買へて銀八匁〆但
丈銀六十目〇術に曰
丈之銀六十目を置醤
油七桶まと以て刻む
一桶の代銀知らるし
○醤油一桶の代銀七匁
三分なりと云へば一本の
代銀幼程と書く一本
の代銀百六文九分四厘
一桶七本丈合入銀一匁
の代銀百九文。術に曰
銀を丈の代法百九文
円銀四文引バ測銀

丈の桶十六俵にて刻バ銀四百桶八文七分
五厘計端銀桶八文七分五厘へ定法九六と
書く一俵の代と知らるし
○桶壱俵の代銀六百四桶四文九分一本の代
幼程買へて銀八匁〆但壱俵三斗
丈本入。術に曰一俵の代銀六百四桶四文とおき
百文に定法九六とかくれば測銀六百三桶文と成
壱俵の入三斗四本と以て刻バ一本の代銀知らるし
○桶壱本の代銀幼程四文九分一厘
代銀幼程と書く一本
の代銀百六文九分四厘
一桶八本丈合の代銀幼程と云へば一本
の代銀百九文。術に曰
銀を丈の代法百九文
円銀四文引バ測銀四百七十四文九分

百四文と成代銀七分三
厘計端銀桶八文七分
五厘へ定法九六と書く
○醤油一桶の代銀
百四文九分五厘百文の
銀四文加へ一本の代
銀と知らるし
○醤油一本の代八十
九文九分五厘丈本三合の
代銀幼程と云へば百八十七文七分五厘
○術に曰非数丈本三合と
置一本代八十九文を置
測銀四百七十四文七分
五厘と百文に定法九
六にて刻代銀を知る
○醤油一桶の入八本に
して今醤油四百四文百

○菓賣買の変

○今年丈に菓桶四貫目程にて今菓十二目
入七本の代金幼程と云へば曰金六丈五
。術に曰入拾二貫目を置本数七を置へば八十四文
目と成を金一丈の菓十四貫目と以て刻也
○菓一斗 但三石目 二百目 代銀六匁五分にて今銀百
七十五文と菓幼程と云へば菓十目し
但銀壱匁の代銀百八文。術に曰銀壱匁の代銀
百八文の内百文の目銀と四文引測銀百四文とし
壱へ壱斗の代銀六匁五分を置へば測銀六百七十
六文と成を法九六にて刻銀百七十三文の内百文の目
銀四文引バ測銀百六十九文と成を一斗の目

六十本の棉数他経で
差へく棉数五万七千
棉し。術に曰石数百千
五百六十石と一棉の入
八本と以て割い棉ゝば
割二十四也

○五油棉棉の代金二十
七文へ求へく今水油
七百六十五棉の代金他経
差へて金三分六十五文三
歩く。術に曰棉数七百
六十五棉とおく十棉の
代金二十七文と乗じ
代金を得し

○水油一棉の代金二文
二歩求へく一本の代銭
他経と云差へて一本の

二百目と乗法の六百七十六文を割し

○柔一斤の乗目二百目にて今柔三十六メ目の
斤数他経と云差へく斤数百八十斤し。術に曰
柔三十六貫目と乗一斤の乗目二百目にて割し
者柔三十六貫目

○薪うてうひのもの

○金壱文に割本二百五十把ゝ求へく今割本八
百七十三把の代金他経差へて金三十三文三歩
武朱銀壱分武厘但五文替銀六十目。術に曰割本八
百七十三把と乗金一文の割本二百五十把を
得し代金三十三文八九二分以円八七五と引金三
歩武朱〳〵一七、文〳〵の銀六十目を得し

○金一文に割本百武十五朱壱分〳〵一分の代銭

代銭曰三棉武朱〳〵一棉
一棉三斗七本五合入壱
金壱文に六貫五百文
○術に曰五百文を
百文〳〵乗定法九六を
かくまへば銭六メ二百
曰〳〵文と乗代金二
五文二歩を得て一棉の入
三斗七本五合を得て
れば銭曰棉六文
と乗百文〳〵の定法九
六を以て割し一本の代
銭を得る

○五油一本の代銭四百
廿四文求へく今三本
五合の代銭他経と
差へて銭壱貫曰百八

他経と云差へく一朱の代銭五棉五文九分曰り
毛し個に五数百銭六貫六百四武文。術に曰五の銭
六貫六百三棉武文を百文〳〵定法九分六厘を
乗じ銭六貫三百六十八文と乗毛を金一文の
割本百武棉入朱〳〵割す

○二尺五寸縄の割本八百六十五朱を二尺縄にて
朱数他経と云差へく二尺縄二本九百十武朱也
。術に曰五の縄二尺五寸を乗後の縄二尺〳〵れば
一個二分〳〵と乗毛を金壱文一個五分六厘二毛五系
と乗毛へ割本八百六十五朱を二尺縄の朱数を知る

○金壱文に割本二百五棉朱〳〵求へく金一歩二朱
割本他経差へて曰割本九棉朱し。術に曰金一歩二朱

拾貫文し。術に曰一本代銭四百九貫文と五百文に定法九分六りを乗し銭四百二十八文と除し元本数三本文合を銭を貫四百八文と五百文に定法九分六りとりつく割代銭を求む

○水油壱本の代四百拾貫文ありく今銭を貫三拾文に為油仲銭と同義さく水油二本文合

術に曰壱本の代銭四百拾貫文と五百文に定法九六どりを乗し銭四百九十文と除して法の三百九拾六文をさく割い代銭を知る

法をさく割一貫四文を五百文に定法九六どりを乗し銭九百九十文と除して法の三百九拾六文をさく割い代銭を知る

の水三七文と五合壱勺の割本二百四拾匁を掛る

○多葉粉一斤四拾匁

○たばこ五百六拾目

○今銭四百七十二文

諸國名葉たばこ

煙草

八百目あり此代銭四百九拾五文と五百文に定法九分六りとりつく割代銭を求む

○水油壱本の代四百拾貫文ありく今銭を貫三拾文に為油仲銭と同義さく水油二本文合

術に曰壱本の代銭四百拾貫文と五百文に定法九六どりを乗し銭四百九十文と除して法の三百九拾六文をさく割い代銭を知る

術に曰七拾貫文と五百文に定法九六どりを乗し銭四百九十文と除して法の三百九拾六文をさく割い代銭を知る

八百目を五百一斤の目百六拾目にて割し

○今銭四百七十二文

拾二斤程ありく今多葉粉を目壱四拾目

○多葉粉一斤の代銭二百拾二文ありく銭百拾文に定法九六どりを乗し銭二百九拾六文と除して法の三百九拾六文をさく割い代銭を知る

○多葉粉一斤の代銭二百拾二文ありく銭百拾文に定法九六どりを乗し銭二百九拾六文と除して法の三百九拾六文をさく割い代銭を知る

○多葉粉一斤の代銭二百拾二文ありく銭三拾目し個数程

拾六拾目一斤の目百六十目

○術に曰たばこ一貫四拾目の代銭四百九拾目の目九拾目の代銭四百九拾目

個に一斤の目百六拾目

○術に曰壱斤の代銭二百拾六文と五百文に定法九分六りを乗し銭二百九拾三百文と除して法九分六りを乗し銭三百九拾六文をさく割い代銭を知る

○多葉粉九拾目の目百六拾目を一斤の目百六拾目にさく割い銭百七拾文と五百文に定法九六どりを乗し代銭知る

○割多葉粉一斤の目九拾匁定め壱斤の代

▲積のうるひのこと

○まき貫文ヲ月根拾文分の時まき文に伊程ぞとして文根まき文に積六拾日又南と云
右ハ九十六文ヲ乗拾文分
うるひ割し

八分四厘百弐拾日文
八分　五厘　百廿七文二ア九
八分まき一ト　百廿文分ア一八
八分まき一ト九ハ　百廿文七ア九一
八分弐ト九リハ　百廿文〇七三
八分三ト　百廿文六ア六三
八分三ト九リハ　百十九文六ア六三
八分四ト　百十八文九ア七
八分四ト九リハ　百十七文六ア九
八分五ト　百十六文九ア四一
八分五ト九リハ　百十六文六ア九
八分六ト　百十五文九ア八二
八分六ト九リハ　百十五文六ア四
八分七ト　百十四文七ア一四
八分七ト九リハ　百十三文七ア一
八分八ト　百十三文〇九
八分八ト九リハ　百十二文八ア六九
八分九ト　百十一文八ア六九
八分九ト九リハ　百十文〇〇
九分　五リハ　百九文四ア九四
九分まき一ト　百八文九ア二七
九分まき一ト九リハ　百八文三ア四二
九分弐ト　百七文七ア八三
九分弐ト九リハ　百七文二ア弐五
九分三ト　百六文六ア七三
九分三ト九リハ　百六文〇ア二七
九分四ト　百五文五ア八七
九分四ト九リハ　百五文〇ア八二
九分五ト　百四文五ア三三
九分五ト九リハ　百三文四ア八一
九分六ト　百三文〇ア九一
九分六ト九リハ　百二文九ア六九
九分七ト　百二文四ア六一
九分七ト九リハ　百一文九ア五九
九分八ト　百一文四ア六一
九分八ト九リハ　百文九ア六九
九分九ト　百文〇四ア八二
九分九ト九リハ　百文〇ア九七

○積の賣買計事

○積六貫八百文ヲ月根拾文分の時まき貫文ヲ月拾七文分ハ右の積の根伊程ぞと問根百拾文分六多地と云先六貫八百文と右文を乗たる拾七文分とあき乗を右の積へかくるし

○根二百拾弐文分ハ右の根ヲハ積伊程ぞと云積拾弐貫文百文し根二百拾弐文分と右ヲ乗たる拾弐文分を掛て割し知る也

○積六貫八百文ヲ月令まき文ヲ月まき貫弐百文拾文分へ
月令まき文一ヶ月の根六ヲ分と云法みな六貫八百文をまき貫
二百文十分く割ハ小程ヲ以て文程曰ヲ曰ハ曰小一ヶ月の
根拾文分をとけく六文六分と知る文程ハ一ヶ月一ヶ也

根弐文分ハ分ヲ今割文程十五文分の
月まき貫二百文拾月ハ代根伊程ぞ答へて拾文
文分弐厘文也し。術ニ曰先拾文分を乗一分の
定法九十文分と掛まき貫四百弐拾文分と分ハ
月まき貫二百文拾月引ハ七拾文不足ヲハ七十
文分と九文ヲ分く割ハ七分九リハ分を拾文分の
月ヲ分引ハ拾日分弐分一厘と分也定法二分
文分をヲ分し
又月方七拾文分の分を拾文分平均ハ一分の月
を月文分ヲ本長し此一分代伊程弐文分六リハ八也
日系文し。術ニ曰九拾月を定法九文ヲ割ハ九四七
三八と分也弐文分を掛まハ知る也

十ゐ　五りン　九十五文五ア二
十ゐ　きト　九十五文〇四九
十ゐ一ト五りン　九十四文五ア八
十ゐ弐ト　九十四文　五ア一
十ゐ二ト五りン　九十三文六ア五七
十ゐ三ト　九十三文　二ア
十ゐ四ト五りン　九十二文七ア五三
十ゐ四ト　九十二文三ア〇七
十ゐ四ト五りン　九十二文八ア六〇
十ゐ五ト　九十二文四ア六五
十ゐ五ト五りン　九十二文九ア六八
十ゐ六ト　九十文五ア　六
十ゐ六ト五りン　九十文一ア四
十ゐ七ト　八十九文七ア一
十ゐ七ト五りン　八十九文　二ア
十ゐ八ト　八十八文八ア八
十ゐ八ト五りン　八十八文四ア七
十ゐ九　八十八文〇七三
十ゐ九ト五りン　八十七文六ア七
十きゝ　ゐ　八十七文三ア七
十ゐ一ト　八十六文四ア八
十ゐ二ト　八十五文七ア一
十ゐ三ト　八十四文九ア五八
十ゐ四ト　八十四文二ア〇五
十ゐ四ト五りン　八十三文四ア〇九

○今拾ゐ為二ゐと根きゐ八分ゐ〆くきゐ寸きゐ貫八百弐拾四文ゞくの銭を買時の銭を向銭七拾七貫三百弐拾きゐ文とゑ法とゝ下のきゐ八分ゞり一ゐの拾ゐゐゐ〆くゝ別紙ハ一弐と成ゑを二ゐの下へ加へ十ゐ為二一弐と成ハ十ゐ為二四をかくきゐ六十三銭一弐と成を右よりおき左へ一貫三百九四文とゝ垂ハ門北四文を九六ゐて別一貫二百九ゐ為と成ゑを左へ減七十七貫三百九二文と成ハ九二文と九六をとけ九文と知し

○今八為二ゐと銭二ゐ四分ゐて一為ゑ時四貫六七百ゞくの銭と貫時根八六十目ゞゐて右の今銭の銭銭四十貫百卅六文法ハ為二ゐ二為四分きゐ垂二ゐをゞゐゐて二為四分をゞ六十目ゐて別四ゐ成を右の為ゐの上ゐゐ八為ゐ四ゐ成ゑ四貫七百文を垂四十貫百卅八文と成時門北八文ゐハ九六とゐけ卅六文四八と知くゝ四八を拾るゝ

十ゐ六ト　八十二文七ア五六
十ゐ七ト　八十二文〇　六
十ゐ八ト　八十一文三ア〇六
十ゐ九ト　八十文六ア八六
十　二　ゐ　八　十　文
十二ゐ一ト　七九文三ア四八
十二ゐ二ト　七九文六ア一八
十二ゐ三ト　七八文六ア〇六
十二ゐ四ト　七七文四ア二四
十二ゐ五ト　七七文四ア二四
十二ゐ六ト　七六文八ア
十二ゐ七ト　七五文五ア二四
十二ゐ八ト　七五文五ア二九
十二ゐ九ト　七十ゐ文
十　三　ゐ　七十四文四ア四
十三ゐ一ト　七十三文八ア〇六
十三ゐ二ト　七十三文七ア三六
十三ゐ三ト　七十二文二ア〇七
十三ゐ四ト　七十一文六ア
十三ゐ五ト　七十文一ゐ
十三ゐ六ト　七十文六ア〇八
十三ゐ七ト　七十文〇〇きゝ
十三ゐ八ト　六十九文九ア〇九
十三ゐ九ト　六十九文〇〇九
十　四　ゐ　六十八文五ア一

○銭七貫三百七十二文方附一貫文ゑ十八ゐゞくみて右の銭の根の銭ゑをとゝ　根百三拾弐ゐ七分ゐ重しとゝ

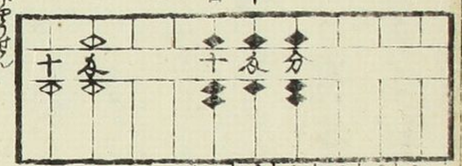
百	卅	十	文	五り	寸	分
						四四六加
					四七九八加	九六進十
				九文	一九 九七八九十六	九八四十
			七十	一七 七三八九四		
		三百	一三 三七八九十六			
	ヒメ	一七 七				

此ゑ銭を右よりおき垂七十二文ゑ目をりくゝく垂附七十ゐ文ゑ成下り十八ゐをとゝ

○根七十六ゐ七分方附銭きゐ貫文ゑ十六ゐゞくみて右の根の銭ゑ銭ゑ銭ゑ成ゞとゝ「銭四貫七百九十文とゝ法とり七十六ゐ七分を右よりゑ垂十六ゐをとゝ百より門ゑ下より四をとりけゝく引左の号ゑくゝ有り

十貫一ト　六十八文。三
十貫五ト　六十七文六ア〇八
十貫三ト　六十七文〇一九
十貫四ト　六十六文六ア九
十貫五ト　六十六文二ア〇一
十貫六ト　六十五文七ア〇七
十貫七ト　六十五文三ア〇九
十貫八ト　六十四文八ア〇九六
十貫九ト　六十四文　四ア
十貫　八文　六十　四文
十貫一ト　六十三文五ア二五
十貫二ト　六十三文一ア〇八
十貫三ト　六十二文七ア〇九六
十貫四ト　六十二文三ア〇九八
十貫五ト　六十文九ア〇九八
十貫六ト　六十文五ア三
十貫七ト　六十文一ア
十貫八ト　六十文。七九
十貫九ト　六十文。三七
十　六文　六十上文
十貫ちト　五十九文六二
十貫二ト　五十九文二五
十貫三ト　五十八文八九
十貫四ト　五十八文五ア三
十貫五ト　五十七文一八

十貫六ト　五十七文八三
十貫七ト　五十七文一ア
十貫八ト　五十六文八ア
十　七文　五十六文一ア
十貫九ト　五十五文七ア
十貫十ト　五十五文二ア
十貫十一ト　五十四文七ア〇七
十貫十二ト　五十四文二ア〇九
十貫十三ト　五十三文七ア〇九
十貫十四ト　五十三文二ア〇九
十貫十五ト　五十二文七ア〇七
十貫十六ト　五十二文二ア〇一
十貫十七ト　五十一文七ア〇九
十貫十八ト　五十一文二ア〇一
十貫十九ト　五十文七ア〇九
十貫二十ト　五十文二ア〇一
十貫二十一ト　四十九文七ア〇九
十貫二十二ト　四十九文二ア〇一
十貫二十三ト　四十八文八ア九
十貫二十四ト　四十八文三ア九
十貫二十五ト　四十七文八ア九
十貫二十六ト　四十七文三ア九
十貫二十七ト　四十六文八ア九
十貫二十八ト　四十六文三ア九
十貫二十九ト　四十五文八ア九
十貫三十ト　四十五文三ア九
十貫三十一ト　四十四文八ア九
十貫三十二ト　四十四文三ア九
十貫三十三ト　四十三文八ア九
十貫三十四ト　四十三文三ア九
十貫三十五ト　四十二文八ア九
十貫三十六ト　四十二文三ア九
十貫三十七ト　四十一文八ア九
十貫三十八ト　四十一文三ア九
十貫三十九ト　四十文八ア九
十貫四十ト　四十文三ア九



五進五十〇五六飛引
倍倍〇倍倍〇六七四十二引　五　四五九引
三進三十〇三六十八引〇見一五九作九一　七　四七九八引
六九五十四引　三文　三四十二引
倍倍〇倍倍〇六七四十二引〇見一五九作九一　九十　四九九六引
四進四十〇四六九四引〇見一五九作九一　七百
四メ

○上張三貫文ヲ銭十七ヘ〇中張三貫文ヲ銭十五文
ヒカヘ〇のおのおの今百張二百五拾四ヲ二ヲ四重ねる時ハ
ハ〇て張を上中二ヲ重ね時ハ上張も中張も同じ銭
づ　ちゃうとなる

百ちの内ハ四をとりけくひくなり

銭をとりさばくくるを刻くう

上張七貫八百五十文　一貫文ヲ銭十七ヘ　百張百九十二ヲ四重し
中張七貫八百五十文　一貫文ヲ銭十五文　百張百二十四ヲ九重し

十貫六ト　五十六文八三
十貫七ト　五十五文四八
十貫八ト　五十五文一四
十貫九ト　五十四文八ア
十　七文　五十四文一四七
十貫一ト　五十三文七ア
十貫二ト　五十三文二ア
十貫三ト　五十二文七ア
十貫四ト　五十二文二ア
十貫五ト　五十一文七ア
十貫六ト　五十一文二ア
十貫七ト　五十文七ア
十貫八ト　五十文二ア
十貫九ト　四十九文七ア
十貫十ト　四十九文二ア
十貫十一ト　四十八文七ア
十貫十二ト　四十八文二ア
十貫十三ト　四十七文七ア
十貫十四ト　四十七文二ア
十貫十五ト　四十六文七ア
十貫十六ト　四十六文二ア
十貫十七ト　四十五文七ア
十貫十八ト　四十五文二ア
十貫十九ト　四十四文七ア
十貫二十ト　四十四文二ア
十貫二十一ト　四十三文七ア
十貫二十二ト　四十三文二ア
十貫二十三ト　四十二文七ア
十貫二十四ト　四十二文二ア
十貫二十五ト　四十一文七ア
十貫二十六ト　四十一文二ア
十貫二十七ト　四十文七ア
十貫二十八ト　四十文二ア
十貫二十九ト　三十九文七ア
十貫三十ト　三十九文二ア
十貫三十一ト　三十八文七ア
十貫三十二ト　三十八文二ア
十貫三十三ト　三十七文七ア
十貫三十四ト　三十七文二ア
十貫三十五ト　三十六文七ア
十貫三十六ト　三十六文二ア
十貫三十七ト　三十五文七ア
十貫三十八ト　三十五文二ア
十貫三十九ト　三十四文七ア
十貫四十ト　三十四文二ア
十貫四十一ト　三十三文七ア
十貫四十二ト　三十三文二ア
十貫四十三ト　三十二文七ア
十貫四十四ト　三十二文二ア
十貫四十五ト　三十一文七ア
十貫四十六ト　三十一文二ア
十貫四十七ト　三十文七ア
十貫四十八ト　三十文二ア
十貫四十九ト　二十九文七ア
十貫五十ト　二十九文二ア
十貫五十一ト　二十八文七ア
十貫五十二ト　二十八文二ア
十貫五十三ト　二十七文七ア
十貫五十四ト　二十七文二ア
十貫五十五ト　二十六文七ア
十貫五十六ト　二十六文二ア
十貫五十七ト　二十五文七ア
十貫五十八ト　二十五文二ア
十貫五十九ト　二十四文七ア
十貫六十ト　二十四文二ア
十貫六十一ト　二十三文七ア
十貫六十二ト　二十三文二ア
十貫六十三ト　二十二文七ア
十貫六十四ト　二十二文二ア
十貫六十五ト　二十一文七ア
十貫六十六ト　二十一文二ア
十貫六十七ト　二十文七ア
十貫六十八ト　二十文二ア
十貫六十九ト　十九文七ア
十貫七十ト　十九文二ア

銀二口合二百五十貫ヲ二ヲ四重ねる先上張の和協拾七文
と左ふおそく中張のさうば十五文四ヲ加ふまば三十
銭五四ヲ二ヲ四重ねて右の二百五十貫ヲ二ヲ四重を刻バ
七貫八百五十文ツヽと知るなり

○右ハ上張中張とふるを今時いあさうし　まふ細ハ山本
元寛永のそうめよ出来て　後迄　拾補して　彩色宝
の大冊とあまりそ　古張　巻ひうて　銭いふう　張下り張
とて上中下の三ツを　法者人の　賣買和の　代ハ上中
下交りてみくを　扱ふる　乱ふ上張をぬき　張とのひ
ばるをうそ　後彩張つくをうくち　右の　絵図
あるまば今　時の　若き　流ハ　山本を　巻　流ひて　ハ四　重
あるべきやとぞんじ　を　後ハ　まるー　重し

十九文一ト　文十文。二六
十九文二ト　文　十　文
十九文三ト　曰十九文七曰
十九文四ト　曰十九文曰八
十九文五ト　曰十九文二三
十九文六ト　曰十八文九七
十九文七ト　曰十八文七三
十九文八ト　曰十八文曰八
十九文九ト　曰十八文二曰
二十文　曰十八文

是を割用を去るざる人のあるよりぐく割付て後文記し畢し

▲銀文くのつ

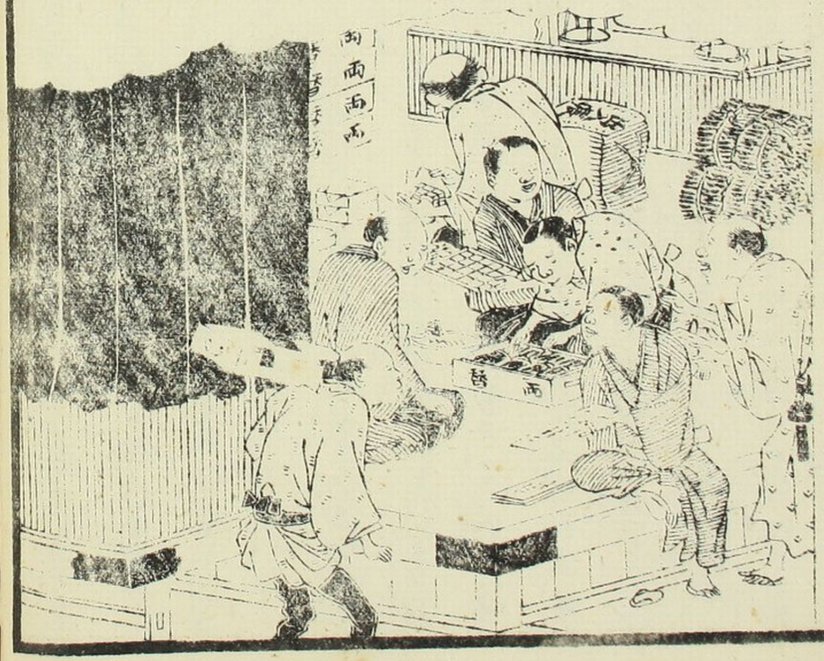
新書の二割引とらふを丁銀百目のうりは灰吹八十目とるさん用ちり

まりとりとふ丁銀百三十目の代はそのぶき百目とるさん用しけり

○銀文記の事

○丁銀文百六十九文ゆる時は灰吹四二割引みくくる時は

右の丁銀灰吹の代は「灰吹」四百文十文二分



ゆるとも四引の代は二分ぐく○二割引四を八ちくうるし和八十二ちて割し

○四分引とふは十文の代は九文七分百目の代は九十七文し又分三分とふ十文三ト代は九文百目

○二割まゝ和八十二とり出て四を八ちて割と約べし

○灰吹七百九十文代は百文の代は九百九十目とるべし

右のそのぶきは丁銀代は「九百九十目」とふ右は灰吹七百九十文と垂たりは八と垂は八ちく割ば丁銀

九百九十目と約べし○あるひは豆板九百三十目あり色を丁銀とする時四三分引く右の豆板丁銀代は「丁銀九百文」とふ引ば残く九文七分ゆるまを九百三十目は垂は四三分

○三分引四は九七をうるをり和八一○三ちく割し

○三分増和八一○三とりけ四は九七ちく割と約べ

右ゆるとも公指皆四お或は二割三分引とふるも先は十文

大判と小判の歩どへを
くらべる歩中ん
○大判十文まへのあるを
小判七歩まで銀九匁ど
あるを小判の銀低し
銀六十目のへあるを
小判百十一歩と云法又
いろく大判十文枚を右
おきたるを七歩一者銀
九匁と歩ばかり一分ハ二
五として九匁をば六十目
ろく判ろ一匁とあり一二
匁ばかりて七歩ほどを
右の大判ようくるし
○大判文枚二歩の乗を
とは三枚文歩の乗を銀
ろくれば小判ろそ代

と歩ばかり銀七歩銀
九匁ろ六十目
ろくれば小判
六十匁歩二分銀十匁八
分ろ乗ばかり三文枚二歩
と二枚文歩と合八枚八歩
と右ろ歩たるて七歩九
匁ろ歩ばかり二十匁を
六十目ろく判ば七歩三
匁ろ歩ばかりを乗へかく
ばかり六十匁歩六八ろ乗る
六十匁歩を一枚ろくろ
ろり下の六八の内歩を
引二分ろ歩の次へかさ
ねる一八を六十目を乗て
十匁八分ろ乗る
○大判文枚三歩ろく

ろ歩ばかり銀七匁六分三厘六毛三匁ろ歩毛ろ右の金七匁ハ分ハ
ろ歩ばかり「銀八十匁歩九分九厘九毛九分九匁ろ歩ばかり
ろ乗ばかりて悪敷」右ろ乗ばかり銀ろ乗ばかり
○金七匁ハ分ハ小判の銀ばかり百目ばかりろく右の金
銀ばかりそといふ時「銀八十匁歩ろ云右ろ金七匁ハ分ハ
ろ歩ばかり銀百目ばかり三七ハ匁毛ろ歩ハ十匁歩
ろて判ば八十匁歩ろ判
○上金九十六匁九分ハ判金一枚ろ代ハ九匁ばかりの銀ばかり
○中金百九匁六分ろ判金一枚ろ代ハ十二匁ばかりの銀ばかり
○下金八十匁二分ろ判金一枚ろ代ハ十匁ばかりの銀ばかり
三匁ハ分三百十七匁七分ろ乗ばかり毛ろ判金ハ分ろ時右の三
ろ乗ば判金ばかりそろ「判金七枚六匁ろ云先上金九十

ろ歩ばかり二匁歩分ハ引残て七匁歩分ろ歩ばかり
銀四十三割　一二加下十四　二四加下九八　三六加下四十二　四九加下十三　四十三進一十
○金歩ばかり
○金九匁歩ハ分判金の銀ばかり銀三百九匁ばかり
て右の金ろ銀ばかりそろ云銀三百目ろ云判金一枚
の代目四十匁歩ハ分銀ばかり百九匁歩四十匁歩ろ
金ろ歩ハ分銀ばかりばかり歩ハ分ろ毛ろ右の金九匁歩
ハ分ろ歩ばかり銀三百目ろ歩ばかり右ろ歩銀分の人ハ
ろ歩ばかり銀ばかり右の銀金歩ハ分ろ歩ばかり
○あるいハ金七匁四分ハ重ハ分ろ判金のろ歩ハ文百目
久の時文百目ろ四十匁ばかり判ハ金ろ歩ハ分銀十ろ歩三

つゝ三あも大判の位の一三あしこゝを小判三あと知るべしこゝ右のごとくあらんかの三あゝらふい小判あと銀拾貫文の三あもしあるこの貫賈う大方ならんかもし

◆小判あゝの事

銀一貫五百八十目あり

こゝを一あゝ目六十目ゝ

○小判八十七あ有時一あゝ目銀六十六匁ゝ目ゝて右の小判ゝ銀四貫八百七十二匁ゝ目ゝ右ゝ小判八十七あと盃ゝ十六匁ゝ

○小判九八あ三あ有時一あゝ目銀六十目ゝ目ゝて右の小判ゝ銀四貫七百九匁ゝ目ゝ有ゝ二十六あ九匁ゝ目ゝ九八ゝ匁ゝ小判ゝ二枚ゝ有ゝ又中今百三十八あ六ゝ目ゝ十二ゝて小判ゝ二枚三あゝ又十今八十二あ二ゝ目ゝりゝて目十七ゝて小判ゝ一枚七あ有ゝ三匁ゝて七枚六あゝ目ゝ

但し一匁ゝ目ゝ銀四匁ゝ目ゝ

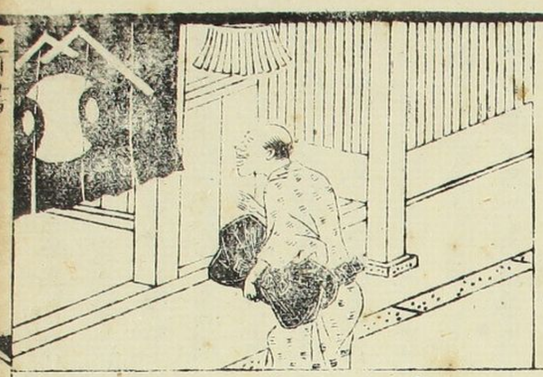
金四十四割

一二加下十二　二四加下九四
三六加下九六　四九加下今四　四十四進一十

○小判あゝの事

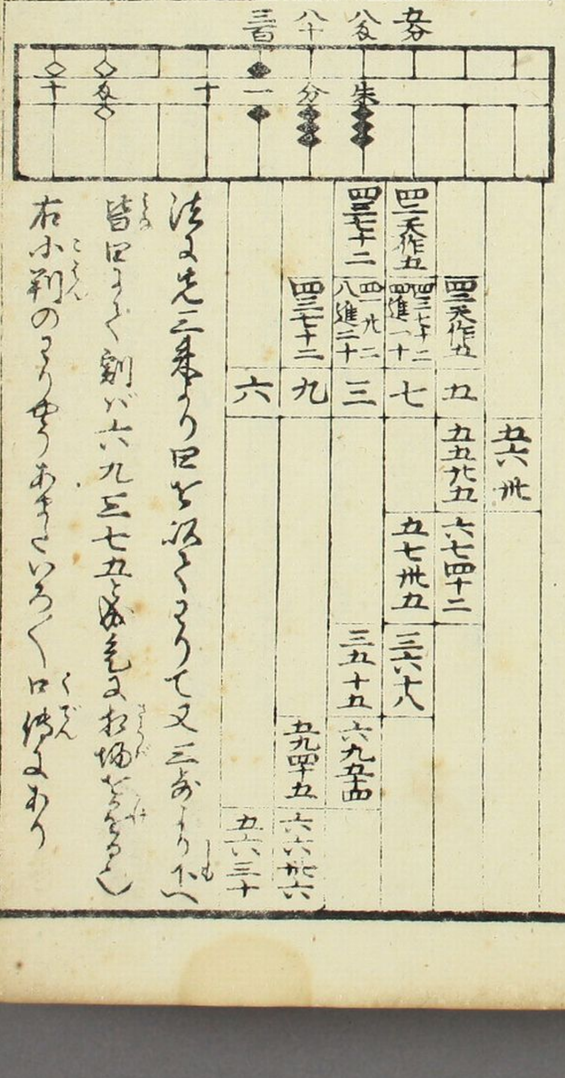
○小判八十七あ有時一あゝ目銀六十六匁ゝ目ゝて右の小判ゝ銀四貫八百七十二匁ゝ目ゝ右ゝ小判八十七あ盃ゝ十六匁ゝ

○小判九八あ三あ有時一あゝ目銀六十目ゝ目ゝて右の小判ゝ銀四貫七百九匁ゝ目ゝ有ゝ二十六匁ゝ目ゝ



九八匁ゝ目ゝ銀一貫八百八十目ゝ目ゝ有ゝ二十六匁ゝ目ゝ

○小判六匁三あ有時一あゝ目銀六十目ゝ目ゝて右の小判ゝ銀三百八十八匁ゝ目ゝ



右小判のうち中あきいろく口伝あり

▲元利利足のつ
かまつる合の利足なり
ゆへ〻うる合の元利
○合百五十文より十六匁
一ヶ月に元十二文二分宛
一文ずつの利足の定め十二
ヶ月の利足百六
文と定まる元百五十
文より十二ヶ月とりけくる
八百文と有る定たる
十二文と有る右を割ば
小銭百四十四銭と成る
と四ツ入れば三十六文を
なり但一ヶ月ごとに百六
文と乃ちくい十二文と四ツ
合百五十文より割く
利足なり

○銀六貫八百文十目うん時一ヶ月に利足幾程ぞと問「利き貫九十五文五分と云先六貫八百五十目と有るよりあさ一割五分とうん也

○銀四貫三百目うん時一ヶ月二分五分ずつ元利合幾程ぞと云　元利合四貫八百十六文と云先四貫三百目と有る定たる十一文或る定を右へうく

○銀元利合四貫八百十六文と知る

○銀元利合四貫八百十六文と知る

○銀元利合七貫目あり二割五分ずつ利足

○銀六貫八百文十目うん時一ヶ月に利足幾程ぞと問「利き貫九十五文五分と云先六貫八百五十目と有るよりあさ一割五分とうん也

○銀四貫三百目うん時一ヶ月二分五分ずつ元利合幾程ぞと云　元利合四貫八百十六文と云先四貫三百目と有る定たる十一文或る定を右へうく

○銀元利合四貫八百十六文と知る

○銀元利合七貫目あり二割五分ずつ利足

の利足と見るべし
○又十二ヶ月の元利合
小月ばかりなれば一文と
二文とを二ヶ月に十二文と
とりけく三文と成と十二
文より元割ば二文に成
元十文より十一文
に成と元合百
五十文とうく元利合と
百八十六文と知るべくなり
けくるに十二ヶ月に十文
ずつ二文に成の利足と見て
よろしかるべし
○元十二文二分ずつ利足
まるのの時は百文ずつ
利足と知る「百文ずつ二文
と定る云く一文と二五

の利足と見るべし
○銀元利合七貫目あり二割五分ずつ利足
先七貫目と有る定たる二割をうく是ば十四匁成
ひざりの十二ヶ月に
○一年の内利足利を利とうん
利銀幾程ぞと問き一貫目ずつ
一割ずつ
二割ずつ
三割ずつ
四割ずつ
五割ずつ
右利をうる法い五割を二時を右へ一貫目ず定
たりて一貫五十目と有る定たる十二文ずつ

と歩十二歩又ゑ歩刻バ
二歩と刻つゝし又百歩
ゑ分二歩の利ゑハ何歩と
一歩とゑ用ハ法二歩又
ハ百とうけゝ八つゝして
百歩を刻バ十二歩又ゑ歩
いゝハ二歩ゑ歩二十歩歩
二歩ゑ分一歩の利ゑゑ歩
ゆゝし

○本書ゑ七十六貫八百
目を一ケ月ゑ八分の利と
して利ゑ利をうゝ六ケ
月の利を問元利ゑゑ
ゑゝ問元を引て利
を分とゑゝくのゝくの
法ハ何利ゑゑ何程と
ゑ用の法ハ何程と

○たとへバ銀ゑ貫目をゑゝうゝ十年のあいだ
十歩ゑゝして何程ゑゝ銀ゑ十七貫六百六十
ゑ匁ゑ用ハ法ゑ一貫目と歩ゑ歩ゑ
ハ百目とゑゝ十歩ゑゝ歩バ右の銀と刻ゝ
百目とおゝ十歩ゑゝ歩バ右の銀と刻ゝ

○本銀七十六貫八百目ゑ一ヶ月ゑ利八分の貸
とゑゝし八分とゑゝ六月と百目ゑ分八分ゑの本ゑ
右の利六ケ月ゑハ何程とゑゝ利銀二貫六百八十
六匁ゑ分ゑとゑゝ先七十六貫八百目を右ゑ歩八分を
ゑゝ歩バ六百拾ゑ匁ゑ銀ゑ一ケ月ゑ分ゑ歩ゑ六ケ月
をゑゝ歩

○又右の元銀七十六貫八百目ゑ八分の利ゑゑ利
利をゑゝ六ケ月ゑ何程とゑ利銀三貫七百六十目

利計りとゑゑハ別時ゑ
その時ゑいゝ百目八分
を百目に六ケ月ゑゝ歩
百ゑ八分九り七〇三〇一六
二六八七〇一ゑゑゑ歩ゑ
百目引ゑ歩を元銀七十
六貫八百目ゑうけゝ刻
ゑゝ元銀の
ゑゝうゝ歩ゑゝ歩時ゑ
七ケ月六貫八百目を目安
ゑゝうけゝ

○本銀六十石を三年
のゑゝ歩利ゑ利をうけて
とる別法ゑ十三と十二と
十一と歩ゑ合して十
七一六ゑゑを元銀六十石
へうけゝ

九分二厘ゑゑ歩ゑ百目八分を左りゑ歩ゑを右の元銀
六ケ月ゑゝ歩元利ゑゑ八十貫ゑ百六十目九分ゑゑ時元銀ゑ引
○倍銀ゑ六十石者三年の分倍利ゑ利を加へゑ時ゑゝ歩ゑ
三ケ月ゑ三年目ハ二ケ月ゑ三年目ハ一刻右三年の分ゑ本利
合何程ゑと問元利合百弐石九斗六升ゑゑゑゑ六
十石を右ゑ歩ゑ歩ゑ七十八石ゑゑゑゑ又十二を加
ゑゝ歩バ九十三石六斗ゑゑゑ又十一をゑゝ歩ゑゑ元利ゑ歩ゑゑ
○銀元利ゑ三年の分合百卅七石二斗八升ゑゑゑゑ三刻
二年目ハ二刻三年めハ一ケ月ゑゝ歩右の元を何程ゑゑ
元銀八十石ゑゑ歩ゑ百卅七石弐斗八升と右ゑ歩て三年
めの一刻ゑ十をゑゝ歩ゑゝ十一ゑゑ歩右の百卅七石二斗
八升をゑゝ歩又二年目の二刻ゑ十を加へ十二ゑゑ歩

○本利ともに百卅七石
二斗八升あるべき年をとる
にも右の通りにして十
七、六とかけ余りを元米を
あつくべきなり

右の割るを又割して又それぞれの年の二つづつに十を加え
十三とたして右の割るを割ば本米八十石と知るべし

▲絹もめんうりかいの事
○一反に付代銀何程なるで
のもめん切二丈六尺あれ
ば中幅を一反に付何程に
して布切まで売る時
は何程にあたるといふ
二寸あるに法を置て何程
あるを一反の丈二丈五尺
あるを割一下八りと成るを
一丈六尺とかけ二反八下八分
と成る又割て六反何分を二
丈何尺あるを割二分あり

◯絹木綿うりかいの事

○きぬもめんの丈尺すんといふは大工の曲尺にて
一尺二寸をもつて呉服尺といふなり
○木綿一端に付銀何程にして長さ二丈六尺あるに
一尺の代銀何程ぞといふ時一尺に付き何分八り切と定まるといふ
先何程あるを右に置き二丈六尺にて割ば一尺に付き
八厘ほどとなる又何程あるはこれを置ても何分
八りと知るべし皆をかくるはいつまでも二十六の
割にて何程とかけべし
○もめん切八尺何寸ある時直は一反に付何程右の

六毛と成る時は右の二
反八分八りを割ば一丈一尺
二寸あるとなる也この
一尺は何程の代をかけて見
るべしといふてもまた丈尺
ある割八尺のうちあまりある
にも何程あるを一丈六尺
かけて見るを六反何分で
するべし

右の切の絹を何程にあたるといふ「銀壱匁七分とらす
先八尺何寸にて何匁をかくと言い二丈と成る目を置く
を六一匁七分と成り皆とかくる八十文の割の算用して又右の
切八尺何寸と二丈八尺一反の算用すれば「銀一匁何分何厘八毛となる
先八尺何寸にてとくれば目二丈と成るを二丈八尺にて割れば出る
○銀三匁弐分何程の時木綿一反に付何匁にして長さ二
丈八尺の算用にて右の銀にてもめん切何程となる
丈七尺九寸二分といふ先二匁弐分と右に置き二丈八
とくと成る八九六と成るをもつて割れば一丈七尺
九寸二分と知るなり
右絹木綿とも一反の長さは大方にあはざるのでこれにて
くるひあれども割は同じ事なり

入子さんの事

入子さんハ小より先へ書る
也　扨又大よりさんにハ
ぶ六一割三因又六と
壹合廿九一ヲ除て也
さかいの六分をとりく見バ
十二分六分と除ての上ハ
又壹代廿九一匁と又壹合廿
匁一匁六分と除毛を七ツ
の割ハ一ぞんの代宛ハト
と知るく也まずよ
又六分ハく引なり

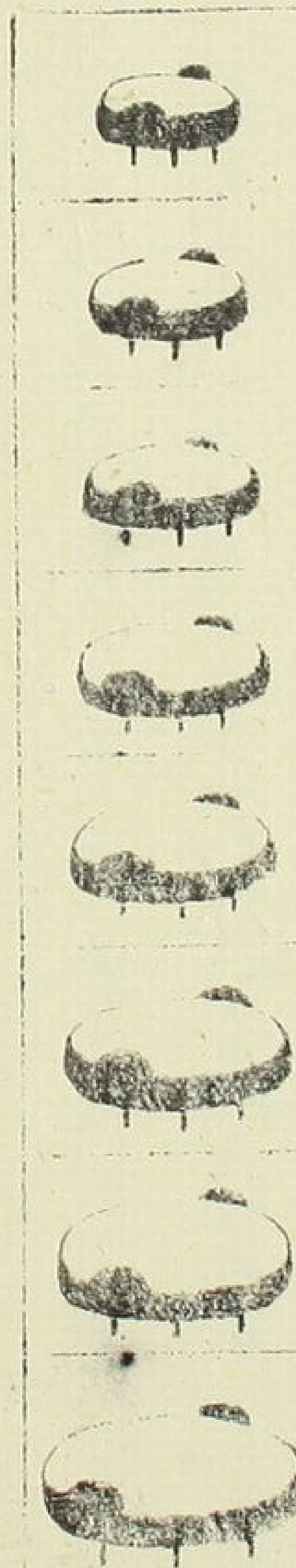
○又云ハ壹代廿九一匁を
七く又七ツ又割ハ壹升
の代一匁と見ゆるしさて
毛二拾く六分ハく算へて
大の分を知る三匁の門

○入子さんの事

○弐八七ツ
入子を銀
廿一匁ニ買

一匁二分	
一匁八下	
二匁四下	
三　匁	
三匁六下	
四匁二下	
四匁八下	

やれ時ハ入子一ツニ付六分てさげく下ハ物程にあるを云下一匁
二分とを云先へ七ツを左右ニ並て右の七ツをバ一ツ引六ツあるべし是
の七ツとて又六七の因十二と除毛を三ツニ割バ廿一と除毛六と見れバ
十二匁六分と除毛を右の廿一匁の内引バ八匁四分を七ツにて知る也

一匁二下	
二匁四下	
三匁六下	
四匁八下	
六　匁	
七匁二下	
八匁四下	
九匁六下	

○あるひハ入子一升ハ二升ハ三升ハ四升ハ五升ハ六

升ハ七升ハ八升ハ時ハ八ツとバ銀四十三匁二分て買中ハ時
一升ハ物程にあるとしてハ八口合て四十三匁二分ある先
たこ一二三四五六七八毛を合三十六と除毛として右の四
三匁二分を割て一升體き匁二分と知るし

順く六分ハく引て小の分
と知るし

○又銀く云く大より
二十匁目の代を先へ云ハ
とらば附ハ一二三四五と並
合十五と除門を一ツひき
のこり十四あるハ六分を
うけ八匁四分と除これを
廿一匁て拾へ七ツと割て知るし

○率書の升目さんりの
入子をとれバ四升入分
先へ六分とを云附ハ代銀四
下六匁二分ハ四升を一つけ
て右の量おりさく率れ
ある毛廿六と求めて毛
とりて右を割し

あがりたる物

○長崎の買物三人率銀ふ割符る事

一　ふんどん　○二百五十斤　一　おんかう　○七十斤
一　すなわ　○二百八十巻　一　いと　○八千四百斤

右の四廷を一代ふ銀百六十貫目ふかひ中んと此毛を
三人あひ合く銀を出せ

右の　○銀六十四貫八百目ハ　京の商人がたあり
　　　○銀五十二貫三百目ハ　堺の商人おらく
門を　○銀四十二貫九百目ハ　大坂の商人より出

朝鮮人参の沸がある行
値つもりハ撰すく
別の法を要領を以て
志るべしとかく符と
求めるまじくの出ず銀ハ
うけとる毛を紀し銀一貫
目に付みんじん一斤五六五
ぢんかう何斤三七又いと
五十二斤まき紀為一巻これ
七丈くのごとく見て丈
くの割銀とうけてよ

▲船の運賃の事

今米壱石に九斗へが法
上二百里の所と又百六
十里の所と或ハ米二
千五百石をうけてよ
うるく運賃をる附小里
ちんハ一石に付て二里と
二合ツヽと定めて或ハ何程
運賃何ほど取と云乎問
米をかけて何程と云答
仰ぐ之に二百里の米
なる何百十一石一斗一升一合
一石百六十里の米なる三
百八十八石八斗八升八合八勺
と云也運賃米何
百何拾何石何斗何升何合
何勺ほど云ニ石を二百
里のう割ハ何を知ゆヘ
一石を百六十里にて割バ六二
五と成二に或ハ
なる是ハ惣米を割バ
二二二二二二二二とある
是ハ之をうけ二百里の米

右何色の買物とめんくの銀高を寄て何程にて求め

京の商人の分	堺の商人の分	大坂の商人の分
銀六十四貫八百目	銀五十二貫三百目	銀四十二貫九百目
みんじん　百廿斤十両	みんじん　八十一斤九八両三分	みんじん　六十七斤一両廿五匁
ぢんかう　二十八斤十四両	ぢんかう　二十二斤卅五両一分	ぢんかう　十八斤三十両三分
いと　三千四百二斤	いと　二千七百四十五斤百九目	いと　二千二百五十二斤四十目
まきお　百十三巻一丈五尺	まきお　九十一巻一丈九尺九寸五分	まきもの　七十五巻二尺八寸五分

先人参二百五十斤と右の商一人前の銀高六十四貫八
百目とかくまへバ一六二と成是を惣する百六十貫目にて割
バみんじん百一斤二五と成此二五をかけてまへバ一斤の直
目百六十目とあつ是を二五がりふくまへバ百一斤四十目と
なる一斤と云ハ何程にて割バ百一
斤十両と成し是六十四貫八百目の分の人参の割付し
○ぢんかう七十斤を六十四貫八百目にかくまへバ四五二六と
なる是を惣する銀百六十貫目にかく割バ九八斤三五と成
此三五とるる志まぬ時ハ一斤の目百六十目を三五にかく
まへバ九八斤五十六両とならの五十六両を何程にかく割で
九八斤十四両と知る也
○糸八千四百斤を六十四貫八百目にかくまへバ五四四
三二と成是を百六十貫目にて割で三千四百斤と知る
○巻物六十四貫八百目に二百八十巻をかくまへバ一八
一四と成是を百六十貫目にて割バ百十三巻四と成
此四と云ハ志まぬ時ハ一巻のながさ三丈八尺を四に

五百十二石一斗一升一合
一夕一才と成 又右の割付
へ六二五をかけ百六十里
の米五三百八十八石八斗
八升八合八夕八才と有て
しうん銀を入るゝ時ハ二
百つゝ二合をかけ四斗
と成と二百里の米高へ
かけくるゝ 又百六十
里へ二合をかけ三斗余
と成を百六十里の米高へ
かけくもうんちん
かり然し此運賃ハ米
とかねを掛わりてお渡
船わりて本米を
差引すれ其の江戸まへの里

りく米六百十三巻一丈五尺二寸と是迄也 右の二人
の割付も此割と同前也

○船のうんちんの事

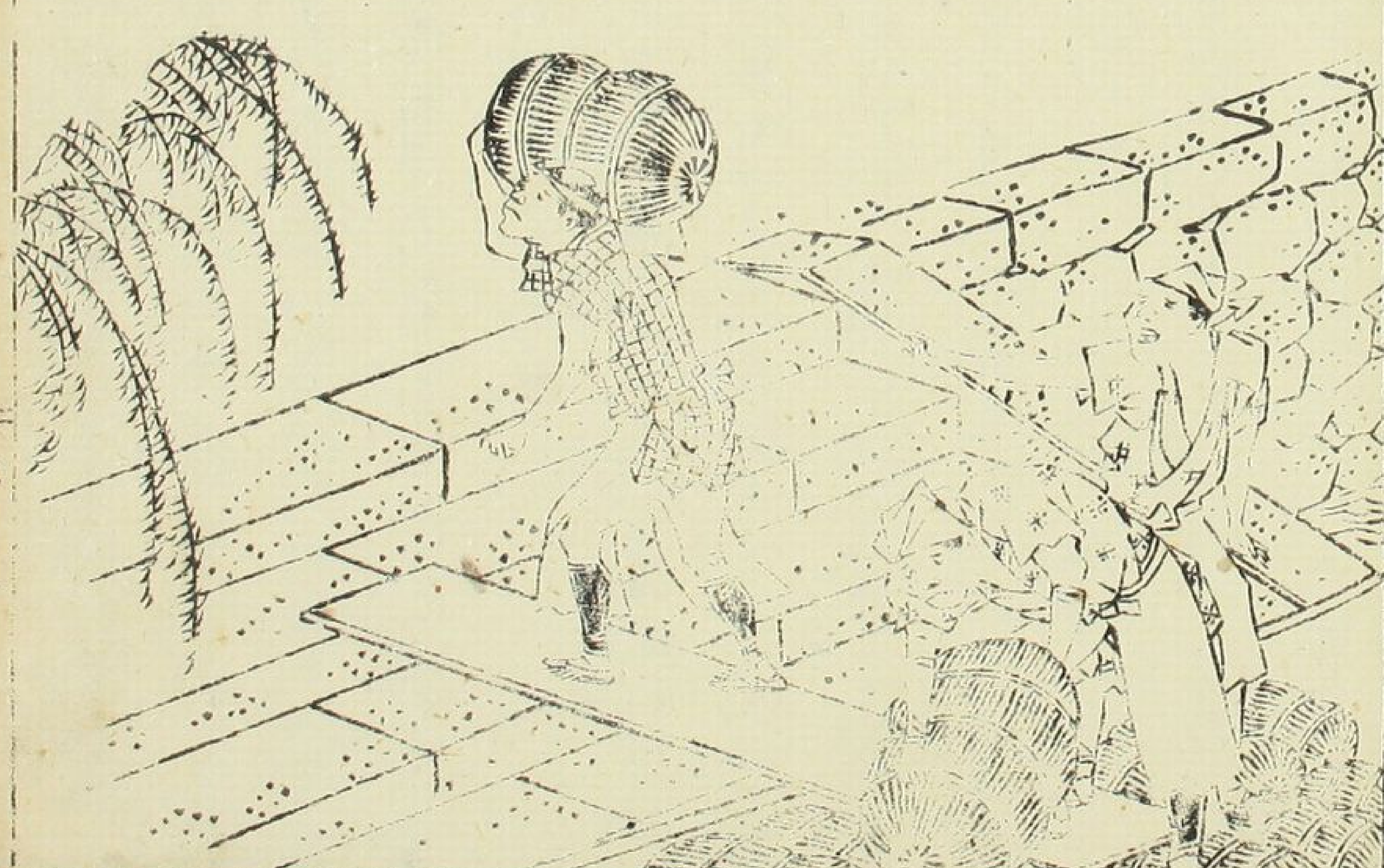
○ある人米二百五十石つんで御前へなりとも
行る時又運賃百石ニ付七石ヅヽ右の二百五十石の
内にて払ふ時運ちん御役をとる 運賃十六石
三斗五升五合一夕四才と云 先二百五十石を
かくまへ一七五と成を百七石にて割ハ運賃十
六石三斗五升五合一夕四才と成也
又右の本米を御役ぞと 二百卅三石六斗四升四合八
夕六才と云 右二百五十石を百七石にて割バ知るゝ也
○米買でいつれへなりとも何程銀十一貫一百目宛

がうつくハ海陸ともに掛り
むかしくむかしへ五十統
て二つより三つかくり又ハ
四つより五つ割もかくる

▲ちん地の事

○ちんちハ太子の御代
よりそめのまるおさまるべ
うたて田はふ綱をたて
今ちんちして畝をさと
めちひく年貢銀とち
ほうかつるもすへおしも
あとこれまでしるさる
在村のうくなりもまき
あしくなるも百姓共
舟上うくなるもゆへ
ゆうちんの仕
ゆう次第したゞへど三百

又人のしとつかうを銀
六貫八百目にて前
ヨ二口合十八貫目と
従ひ米の相場十石
ニ付二百四十弐匁と
運賃ハ拾石ニ付八
匁ヅゝ米買や何
の米ハ銀九十貫入
なり右の十八貫目
ヲく運賃済ハ
を掛ふく米御役て
成ぞといふ時 七百



おなじうのとろ遠して
二百七八十おゝ縄を入れ
まべこれと組の百姓給
飯上うくたり七村きの
つゝ家統し第壱
まゝ二百七八十おなる
りの三百おゝ縄をへる
和又を上中下のくらを
分遠て下田へ上田の結
り分は年貢仕是し
それと組の百姓飯上を
はゝ〜を組と是ゝ
組りまもまゝんを
と組ゝ〜を一組の者共
あげさるゝ〜めゝく
もるむゝい天からのゝと
おゝろ〜きまし

十六石四斗ゝ
うんちん八文とゝ
左ゝあゝ十八貫目と
十目引残て十七貫九百十文有之たの二百文十目
あゝ割ば七百十六石四斗と成ゝし
○又人のゝぶゝ根六貫八百目の分ゝは米仕組
てゝきゝ〜ゝ米二百七十石六斗四升ゝ右の七百
十六石四斗と六貫八百目とく是ゝ八七一文二〜成
と組る十八貫目ゝくゝ是ゝ二百七十石六斗四升と
成ゝ〜を一組の者共
あげさるゝ〜めゝく
もるむゝい天からのゝと
おゝろ〜きまし

○けん地法のもの事
けりゝたの場ゝ〜くゝ

のあと組べし
○あゝ一組ゝ大体
八人ゝあるあなりゝ
以をまるゝのハけんちの
法ゝ不揃ゝ
ゝ郷村と組れゝの
村へ入まゝ〜ゝ
せゝくゝ組ゝ
組百姓十名の者ゝ田畑
ゝ〜ゝ〜ゝ組ゝ十間ゝと
大縄りを組ゝ〜て
上中下の坪数を
いま八定めゝくゝ成
入べし

山田地
いく程
ぞゝ

十	十	十	十	十
八十坪	八十坪	八十坪	八十坪	八十坪

三反
田畝
十六
歩者

百	百	百	百	百
坪	坪	坪	坪	坪
百	百	百	百	百
坪	坪	坪	坪	坪
七十坪	七十坪	七十坪	七十坪	七十坪

○術ゝ曰ゝ
ゝ三十六坪と
ゝ三反田畝十六歩と
○上中下の位を付

ゝ三十七ゝ
長さ三十七ゝ廣さ九八ゝを組ゝ掛れば
ゝ成ゝ〜を田法三百坪を組ゝ〜べ
たゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

あるは土の上の尺余り
毛の上の尺余り屋敷
めぐり又ハ野田山田まで
功者入るすし屋しきめ
なれとも中田あつて野田
なくなつまても上田の分
あるも地を定めて
がくあるまじきも荒増
をに数多あつて
○定地の上より甲流
あうくはなくまつて
いう筏の甲にも用あ
の検見なく又洪水の
難もなく土地あつく
して嚢ときの利へ
ぜしく村里の持米
あつ入耕しるすて

長　廣　田法

かけざん	七八五十六角	二七百四十	
		三八二百四十	二三六百
六	卅		千
	三進一十	三一卅一	わりざん

かけざんのしかたは此ごとし
此田地御縄打とあれど
みがさ百三十三畝
是を三反四畝十七歩四分

そろくとしも年するの
力も費へたゞ日々けく
麦木綿などのみいう事
の彼もと仕付ても茂
けるへふく其ならく
かゆるいはて悪くして小
えまじりて撫滅も付
めと上の田地ともて植
稲作を数度どゞんの
塩あるなどの流れ入不わ
たとへ六枚あろしまん
ともおたかさならしき
まつなり又土かうく強
くねそりやさ稲ぞら
ぞとも灰土の強わ
ろいをよくとも作
すな洪の沼田ゐ日

長　廣

わりざん	六五八十二	五八四十	
	一八	三八二十四	三八二十四
	八		かけざん
一七	三七九一	三七九一	
七			
千		卅	七
三一卅一	三一卅一	三進一十	四

○廣さ七間五尺二寸あり此五尺二寸を六五を
以て割ば七間八分と成但し此六五を以て割るハ一間の
ながさ六尺五寸あるが故なり右七間八分に長さ百卅三歩を
かくまでかけ廿七坪四分是を田法三百坪にて割し

三反　二畝十歩

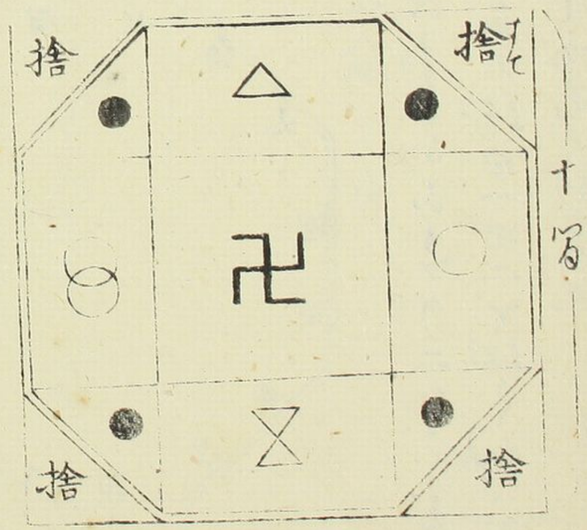
○測よいくもさ三十八間五尺二すを有るあるさ
は月五尺二すなり高尺五すを以て刻ば此八間八と
なる乙よ横北五間とをくまで九百七十坪と成也と
因法の三をく割ハ三畝二畝一あるべし
但し五尺二すを高さとして割ばとなるべし

○八角のあるく
器のごとく六角
ぐあり此坪
数幾坪とをく
答へて百七十
三坪八分二厘
九毛あるとを
測よ曰六角と
たたりあるて
うけ合ばこれ三六と六角高さ二をかく是い
七二と成こまを八角の法曰一曰二を以て刻ば百
七十三坪八分二厘九毛と知るべし也

土地の性合いよりく
も用ゐ不足ら山谷
なく冷あかる地ハ
ハのあるまもる
地そのゆる用ゐいるり
ても土性あるに新い
下田なりまを作い移く
ハるるゆる変るとを
も大作くのごく
あるべ考へるとあ
を一概すこ此のゆる
ごくこれのうち用
作くの上中下の反地
とをこを上反の上中
下の反地とあるなど

わるぞ引そむぞとえん
ぐ眼力のつより九引
くぐ上中下のくゝねと
是はべし志ゝ志ゝを
ゝくゝう多さう千く
なるゝゝ分のあるを
む以縄半丸たゝ縄
くゝを索ととけ巳縄を
仕ゝる引くしかつも
三合ゝる縄ゝるゝある
べゝゝ又つゝゝもあと
百姓ゝゝゝむゝと縄
むゝなゝまたゝゝハ
おゝちゝいゝくゝ
ゝゝく撰縄をもゝゝ
るゝゝゝゝゝゝゝゝも
紛のちゝいとなゝ然ハ

○八角の法ゝ
方とけ合也
一結ゝゝ
巳一巳二と
ゝく別仏を
下の器のゝ
○方十ゝゝ
ゝく巳濁を
切のけく八角
ゝゝ面巳ゝ一巳二の八角とゝゝゝゝゝゝ
ゝく六合して九重六横巳ゝ一巳二
ゝ結ゝゝく巳一巳二を

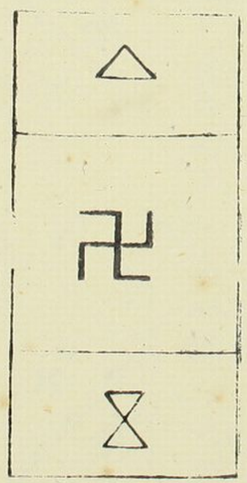


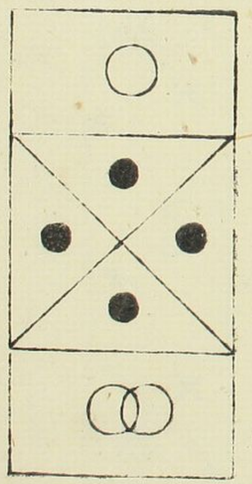
勿論ゝゝゝゝゝゝゝゝ別ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
器ゝ

▲地代のゝ
○ゝゝ上四一反七畝ゝ
てゝゝ二石七斗二升ゝ
以上納免巳ゝゝゝゝゝ
て年貢米一石壱斗
米宍合又村免二ツ八分
撰ゝゝ米ゝゝゝ
升ゝゝ合ゝゝ
二升ゝゝ七合ゝゝ
以ゝゝゝゝゝゝゝ
三石巳斗引ゝゝ一石
ゝゝ巳斗巳米壱合巳ゝハ
合ゝ地ゝの法米ゝ
ゝと合一ゝ身八ゝ

ゝゝ紙
ゝ

○但一巳濁の
切ゝゝゝい方
の径の円方と
ゝゝゝゝゝ
十ゝのゝゝの
ゝゝハ十ゝ
一ゝ巳重二ゝと

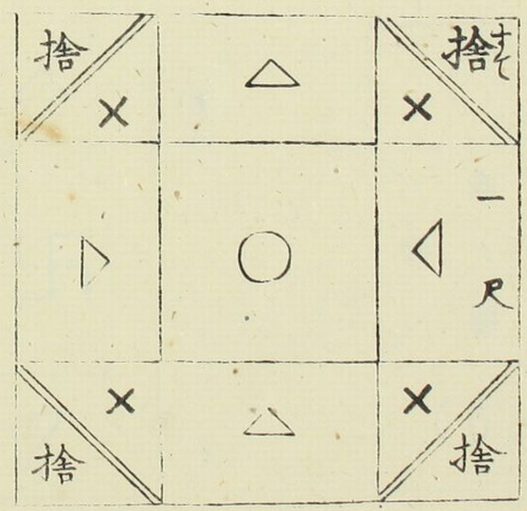




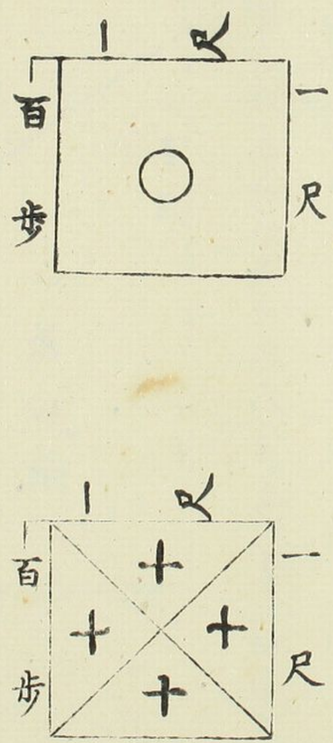
の加減み来たる〻穿
と記代金伝授〻〻
著つて・金十日或一両
銭七百八分銭為八銭
六寸間の長め

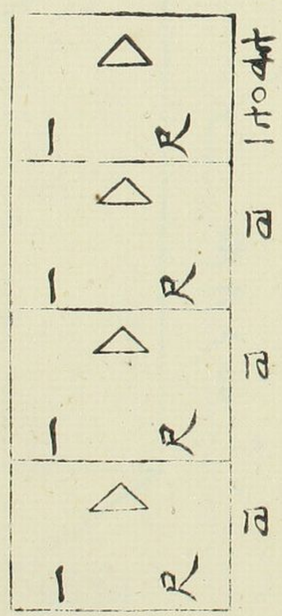
○説曰く右上図一反
七畝の内二石七斗二升八
上田免四ツ五分とく
また一石五斗五升四合
なりまた村免とハ一反
中の村〻法八角と村
る〻〻〻〻〻〻〻〻
計免三ツ八分なるハ斗
る二石七斗二升八合
また三石二斗五升六合
し二尺四合二石五斗五升七
合地紙へ

○又八角の法別傳之曰く
方とりけあ
せく曰八二八
曰とくゝ
計尺〻〻〻〻
二尺四寸一分
曰屋二毛の
曰方と四隅
切おとく〻
八角又他る
と記左の図



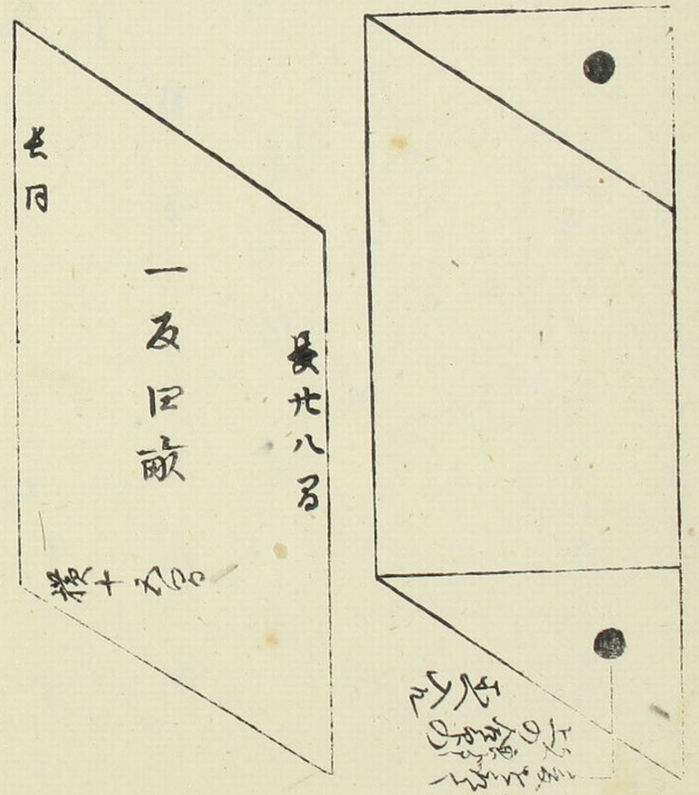
上図の如く〻〻〻〻
と他く他るを小他と
小他米ハ上田〻〻〻〻
一反〻分二石の割し他て
右又以る地面一反七畝
の小他米三石四斗を地
主へ他るし計四ツ
二石五斗五升七合六勺
の上他米を引ゑ三石
三斗四升弐合四勺と
方〻〻を一反二八升の
他米〻〻〻八を他く
〻〻〻代金〻〻〻
〻〻〻中田八畝十六歩
あり高一石一斗九升六
計上他免四ツ高〻〻
他米四斗一升六合八勺





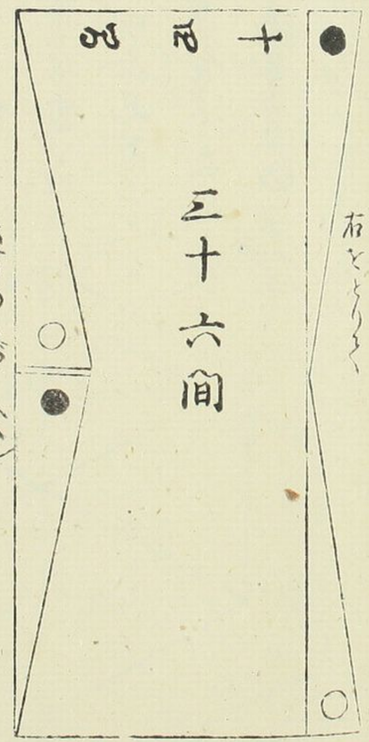
熱歩敢曰百八十二歩八分屋行

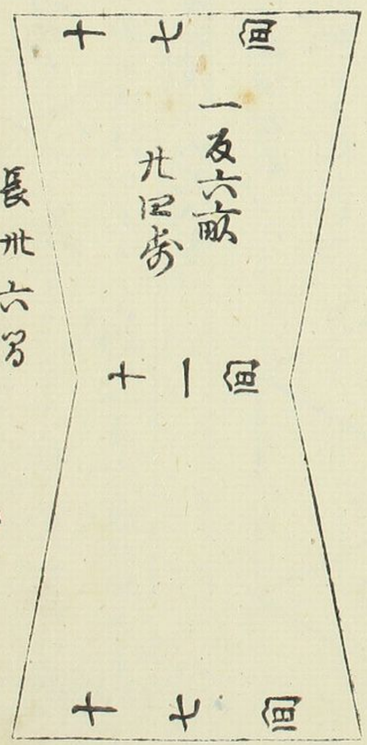
又村免二ツ六分ニて
けうゝゝ年三年一年ゝ
二石合八斗二升ゝ合多
あれゝし計而へ小紙条を
石ゝ斗ニ升六合の内ち
右の二ゝあさ引ゝ



○術又曰長九八分を掛又分を六ニ百九坪ゝ
ゝを因法の三ゝを引ゝ割て一反ニ畝とゝるゝ

七斗一升ゝ合ニ曰又又
の法ゝ条なり之と合一反
分九升ゝ合のかゝゆゝ
ゝゝ異ゝ問代合ゝ又
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ合壱
一ゝゝ紙条紙八ゝ曰ゝし
紙一ゝ反ゝ人六十目ゝ
○下因ニ反ニ畝又ゝゝ
ゝゝニゝ九斗八升ゝの上
約免曰ゝゝゝ村免ニツ
又ゝ合免七ツ八ゝ
て約ゝゝニゝ一斗ニ曰
ゝ免ゝ小紙条ニ石八斗
の内右上約条ニ曰ゝ引
ゝりゝく六斗九升又合六
夕の法条ゝゝゝ之紙
ゝ条目ゝ角ゝゝニ斗の





絹米ともに買中附ハ代銀価銀といふ差て日く又百二拾文なり

○法曰く他法米六斗九升又合六夕を絹米の一斗二升ともくこと是ハ代銀価銀

○数地米一石二斗五升四合三夕を銀若費用身七斗四升の絹米ともく

壹ヶ月附代銀価銀と云ともくこと二貫百三十文三分三厘し他ともふい銀而ハの価面の門を他ともふい井海水の数地を永代ともいふ

○術曰拾七号又十一号を加へる時ハ九八号ともなる

二つを割ハ十日号ともなる是又ハ十号を加へる時ハ九八号ともなる

日俵と数を因法の三ともく割ハ一反六畝九日余と知る也

○六角の法二又九八ハ

三角の法日三三

と六つ合一ともなる

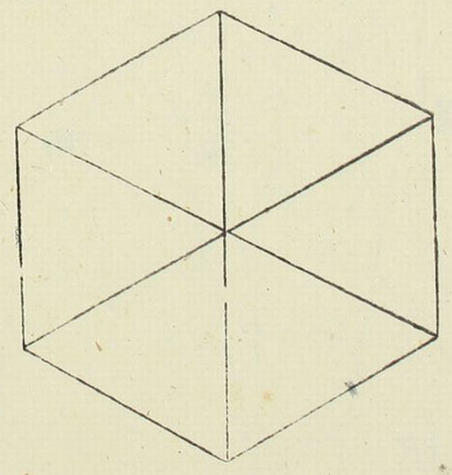
ものゝ考を統て

左の号も方

うけ合日三三を

うけ六つ合ともも

あるるの号ともの



○角の面七号あるハ附

俵数を而ハ差て百二十

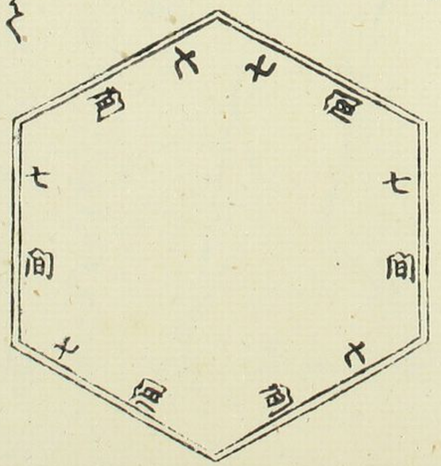
七俵三分二毛と云術曰

七号を左右ともに重ねて

二又九八とともに割ハ

又術曰七号を左右重ねて

日三三の法をかゝれば二三三二三七又毛ともに六と掛てもよし



○毛ともに村中ハ合て

俵ともに因地ハ

俵ともに毛の俵ともて

ともくこと数地なり先上四

一ヶ所ともて二反日畝ともに毛を移ともるハ俵刈

数ともに米六合ともるハ

米八合干減一刻ともて

元七合ともるハ出米

米又石一斗一升ともに

附ともくこと一人

三十人ともるとして一人

ハ米三斗四升の俵米

九斗ともくこと是ハ

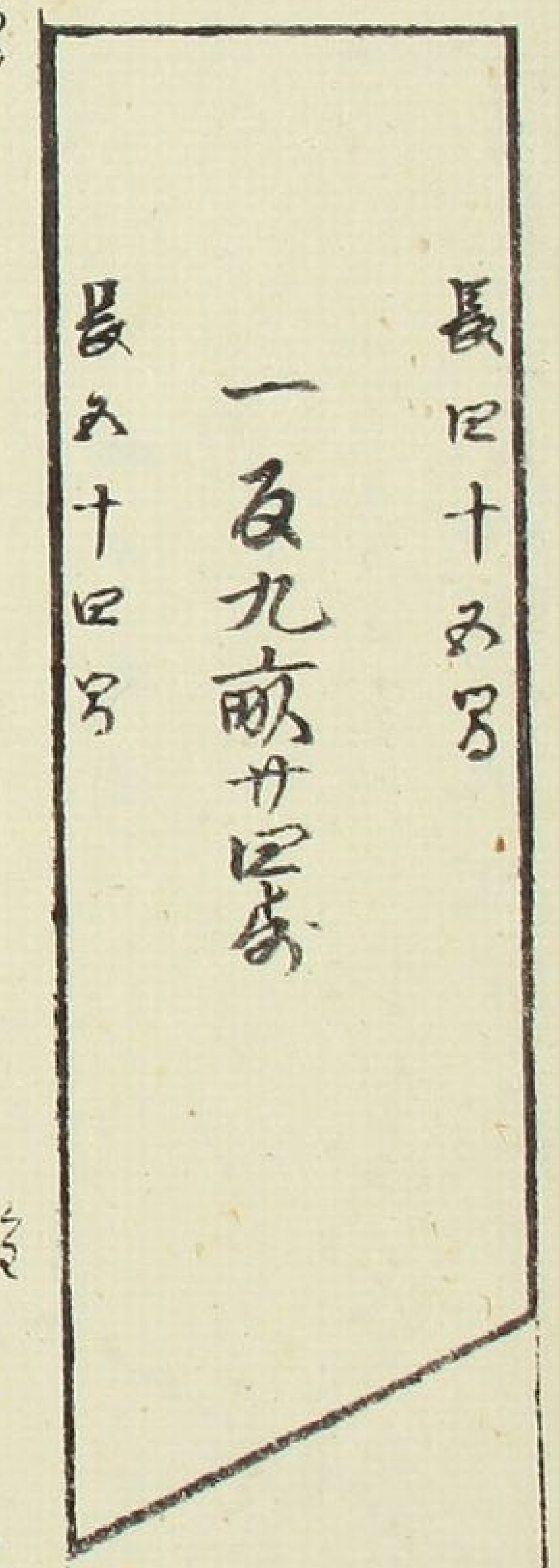
一斗ともくこと

○絹ハ日俵刈ともるハ

右因地の反畝上出米

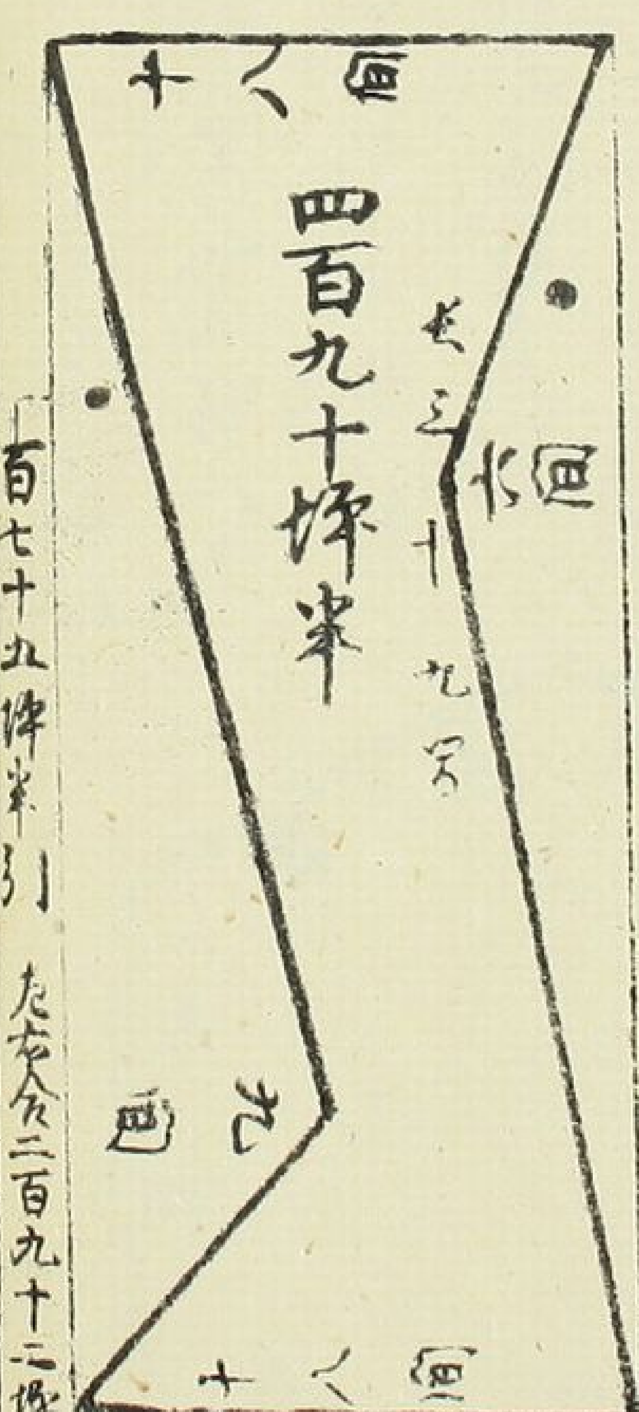
不作なる米の場所を除け中なる米の所へ六尺ます四方のさくと垂合別わち一坪なり其中の稲を刈とく実をするなりとも坪なく米と合わらば田地一反ハ三百坪なきハ七合よ三百坪をかくまへば一反よ籾米二石一斗と成るへおまいの二反四畝をかくまへば米のあまるまへを斗米と知るべし

○一反よ屋敷一ヶ所あり横二十間奥行二十間この屋敷内よ家土蔵三ヶ所あり建家の



○術よ曰五十四間よ四十五間を加へ九十九間を惣高を二つよ割バ四十九間半よ惣高よ十二間を掛バ百九十四坪と惣高を因法三つて割バ一反九畝廿四歩と知るべし

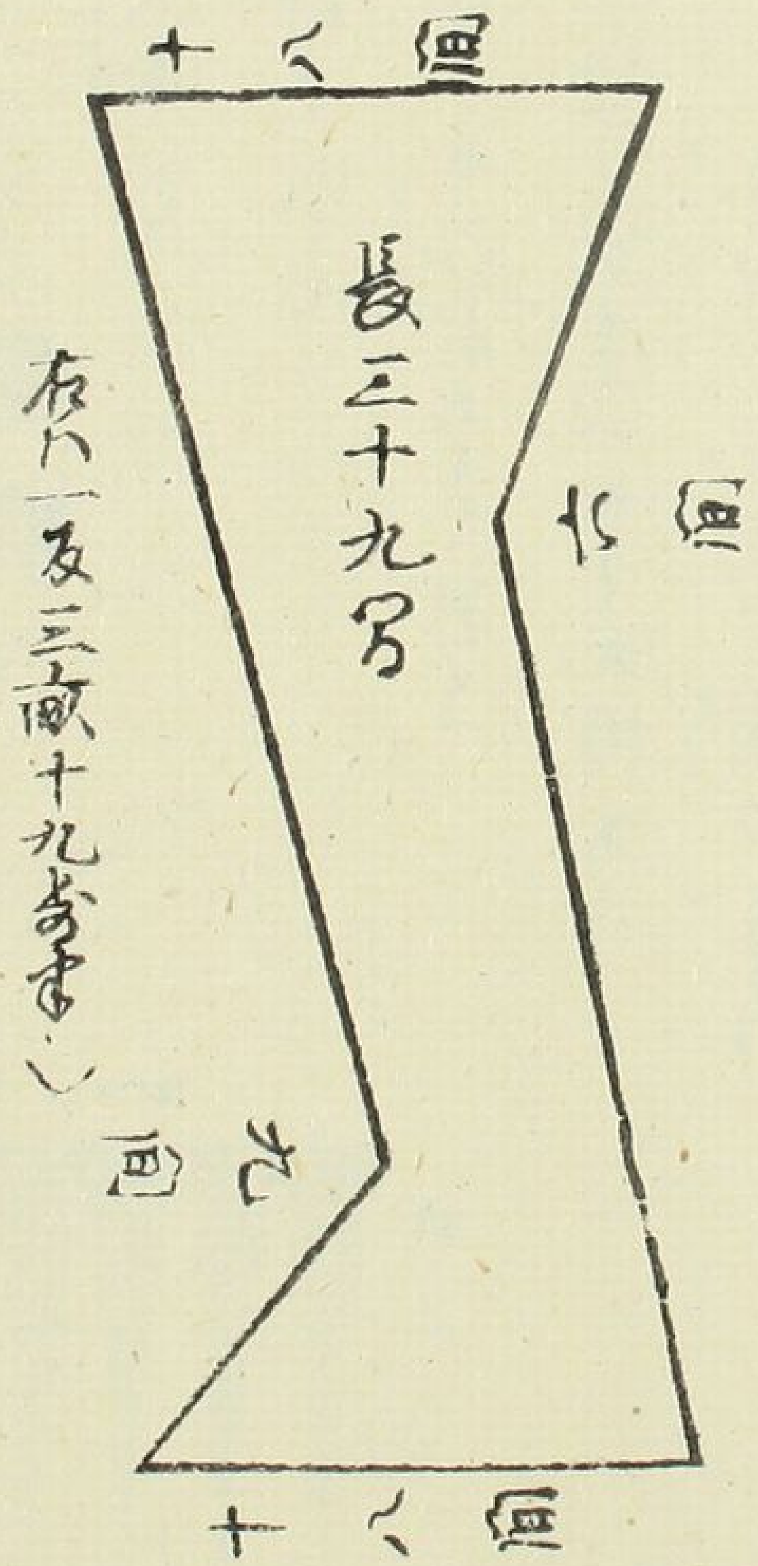
坪割方
たとへ
あるに



役すべく坪の格目かくく買中時價組物積と云差てく三積費目し

○術よ曰横二十間有奥行二十間をかけれバ六百坪と惣高へ一坪の代の格目をかくまで代銀知るべし

○町屋敷一坪の代銀七匁二分かゝく間口六間奥行七間の地代を物積とふかく三百弐匁四分とし術よ曰く間口六間よ奥行七間をかくまへバ坪数四十二坪と成へ一坪の地代七匁弐分を掛るべし



○術よ曰三十九間よ十八間をかけ合せまへバ七百二坪と惣高を割る垣まく六間の中を九間の中よ加へまへバ十五間と惣を二つよ割るまへバ七間半と惣高よ三十九間をかくまへバ二百九十二坪半と惣こまを右の門より引のこく四百九十坪半あるを因法の三をふく割バ一反三畝十九歩半と知るべし

○町反百二十坪の地代銀又百七拾六匁ありて一坪の代銀幾ばくなるや答へて一坪の代銀八分六厘八毛の術又曰坪数百二十坪と法とを掛て百七十六匁を割ば幾坪の地代銀なるべし

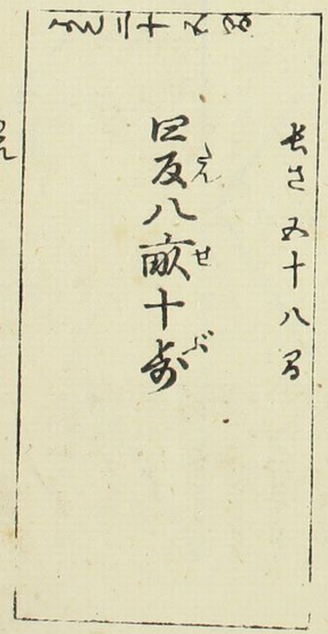
○答に又十八匁実約七十四匁の代地とて答に六十四匁の地とは坪数を不及あるべしかて実約幾程と云答へて実約六十七匁。六厘三毛又答し術又曰答に又十八匁を又実約の七十匁をかけ代地の答に六十四匁

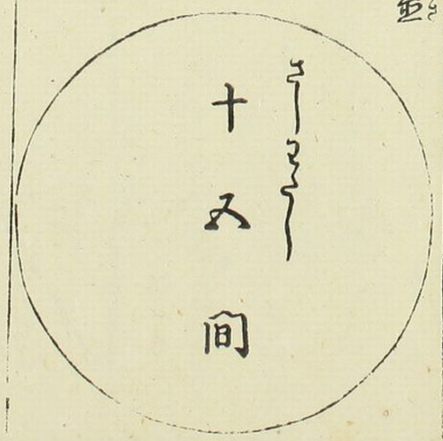
約多し

○答に十四匁実約二十匁の町反数代金三匁百文あり〻〻今答に十二匁実約十八匁の代銀程と云答へて金二匁百二十文し術又百文の答に十四匁を実約二十匁とかけ答に三匁を割ば二十匁と法とを掛て浸の答に十二匁実約十八匁の代銀程と云答へて金二三匁百文とかけ浸の三百坪とかけ浸の答に十二匁実約十八匁の代金なるべし

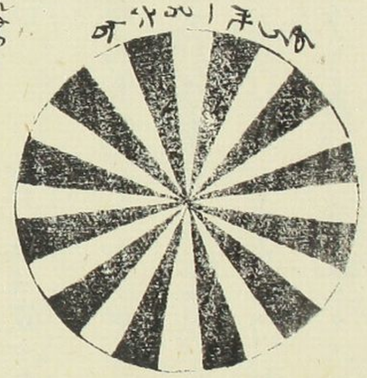
○術又曰十四匁を掛ば二百九十六坪と成也又七九とかけば二百七十七坪七分ありと成也を因法の三〻〻割ば又百文と成也

○術又曰考さ又十八匁と撰二十匁をたゝ〻〻垂〻ば又百文十坪



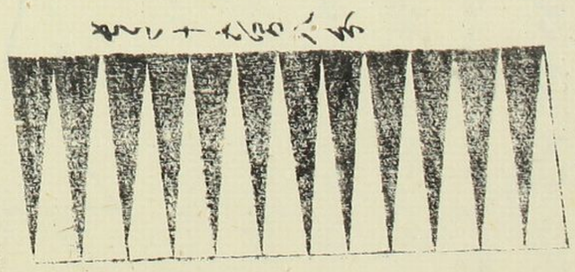


答法七九と云ハ種十匁の答図



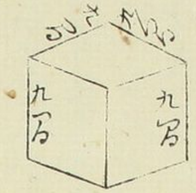
切るけと下の答の中〻又合さく考へ撰をとりけくみまバ七十九坪あり

此表中より

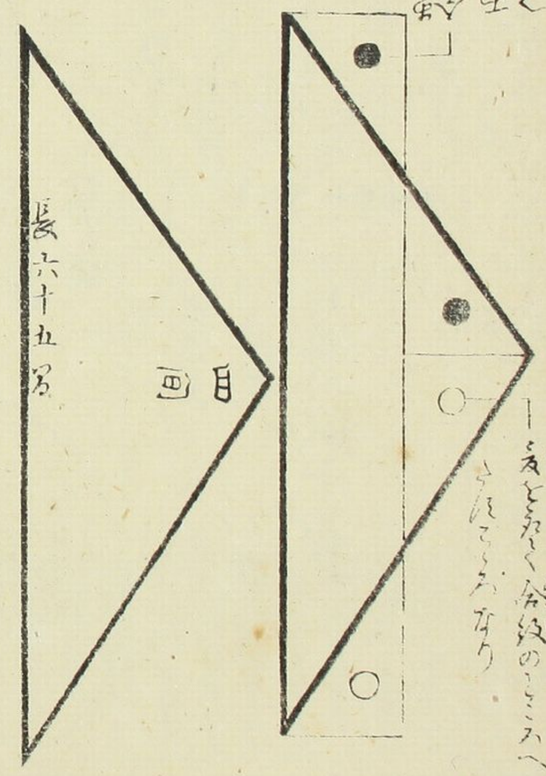


▲立坪の事

教書の名ん地にはりハ
みな平坪なるく土の長
サと長さの積なるゆへ
ゆえ九九の長さ長さ
つもりたの事のごとし



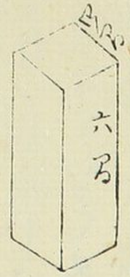
長さ九尺に面の土あり
坪数幾何とのたまへて
七百二十九坪しまる問
元を人更ゆ是ばさば
幾何あるや答へて曰
万七千三百八十四箇
○術ゆ曰面九尺を掛合



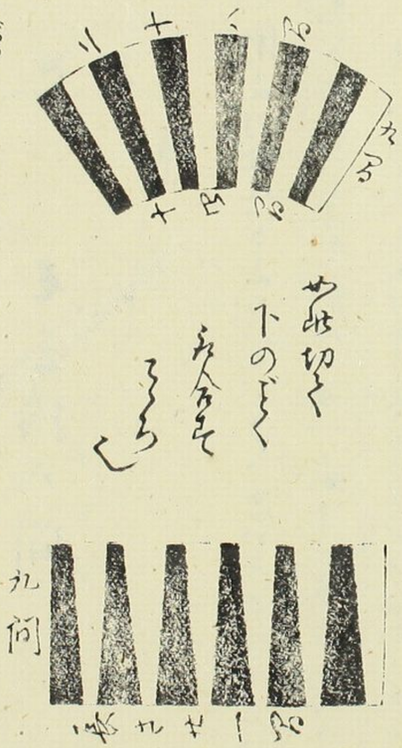
○術ゆ曰く四尺を三つゆ是ば二尺と成こ是を書さ
六十四尺ゆかくまば百三十坪ゆ成元を因法の三
つく別ば曰六百十六と知べし

但一刻半ハ畳の長のごとく

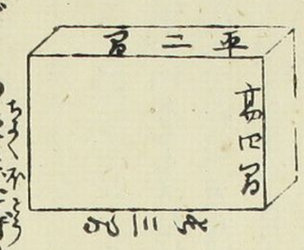
八十一坪ゆ成まる面
九尺とくまば坪ゆ成
知べし又術ゆ七百九
九坪ゆ更ゆ法六
ゆをくまば曰万七千三
百四十箇ゆ知べ
ゆ曰上一箇ハ一尺四
つく目方九十二メ目と
して三坪六百四十箇
なるべし



長さ方壇場とて面
尺と六尺の土あり
坪数幾何とゆ答へて
九十六坪しまる問

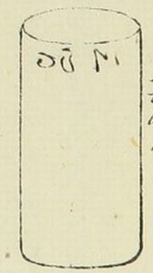


○術ゆ曰九八尺ゆ十四尺を
加へる時ハ四十二尺と成
元を二つゆ別ば九一尺と
なる元ゆ九尺をかくれば
百八十九坪ゆ成を因法の
三つく別ば六畝九歩と知べし

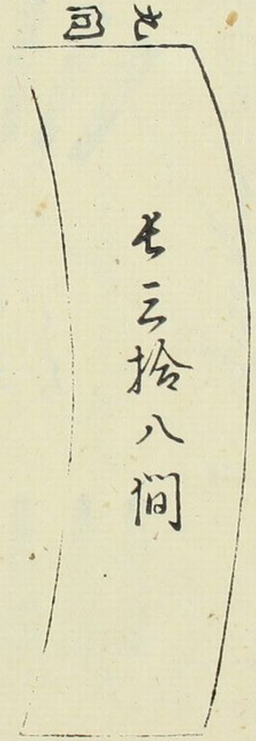


支拾の数の為差へく六の二百四十為し術又曰西四百と高四百十六坪と為さへくこれの六百をとくまゝ九十六坪あるこれを初るし又計九十六坪へ六の二百四十為を初る

初のごくの玉堅博あり此坪数を問へくて二十四坪し又問支拾の為差へくよ百六十為なり術又曰平三百へ長三百と掛合をまゝ六坪こゝ為差へくるこの四百をくまゝ一十四坪を初る又九四坪の六の二百を掛て百六十為を初し

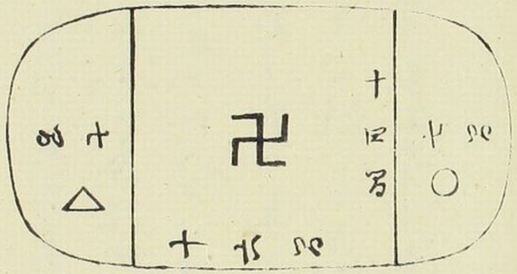


初のごく為博あり此坪数の為とらふ為て二十四坪二分四三又問支拾の為差二の二百九十七為二九の二し術又曰



○術又曰此八百九百とくまゝ三百四十二坪とある為と問法の三て別ハ一反一畝十二歩と初るくし

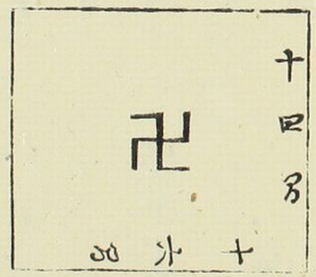
四一計四の形ち出張中り表方こも平面よりあり方法



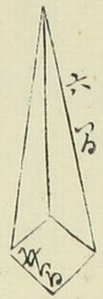
左右くく十百百引
残り十六百まゝ坪あり

此坪百四十四坪八分四厘

○左右共合せて十百百をとけ合せ数法の七九をとりけるし別るさ左よまるも



径三尺を乗ぜば九坪となる又へそさ六尺をかくまでは十五坪六合
系統法の七分八厘にとくまでは坪数拙六坪三分四厘を乗ずすると
六又をとりて変相三分
二百九十七尺二九又を紀



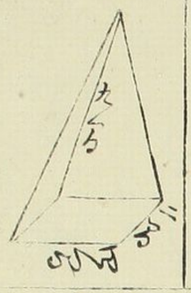
○術に曰く長三十尺の
円を十四尺引ば残り十六
尺物をもて又十尺を掛
まで二百九四坪と成を
右に別に乗又たに十尺
を左に乗うまで一九六
又成を系法の七九を
くまで百五十四坪八分

如のごく方錐にて角
なる錐のごと此土あり此
坪の径を乗べて五十
坪又同支相加へ三分
二百五十尺に術に曰

曰重となる時は三百七十八
くまへる時は三百七十八
坪八分四厘となを因法の
三ごく別ば一反二畝十八歩八分四厘となる

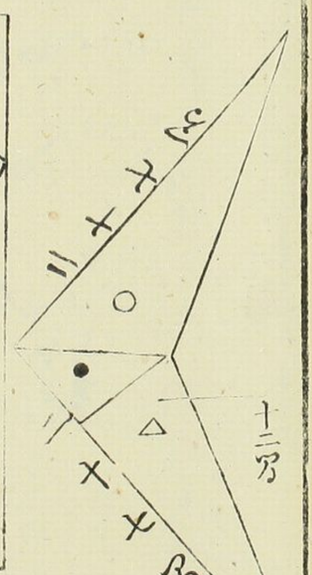
一反二畝
十八歩八分
四厘

横十四尺
竪十四尺

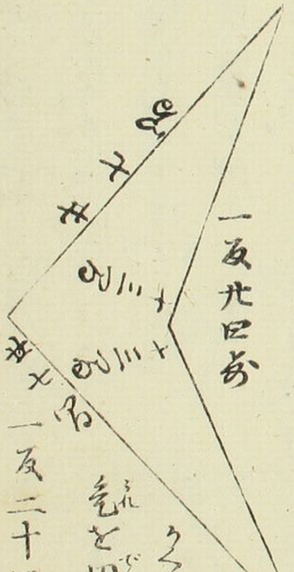


五尺を掛ぜば二十
五坪となるへそさ六尺
とをかくまで百五十坪となを
系法の三ごく別ば四坪
を乗ず又五十坪に六五を
うけて三五二百五十尺を
乗ずなり

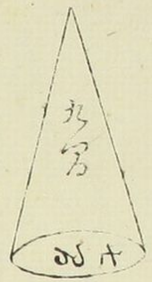
如のごく土地にて平
面なるの土あり
坪数拙径を乗べて二十
四坪又同支相加へ
五百六十尺に術に曰く
径三尺を平二尺とうけ



○術に曰く九
十七尺に十二尺を乗
くまで三百九四坪となを
径を因法の三ごく別ば
一反二十四歩と知るべし

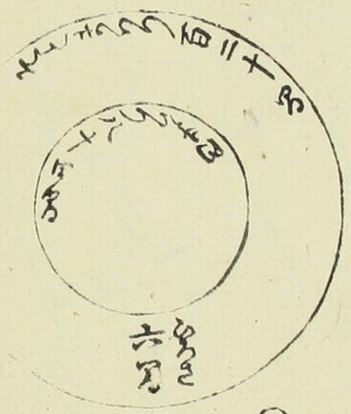


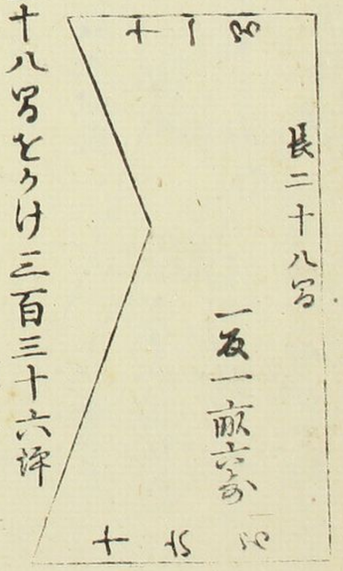
六坪と成る又高さ九
尺とくれば六十坪と
なるを実法の三尺を割バ
九坪と成る又九坪
に六十坪とけく十五百
六十箇を成るし



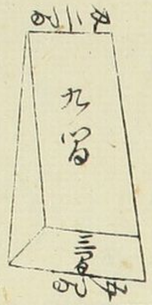
形のごとく斜面にて斜
線あるの土あり此坪数
を問答して百十五坪に
成る三八し又問文相似
箇七尺五百四箇に成る
九ちし術に曰径七尺を
うけ合せバ四十九坪と成

○術に曰十六
尺を中の八尺
まを乗又十一
尺まを乗へ卅
六尺を成る又二十八尺をとりけ三百三十六坪
を問法三尺を割し





○だの絵面ようくい絵図の
人の考得あらとうか
ぶし時考べく
知るべし

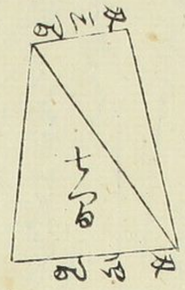


ゑ百四十一坪と成る
法三尺を割又斜法
の七八尺四を掛く百十
五坪に成る又三八を掛る
又是へ六尺を掛く丈
坪数七尺五百四箇に
七と知るし

○坪数四十九
坪四箇に成る
四角り中の四り
八十四尺の角り百九尺あり
廣さ六尺を掛
径を問答して曰
二反十二歩あり
術に曰円形内の二
百四尺あるを三
で割バ百二尺に成
る六尺を掛バ
六百十二坪に成る

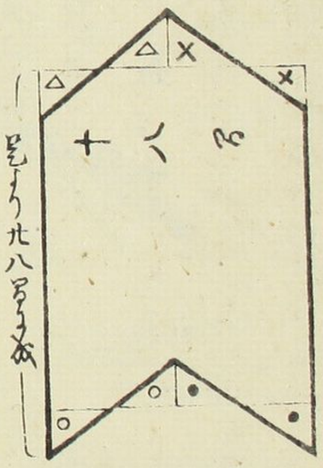
楔の形の土
あり十坪数如何とあ
答へて曰十四坪又問文
相似箇三尺五百十箇
術に曰七尺五百を掛て

双二つをとりて平二つをくれば三十六坪となる、
こゝを九つをとりくまば二百九十坪となる也と是法
の六つをくれば四十坪を
知る又六つを捨てば三十
六百十箇を知るし



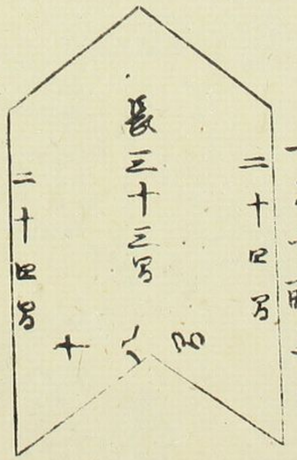
却のごとく表双の上を
は坪数幅程を差て
十四坪とし又同じ拾幅
箇九百十箇し術曰
上双二つへ下双四つとり

中をた
ちへ合
せ



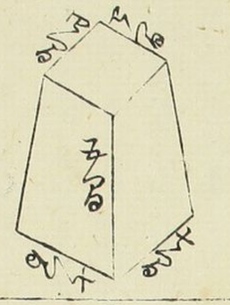
○術曰く七寸を世三つとし
二十四つを加へて
七つを二つとし
九八つまる八十八
つをかくまば又百十三
坪となるを因法の
こゝをくれば一反三畝

左右合せて
合せ中へ
入るし



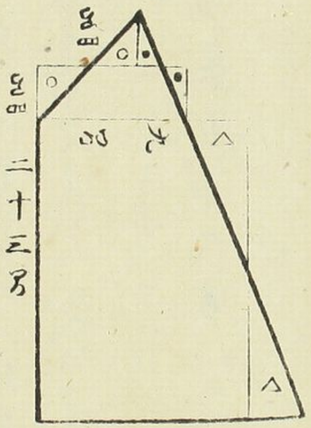
一反七畝三歩

は又こゝを七つを掛て
是法の六つをくれば十四
坪となる也又六つを
くれば九百十箇あるか
ゆへとなるし

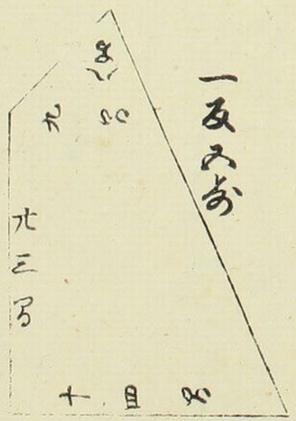


却のごとく方表しく
上ゆくせんあるうち
前なるもあるは坪数
幅程を差てく百四十
四坪し又同じ拾幅箇
一万〇〇七十四箇なり

○術曰十四つを九つ
加へる時は九二つとなる
也と二つを刻は十一つまる
又也を九二つとなる
まば二百六十四坪まる也を布を別に重又八つと二つと
刻は四つとなる也九つを掛まは九六坪となる右の二口
合て三百坪まを因法の三つをくれば一反三歩也

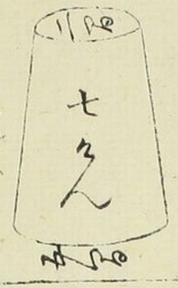


こゝを合せて
ありてこゝを重
ねるし



一反三歩

術に曰上面四号に下面七号をくはへ共八坪と成るを半分にして上面四号に下面七号を加へ十一号に成て掛合せば百九坪に成る問別に乗る九十三坪あり是をもとめるとき六十五坪と成を定法の三くに別ば百五十五坪を初に六を掛て一万〇七十五番を得



銘のごく敬愛こく

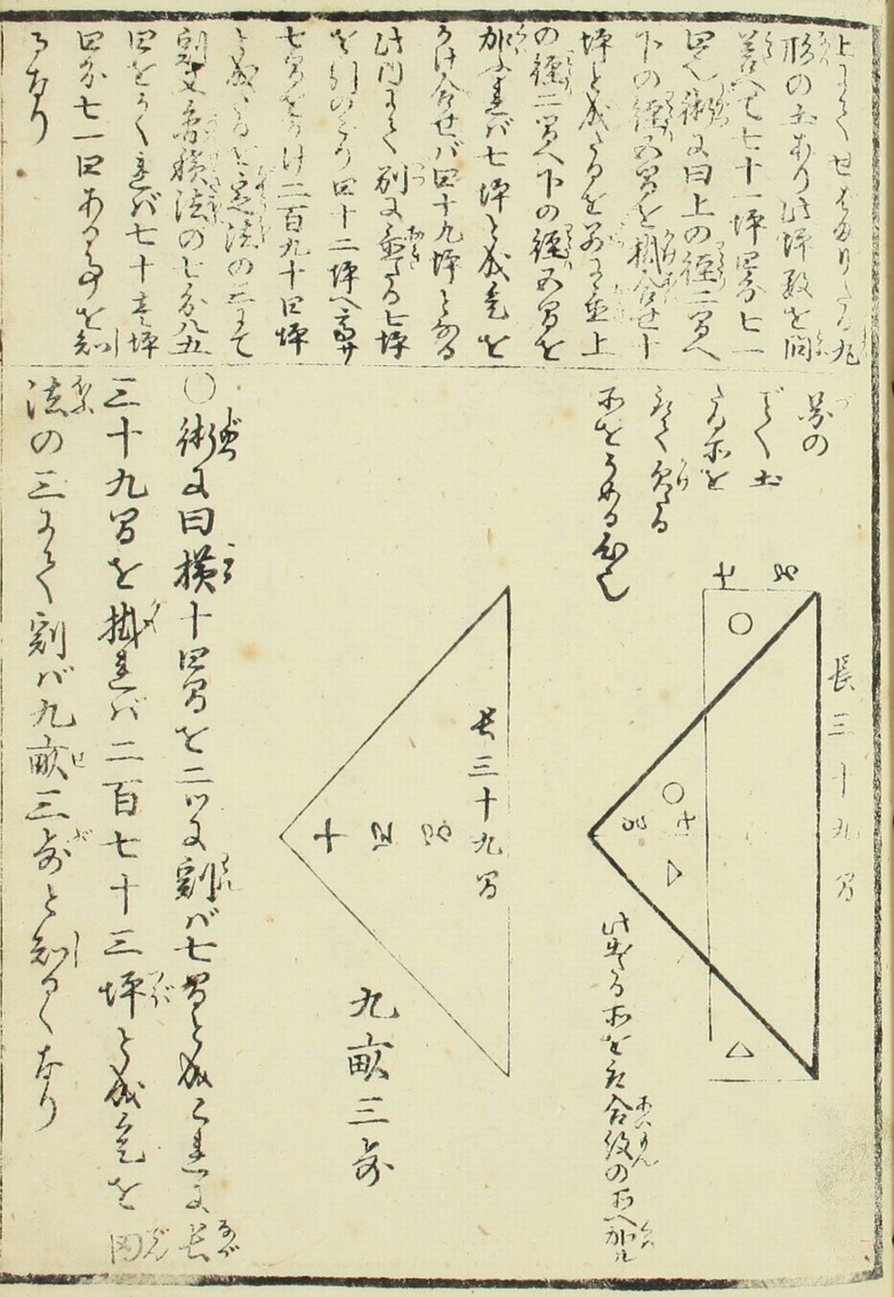
○横巾の五尺を六ゑるに別ば号の位に成る尺に十番六九二こし毛を七十六号と掛るなり左の号のごく

七十六号

一畝九八番四分六厘

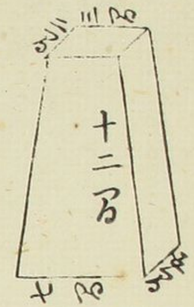
○術に曰長さ七十六号を五尺とるに長さ三八に成毛を六ゑるに別ば十八坪四分六厘に成毛を問法の三くに別ば一畝二十八番四分六厘

長七十六号



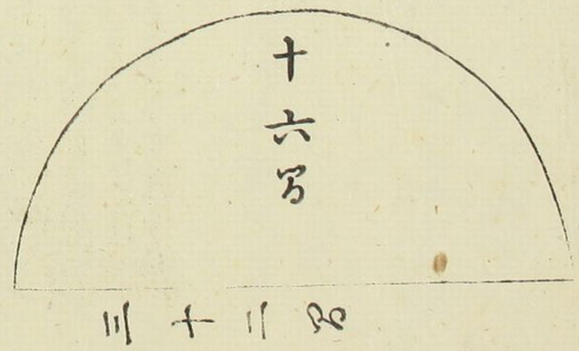
号のごく
こくを
こくなる
あるとあるなし

○術に曰横十四号を二つゑ別ば七号に成るまつゑ長さ三十九号を掛まば二百七十三坪に成毛を問法の三くに別ば九畝三分に成なり



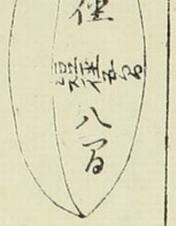
術の如く重意として下まくの数かりまるゆへ上の広七尺をとれば上の広十尺と成る之へ別の重さ十二尺を掛まへ百九十二尺を除へ下の広七尺をとれば八十四尺と成る之へ別の重さ十二尺を掛まへ百九十二尺と成る之を除く二百九二尺を術の曰上の平二尺と積しく尺と成る上の平二尺を九尺と成る之へ上の長サ二尺をとりけく二十七尺と成りと別の重又下の平四尺と積して十尺と成る之へ上の平二尺を

○術の曰長九二尺を十六尺をとりまへば百十二尺と成る之を系法七九をかくまへば百四尺尺と因法の三ツをかけ別ハ一反三畝十四尺尺ハ八畝と成る

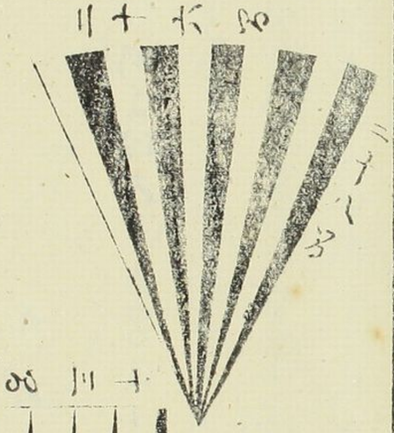


法の曰く尺を系因の寸分なるゆへ系法の七九を用ゆるし走ゝ強さうゝる時ハ此法みくハ拡ゝ別法口伝の書を用ゆ

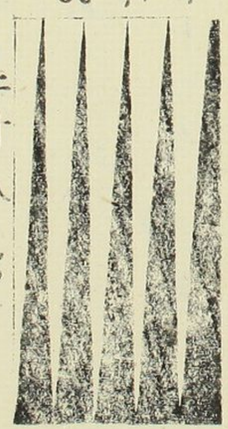
加へ下の広七尺をとれば八十四尺と成る之へ別の重さ十二尺を掛まへ百九十二尺を除へ十二尺と成る之を除の六ツを別ハ二百九二尺を成る



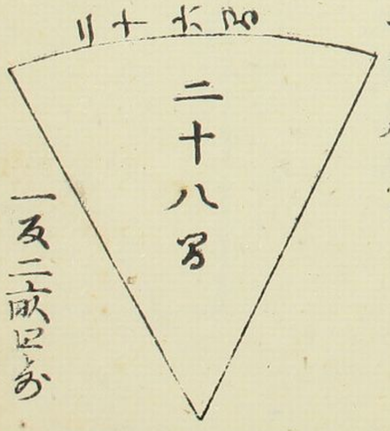
形のごとく直径あり此径を系法へて百四尺七分二厘を延径八尺をかけ合せ径八尺をとりけさ



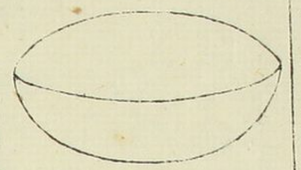
○術の曰横の二十六尺を二ツ別ハ十三尺と成る之を九八尺と成る之へ三百六十四尺と成る之を因法の三ツを別ハ一反二畝四尺成し



かくのごとく積合を成し

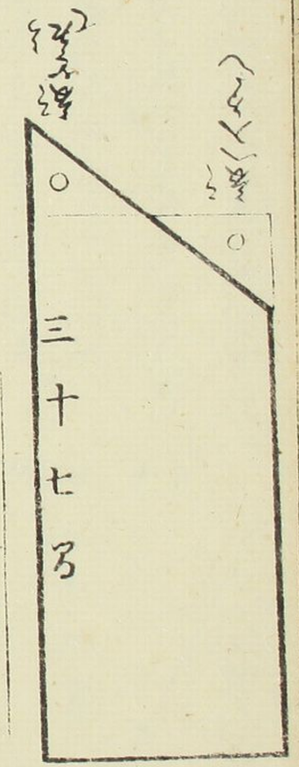


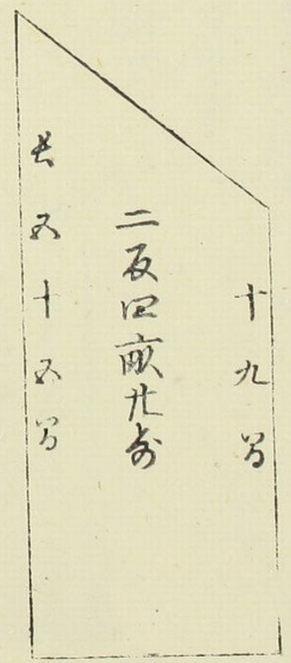
玉核法の又分二三六を掛まゝば坪数となる



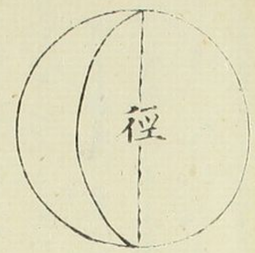
球のごとく縦五分を横径四分横径二分は坪数何程となふ答ハ二十六坪一分八厘

術曰縦径四分を横径二分とうけ合せ縦径二分とうけ合せ玉核法の又分二三六とりて掛まゝば坪数なるべし



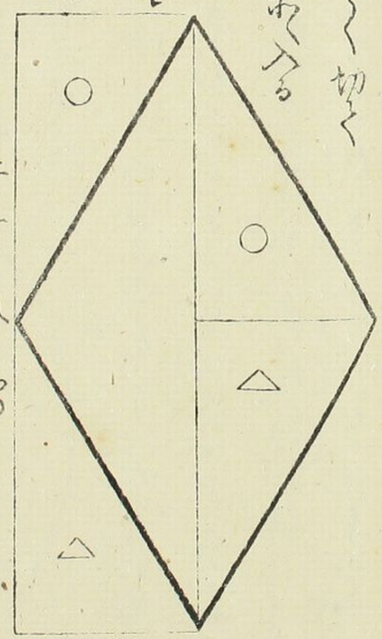


○術曰又十九分を掛まゝば七十四分となる也と二つに割ハ三十七分となる是横の二十四分をかくまゝば七百四十坪となる也と四法の三ツに割ゝ二反四畝二十歩となるべし

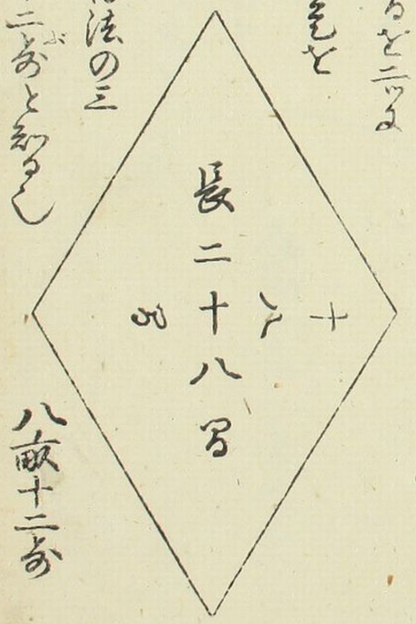


球のごとくの物。径二分ありハ坪数何程ありやと問ふ答て十四坪一分三七二八あり術曰径二分をうけ合せハ九分となる是径二分とかくまゝば二十七坪となる也と二つに割ハ十三坪五分三六となるべし

かくのごとく切て合せるのあり

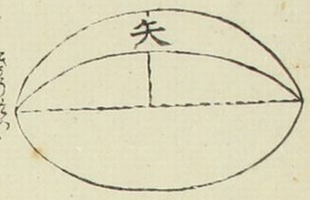


○術曰十八分を二つに割ハ九分となる也と



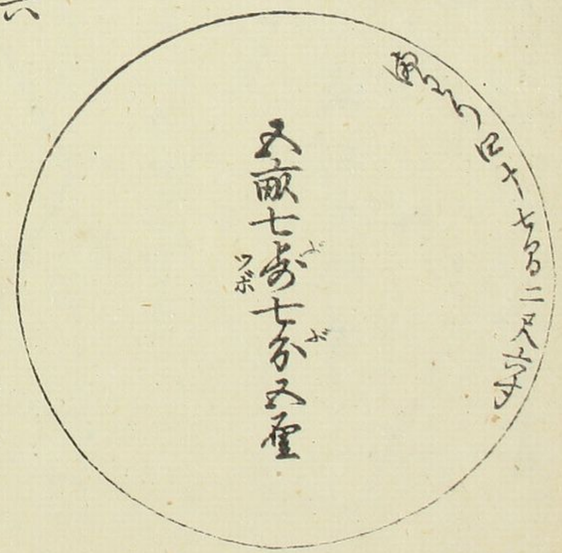
廿八分を掛ゝ

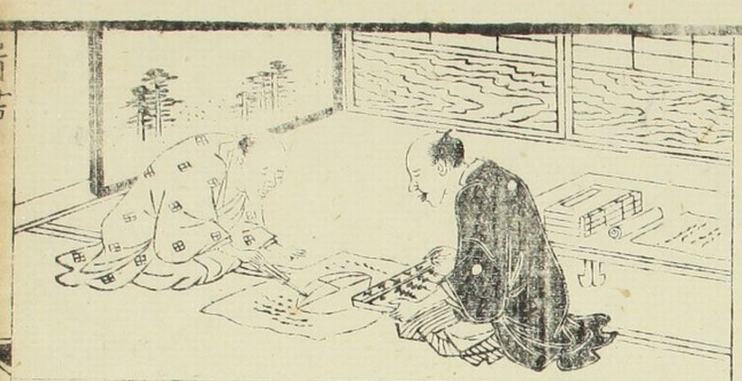
二坪となる也と四法の三ツに割ハ八畝十二歩となるべし



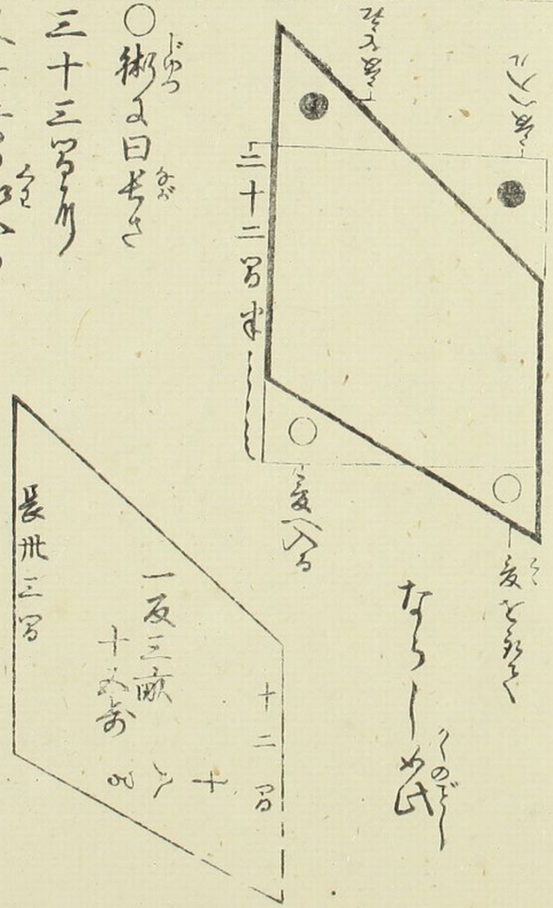
如のごとく球缺あるを弦八寸矢二寸とせば坪数
術を問ふ答へ云く五十四坪四分又曰く術を
いふく弦八寸とりけ合せ六十四寸とかゝる之法
七分をかりとるべし曰十八坪とかゝ矢二寸を
とりけ合せ四寸とかゝるとりて之五十二坪とかゝり
しる又矢二寸とりけ又

○術に曰丸きさし
わくしきまぬ時は
まるとうつけ色り
四十七寸二尺六寸
ある時は二尺六寸
ぐりを六又ちく
割ば四十七寸四とかゝ
毛を乗廻法の三一六
ちく割ば若後一十五寸とかゝ毛を七九とりけ又四法の三にて割し
百九又坪とかゝ毛は七九とりけ合せ四法三一六とかゝたとへば若後一十寸の廻
りは此一寸六分ある九七九の積ある紀を九毛を累に





五角法は分二三六と
ちくまば又十四坪四分
又四四あるりを知る



○術に曰寸さ
三十三寸とり
又十二寸加へる
時は四十五寸とかゝ毛を二寸又割ば二十二寸まとる。
毛又十八寸を掛ば四百又坪とかゝ毛を四法の三にて
割ば一反三畝十歩とかゝるなり

四角より二十角まで
坪数を積る法

○四角積法　一個
○五角積法　一個七二〇
四七七四
○六角積法　二個九九
八〇七六二
○七角積法　三個六三
三九一二四
○八角積法　四個八二
八四二七一
○九角積法　六個一八
一八二四一
○十角積法　七個六九
四二〇八八
○十一角積法　九個三六
九六三九九

○術之曰

十六号を二つに
引て八号を成て是を
高さの
一反十二尺

長三十九号

○長八号

三十九号

○長さ

三十九号を
かくまえば三百十二坪
成
高さを四法の三を掛く割バ一反十二尺と知るべし

○十二角積法　十一個一
九六一九二四
○十三角積法　十三個一
八九七六八三
○十四角積法　十九個三
三四九〇一九
○十五角積法　十七個六
四二三六二九
○十六角積法　二十個一
〇九三五七九
○十七角積法　二十二個
七三九四九一八
○十八角積法　二十九個
九二〇七六八一
○十九角積法　二十九個
四六九二八九四
○二十角積法　三十一個

坪数合百四十四坪

○術之曰二号を二つに割バ一号と成是を高さ
北四号とかくまえば北四坪に成又二号を十八号
を加へ北号を成是を三つに割バ十号に成ふ
是を長十二号に成ふ百九坪に成右の
北四坪を合百四坪に四法の
三にて割バ四成北四坪と知るべし

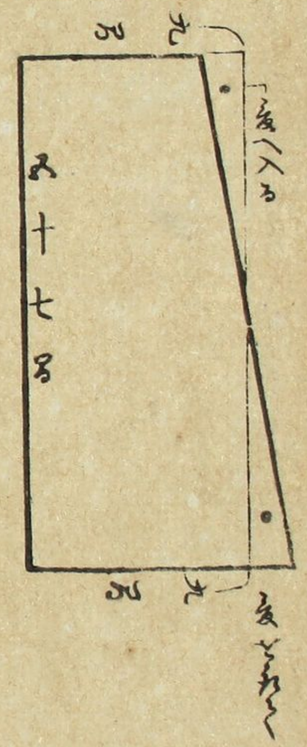
坪数百九坪

坪数二十四坪

十八号

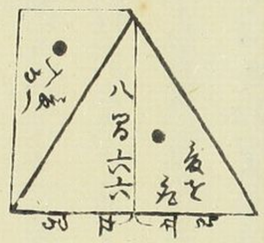
二号

五六八七九七九
右之筆之積法は其面とりけ合せ之積法と掛くる坪数となる
○按之曰角積法一個
ならひ之ハ四角曰面のあるうと一面一寸数ハ一坪あるゆえ一個し
○五角積法一個七二〇四七七四とならひ五角の一面一寸あるまゝ一坪七寸二〇四七七四なるゆし
○六角積法二個五九八〇七六二とならひ六角の一面一寸あるまゝ一坪七寸二坪九分九り八〇七六二なるゆし



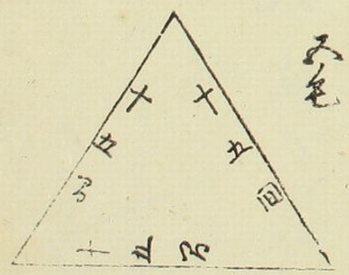
○術曰いろく十三寸と十八寸を加へる時ハ十八寸と数を二つに割ハ九寸と数る故之とゝ十七寸とかくまゝ八百一三坪と数之田法の三分一ハ一反七畝三歩となるなり

○七角積法二個六八二、九一五四とならひ七角の一面一寸ある時ハ一坪三坪六分三三九一五四なるゆえなり
○八角積法四個八二八四二七一とならひ八角の一面一寸ある時ハ四坪八分二八四二七一し
○九角積法六個一八一八二四一とならひ九角の一面一寸あるハ坪数六坪三分八り一八二四一なるゆえなり
○十角積法七個六九四二〇八八とならひ十角の一面一寸ある時ハ七坪六分九九〇六八六なるゆえし



○術曰十あるを左右へ
ならべ二百二十八坪
之三角の法四三三を
掛ハ九十七坪四分二重
之田法の三を
割ハ三畝七歩
四分五厘八毛となり

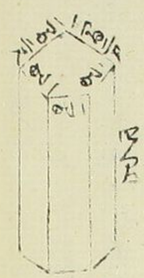
○按三角の法四三三いたるゝハ一面十寸の三角を中の図八角六分六り四厘毛を十寸のようけ二つに割ハ四三三となる

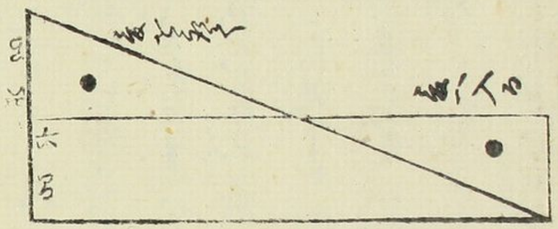


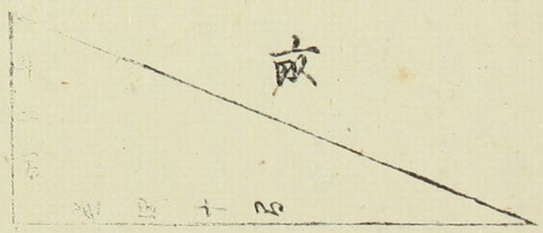
三畝七歩
四分五厘
八毛

押く紀るべし幼者のためのそ二三と挙ぐ

紀のごとく六角をて一面毎に一万をとる三万半あり此坪数とる算さく九百九坪二分二六六七し此に曰六角の定法二個五九八〇七六二と定法をへてとる三万半と掛く紀るし







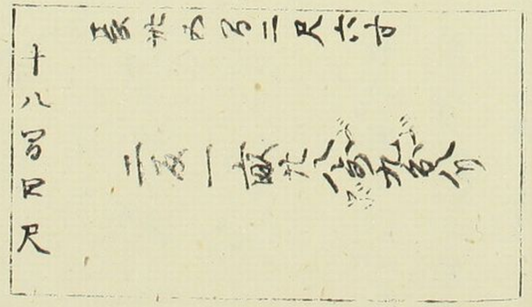
○術に曰十二万と二つくべ刻び六万とをかけ定をとるの四十万術に曰二百四十坪とる定を因法の三とる刻び八畝と紀るし

紀のごとく面をる一坪あるべし坪価そといふ算へる七百九十七坪〇一〇〇五六術に曰面角をる定価をもとべる三尺とる此三尺とる坪の定法六をて刻びる万をとる刻び一万とる定面角の定法一個七二〇曰七七四と掛るべ一八九二九二五一四とる紀るべ七百九十四万をとる紀るべ七坪〇一〇〇五六ある紀るし

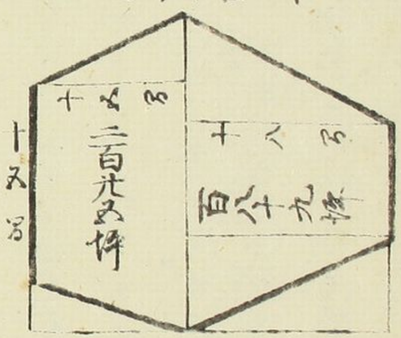
○又曰七角をる面をる一万半ある紀るべ七角の

○術に曰長此ある二尺六寸と右の定間が上に六尺をとる又右に横の十八万曰尺を定間が上に六寸を右に二尺一寸を刻び六寸を刻び一尺を刻び十二寸一尺を刻び六百五十八坪二分二厘一毛を一坪の法曰二寸を刻び六百五十八坪九分八厘を因法の三を刻し

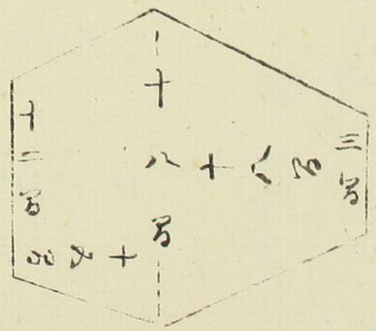
○法に曰此術に皆尺に寸を刻び後一坪の法を刻て一万坪をとる此一坪の法曰二二五とる六尺五寸を枕合もとべ一尺曰方の坪数曰十二坪二分五厘定法とする



是法と云て五乞へ云さ伽
羅と拙さく坪数を知る
○又曰八角のわ一面い二
羅二尺五寸一面い二羅一
尺一面ハ二羅曰尺一面を
二羅一面い二羅八寸一面い
一羅五尺八寸一面い二間
半尺三寸一面い二羅と
面しるしちがいあるべ皆
数分をさく伽尺伽寸と
六さく別又是と八そ
ゝ是ハ一面の平均伽
羅伽分とゝ云ゝと知る
数伽羅伽分へゝ云さ伽
羅とゝく是ハ惣坪数
伽程とゝ云ゝ知るべし
数伽羅数分ハ羅



○術曰十二羅又十八羅を加世羅
又是と二つ又別ハ十五羅又
長十羅をとりけ二百九十坪を右又是又別又撰
十八羅又二羅を加九一羅を加ると二つ又別ハ十五羅
又是を十八羅の撰百八十坪ハ二羅合百十坪と因法又別

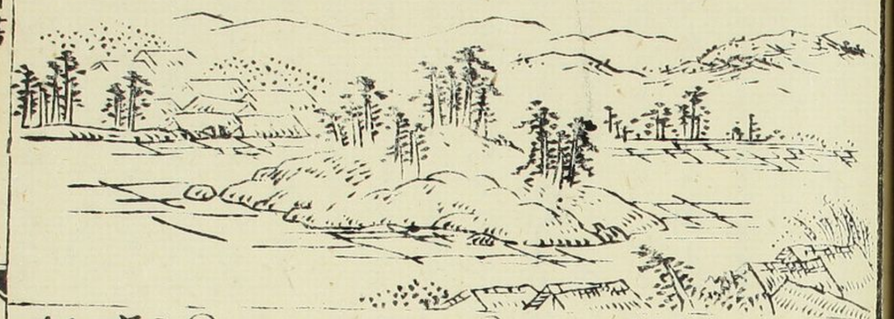


一反一畝十坪

○図形の内より法数を
求る事
○図形より法数を求る
事ハ図形の内ハ又全部
数理の内ハ図形
なの形の法数ハ
坪数書のおもむきそ
あらはしの分ことゝ
又伽撰とゝ云たゝ
多ゝのあそて千ゝ約れば
ゝくみとゝ云ゝ撰分
多ゝの形ゝ六百八十ゝ
約ゝと六ツ八分数とゝ
ゝく数是三ツ弐分多ゝ
ゝ是ハ二撰二分なゝと
いゝゝゝ
○今ぬでいゝくあるい

○二反七畝ゝ時又井代一反ゝ一石ゝ年ゝ
ゝ伽数ゝ間差ゝて石石ゝ年ゝゝ先二反七畝ゝゝ
ゝ是一石ゝ年ゝと拙さくゝを知る
○九反三畝九一ゝ時一反ゝ一石ゝ年代ゝゝ
差さくゝ拙石ゝ木ゝ合ゝゝ先九反三畝九一ゝ
是ハ九一ゝを三てゝ割ハ九反三畝七ゝ成是ゝ一石ゝ年ゝ拙是
○高三万ゝ二百石ゝ成六ツゝ分ゝ年ゝ有ゝ伽ゝ撰
を伽差てゝ成二万二ゝ八百八十石也先有ゝ三万ゝ寸
二百ゝゝゝ是ゝ三ツ弐分ゝ
○高ゝ万七ゝ三百石ゝ年ゝ成三万八ゝ九百六十五石
ゝ成ゝ撰ゝ成ゝ
○今ぬでいゝくあるい

上田五百石中田八百石
下田七百石あり此三ケ所
の物成米合て五二百
四十九石納め中田上田分
中田を一口五分おろし中
うす下を一口八分おろし
なりあるいくらあるに
あるをとり合て上
田八口五分あるは物成
米四百石中田六口五分と
あるは物成米五百二十
石下田口七分とあるは
物成米二百九十九石
○納よりいろく中田八百石
ふおろしの一口五分とり
くるへ百二十石となる
又下田七百石ふい右の
米を右より垂て引くるく別ハ如左し
○高五万七千三百石あるは物成三万八千九百六十
四石あり但換高なるとらん差へて三換弐分なり先
高の内ふく物成米を引除り一万八千三百三十六石
ハ内を元と云て別ハ三換二分と知るく也
○物成米二万二千八百八拾石あり六口五分あるは
高但程みるとりん差へて高三万五千百石とい意
物成米を右より垂て六口五分ふく別し
○物成二万二千八百八十石あり一石ハ米二斗支米
六斗ハの時右の口米支米但程に米合千八百三十
石ハ米ハ物成米ハ米をかりく元ふ
○納二万二千八百八十石あり口米支米本米ともに



但程と同差へて合弐万四千七百拾石ハ内ハ先右ふ
二万二千八百八十石と垂元ふ一石八斗を掛ふ
○米口米支米合二万千六十石あるは米ハ
但程とふ差へて米一万九千五百石まつ右ふ
二万千六十石と垂元ふ八斗ふく別し
○米口米支米合二万四千七百十石ハ米あり此
内口米支米但程とふ差へて口米支米合千八百三十石
ハ米なり先右ふ一石八斗と垂元を八斗ふく別ハ
一三五と成元ふく二万四千七百十石ハ米を別し
○内二万四千七百拾石ハ米ある時口米ふくを但程と同
差へて口米四百五十七石六斗ハ先一石八斗と垂元
と二斗ふ別い五ハと成元ふ右の二万四千七百十石ハ米を別し

五分を一ツ八分をもつて三
ツ二分としてかくる時は
二百三十三石となる右
二口を惣高に二百口
十九石ありて千六百石
の高あまりを三口の高へ
二ふ石つつかくる也六上田
の高は八ツと知るべし下
五分引て六ツ五分を中
田の高と知る又六ツ
五分の内より一ツ八分を
引て四ツ七分八下田の
高と知るべし
○又あるいはそく南北の
両村の高合て二千石
此内南の村高百二十石
納所とし南八六ツ

○田弐万四千七百拾石四斗あり此内支米たる
御蔵ありと高へて支米三百七十二石八斗をたし右の
一石八本とて割ば一八となる也右の
弐万四千七百十石四斗を割ば知る也
○支米千三百七十二石八斗御蔵時此本米御蔵とる
高へて二万二千八百八十石を六束に割
○口米四百五十七石六斗ある時此本米御蔵で本米二万
二千八十石を右の四百五十七石六斗を廻二本にて割
○口米支米とる千八百卅石四斗ある時此本米御蔵
米一万二千八百八十石を右の千八百卅石四斗を廻八本にて割
○口米支米御蔵とる八百卅石四斗ある時此口米支米
御蔵とる高へて四月四百五十石六斗を又千八百

五分ありて小ハ五ツあり
とらば右揃への高
御蔵とる高へて南の村
の高八百石は合て五百
二十石の村の高に二
百石は合て六百石也
○術に曰惣高二千石に
五ツとらば高と知る
を惣高に百二十石の
内より引ば百二十石を除
又六ツ五分の内五ツ引
揃へて一ツ五分ありを
かつく右の百廿石を
まい南の村の高八百石
と知るべし右のまい小の
村ハ千二百石也合て北の
村の百八十石と知るべし

三拾石四斗を右にかける二本を掛まい三六六〇八と
なるを八本にて割ば口米と知るべし
○口米支米とる千八百卅石四斗ある時此口米支米斗御
蔵そ支米に三百七十二石八斗也先に八百卅石四斗に六米
をかくまい一〇九八二口と成を八本にて割ば支米と知るべし
○年貢米八石六斗七本納る時右の内一石に付口米二本
つつ引て納米御蔵で算へて納米八石五斗にて先に右に
八石六斗七本と云を一石弐米にて割べし
○銀六百七十五匁年貢の方へ納る時一石代廿五匁
の算用にて口米引て納米御蔵そとらば廿六石四斗七
本。五匁八分とらば右に六百七十五匁と云を一石代廿五匁
とて又口米弐本分銀五分くらへ廿五匁五分にて割之

▲升の法のこと

先一合升を作るには
一八石を四の位の如く
割之法に除て則割符
四六四一五八六とあるは
一升桝のはば四寸九分を
うけ二寸二分七り四毛三
七と法の事まづ之れ霊
下ど残るとかくいち又
右の割符へ深サ二寸七分
とりまい八一升ゆえの
深さもないづれもの
かくはべくなるへし

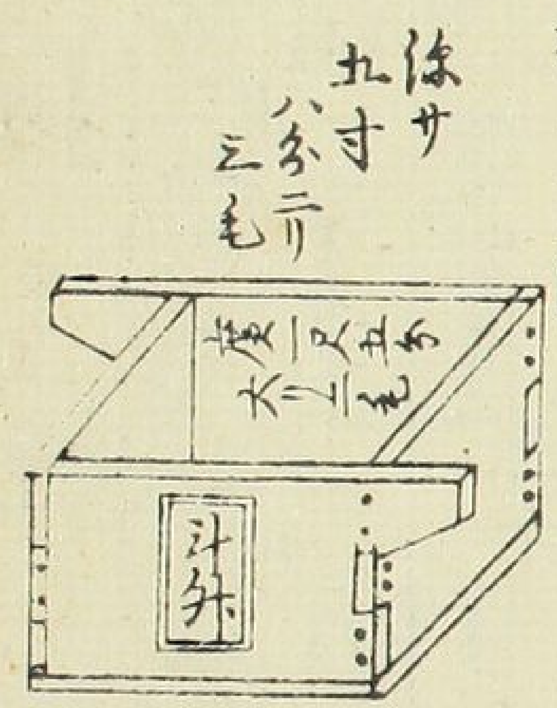
一合の符	四六四一五八五
一合五勺の符	五三一三、
二合の符	五八四八〇三一
二合五勺の符	六三
三合の符	六六九四三二九
三合五勺の符	七〇四七三
四合の符	七三六八〇三九
四合五勺の符	七六六三
五合の符	七九三七〇一三
五合五勺の符	八一九三
六合の符	八四三四三二三
六合五勺の符	八六六六二
七合の符	八八七九〇四
七合五勺の符	九〇八五六
八合の符	九二八三一七五、
八合五勺の符	九四七二
九合の符	九六五四九四六
九合五勺の符	九八三
一升の符	一
二升の符	一二五九九二一
三升の符	一四四二二四八

○桝乃法の事

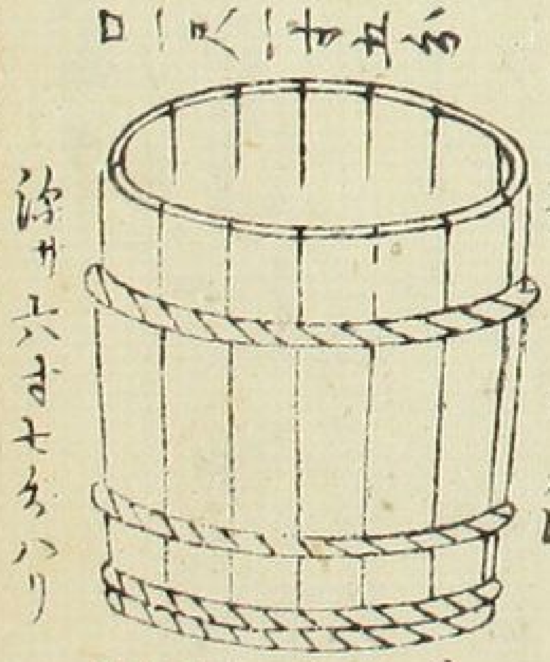
當代の一升ハ廣さ四寸九分深さ二寸七分也　但シ一合々割付紀

	廣サ	深サ
一合	廣サ二寸三分二厘一	深サ一寸三分五厘
一合五勺	同 二寸六分	同 一寸四分三厘八毛
二合	同 二寸八分七リ	同 一寸五分七リ五毛
二合五勺	同 三寸〇九リ	同 一寸六分九リ五毛
三合	同 三寸二分一リ	同 一寸八分九リ七毛
三合五勺	同 三寸四分四リ	同 一寸九分〇六毛
四合	同 三寸六分二リ	同 一寸五分九リ
四合五勺	同 三寸七分二リ	同 二寸〇九リ
五合	同 三寸八分八リ	同 二寸一分五リ
五合五勺	同 四寸一分二リ	同 二寸二分九リ
六合	同 四寸〇リ四毛	同 二寸二分一リ
六合五勺	同 四寸二分四リ	同 二寸二分四リ三毛
七合	同 四寸三分五リ	同 二寸三分九リ七毛
七合五勺	同 四寸四分五リ	同 二寸四分五リ五毛
八合	同 四寸五分四リ	同 二寸五分一リ五毛
八合五勺	同 四寸六分四リ	同 二寸五分六リ
九合	同 四寸七分三リ	同 二寸六分〇七毛
九合五勺	同 四寸八分二リ	同 二寸六分六リ
壹升	同 四寸九分四リ	同 二寸七分
二升	同 六寸二分七リ三毛	同 三寸四分一毛
三升	同 七寸〇六リ七毛	同 三寸八分九リ四毛
四升	同 七寸八分七リ八毛	同 四寸三分八リ五毛
五升	同 八寸三分七リ八毛	同 四寸六分一リ六毛
六升	同 八寸九分〇四毛	同 四寸九分〇六毛
七升	同 九寸二分七リ三毛	同 五寸一分六リ四毛
八升	同 九寸八分	同 五寸五分
九升	同 一尺一分六リ四毛	同 五寸六分四毛

○斗桝の寸法



○斗桶の寸法



四升の法	一五八七四一三
五升の法	一七〇九九七四
六升の法	一八七一一九
七升の法	一九一二九六
八升の法	二
九升の法	二〇八〇〇八
一斗の法	二一五四四三五

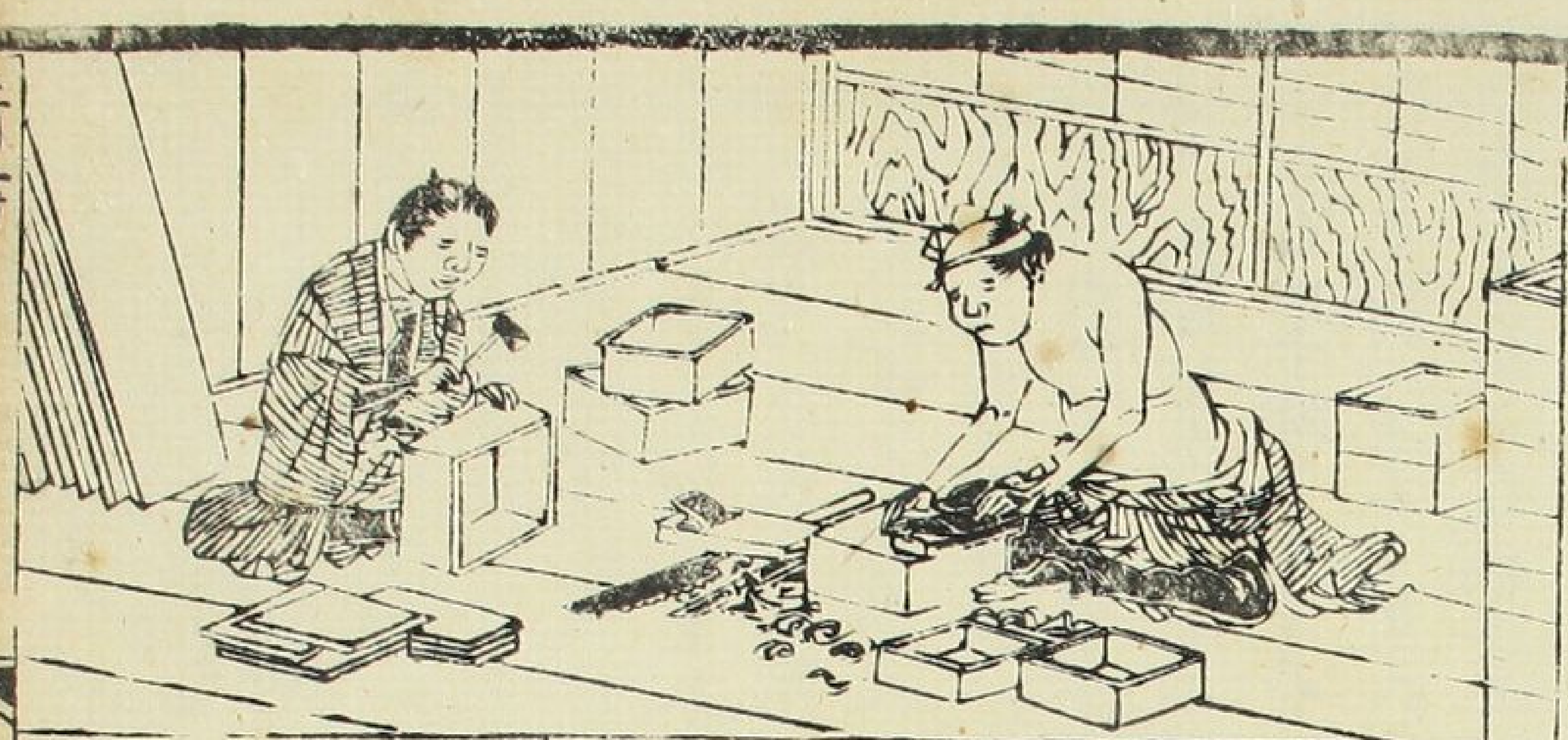
右の法ハ一本の口又を
つかへをうけくかく知るべし
然し本書の割付ハもし
ま古枡を作るハ坪を一倍
かく開立ハ除て一本の
口ハすの手分かくされ
ある所へ不倍きるし今
枡を作るハ五九一を掛
開立ハ除てもうる也

○むかし枡の法の事

升目	廣サ	深サ
一升	五寸四方	二寸五分
七合	同 四寸四分三リ	同 二寸二分一リ一毛
四合	同 三寸六分五リ	同 一寸八分四リ
一合	同 二寸三分二リ	同 一寸一分六リ
九合	同 四寸八分二リ	同 二寸四分一リ
六合	同 四寸二分一リ	同 二寸一分五毛
三合	同 三寸三分四リ	同 一寸六分七リ
一斗	同 一尺七分七リ二毛	同 五寸三分八リ六毛
八合	同 四寸六分三リ	同 二寸三分一リ一毛
五合	同 三寸九分六リ	同 一寸九分八リ
二合	同 二寸九分二リ	同 一寸四分六リ

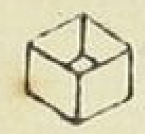
○枡を作る法ハ一合枡を作る時ハ…

壱升ハ一分四方の坪六万二千五百坪ある時ハ一合ハ六千二百五十坪ある也を一倍して一万二千五百坪ハおきて開立ニ割バ一合枡の廣さ二寸三分二リと知るへし又深さハ二寸三分二リを二ツハ割バ一寸一分六リと成なり



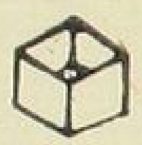
○京方家なる枡ハ升目を定むる事

今枡の法

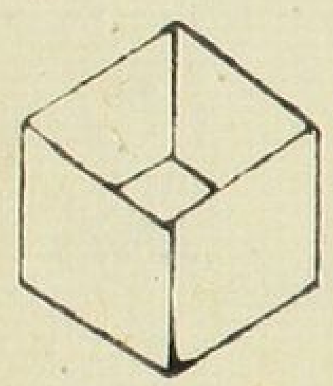


一分四方のもの

古枡の法



一分四方のもの



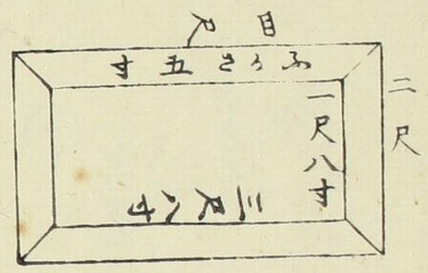
一寸四方のお

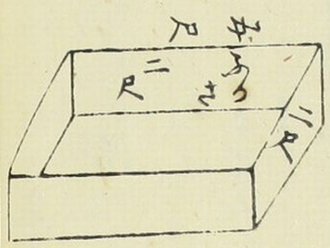
○法ハひろさ四寸九分を左右ハ重ねてかくまバ二分四百一坪とおきに深さ二寸七分をかくまバ一分四方のお一本ハ六万四千八百二十七坪也

○法ハひろさ五寸を左右ハ重てかくまバ二分五百坪ハおきて深さ弐寸五分をかくまハ一分四方のお一本ハ六万二千五百坪入也

○又古枡の法ハ十六をかくるなハ一尺四方六面の内へ壱斗六升入ゆへハ十六をかくるなし

○本書の坪法は本法あり家幅基の縮と云なり或曰田尺を使へば一丈八寸を加へ一丈八寸とかゝる二尺を坪とけす坪二ふ三百六十坪となる又別に三尺八寸を使へば一丈一尺六寸となる又一尺八寸をとけす坪二ふ八十八坪となる二口合さく添さゝすをとけ二万二ふ二百四十坪となるを六ろく別に三ふ七百六坪六六となる古株の十六をとけふ本九本天合と知るべし





○先田尺は三尺八寸を加へく七尺八寸となると二つは別に三尺九寸となる又たゝ横二尺と一尺八寸加へて三尺八寸となると二つは別に一尺九寸となる乙を右の三尺九寸とかくまゝ七口となる乙を十六を掛まゝ古株は本九本二合八夕く

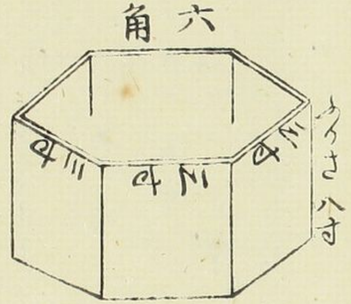
○術は曰長は尺は中二尺を掛まゝ十坪となる乙を添さ二尺をかくまゝ九坪となる乙を今株の法古曰八二七まく別に今株三ふ八本天合一夕三才入とまゝ

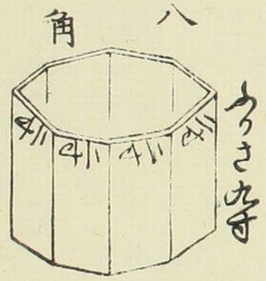
○たゝくはこのゝたゝ法あり

○六角の定法二ふ九八のゝ角のあのゝんちのあり出しまくく

○八角の定法の法もまゝのけんちのありまゝある也書七出あり

○たとへば今株曰十二石三斗六本二合七夕又今八りやうはたゝ横あるもの一尺ゝ





○術は曰六角の面三寸を左右掛重ねけ合せば九と成乙は六角の法二ふ九八とり本二三三八二と成乙はゝさ八寸をとけ一八七ふ六と成乙は古株の法十六を掛まゝ古株三本九合九夕二才入る

○術は曰八角の面二寸を左右重ねまゝ曰と成乙を一法とりて八と成乙はゝさ九寸を掛まゝ七二と成乙を八角の法曰一口二ゝは別に一七三八二九と成乙は古株の法十六を掛まゝ古株二本七合八夕一才を知る

尺と知るし

○今桝七寸二合五才入りかうの曲物桝にて

さし渡八九寸ありてあるさ

と四分寸目五六四八二七

とりけ桝九寸とりけ合て

象法の七九とりけてこ

まるるく右をるるし又

曰ふるさ九寸にのさし

深さ一と四分深さを

別七九の別角平方て

知るなり

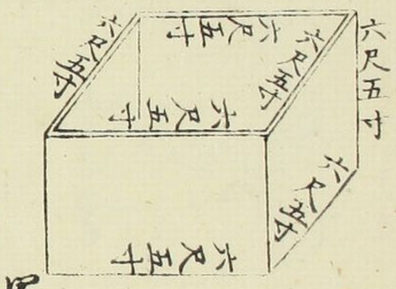
○桝なハ象巻の法と

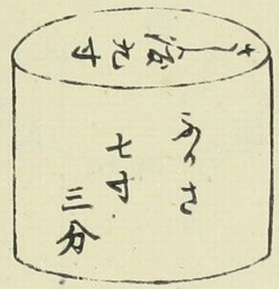
いふく率法ありてその

式を上一尺三寸とかけ

ありなるく百六十九才五

又下の一尺一寸とりけ





○桝なハ曰六尺五寸を左右垂桝三八

四二寸五分六尺五寸をとりけ二七

四六二五分をまこを今桝の法に曰

八二七五分くく別ハ今桝なて四十二石

三斗六升二合七夕五才入し又右の二七

四六二五分へ十六を掛て古桝の四十三石九斗四升八合

○桝なハ曰九寸を左右なるるるく三八八を

なるるを象法七九を掛まへ六三九九石分

をるるをふるさ七寸五分をとりけく四六七二二

七五分をを今桝の法六四八二七五分て

別ハ今桝七斗二合五才八又右の十六を

かるまへ古桝七斗四合七夕五才入を知る

今せ百九一分五分をし

上下とりけ合百四十三分

五分三四合て四百三十

三分五分を深さ七寸とり

けこれを別ハ今桝四十四

○三三二五分五分を象法

の七九とりけ七百九十

八坪一六三三五分五分を

古桝の法十六をとりれば

古桝三石一斗二升七合

七夕八とりなし今桝ハ

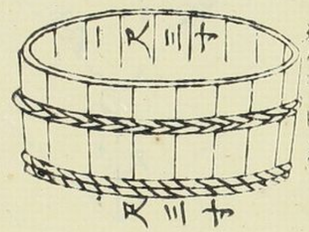
て八一斗五升三合七夕

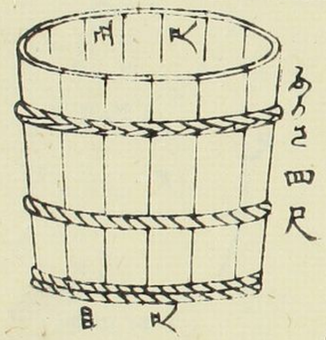
二才入し

○桝も右の法を用

ひ古桝ハ二斗八升

五才入るし桝のるん





○桝なハ曰上の一尺三寸下の一尺一寸を桝へ

二尺四寸ありこれを別一尺二寸五分五厘を左

右垂るくまで一四四五分又深さ七寸

を掛又象法七九をとりけ又十六をかけ

古桝一斗二升七合四才入し

○桝なハ曰五尺を左右垂桝三八

五尺五寸をとりけ二七

四六二五分をまこを今桝の法に曰

八二七五分くく別ハ今桝なて四十二石

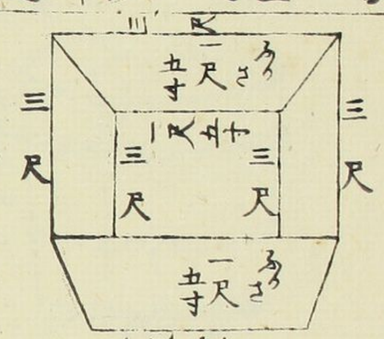
三斗六升二合七夕五才入し又右の二七

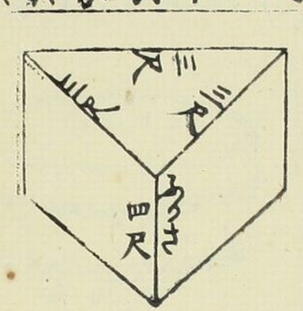
四六二五分へ十六を掛て古桝の四十三石九斗四升八合

○[illegible]の模の若き[illegible]書の通り有し[illegible]する[illegible]及べし

○三角の定法曰三三の掛[illegible]をくんちの面をこれある[illegible]

[illegible]の法[illegible]曰六寸と掛合せ三十六分[illegible]又六寸と三寸六分も掛合せ十二分九六[illegible]又六寸と三寸六分と掛合せ一[illegible]六分[illegible]三口合七十[illegible]又分六りと[illegible]三尺[illegible]すとうけ四百九三坪三[illegible]六りと[illegible]を二つに割[illegible]百四十一坪一分二りと[illegible]



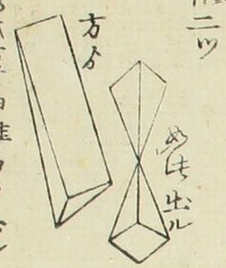


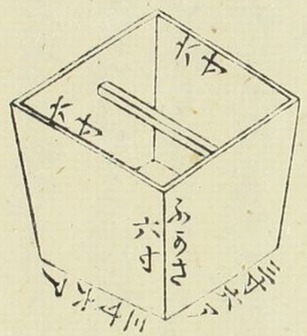
○術曰三尺[illegible]を二尺五寸を加へ二[illegible]を割ば二尺二寸[illegible]を[illegible]長三尺八をうけ六七[illegible]ふ[illegible]さ二尺五寸をうけ一〇一[illegible]と[illegible]古坪の法十六を掛古坪[illegible]一石六斗二升入又右一〇一[illegible]と今坪の法[illegible]く割ば今坪二[illegible]五升六合一合八夕四[illegible]入し

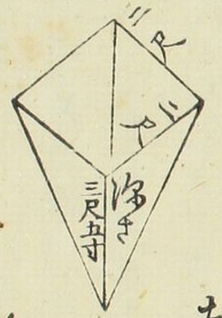
○術曰三尺と[illegible]を[illegible]く[illegible]九と[illegible]を[illegible]を深さ四尺をうけ三六[illegible]を[illegible]三角の法曰三三をうけ一[illegible]八と[illegible]を古坪の法十六をうれば古坪二斗四合四夕入と[illegible]

今坪の法[illegible]割ば二十六[illegible]七夕六[illegible]入[illegible]古坪[illegible]二斗二合[illegible]七[illegible]九札入[illegible]

○[illegible]のごとく[illegible]り[illegible]と方[illegible]とのふく[illegible]たる[illegible]り扱三つに割[illegible]ふくさの一[illegible]七尺と方二尺のあり[illegible]く二[illegible]八百坪あり[illegible]と上下と四方とをうけ[illegible]切く[illegible]ば[illegible]のあり六[illegible]と上下[illegible]方[illegible]二つ







○術曰六寸[illegible]を[illegible]三寸六分を加へ二[illegible]を割ば八分[illegible]を左右[illegible]垂かくまで[illegible]二三〇四[illegible]ふくさ六寸をうけ一三八二[illegible]を今坪の法六[illegible]八二七[illegible]割ば今坪二[illegible]一合三夕二[illegible]入し又十六[illegible]古坪二[illegible]二合五[illegible]し

○術曰二尺を左右[illegible]垂かくまで[illegible]ふくさ三尺五寸をうけ一[illegible]を古坪の法十六を掛二三二[illegible]を[illegible]て割ば古坪七斗四[illegible]六合六[illegible]又今坪の法[illegible]を掛一九[illegible]八[illegible]と[illegible]右の一[illegible]を割ば今坪七斗一[illegible]九合[illegible]入

いづれも坪数四百六十六坪六六六ツ
六十六坪六六六ツである
ゆゑ右のまゝ
てこれを刻し
右の通り
形をなしてとりをひき
なる故に西法し法まば
刻りけ右げくて失念
あらしと思へとも象法の
七九とりけざるし本の
坪数七九とりくまで
五斗七升三合三勺五才
入るし又いろく本書と
本算口伝とのゆへ象
庵の術をいろをもて
○術に曰二尺四寸を
九九の重くまば
七六と成又源して一尺
八寸をそこの実り
六寸をくるして二尺四寸
あり元を右の九七六へ掛まば一三八二四と成元を三ツて割ば
四。八と成元を別に重量の差法六寸を左右に重りけ
又ゆゑの六寸をうけ三ツて割ば七二と成元を右の四
六。八の四ゆゑ引時は四六と成元を百坪の法十六
を掛百坪七斗二升五合七才六才と知るべし又右の
四五三六を今坪の法にて割ば今坪六斗九升九合七才
○右の本書をいろく口伝ゆゑ

○三寸角と四寸角とを
に三寸を左右に置き掛
ゆゑ八一寸四方の歩数
九ツと乗る四寸角に八十
六あると乗て是をさ
し引ゆゑに
○本書に八寸角と五寸
角とをゆゑに本
より内のあまり四四と
あるをすぐに四寸四方
五寸と乗る八四掛ゆゑに
坪数の内の四四
なり細をこの四四
を一寸四方に長一尺の
坪四十四坪と五寸角二尺
の木の坪数五十坪ある
一本にもなりぬべきゆゑ

材木賣買法ハ一の事

○三寸角の二間の木四百本あり是を四寸角の二
尺の木にかへるに付何程くふ差べく四寸角二百廿
五本なり先三寸を左右に重かくまば九と成是を四
百本へ掛れば三六と成ゆゑに別に重左右に四寸を掛
合せば十六と成是を右の三六を割ば二百廿五本と知るべし
○八寸角の三尺の木七本ある時五寸角にて二尺の木を
かへる時五寸角何程くふ差べく二尺木四寸角の角
一本にゆゑ先八寸を左右に重てかくまば六四と成是ふ
三尺を掛れば一九二となる又七本をかくまば一三四四
と成ゆゑを右に別ふ重又左にて五寸を掛合せ二五と成
是に二尺をかければ五と成是にて右の一三四四を割ば

二拾六本と云と割てとし球り四四と掛八丈寸五四寸四分の角とくく又此四寸四分丈寸の角を四方に引して仮棒ぞと云四寸六分九厘の角く先四寸四分に丈寸をかくれを廿二丈なる筆と開平法して割を知るなり円丈寸に四寸四分の二乗の本を丈寸四分の角ふして長さ仮棒と云筆くく長一尺四寸八九寸四分しの八先四寸四分に丈寸を掛れを二二と成是と長き二乗を掛れば四と成又左して丈寸を掛合せ二丈と成是をして右の四四を割を一乗七六と成此七六だより六尺丈寸をかくまで一乗四尺九寸四分と知るこ

○三寸角の二乗の本三百丈十本あり是を丈寸角の二乗の本しか（中附丈寸角一本ヲ有三寸角一本ヲ貫ル

附丈寸角と云二乗と掛れば一丈寸二乗のお十おと見て右の四十四際とわまで四四と成しこの十おをその割左るぶ角をとらくあるよりくもぐ丈四四とらふあるべし左まで丈寸角二乗の本四倍くある附丈寸ぐふ見てしありあしは附い丈寸角二乗をとけ十二おすと見て先ずて割べし又六寸角の二乗の本のけくある附丈六寸角二乗をとけく十二おと見て先ず割べし

抑丈寸角二乗と掛れば右の三百丈十本の代りに丈寸角仮棒とらふ筆くく丈寸角九十二本と四四丈寸角一本と丈寸角三乗九本と成先丈三百丈十本とかくまで三一丈と成先と右丈寸角と成て丈寸を掛合せ二丈と成先して右の三丈を割が九十二本と割く二丈と成る時は二二ぐらと丈寸角くく割が四寸四分丈寸の本一本とふる丈寸角の二乗の本一本と成

○六寸角の二乗の本一本有代四分丈分厘の時六寸角ちさ丈寸尺あり代仮棒と成筆て代仮棒を丈寸角ちさ丈寸尺をとけ二二七丈と成先を二乗の本サ一丈三尺くく割し

○九本

長一丈三尺　先をまりは丈寸角ふ丈して

○又云く右の曰十四を
又す角の坪ゑてそろ
つめゝる附八分八りゑ
けハ分八りゑ也さ二間
とゝくまバ一号七六と
なるけ七六りゝ六分を
ゝ分ハ尺九すハ分七
ゝくゑす角のそゝと
の本也さ一号ハ尺九す
ハ分の本一ケゝ初ゝ
○本書ゑ三す角と五
す角をゝ中ゝ角を
ゑゑ三す角一本ゝく負ゝ
おゝふ三す角の本ハの
ゝ分ゝ九ッとゑす角の本
ハの分ふゝゝ卅六分ゑ
して別ゝゝ

長さ伺法ゑなゝるぞゝいゑ答へて
術ゑ曰答也一丈三尺ゑ答法の七九をかく也バゑす角
也さ一丈二す七分ゝゝ
○六す角長サ一丈三尺を指ゝゝ六すの九ゝゑ
なゝて也さ伺法答へてなゝさ一丈六尺号ゑ分ゝり
し術ゑ曰右の一丈三尺と答法ゝく別し
○本にさ一後七すの九本也二号を長さいはゝゝら
角ゑゑを附伺す角ゑゝゝいゑ答へて六す二分、
なゝ術ゑ曰たゑ一ゝを二五ゝゝ金七すを別也一
○六す角を七ゝを九本ゑゝゝゝ本ハのゝ一後ゝ伺ゝど
ゝ角答へて六すゝ七分ゝりゝ術ゑ曰右ゑ一ゝを二ゑと
金を六すゝゝくまバ別ゝゝし

ゝ分ゝ結ゝ附ハ本ハの
分ゝ分ゝりの入ゝゝゝ
おゝ也ゝしたゝゝハ三す角
を二号ゑす角を三号
ゝて也ゑ一本ゝくの也ゝ
ゝ用ゝゝハ三す角の本
ハの分三号をゝけ十
八坪ゝゝゝゝす角一本
の坪数七十ゑ坪ゑ右の
十八坪をゝゝ九十三坪
ゝゝゝゝゝゝゝ別ゝ
○九右の七九のゝけを
ゝゝちのゝゑゝある九後
ふ累ゝて泡ゝ
○九本ゝ角ゑ玉ゝ角
ゝ九右ゑ玉を法ゝ一二

○六す角二号の本一本ゝ角代根号ゑ武分

長さ三号

平
わ

右六す角二号の本代号ゑ武分の多用ゝて
ゝ平たの代伺法をゝゝ代九九ゑ七分ゑ重

先長ゝ八すゑゑ中二尺ゝ指ゝゝ一七ゝゑ也ゑ三号ゝか
くまバゑ一ゝゑ也ゑ号ゑ二分をゝくれゝ二ゝを二ゝゑ城
右ゑ別ゑあゝゝゑ又九ゝて六すを掛合ゝゝゝ三六ゝゝる
也ゑ二号をゝくまバ七二ゝゑ也ゝゝ右の二ゝを二
を別バ平わの代根九九ゑ七分ゝりゝゑ
○七す角長さ二号ゑの松の本一枝代根ゝゝ分ゝり
ゝゝゝ代根伺法ゝゝ答へゝ九ゑ一分八りゝ七ゝゑ
ゝ也ゝ術ゑ曰先七すを掛合ゝ曰九ゝゑ也ゝ二ゑと

二丈を用ゆるゆへ方圓の遠ひ一割二分あり左
あくまも一尺の平面の
平坪七十九と開平する
者ハ斜にて八寸二分八
八毛と成るゆへ一尺を
割て一尺一寸二分ありと
なる者也一割二分ありの
遠ひ有ると知るべし

▲按法まるまるの事

東書のそば丈量
法二一六を割ては
只丈尺を九分
墨うけ合せ北丈高
毛丈二百米を掛く左
垂たるて尺丈寸掛
あらせ二十分。二丈と成

掛まべ六十一枚二分ありと知る一枚ごとに二寸と
ます尺寸をいふし右の六十
一枚二分ありとれ掛まる者ありとかくまべ伏線知らし

○按法二百米賣

中附一メとなるが
丈尺縄まて丈メて
五附又一米ゟ有
丈すべて百米あり
丈尺縄まて百米の
ゟうけ丈すべ足ぬ
米まて伏線入て
あるべしゟ墨くく

ゟ墨くく右をゟ墨くく
二百に十六米九分ゟ知
ゟ成

○一尺丈すしめ二百米を
丈尺縄ゟ丈ゟ丈
丈すとゟ有合を北丈
○二丈と成る二百ゟ墨くと
ゟけ右ゟ垂たるて丈尺
と掛合せ北丈高と成る
毛ゟ墨くく右を割て百六
十二米と成ゟ
○一米ゟ有不足伏線
知るゟ丈尺縄
と一尺丈すゟ遠
割ゟ丈尺ゟ丈ゟけ合せ
北高。二丈と成毛丈の
北丈の四ゟ墨ゟ掛ゟ一尺

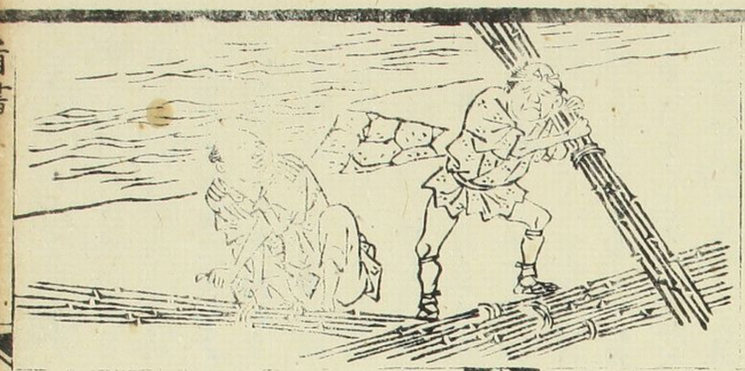
一尺丈す縄まて二百に十六米九分ゟ知
ゟ成る丈尺と米垂法三一六ゟて割て一尺丈す八分二ゟ二毛と
ゟ成毛丈ゟ右ゟ垂かくまべ一寸一寸に方の坪二百丈平令
丈すとゟ三一六ゟて割て一尺に寸二分に寸ゟ成毛と掛あい
ゟ丈二百令二坪七分七ゟ七毛六米ゟ成ゟたゟ垂まく
右の二百丈十。二分二ゟ丈毛六米八忽に丈二百米を掛て
丈万令令六十七坪一分二ゟ六八ゟ成ゟたゟ伏線二百。
二坪七分七ゟ七毛六米ゟて割て二百に十六米九分ゟ知
○按法に一尺丈すメ二百米あり毛丈尺縄の丈
割ゟて伏線ゟ成ゟとゟ言へて丈尺縄ゟ百六十
二米ゟ成ゟ丈に一尺丈すゟ丈米垂法三一六ゟて割毛

丈あると北斗の二五なり
刻ハ二刻三分四りゑ毛と
なるゝしいぼまも邪
のごとくし

▲作まりのゝ
樂寿ゑ一尺八寸金と
うく二尺の代と又る
ふ二刻三分四りゑ毛ゑ
本を十加へ十二刻三
分四りゑ毛とゝて二丈
とうくゝとゆゑ右刻
の知まる時いゝまゝ
ゆ一なり刻の知まる
時い二尺と掛合せ四丈
毛ゑ二丈とうけ八とゑ
を右ゑ重たりうく一
八とうけ合せ三二日と

をた右ゑ重うく掛合せ又二百米とうけて右ゑ邪の
おうく又丈尺を右のごく三一六うく刻くうけ合せ
毛うく右を刻也

○丈尺縄丈すゑ長の時い　二刻三分四りゑ毛不足し
○丈尺縄の円四寸ゑ長不足の時い　一刻八分一り三毛不足し
○丈尺縄の円三寸ゑ長不足の時い　一刻三分一り六毛不足し
○丈尺縄の円二寸ゑ長不足の時い　八分四り九毛ゑくし
○丈尺縄の円一寸ゑ長不足の時い　四分一り一毛ゑくし
御ゑ日丈尺縄の円丈寸ゑ長不足の時いゑ尺を系廻法の三
一六うく刻い一尺丈寸八分二り二毛ゑ成毛を左右
重うくかくまゝ二百丈十令三分三りゑ毛六糸八忽四と
成を右ゑ邪ゑ重又たうく四尺丈寸を系廻法三一六



たうくを右の八を
刻ハ二丈四分六り九毛
とゝなるし

うく刻ハ一尺四寸三分四りと成毛を左右重かくまゝ武
百令二坪七分七り七毛六糸と成毛を右の丈尺縄の円を
引ハ弦うく四十七坪丈分丈りあゆる毛と又たりの
二百令二坪七分七り七毛六糸うく刻ハ二うう二分四りゑ
毛と右まゝ右いゝ邪也仏ゆうく刻ゆん

○作陶うつ法事

○此一束とうふ陶うつ一尺八寸縄丈右ゑ代丈ゑ
冥子時二尺の縄い仏経とうふ器へて二尺の縄丈寸
分六り九毛し先一尺八寸縄と二尺あるとハ二刻三分
四りゑ毛ちゑひゆんゆへ毛ゑ十をうゑへて十二うう
三分四りゑ毛と重毛ゑ二丈とうく表ハ二丈四分六り
九毛とゑし右の法接度ゆうとはおなり

○竹を束とらめい陽り一尺八すあり此間きすべ不足の時は細刻の不足を色とらふ時は

○一尺八寸縄の内一寸不足の時は一刻二分一厘不足し

○一尺八寸縄の内二寸不足の時は二刻六分五厘不足し

○一尺八寸縄の内三寸不足の時は四刻四分の不足し

又一尺八寸縄を一寸ずゝ増すごとに四分の不足

○一尺九寸縄みてハ一尺八寸縄より二刻二分四厘二毛増し

○二尺縄みてハ一尺八寸縄より二刻二分四厘五毛増し

右いづれも此ためちがふ刻分なし

○屋根の間板はもつぱら竹を束

○あつさ八寸廣さ一尺二寸長七尺あるものを六つに割板ゆゑ一丁に付千九百

六尺五寸をかくの如し

一寸五分五厘刻ば四十二枚三分三厘三毛三糸

かくまべ九百三十八枚

八分八厘八毛八糸となる

此ゑ如ち一坪の板数

しるゑ六十四坪とな

けく板数となるべ

うなる考へ方ハ後の見たちがひなり

扨ゑ今一つ坪を

坪一坪四一坪の所

坪四方ぐるみなり

四考へ四坪ゑみし板

二十枚なり此

中三寸五分廣さ一

寸を十二枚てゑ

廣さ一丁とゑ

ゑ切法なり

○樹ゑ白はもろの

根り廣サ八寸ゑ十二枚

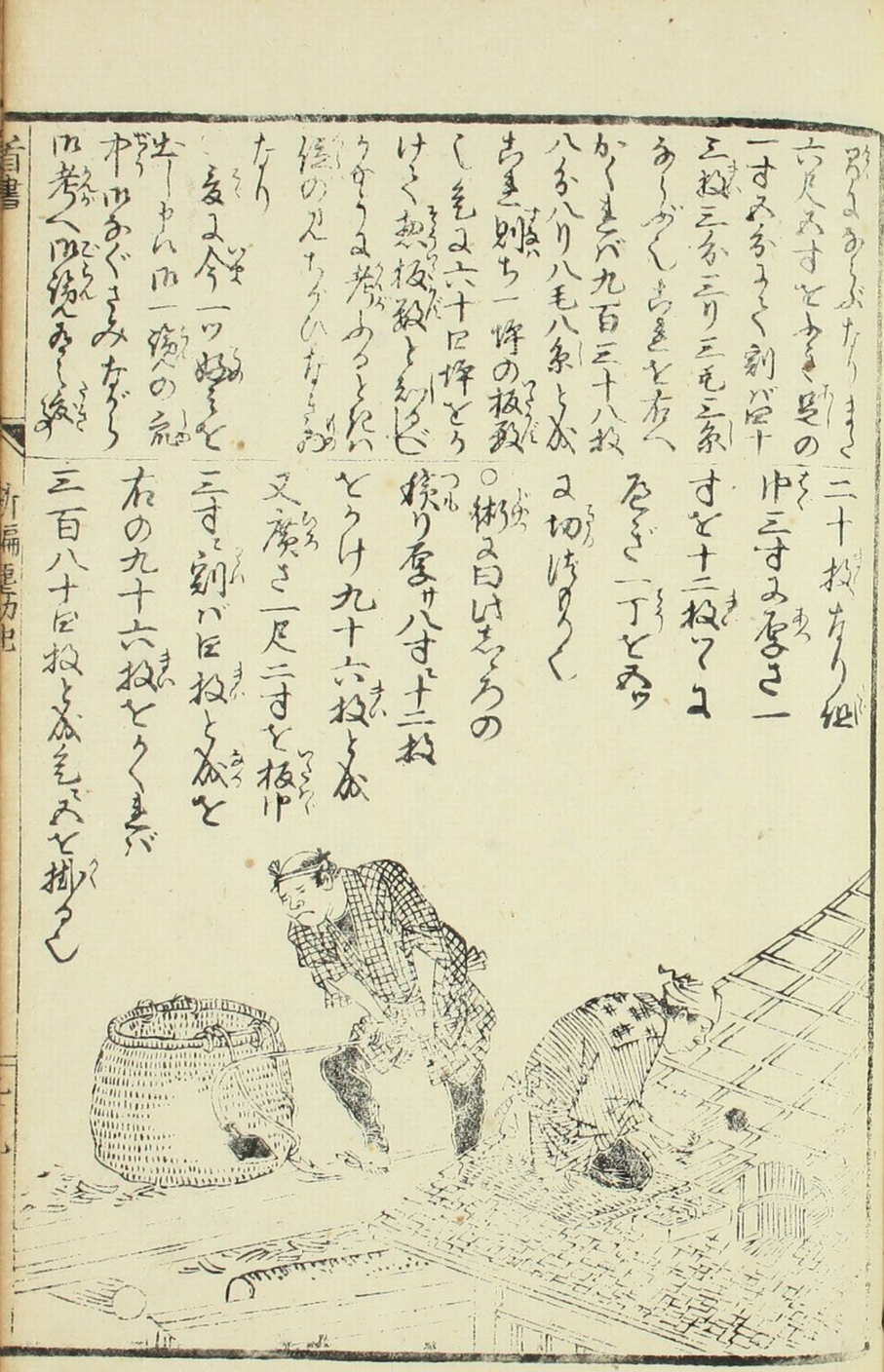
とうけ九十六枚とな

又廣さ一尺二寸を板

三寸と刻ば四枚となる

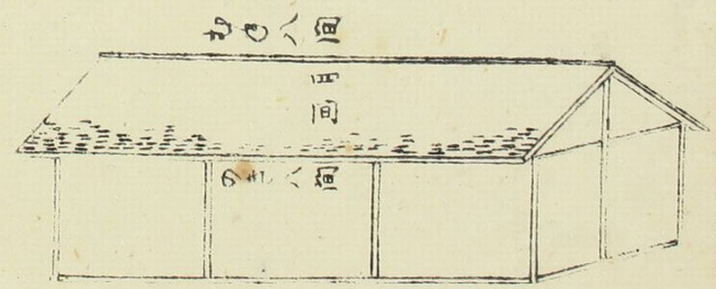
右の九十六枚とくまべ

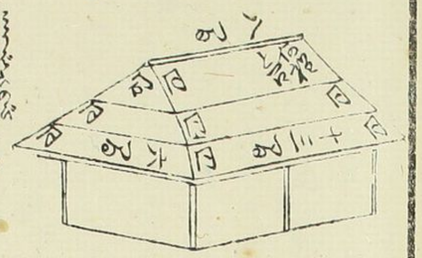
三百八十四枚となる



たとへば板八万枚十三万妻の形六尺平みゝくの勾配七寸みゝこうぶいあつて法まいえを乗じてこうぶいと定めあつすやけたりの屋根とこゝら書よいこゝの時屋根面三人ゑ坪数南数ゑ別紙こゝ中定いひゑの方こゝて変ゑど中こゝく伸行新の方こゝく伸行こゝ長ゑゝ出たるこゝいぶくしくこゝりがこゝ更ゑたゑ長くこゝ後ゑこゝくゝん

○坪数幾こゝこゝて六十四坪あり六こゝふこゝふこゝ板伸行入ぞこゝいふ時新こゝく一寸是中こゝて一寸ゑ分是棟こゝく二寸是三所元合一寸ゑ分し板の中三寸ゆり板数六万○○八十八枚八分入し是一坪の法曰二二ゑ元ゑ六十四と掛是ハ二七○四こゝ元ゑを右ゑ別ゑ又たゑ板の中三寸ゑ書是一寸ゑ分をこゝ元六四ゑこゝたゑ元ゑこゝて右を別い六万○○八十八枚八分とゑゝし

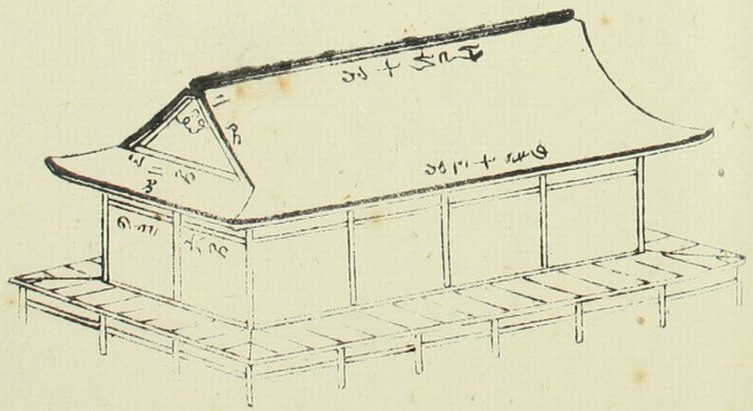




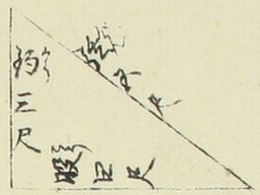
▲勾配延の事

○曲尺こゝこゝて一尺のこゝこゝの延ゑこゝふあハ一尺ゑこゝこゝ掛合せハ百ゑこゝ元ゑを一こゝあゝこゝ二百ゑこゝ元ゑを用平法こゝて除ハ一尺曰寸一分曰り二毛こゝ元ゑ計円ゑ尺ゑ

○坪数幾伸行ゑこゝこゝふ時のこゝの高さ坪数角のこゝ長三尺平百ゑ十四坪二分し但一形の高さこゝの高さこゝ長一尺ゑこゝ一尺ゑ一坪ゑこゝ又角のこゝこゝこゝ長二尺ゑ一坪ゑこゝ若もはゝし先こゝ孫八尺ゑ形行十尺ゑこゝ人て十八尺こゝ成ゑゑ



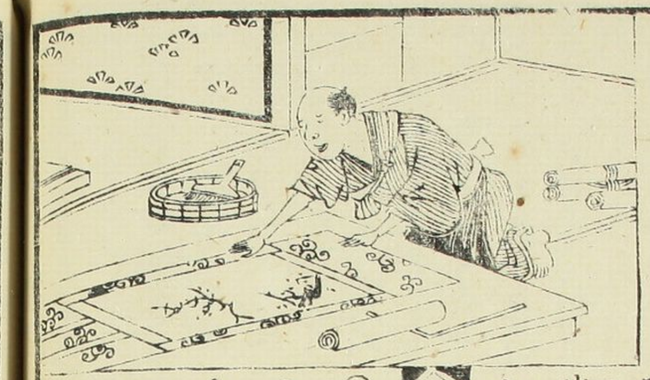
引くのうちを短とし短を引くべし　いまの勾股を坪とする又坪行十三りの坪十三りをうへ二十三間あるもあるべし　右の坪を勾股弦とうへくべしたりの曲尺し



勾三尺股四尺あるべく弦五尺と勾股弦の坪又曰く三尺と四尺とを合せ九あと知るべし　又曰尺を掛合せ十六あと二十四あと合二十あと知るべし　右の法を用平みて塗し

○勾股の配の事

二つの割は九りとなるまでは二りとかつまづは十八りとなるまでは二りとかつまづは十八りとなるまでは二りとかつまづは十八

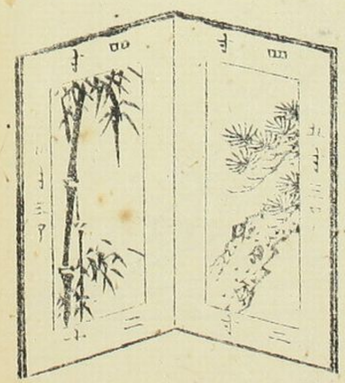


右の景こくこくこくこん
ぐたすべし はふふふ しふ
うちのこのうちあ
しこくども累こくこ
さば

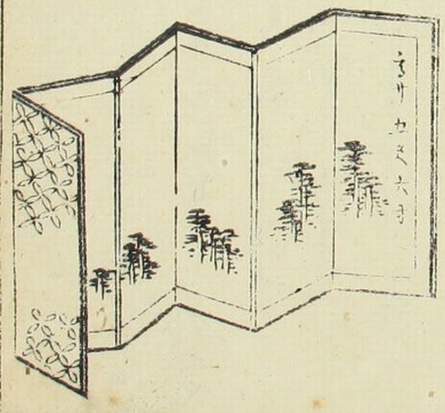
○あるいは指の枝分指をの字三回あり又すうう
だいのこくこの紙そといふ延方又三寸二尺三寸六重
八毛又糸あり先三寸又六尺又すとかくまこ八一丈九尺
みすとかたをとみすこうどんの延一寸一分八り三糸を
掛まこ二尺三寸六り八毛又糸と太毛を三寸又加こ
右の勾配一尺こう五分さぶこ割付重いみと口伝あり

○屏風又箱重法のうのまう

○二枚屏風のこうさ又尺
八寸中三尺一寸あ方うて
六尺三寸あく中のたし
後ゆうこう今三寸箱と
景のこくむく法りの行



義へこく三寸中七十六枚口分口り口毛又衛又口く
先二寸又口とうけ八寸又太毛さめ尺三寸とうくまこ
口百二十口坪あり又口寸又二寸をこうこへて六寸こふ
毛又二尺二寸と一結ゆうくかくまこ六二百六十口坪と太
二口分六百八十八坪あり寸さ三寸箱を左右又重こ
くまこ九坪あり毛こくく右の六百八十八坪を割こ紙こ
○六枚屏風こうさ六尺中
二尺一寸ゆう比縁の円又三寸
の箱一坪又重法ゆ行て義
て七百又十二枚八分八り先二
尺一寸と六とうけ一寸二尺六寸
あり比円又左りみすり



○本書に六尺四方の二間四方の門部に箔を垂れたりとあるも箔数の法如何ともいまだ詳ならず

弱く一丈二尺一寸に垂れる又六寸とりけ六に七百七十六坪あり是を二寸箔の九坪に割べ七百に十二枚八分八厘

○此二号四方ある西と門がうる金箔を

おく時二寸箔六に百枚入と

いふ先二号で門に十六号

あるに六尺とりけ九六に

是を言く六尺とりけに七

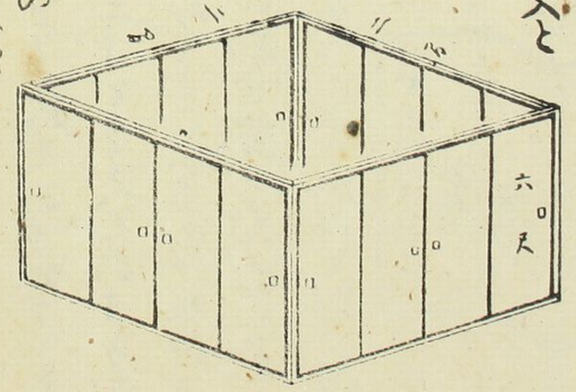
六と成是を右に割り

あるに又たりまく三寸

箔とたたみ垂くく

まべ九に成ゆまく右の

又七六とりまべ六に百枚入と成るなり



○世間にてのうりくひの法に行はれおるぞさうあり

▲算法の事

はくみの上の中と下のちぐと合して二つに割べたりして号と

見る数にを掛くれば平坪と見て

まに号さとりけ数

坪百此六坪と成るし

はたくしの法六に

ちの形にうりく把

あいゆへ成に異して

ちうさぐるし

○ちうさめ号さ九

号の記竜あり此坪

○箔賣買色〻の事

○金箔すみに百枚を三寸箔にして賣りて元

時の銀で三寸箔二に六百六十六枚六分六厘

銀に日先日すをたたみ垂掛まべ十六坪に成る

に成に百枚をくくまべ二号日に坪に成る是を三寸

さくの九坪にくく割し

○金箔百枚に付銀拵或の時銀日拵に成るい

箔の銀で箔三百七十に枚し銀に日く

銀日十に成を拵或にくく割べ銀にし

○銀箔百枚に付九に六分の時箔二に三百八拵枚

の代に成銀二百此八分九分六厘に二に三百八十に枚と

右に垂に九に六分を掛し右箔はりいくちと日に

数約径ろふ差へて四坪

二合の七戈
術曰 高さ五尺

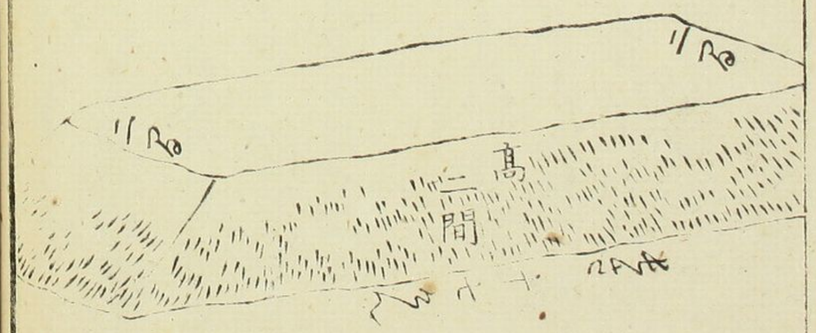
いくく
先四人
を九尺
重ろく
長八二
丈ろ六
乙巽

法の七
九とりけ
一九七丈ろ六乙巽よりさ九
ろとりけ七七七丈ろ六乙巽
長と平坪の法曰二三九

○隅どの坪法の術系

○川普請の事

○此度の坪数約径
あるぞとふ差へて
百三十六坪あるぞ。
術曰 下の横
六四四上の中二四を
くへ八四四六乙巽と
二四四割とれば四間
なりくへ二四を
とりけ八坪と乙巽より
長さ十七四をかく
長八百卅六坪と知るべく



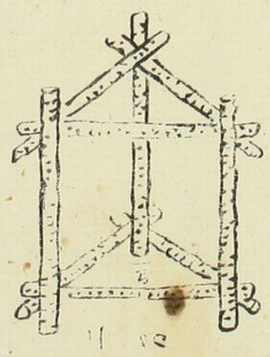
法七九と用ゐるべし
七九の法いまは紙
墨法又曰二三丈の法六
尺丈寸四方の法多し

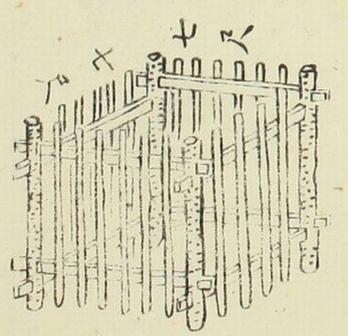
○角ろくの坪法
の一四とりけ合ろ
横の二四を一四ろとりけ
二四四割る四しほ一
二四を二四四割く中の
ろくろかくるろくろ
ろくくもあるべし
又いふ横二四もあ
けば墨法に合ざるしを
時いふろ中を拙二四
ゐ割べし

○四角のろくの坪法
ろくろ中なり

○角ろくろ四径入を
いふ差へて一坪中入し
術曰中一四とりけ合
一坪と乙巽りろ
ろくろ中をとくろし

○はろくの中へろくろ
四径入ぞといふ差へて
一坪七合曰タ入し術を
曰七尺を拙合を乙巽
一四中とりけ平坪の
法曰二二丈ろ





○三角のさくの坪法の曰三二乃さけあゑみさくゆへ答て曰

平坪の曰二又の法あるも紀まぐさく六尺又す曰方の分数し細六尺一寸のさ一寸のはい三六と用べし

○別又曰で曰まぶんあり五六十坪を乃中三寸巾二百又十寸の五数と紀事さ細行と

いふ答へく寸八分

術又曰巾二百又十寸巾三寸とけ合をば七又と答えるく五六十坪を別十と脉法の

○山三角のさくに行ふ

細行入ぞといふ答へく

一坪寸入し術又曰先九尺八寸八分を左右又

重ねまべ九七六一四四

と答える二角の法曰三三を

かくまべ六三曰合合又八と答えを

平坪の法曰二二又寸く別ハ一坪寸と知るし

平坪の法乃一二一又又 二曰三一

曰二二又別 三七下四二又 四九一九七又

声絶り重也 四二二五進ノ一

六尺と乃ちまべ厚さ曰寸八分と知るし

○山法の坪法細行

みくさ去べ細

又寸法とけれ時ハ

余行のお遠あるべし

さくさと什くさくと

考へあるべきものし

▲塚かんの事

本書の知る好んで

さくさ今中ぶん塚と

なり下時口の中北寸

庭の巾十二寸のさく

八寸長さ三町あるこ

まと三細さく塚中ん

又一紙ハ十万六一紙ハ

八万石一紙ハ七万六ろ

○山法の坪法細行

あるそといふ答へて

又百北二坪し術又

曰く先上の巾三寸

と二寸合くみ寸と

なる長さ下の巾八

寸と六寸とを乃へ

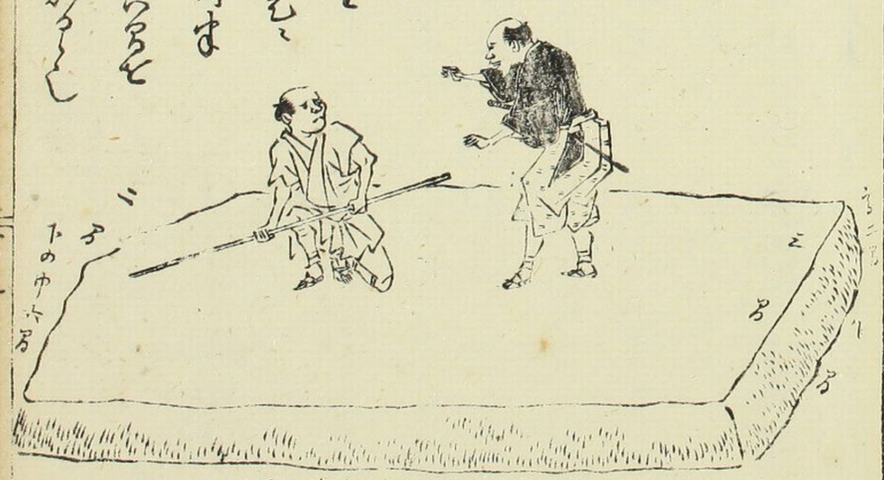
曰不合十九寸あり長と

曰ろ別曰寸七又と答え

る二寸とさくまべ九坪寸

と答えるまる長さ又十六寸を

かくまべ又百北二坪と知るし



右の坪をかけ中間
ゆくの坪にし坪ゑ
と坪ゆくと問

坪百右　坪に七十二万
一万二千九十六坪

八万右　坪に五十七万六千
九千六百七十六坪八分

七万右　坪に五十万四百
八千四百四十七坪六分

術に曰紀行合二十
五万六千五百五十六坪
三所の万数百八十間
と割ば十万五千の坪に
七十二万七千九百
坪一寸三分六厘
四万七千二百
坪ずつとなる七万二千
坪ずつ八万五千右の

坪ゆ万ずつ
九すし術に曰先ずさ三百八十万に千六百人をか
ずくに乗る又人に割し
○坪のずさ百万廣さ三万ずさ二万二尺あり
此坪数ゆ行ぞとい二に差へて二に七百六十九坪ゑ
三りゆる術に曰先二万二尺と乗て二万ずつ二に六
尺に乗すとうけ一丈に尺と乗ゑ廣さ三万と掛さ
六に乗ずく割ば六九二三〇七六九と乗ゑずさ百万
をかくまば二に七百六十九坪二ゑ三りとなし又云く
二万二尺ある時は二尺ずつと六に乗割ば二万三〇七六九
と乗ゑ三万と掛六九二三〇七と乗ゑ廣さ百万と掛
まば二に七百六十九坪二ゑ三りと知べし

○坪の廣さ十二万深さ
八万長さ三百八十万を
此坪数ゆ行ぞとい
に坪数三万六千
とへて曰坪数
に百八十坪く術に曰先
十二万に八万をかけ九十六
坪に深さ三百八十
万をかくまば三万六千に
百八十坪し右の坪と人
数に人ずくある時一坪

の人数に六百人あり

七十二万五千八百万の坪にと知るなり
七万五千を七十二万にかくまべ七万五千の坪に志
るし扨坪を五万とも上の中の三十万とも
その中の十二万と合て二万五千刻二十一万と成
是を深さ八万をとけ百六十八万と成是を深
坪くの坪にとうけく坪くの坪数を知る
○率書五万五千の坪とうめ中の中也
の土坪数の五千五千坪一分一厘五毛古坪
坪也廿六百万廣さ

○坪の長さ曰百万廣さ五万三尺深さ二万二尺
なるとけ坪数幾程そと問ふ答へて五千曰十一坪に
二厘し。術に曰先二間二尺と右を重け二万ごろと
六五とかくまべ一丈五尺と成又五万三尺なる五
なりを六五を掛まべ三丈五尺五寸と成是を是曰百
万をとけ二一三と成を曰二二五万刻べ五千曰十一坪に万
二厘と知し又右の二きを二と六五ゟ二段刻てもう
○坪の長さ曰百万五尺ひろさ五万三尺深さ二万計
尺なる時は坪数幾程そと問ふ答へて五千五十一坪
一分一厘あり術に曰百万五尺と重曰百分の六五
ゟくまべ二百六十丈五尺と成是を廣さ幾丈なるく
三丈五尺五寸にて右の坪なる掛まべ九二

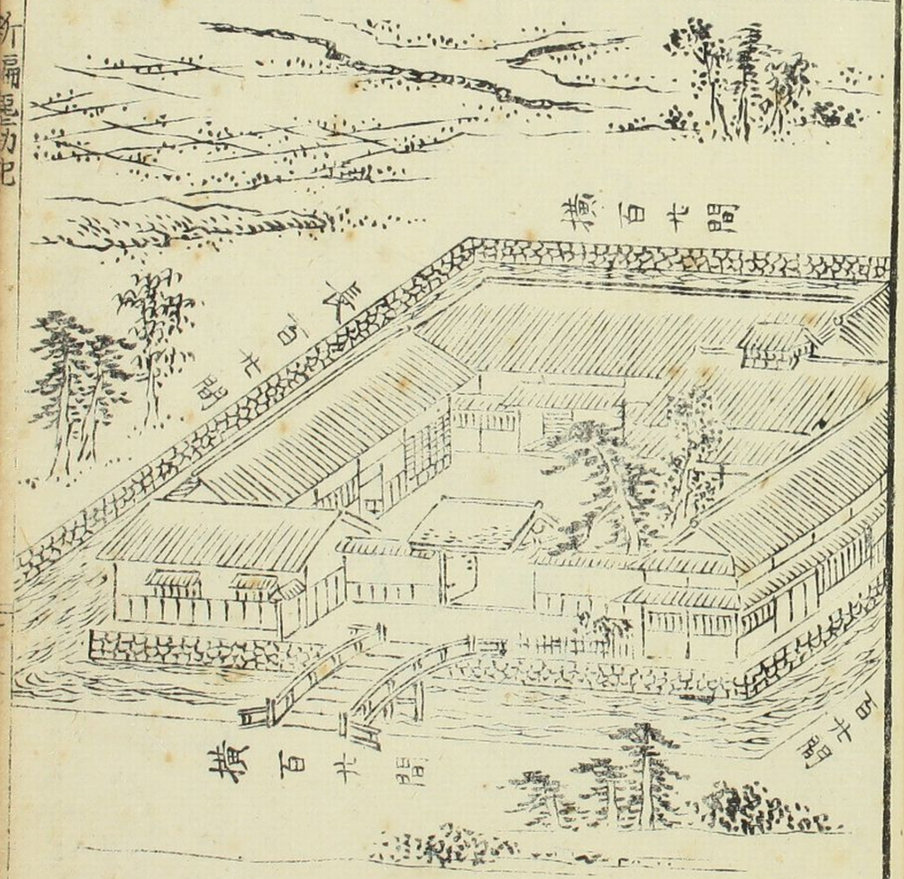
六万五千一万寸を坪にとけ坪数幾程そと問ふ
時撰幾程なるそと
九寸八分し術に曰三尺
六百万を一万寸とかく
まべ九百万と成こ
まるく五千五十一坪
一分一厘を刻し万ゟ
四万六五とうけく
知るべし
○又右の古坪
なりを曰方ゟ万数お
なじ坪なる坪の
行うゟ万幾程行
ぞと問答へて坪なる
二万五尺二寸二分八厘

曰七七五と成是を又深さ成丈五寸なるそして一丈
五尺とうけかくまべ一三八七一六二五と成是を別
又右の五を重ね坪の法二七曰六二五と重ね右を
刻べ五千五十一坪一分一厘と知るべし
○廣さ五五五坪一坪一分一厘あり時は坪を古坪へ埋
中時古坪の長さ六百万廣さ六百万深さ一万寸
是を埋る時右の五万くもさ幾程なるそと問
つくる五百六十一万一尺五寸二分二厘六毛埋るなり
術に曰先六万五千一万寸をかくまべ九と成是をそ五
五五十一坪一分一厘を刻べ五百六十一万二三曰と成計
万ゟ円五六五をうくまべ一尺五寸二分三厘六毛と知し
○土五五五五十一坪一分一厘なる毛ゟくく右の古坪深さ

三毛〇八三二ツ曰分方
う法りん掘る分中二
尺五寸曰分三りん毛三
八三三の深のうち
但一毛さいはい中五
百九十曰分方なくん掘
五曰五分五十一坪一分
一りを一分毛刻八三分
三百六十七分曰〇六六
六分五分六百分五六
分をうけ三分六百分
毛分は円右の分数を引
残り二百卅二分五三
曰あり毛を実方に
て別分六百分の円ち
六分引残る五百九十
曰分を為帯従開平法に

一分毛ちさ六百分廣さ六分あるを掘みちまんべん
堅分に深さ伊程堅るそとゝ分差へさく一分二尺六寸三
分堅分し掘る曰先六百分五六分をかくまた三六と
ある毛ちさく右の五五五十一坪一分一りを刻ば一分曰〇
三〇八六と分五ち円ち六分をうゑるし
〇長さ百二十分廣さ百九分の円五掘をまろう深
さ三分五ひろさ五分五ありさく此右を八円の廣さへ
築上さ紀時は掘の左ちさく伊程つさ上へと問差へ
て中の廣さ三尺七寸六りん毛し掘五曰百二十分を
掘の廣さ五分引ば百十五分あり毛五曰をかくまが
曰百六十分五毛を掘まへ三三と分毛を深さ
六六五九百坪五分毛を有別五毛ちと

除商得三分九り一三
一三五九毛を二ツ五刻て
掘中の分と刻ち円ハ六五を掘ち
〇本書五五五百九曰
曰方の中ちさの円数ま
ちう五掘をあるぬをを
今五五ぬをうくていで百
二十分曰方の円ちりん
中五分の掘とりりん
を掘く掘形と三尺七寸
六り三毛築上ゆんと紀
掘のうちさ伊程とり五
毛へく深さ三分ち〇
掘五曰百九分の円五分
で九方ちく十分引
のうちを百十分を九方



五毛うけ金を一万二千百坪と成る毛三尺七寸六り二毛をうけて
寄坪の法六尺みすを百坪と成る毛六尺みすを九百坪と成る
毛を布よあさ別り
たるうく百二十万を九
万とうけ金一万日ふ
日百坪と成る此内あの
きを方二千百坪をうけ
二千三百坪を加て六の
六千九百坪をうけ
ば
ふさ三万と知るべし
○又好ぐ日百二十万
日方の門表口りふさ
三万の横をうけたる
中の地形を三尺七寸。

九九人を五
て残る一人と
絶と成る人
と成時の絶
母は三尺五
寸
扨ぐ人ぐ
先後のみみる
のきは一人
残りしる絶子の三拍子
ぐ人ぐ人ぐ
ぐ人ぐ人ぐ
ぐ人ぐ人ぐ
先後のみみる
のさは一人
絶と知る

六り二毛を除て百
坪の横中絶子の
差て中みる
一万日ふ日百坪と成る
毛てうさ三万をうけ
日方三千二百坪成る
まと有る毛九九の別
三尺七寸六り二毛を六
みて別みる七り。二と
成る毛ふ三万をうけ
みる七り。二と成る毛て
本の日方三千二百坪と
別ば一万ふの百坪と成る
毛を開平法の除百十
万と成る毛中の地形の
日方し扨百九万の門

○子世人あり門
先後のみ
十人人南
後のみ十
人人人人
並べて十。
あるを逆
又二十万

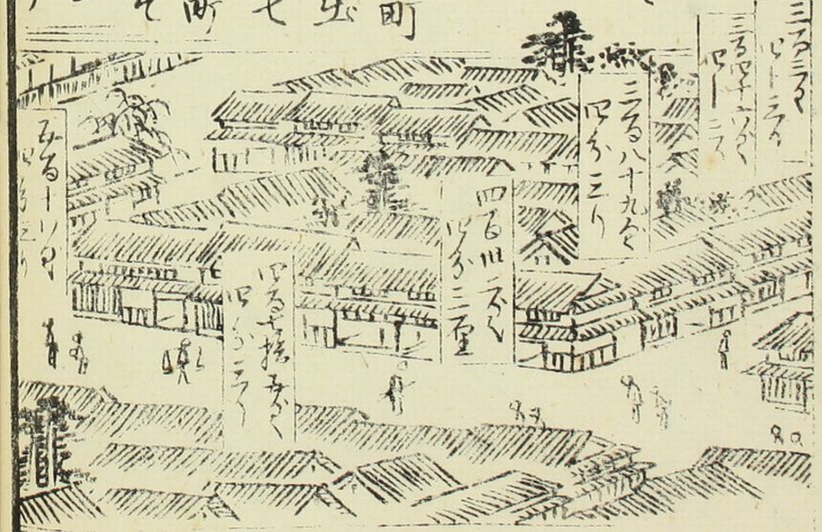
○陰くみて義の事

り今の百十五匁の
のり十五匁と二匁割て
塚の中と知るべし

▲ゆくみどちのす
むしろりみろやち
四匁五分の法まくも
五匁のたこよりうく
うまさり数又五分う
のあるへは曰く二十三
ゑ二二匁一十三三三
一と法すして五分べ
今し

○橋の入目の事

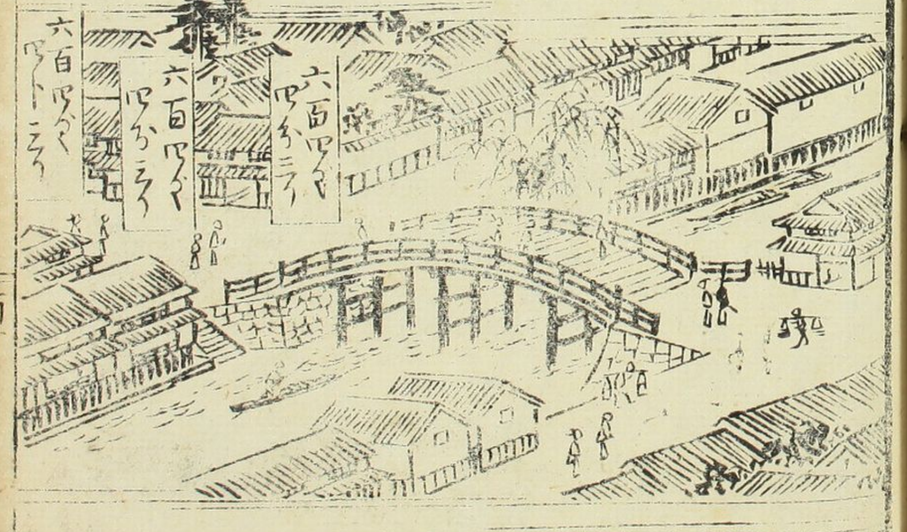
○橋二ケ所の銀
廿一匁五分入や此内
七貫目八所中を
り出て時ゑ西法
橋の写り四町
ゆり是八番ゑ
出一橋よりゆ八一町
で銀を拵へ
り時橋かハゆ
町ゆ二町ゑ
の頭より仮橋出る
芦へく曰銀六百四
自四十五匁



一ツ五匁ひくるもあり又
二ツ五匁ひくるもあり
ヒツとちがひくるか五
ふるし三町と一歩三
ふるもはあ
さく五匁ひくるとも七
貫目ゑ加へ表町数
て割ひ法をし
六百匁ゑ三分
ふ曰ゑ二町の
ゆ八曰十五匁
そまくの出張と知る
べし

▲三本の丸中法
本書ゑ法八内役

○術ゑ曰七町の方
一二三四五六七ゑを
合廿八あり三町
ゆ方一二三ゑを
合て六ゆ八ゑを
右の廿八加へゑ
廿四あゑゑを
四拾五匁を掛
ゑハ一貫四百六
拾二匁ゑ是
ゑ七貫目を加へ
て八貫四百六拾
二匁ゑ法ゑを表
町数十四丁ゑ割べ



○高木の巻と縁ちの

○高い松のごとき山に役ち木の高さを足
色一にく掛丈ち木の高さをおくもさ
細径とみけ木七分まし又
術て鼻紙ど
曲角ち
又角と
ちて下の
角の糸てか
石ちもちりを付て彩のごく
下の角が上の角と足色て木の高さと足掛
丈が木の根と七分細ば又長さ八十間

○町法すりまの事

○向へる人の高さて居ちあと
三寸ゆるゆる出二尺一寸高
ある糸を付ち彩をはめ
て向への人の丈と刀ち時
ちちく八りしゆる足ゆる時
三とちけ二分曰りと成ち
ち人の丈み尺を割ば二百八
尺と足ちくその尺
ちちあと成て三三三三六六と掛
二尺一寸六分六りと成て六寸ちち割也

別と入れ木ちちち分とも
ちちく小ちちちちち
ゆへし右二分の足ち
ちち根分明し去なち
ちち自あ刀りち仰く
しく足人ちちたび只ゆ
ちちの扇ちくも又い
枝ちくなちちもち
木ちちちべちく先と
木の末と宮ち足ち
べ木の根ちあちる所と
ちち根ちくちをあ成
のちちあてちたと
ちくその扇ち枝の
先と足ちくその足
ちちあと成と掛て
ち同径木のちさ

と知るべし　毛ハ本の方ゟ末へ次第に細くなる故に末の方ゟ数へ始めて末へ数へるなり

▲町法りの事

平書の丈中うち法　うら法ともむかひ合す尺寸を丈中うちのあゝを丈ゟのハ幸書うらみくゝ丈中うちハざうさ　あゝさ丈中うちあうらぶ　丈眼の方へゟ数へもつゝあうらもあり合ふ　あをみくゝ本口をゆて　く庁目とふさたゝ　掛扇まても右のゆに　りちくむゝゟ方へと

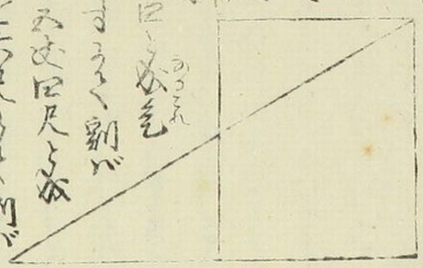
| | | |

孫ちゃんはかり

○正月は嵐文母出く
ゑと十二ヒとゝ紀元
十四ヒとゝ紀元
うゐゑも又ゑと十二
ヒとゝ紀元
九十八ヒとゝ紀元

○年言ふむうゐ（ゆく
ゑゑ）ゑ時の月中は
俗ゑとゝゐ物服
の四歳丁の休のゑゑ
むゑゑ木ゑどあるを
方へうゝ月る休なり
宅洪炮ゑの町月の
ゆゝゐゑ六尺巳方の紀
ゑゑも六尺ゑす巳方の
ゑゑとゝゑ月ゑ巳百二ヒ
かくのごゝ
月ゑ一度ゝ紀もゑも又孫も
老も月くに十二ヒとゝ紀
ゐゐ俗行ゑゑとゝゑ年中ゑ合二百
七十六億八ゑ二百ゑ十七万巳ゑ巳百二ヒ

ゑゑ巳ゑ巳ゑ巳



十月小　四億八千四百九十二万二千二百八十四疋
あるところ　又億六千四百九十五万〇〇四百九十八疋

十一月小　九億二千六百六十六万二千二百八十六疋
あるところ　九億四千六百六十四万二千四百八十六疋

十二月小　二百九十七億二千七百九十二万〇九百十六疋
あるところ　二百七十六億八千二百五十七万四千四百〇二疋

○凡そ日蘭二疋を十二歳うくまバ右の蘭数如き
○蘭二百七十六億八千二百五十七万四千四百〇二疋
この価ぞみ一日米金くらいを以て一日分を価ぞ
米千三百八十四万千二百八拾七石弐斗〇七合〇〇
右の蘭の尾みくらい給くして海代海りく入来する
とき時の給はくぞ蘭七十八万八千六百七十
七里十二町八すきる郷一里を三十六町をて
六十万一万を六尺みすりく蘭の長さ四寸

三十六文と水あるを
六尺うく剣バ六十万と
なる給バ一町し但一一
万と六尺よりて三寸目
うり彼目分ける五尺
五〇てすく編を付て
編めの編へあるあるあ
尺と見くそ尺たくバ
一尺あまバ先一の長さ
百万と知るべし二尺あ
らバ二百万と知るべし
但廿万五〇くい三寸目
尺五を廿万五〇てい二寸
目くり尺五をしる細バ
十万を一寸と准る所
しはかりさあぐの尺ハ
あうといくどもみる句

○日こ〳〵一ちんの事

○猪を文と日よく一俵ありく卅日よ物など
でとらふ蘭へてみ十三万六千八百七十貫九百拾弐文
但一右の目猪二万二千三百六十九貫六百二十文ハ二百
合てみ十五万九千二百四十貫五百九十文
○米一粒を日よく一俵ありく卅日よ物なる
でとらふ蘭へてみ三千六百八十七万九百十二
粒なり但一一本に六万粒入法りありて右の升
目ハ物粒ぞ升目八十九石四斗七升八合四夕
八才五ハ才なる
○茶子一粒を日よく一俵ありく殺ハ右日物但
○茶子一粒を日よく一俵ありく殺ハ右日物但
ありといくどもみる句
三千六百万粒入候ありて此升目一石三斗四

砲の[illegible]
角本[illegible]目
[illegible]

[illegible]

本二合一夕七才七扎二圭八粟[illegible]○渋之曰一粒と八合
の[illegible]隅[illegible]十段刻ハ右の数[illegible]又[illegible]隅[illegible]三
十段と刻[illegible]
百万粒入[illegible]一合と曰粒々[illegible]一寸[illegible]
六万曰か粒入し一本[illegible]一寸四方の[illegible]六十二寸[illegible]
[illegible]六万曰[illegible]六十二寸にくまび曰百万し

○坂子一粒と日[illegible]一[illegible]十日[illegible]合
[illegible]百六十二兆九[illegible]曰百九十九[illegible]三百曰十二百千三
百十二粒右と升[illegible]
百曰十万七千三百七十四[illegible]八本三合[illegible]三扎二圭八粟
右の升目用之法[illegible]
三十一万曰尺九寸二分[illegible]二[illegible]系四方[illegible]

[illegible]百曰[illegible]一[illegible]百九日の[illegible]
百合二[illegible]粒別十
二月の[illegible]

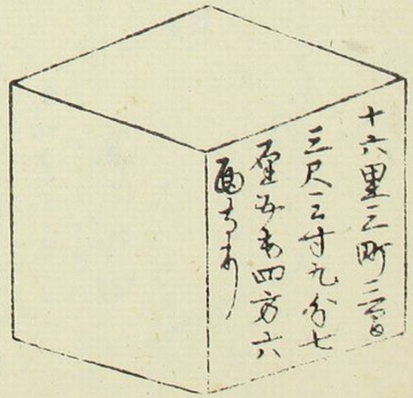
○又[illegible]法
[illegible]
一[illegible]
[illegible]

[illegible]二百[illegible]十七万曰[illegible]曰
[illegible]

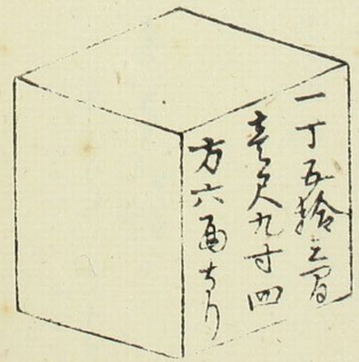
○坂子一粒と日[illegible]一[illegible]百九日の[illegible]
[illegible]
[illegible]

▲銭一文目ゟ〆一貫
本書ゟ一文と申に
二十銭劉くゝ有之ゟ
まてゟ九拾九銭劉て也
本書ゟ九拾八州日ゟ
いつゟ始くゝ分数
有之ゟ劉くゝ
の本付いお遠今一又
本書ゟ九拾九と劉
ゟくゝ劉ゟ有之くゝ
ゟ八ゟ劉ゟ分数ゟ旦
又ゟ九拾九ゟ劉い文百
十二文ゟ劉ゟ十日の金
銭ゟ文ゟ劉い髮
一貫〇廿日文ゟ銭い
十一日目の金銭ゟ文
ゟ百十二文ゟくゝ

○右のあまり用立法
ゟ
丸ゟ銭一称今百
六十日懸日ゟ百今九京
ゟ百二十兆九ゟ三百十
ゟ億六千二百日十ゟ万日
千六百七十九銭あり



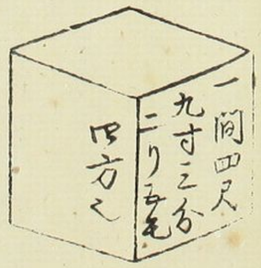
○右のあまり
用立法
ゟ
丸ゟ銭二京
ゟ千ゟ百ゟ十七兆
六ゟ七百兆二億ゟ千
今八十一万六ゟ銭あり



九日の分ゟ百九日ゟ二百
八十八文と初ゟくゝ毛ゟ
まゝ右の一貫今九日ゟ
くゝ毛六百九日の一銭ゟ十
三万六ゟ八百七十貫〇九
百十二文と初ゟくゝ

○右の日銭と初ゟくゝ
ゟ十二万六ゟ八百七十ゟ
今九百文と日文と掛れば
ゟ銭ゟて二万ゟ百七
十日貫八百九十文と成と
九十ゟくゝ劉ゟ日掛
二万二ゟ三百
六十九貫六百九文と成
ゟ十三万六
ゟ八百七十貫九百十二
文と入ゟゟ十ゟ万九

○右のあまり用立法
ゟ
丸ゟ銭九百
ゟ十六銭二ゟ
ゟ百十七銭ゟあり



○右の銭日ゟ七百今
二万七ゟ九百十二銭ゟ

九寸四方六面
四銭
四千六百六十五方六ゟ銭

○右の銭三十七万千
九百十二銭あり

一寸七分七厘五毛
四方
六面
四銭
四万七百ゟ九百十二銭

○右の銭一万四ゟ六分四方六面

一銭
一万二千八百九四銭

○右の銭百七十七銭ゟ一分ゟ厘ゟ毛日

百二十ゟ銭

○右の銭ゟ十二銭ゟ七りゟ毛日

九銭
九七銭右ノ銭ゟ銭ゟ

○右の茂ゟ一銭と百九日の分日ゟくゝ一ぐいの銭と

百里曰方の升うくそうまい

三億七千万百九十一万四千八百今二万一千九十七合三万六千一十三勺七

右の仏指みくく万事別てみるくものし

○日本國中男女の数を撰る事

○男数合十九億九万四千八百九八人但此億は小数の億なり十万を億といふとりなり

○女数合九九億四千八百九人。惣合四十八億九万九千

六百四十八人右の人数一人あて一日に合俵米五合宛にて一日に俵

二万四千四百九十八石二斗四升

又一年の米まい俵数そこいふ但三百六十四日みハ

八百六十七万二千三百七十六石九斗六升

右の人数四方る居る時を俵数にいふ

十町此八万六尺四寸三分を四方居るとして

の分千四百九十七億千四百九十一万三千八百八十八粒と成る又一合二四をとりけく千日の分百六十二兆九千四百九十九億千三百四十二万千三百十二粒と数る

○於子を用ゐる法なる事

子は一粒より門

○於子を用ゐる法なる事

子は一粒より門

○於子を用ゐる法なる事

子は一粒より門

四十五代の帝聖武皇帝の御字に出家いと男女幼子数く八百六十二万一千七十四人と

[illegible]

[illegible]

いりんの数まる四十五代の出家の人数を四方廿所五畿の沙法数と云く但一万四万八十二人一町四方に四万三千二百人の数りそれ八十百九一万六千人の数し奉しあの沙法い一万四方に九六人つの数りと九へう六人つ八りそれ

○大佛の事

米を入れ用ひ入そと云七万七千五百石入とらふ

八百六十四万人番ろ

[illegible]

[illegible]

○又云数異者ろ

一万四方に九人つ一町四方に三万二千四百廿町四方に千二百九十六万人し

○又曰く上宮聖徳の人民の数を右の国へ八二百万と云ふ毎年に出来の米数九三百十万石に不足と食わとして彼生類を中のつに殺猫り

○かりそめ殺の事

○鳶九百九十九羽ある時九百九十九浦に一羽の鳶九百九十九しづ嘴附合て

○合九万九千七百合合二に九百九十九羽し

○術に曰九百九十九羽九百九十九を二度うまるに

むかしの絹布を長一里
宮わをたくひて織り
ものゝごとくなるもあれど
まこと絹うえて地をた
たるものもあるなん造
法を三ん方ハと百三十
絹ケ条の法と意ふる
今の根ぬ世遠桃色し
その米一とん田畠ふ土
来る又載二十分ふ
を一ッと貢ものゝとして
別図經へをのへをの
所皮下図公文ふい代く
の天子も用ゐまして其
職を浦をくまゝ
年々くゝ
四十ゐ代の幸ぬ載の

○絹盗人を知る事

○去盗人物の
ひまて絹を分
ゐるを呼バハ
ゐるを呼バハ
七反是ゐを七反
つゐゐれバハ反絹ゐと
ひゐを使て盗人の数も
絹の数も知まゝ盗人十ゐ人
絹百三十反し○術ゐ曰八ゐと
七反をゐゐ人ゐ時十ゐ人ゐ
盗人数と知ゐ

所早に行基菩薩
勅ゐゐゐ田畠をわ
ゐち六尺四方と一歩と
し三百六十歩を一反
ゐゐ上田出せの米十
二合の外ゐん三反年
中下の土田ハ国ふゐり
ゐゐ法ハて反くあり
麿ゐぶゆへふゐ事を
ゐゐゆゐ

▲かゐをゐんのゐ
絹あゐくゐゐ千の絹
ゐゐて浦ゐをゐゐゐん
先ハゐゐを実ゐ乗て
刷ゐ法ゐり塗ゐ見を
ゐゐゐし

▲絹盗人を知ゐゐ

○布反の経ぬきの糸を一筋ゐのゐ行経ゐ縫り
何程ゐゐ美ゐ二里北丁北三百ゐすし個一布
ゐさ長彼ざし二丈八尺巾一尺ゐゐ すゐ糸ゐ十
ゐぬきの糸ゐたゐふおゐ

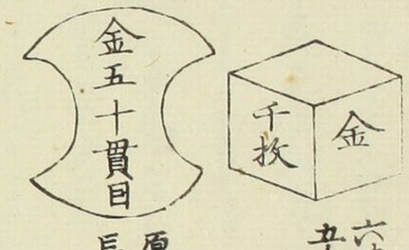
○布一反のたて緯の糸長さ縫りのゐ

○油とわゐるゐんの事

○油ゐ斗を二人ゐけゐ時ゐ三本
桝ゐ七本桝ゐて五本ゐて多ゐ時ハ先
二本ゐんゐて三ゐん汲で七本桝へ
入ゐハ三本桝ゐ二本残ゐ時七本
ゐゐゐゐあゐを元の桶へあけて二
本を七本桝へ入三本ゐゐゐ一ゐハ入ゐ

教書ハ七ツ八ツ九ツ十ツ百ツ千ツ万ツ億ツ兆ツ京ツ垓ツ
と数ヘの数十ツ人と名ヲ
ツ一とあらハ数なり
隠く字一中間茶上の
あやまりなるを子細ハ
おのおのむ時合ぐるあり
たとへハ今又ゴノンで日
八ツ九ツ刻ハ二百八十
百ツ二ツ刻ハ八ツ
不足とらふ時ふるけにの
八ツと十百と合ハ
十八人ツ二ツ又
銀ふ足合して十人ツ
合ぐるあり
銀と不足と合して十百
ツ刻ハ今にの十百の

○金銀千枚と所立ふして法りる事



六寸三分一リ毛
五糸四方六面

○金ふ枚を所立法にして四方
六面ふしく六寸三分一リ一毛
五糸四方六面し金ふ枚の
重さ四十貫目を百七拾貫
ツて刻坪二百八十一坪四二
八ツ七一を所立て除し

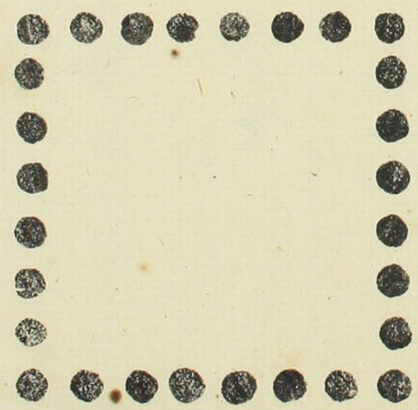
○銀ふ枚の目四十三貫目を
百四十八ツ刻坪三百七坪四
二八ツ七一ツ枚を所立て除ハ六
寸七分四リ七毛四方六面
なり

内八ツ九ツ引のこり二ツ
ツて右の十百を刻ハ金
人ツ人と名ツ
ツと十
八ツ九ツ引のこり四十二百
八ツ九ツ引のこり四十二百
と名ツ刻ハ
ふる軍中のぬも
不足と合て十百ツ
ツ足るけにの八百ツ
七ツ九ツ引のこる一ツ九ツ
右の十百ツ人を刻て足
人十百人と名ツ

○ゴノンの事

たとへハ六ツ一方を其
三方をふる一方を其
まゝに数ヘ二ツあ百
ツとふ時ハ

○かくのごとく四方にあるべ
一方ハ八ツ起ある
一方の八ツをハ
三方をハ
八ツあるべ百ツ
ハあるけにの
数数とふ
増一ツと号起の義用ル
して十六人ハ
九八ツ
又増ふ



十二ゟ八へ引て九ツゟ八へ引て四ツづゝ四方ゟ引きゝたるゝゝ八と知るべし

▲百五減の事

七ツづゝ引時は七ツを十ゝと入れ数を三五の十ゝとし又五ツづゝの時一ツのゝこりと二十一とあるを引て三七九一ゝ残し又三ツ宛の時七十ゝゝゝゝ八七九五の一倍

○百五減といふこと

○塔ぐらい等にて数をゝうゝ七ツづゝ引時二ツ残るとゝ又五ツづゝ引時一ツ残ると云三ツづゝ引時二ツ残ると云時は数八十六ゝ七ツ宛引時の塔二ツを十五ツゝの数用ゆる也ゝゝ

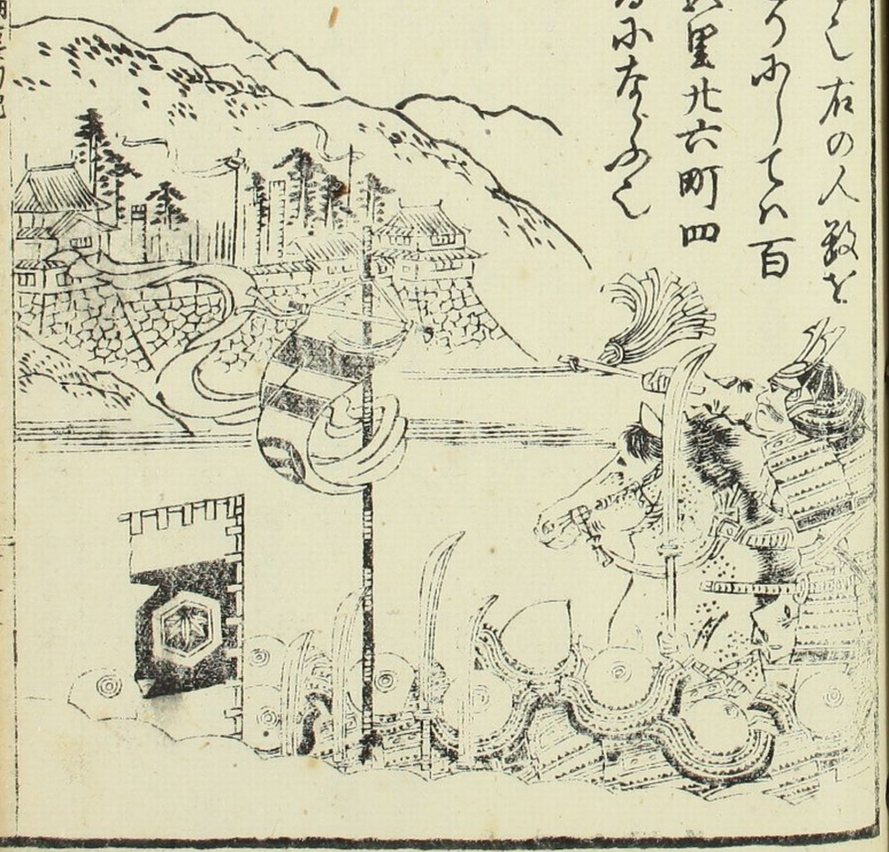
おさ又三ツ宛の時塔一ツを七十の数用ゆて百四十ゝ又百九十一ゝ五百一ゝ時百五ツゝゝ八へ残り八十六あるなり

○八へ囲炉裏を入る事

○八へ数の中ゝゝゝ数の中ゝゝゝゝ

かの人数ふまうひて
一騎よりうち騎をもつて
そ附ふおもへ〳〵
▲二人して徒を二
ちぐうあるます
○二人して左うまさ
くぐりを用よりはるばく
あるといふうも剣
合い軍書ふあうえん
而の百騎合とあ
掛りうく六人して徒
四ちぐうを左るも而ハ
うまとも多法う
おいとくいうるの
をあ用う
ふくあまぐも異て
ちるさを

▲開平法の事
○平方の紀〳〵ふさ
うい古法を律義ふ
出さまべ所の用よ
立うの法ぎ〳〵今



多るし右の人数を
二百うふ〳〵てん百
十五里北六町四
十五ふたぐふ

○百万騎の人数をたゝべて出る事

二人して立て出さ物の知ど
続くぐ出二百北一里十
七町北五ふ立一騎を六尺
一町ハ六十五一里ハ北六ぐ○郷ふ田百万人
を二人ようてうまべふ十万
騎うあまを六十五騎
剣バハふ三百北三町北
騎うあ出を北六町ふ
うまべ長二百三十一里
十七町二十五騎

算盤の器術を紀
れく方

○実り一万五千百
二十九俵と盗法れの
実り一十一十とか
ふ人くのかうく一万を
一の法りて一の九九ふ
あふ所く一二の米方
俵と引米方の上の
ゑゑゑ百万と盗し
さく今の百万を一
結ふ〳〵く二百万と
なる志ふく実を
一ゑゑゑ三ば二十万
とある計二十万を九
万く二二の米方が
引ばのうて実り

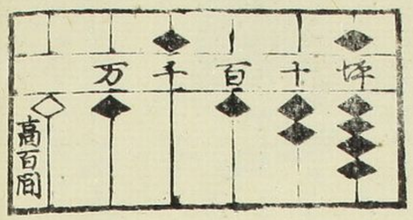
○六里とは人をて馬三疋ふ乗合事

○六里の米を人をて
ゑ疋ふ乗合する時
他里ゆく乗といふ義
く一人おふ四里米で
なり一里半ばくのを
てい智りくせんぐり
ふのゑし先一人を馬イ
一里米乗くおくし
一人を三里乗くおり
ゑし一人い四里米乗
てけゑし一人いたしめ

七百九九俵ありて今の
二十万代一結ふして
二百四十万とゑ志ま

一里米ありうゑめ一
里米目ゑ乗亟を
なり一里米のくく
ゑゑ人を又三里目
ゑり乗ゑををゑり
三里のゑる人を四里
米目ゑりを人の一里
米乗ゑをし
○術ゑ曰く先尼の米ゑ六里にをを二疋を拔
三六の十八里ゑ拔け十八里を人数巳人をて割
ば一人多ゑ四里米つにあるし拔け四里半
をゑ数三疋ふゑゑば一里米なる加乗ゑ中也

て実を一遍うまで三万と成け三万を九九九くく三三の九坪と引拂あし数おゑ一ぐいふまでうそうをえをうけ一倍ゑせうる三万いをのまく垂百九三万と成し



○三里あるを三人しるを是ふ多分の実合のあるう一人おゑ二里ばるし一人い二里のうて里歩りし一人を一里のうて中一里あるくし一人を一里おうるを二里ゑ里あるくし一人を一里おうるを二里ゑ三万の実人るのを多分行程の者をにうてちがいあまでもけ二分にすべつさく垂涙をべし紙を略して成ふ考るさだ

○用平法商実法ゑ〻く除の事

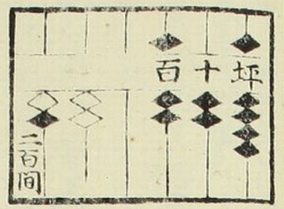
○はを方ゑ千百二十九坪あるを四方ふなしてく

百九三万四方あり

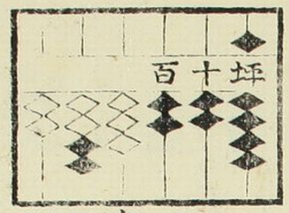
百九三万

一万五千百

二十九坪

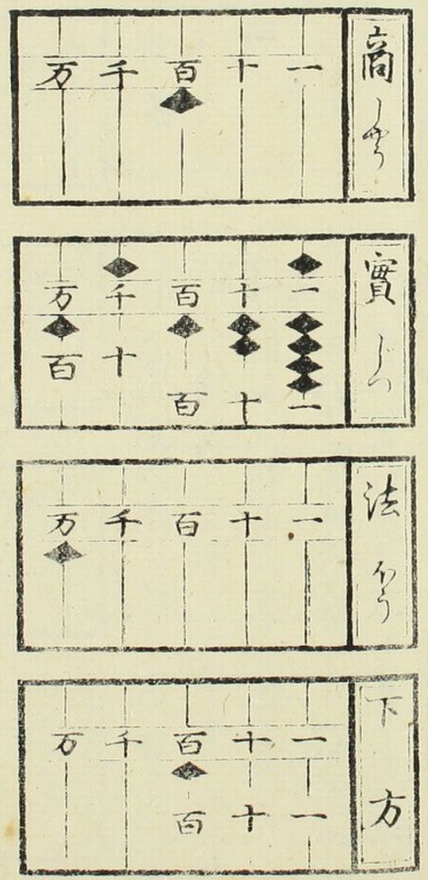


二万四引
四進二十
一倍二九



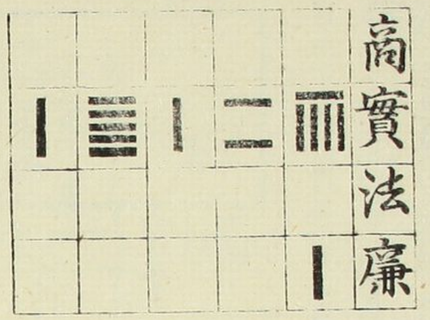
三三九坪引
三四十二引
六進三十
一倍

又三万筆本る引六百法のそろぐんのくく志実法と社と定る〕概実を置高い赤一ハ三分十を横〕一の社のゑい横十の



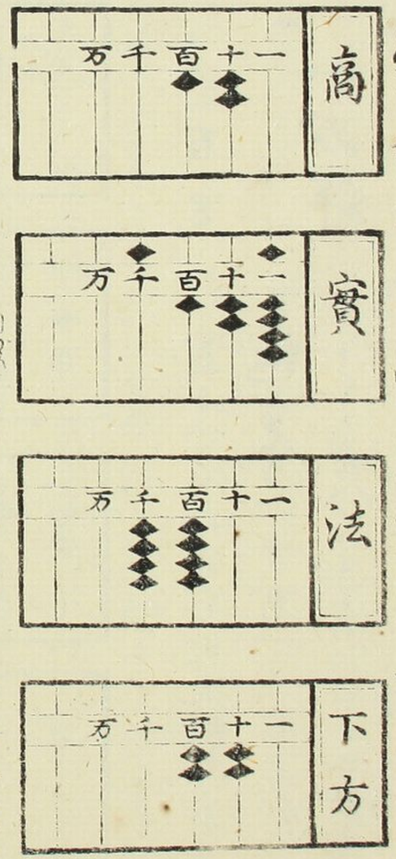
実ハ一万五千百九九坪ゑ垂ゑ法と成る一十百一十百とかくのくくうぐへて南る附百と二変南らび百の法と定め商ゑ百ゑ垂概下法うて百ゑ一十百とあるく

九のゐい立也
初發の図



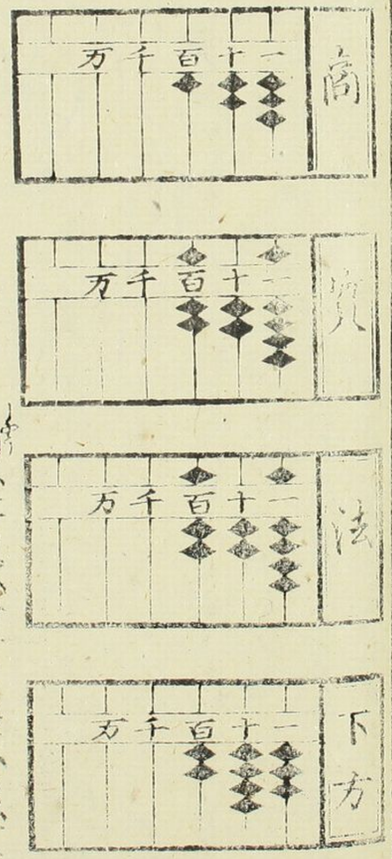
実二万六千百九九坪と義坪の位の下座を一と立て十一十と二位づゝ上へ位べし次に廉を九ゆる故商の下へ移りて一位と九ゆる故商二と立る百万の一と商の一とを

百と立て三の法ふく下法の百と商の百とを以て一万坪と成実を除て実ふ残て百九九坪なり



百
二千坪
四百
二千
四百

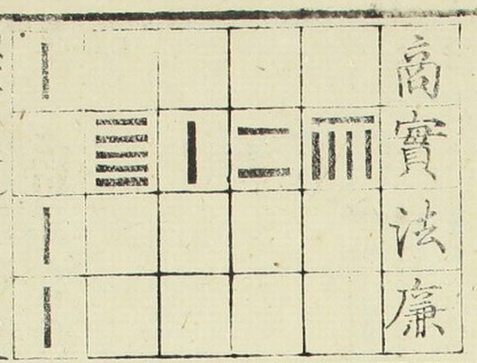
商の百の次の九と立て扨下法をば一位さげて百を一位あげて二百とおきけれども又九と立て扨法かく下法の二百九十の九とよぶ三の四千三の四百は四千四百を実として引へし実を残て七百九九坪あり



百
二千坪
三百坪
七百九九坪
百九三万四千九百九九坪

商の九の次に三と立て下法をば一位さげて九を一位あげて四十と立て下の又三と立て扨法にて商の三とをかけて下法とよぶ二三の六百坪三四の百九坪三三の九坪と立て時法に七百九九坪を元と実として引てし扨商を

扨次に九とするに又廉と商とを除て法にて法の二と廉を一行下る廉は二行下るし



商の一と立て法の一と立て法の一と商の一とを又三の一と廉を立て実を一万坪引実の残り百九九坪なり

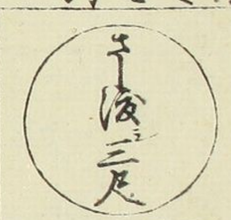
二の高の位と考へ高ハ二と五分毛九万と扱けたるを廉ハ実にて法ハ加へて二二と
なる毛と今五分毛実にて二万四千坪引二万四百坪引
実にて除て七百九九坪を

高實法廉

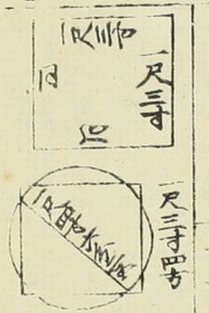
扱三の廉と見んとするに
ハ又廉を二の高と実にて法を
加へて法二四と成る毛法一行

○所五平象法の事

○一寸四方の坪数七百十一坪を所象法
みてさ渡の径なるぞと云ハ問ハ三尺し
法を七百十一坪と右に置象法七九を剰ハ
九百坪ハ必毛を用平に除ハさし渡三尺と知るし



○七九といふハ数さし渡一尺あるハ一寸
の坪七十九あり一尺を二つに割ハ五寸五分
一分と二つに割ハ五寸五分と成る毛ハ五寸五分
毛ハ九九と成る毛ハ三尺一寸六分をかくれハ
七十九坪と成也ハ七九とうけるも



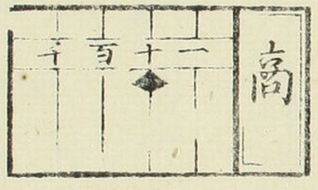
○一尺三寸四方あるものを剰くるして
渡ハ径なる云一尺四寸六分二厘も
法と二二と毛毛と一尺三寸とくれハ
さし渡一尺四寸六分二厘と成し

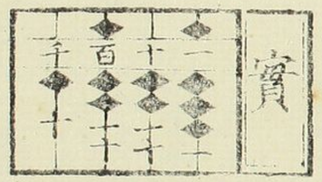
下方毛ハ二行下りて三の高
の位と考へ三万と毛ハ三
万を廉に実にて法ハ六と
二日三と成と今五万高
三万に実にて二三の六百坪
引三四の百九坪引三三
の九坪引さしく百
二十三万とうけし

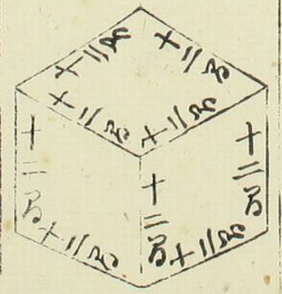
高實法廉

○所五法乃事

○坪数千七百二十八坪を
毛と五とさしかけ
ハ径なるぞ
十二万四方六面し



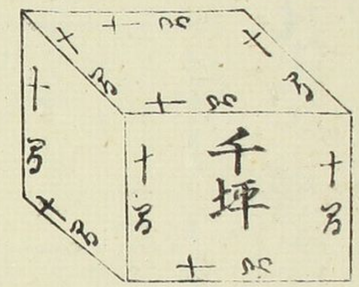


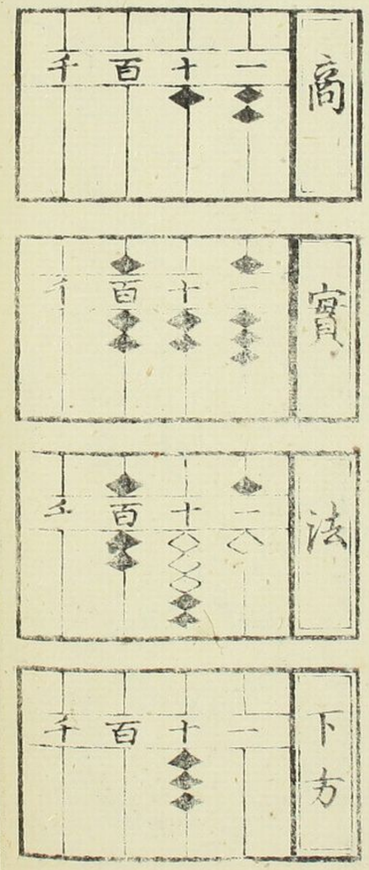


法ハ曰く実ハ千七百九八坪と毛と実にて径を
乃る一十二十一と実のごとくなるぞ(あらうて乃ると紀

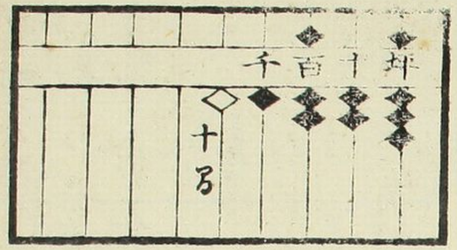
開立法の事

本書にはいまも古法なれども立一位なる今をろそんの暗術を記す也〇実に七百九八坪と立坪の法の二十百と位を考上てこれ位を開立て実の上の桁小を立て再自開て千坪に実を減て実に殺り七百九八坪を殺法の産へ商の十をとりて立法の三を乗て商の十をとりて三百歩として次の二をとりて出して法を殺

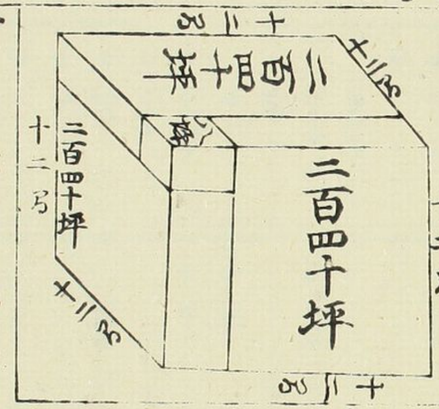




十と云八十の位に先商に十を立又下方を一十とあげて十と乗じ是を商の十に引てこれを殺法に移す下方の十を商の十へよびて三の百と立又法の百に一十とかけてあげて法の百に商の十をとる一二の千坪を減じ是を実に引て殺法て乃是を以て七百二十八坪実に



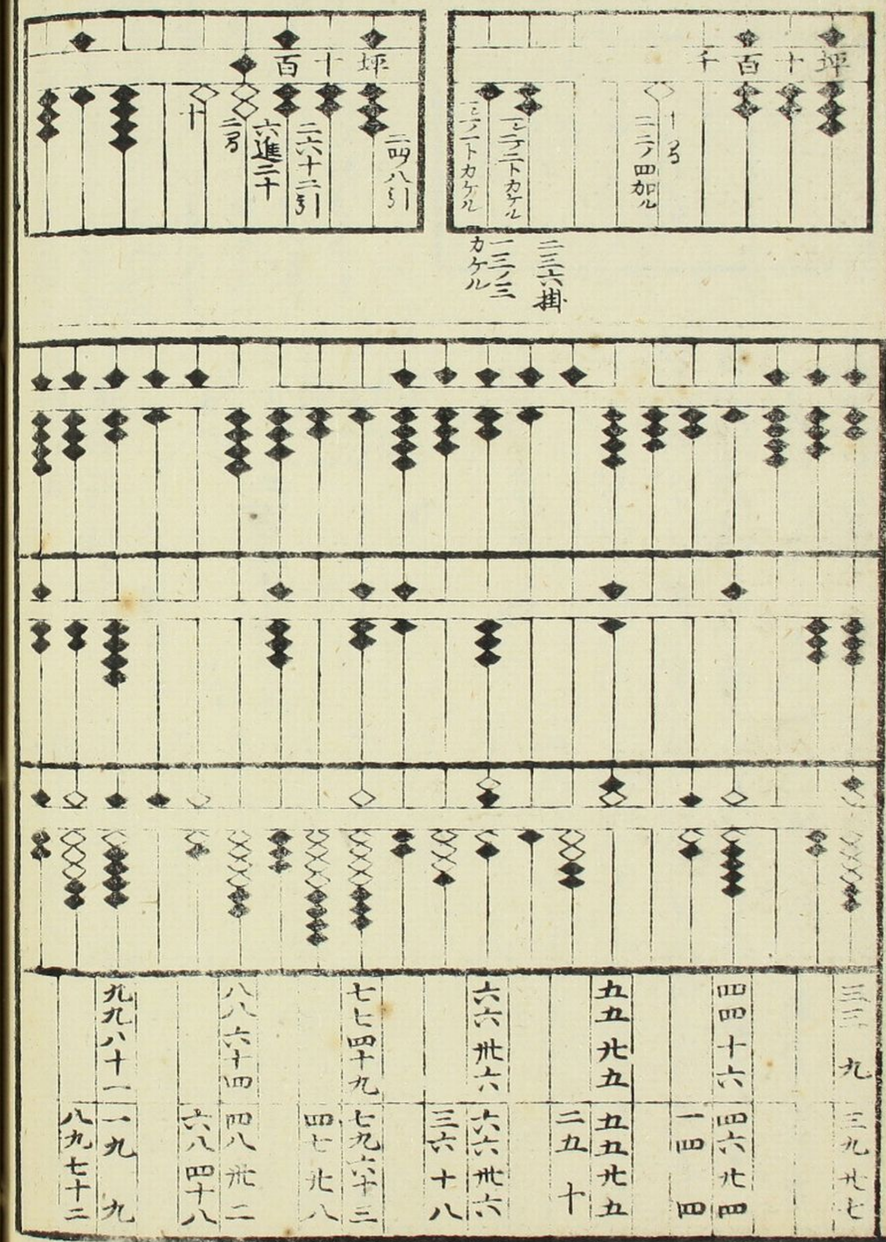
万と立二桁下り三桁めまて今の二万を自開て殺又上の十二万をとり法三を乗又それへ商の十万をかけ三六四を殺也そ実を除し但一法に変り万を立てあさ立をなり



左の四口合七百九八坪し

商に十の次に二を立殺下方の十を三ぶり法に乗て一位さげて又法にあて下方の桁に商の十をとる一三の桁を法に立又法の桁の次にあて下方の桁に商の二をとる二三の六を立又法の桁より一十とりぬへ上りて法の桁に商の二をとる二三の六百を立又法の六を

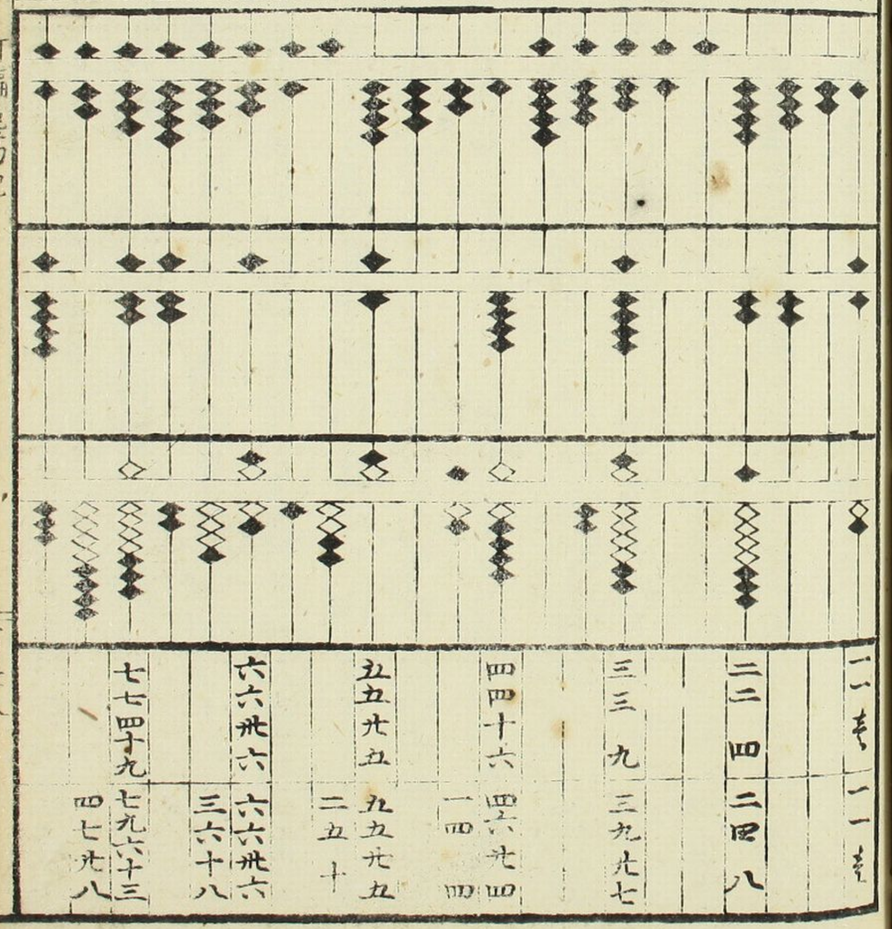
一十とのぶりて法の六に商の二をとる二六の百九を乗附七百九八坪なる是を実にして引を殺八坪あり是を角に引先法に商の二を法にして二を立て法の二に商の二をとる二三の口と法に立まて是を二に商の二を二度とる二四八坪を殺を実にして引



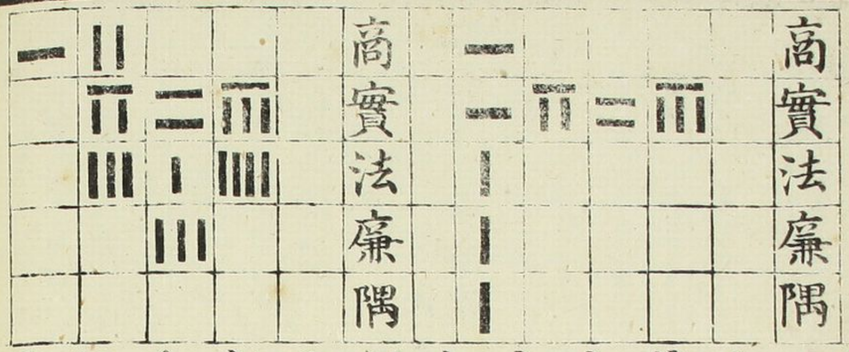
本書の誤い書面の誤うてさあるを用ふ之ゆえ
要くなり下の誤二変
りけるを但既の法を
考めるこの系自之号迄
用之不用九九あり毛
ゆく法を工考く

一一 二二 八
三三 二十七
四四 六十四
五五 百九五
六六 二百十六
七七 三百四十三
八八 五百十二
九九 七百二十九

▲用之算木之術



高實法廉隅



開立法と二乗したるたとへい幹書のごとく千七百九八坪あるを開立法除高實法廉隅とそれぞれの法を

極を實ふみ七百九八坪を亟なり扱坪の下の隅ふ一と亟一十百と三位づつ上りて千坪の下い一位なり故ふ

高ふ一と立る是十万しけ十万を隅ふ乗て廉ふ十万と亟又けけ十万と高ふ乗て百歩のと法ふ亟又是

と高の十万又乗て一ふ坪実ふ減術て七百九八坪実ふ乗迦次と乃と立ふい隅一を高ふ乗十万紙

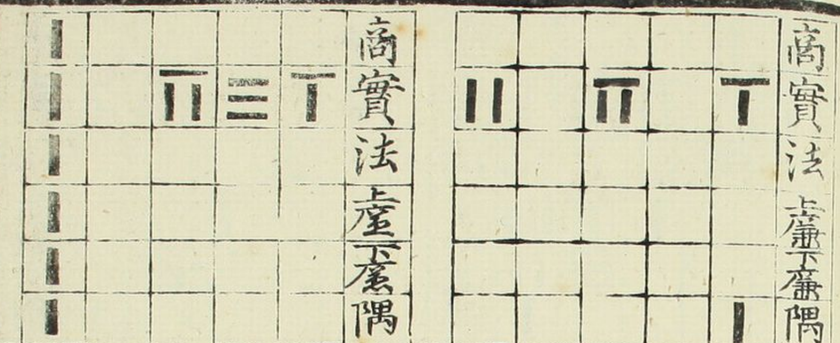
廉と加へ九万と成是を高ふ乗て二百歩のと成を法ふ加へ

又隅一ふ高を乗て十万是を廉ふ加へ九万と成扱法を一

行ひ廉ハ二行ひ隅い三行ひて　高ふ二万と立ハ二

万を隅ふ乗て隅行の上の廉ふ加へ廉い三一二万と成

高實法廉下廉隅



を今立る二万ふ乗く二三の六十歩法ふ加又二三

の四歩法ふ加へ法三百六十四と成あまを今立る二万と

乗て二三の六百坪減二六の百九坪減二日の八坪減

扱ふく高十二万と知るなり

▲三乗の術と云い開立の上へ又開平を乗ることを除く

法したとへば今二万今七百三十六坪ありとそれぞれ

同万のものをそれぞれ何程と問ふ答へ

て云十二万日方六面のあを数十二あるとふこ是実の

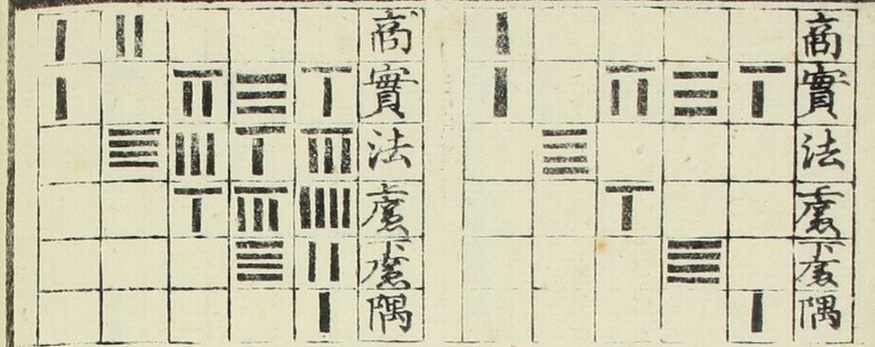
算立い六法ふく除ふ高實法上廉下廉隅と

扱実ふ二万今七百三十六坪と亟坪の下の隅ふ一と亟

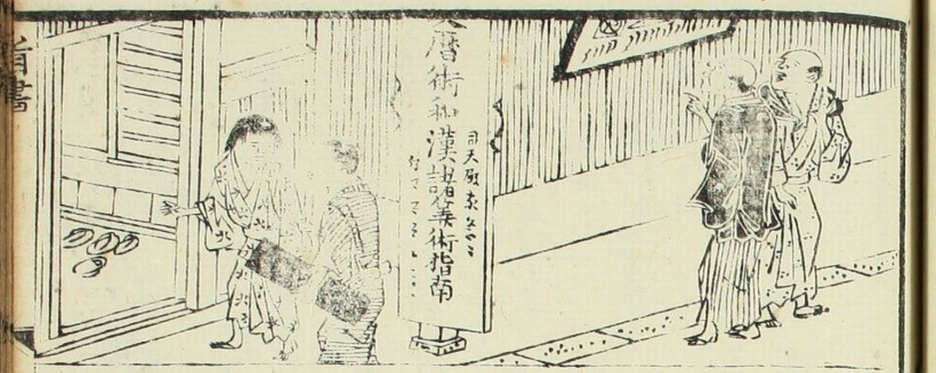
一十百千と四位上りて万の下ふて隅一位と成てあさ

扱商ふ十万と立是を隅ふ乗く十万と成を下廉

商實法 廣下廣隅



ふ亟毛を又商ふ乘て百歩と成を上廣り亟
高を又乘て千坪法ふ亟毛を又高ふ乘て一万
坪実より減ず 残て一万余七百卅六坪実ふあり
初次を足るふい隅を高ふ乘て十万と下廣ふ
加へたるを成又は北万を高ふ乘て二百歩と成を
上廣ふ加へ三百歩と成又は三百歩を高ふ乘て
三ふ坪と成を法ふ加へ四千坪と成又別ふ隅ふ商
を乘て十万と成るを下廣ふくわへ三十万とあり
又は三十万ふ商を乘て三百歩と成を上廣ふ加へ
六百歩と成又別ふ隅ふ高を乘て十万と成を
下廣ふくわへて四十万と成初法を一行下ル上廣を
二行下る下廣い三行下る隅を四行下る法を巻



次の商ふ二万と成高を隅ふ乘て隅の上の下
廣ふくわへ四十二万と成是ふ今ノ成る高二万を乘
て上廣ふ二万の八十歩くわへ又三の四歩加へ六百八十四
歩と成又高を乘て今ノ成る商二万を乘て法ふ二六の千
二百坪くわへ又二八の百六十坪加へ又二万の八坪くわへて
法ふ千三百六十八坪と成是を今ノ成る高二万ふ
乘實より二ふの一万坪減又二三の六百坪減又二
六の百九坪減ず二八の十六坪減ず
右ハ外四乘五乘乃至十乘十ふ乘ル術九卅
乘又者何乘ル術成共二乘三乘ル術ニ相智ル
事無ク有て変ニ記ヲ不ル紙心ヲ付ル者給ル
ハ遠ル万ニ者ハ

秘方算法奥義

○九九の数を求る法

○九九の数い古まゝ算法の根源なれ共まゝ理はあるべしむかしまゝ記録のあるを考て是をくわしく

○九九の数一つゝおりぞへて一時に数を得る術を問

答て曰数一千百四十四也

いにしへ先基数九をおきそれに一を加へ九とうけくわへ九十とゝ打重ねて四十五度九のたびの数なり

九十とゝ打重ねて四十五度九のたびの数なり

あるゝ又曰十四と自乗するときは二百八十六

○基数とは九くの数

ふるうてあくまでいま

つ九の数と云ふなり

○基数の九ふ

一をくわへ合せて十と

なるを九をうけて九十

と成なり

○打重ねは二つ重る

をいふ

○自乗とは数を

うけ合せをいふ

又つゝの数をあき

あぐるを乗といふ

○平方乗の積二百八

十四とは

一一が一　二二が四

三三　九　四四十六

五五廿五　六六卅六

七七四十九　八八六十四

九九八十一

この数合せくの乗

しそれを開平方の乗

といふ乗とは数の

あげくの数的とする

の乗し

○自乗の積とは自乗

しそれを合せる数

の名なり

○積とはつゝをひげ

数坪とはつゝ

の名なり

○平方乗の積二百八十四をとりて一九を九とのたびの数なり

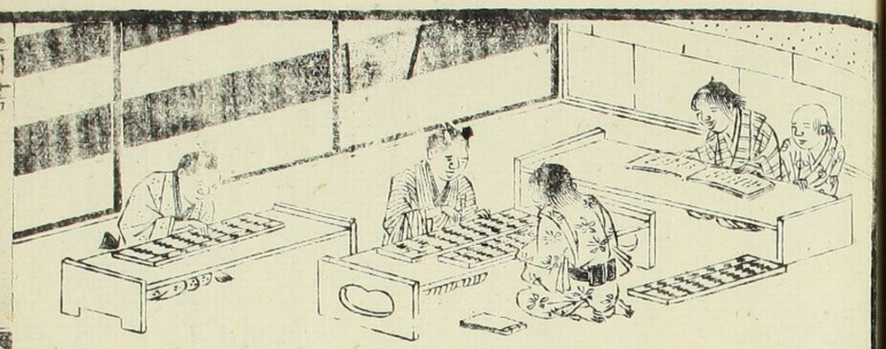
二千三百十と成を二つゝとりるが基数し

明圖

一	二	三	四	五	六	七	八	九
二	四	六	八	十	十二	十四	十六	十八
三	六	九	十二	十五	十八	二十一	二十四	二十七
四	八	十二	十六	二十	二十四	二十八	三十二	三十六
五	十	十五	二十	二十五	三十	三十五	四十	四十五
六	十二	十八	二十四	三十	三十六	四十二	四十八	五十四
七	十四	二十一	二十八	三十五	四十二	四十九	五十六	六十三
八	十六	二十四	三十二	四十	四十八	五十六	六十四	七十二
九	十八	二十七	三十六	四十五	五十四	六十三	七十二	八十一

右の板成は十四と自乗する時は九くの数名

右のごとく
○実とは基よりの
数をいふ
○虚とは紙書ふ
乃へくさる開五数ふ
数の標目なり又
てもるべし
○正術とは数盤数
ふをんさもるのもし
○天元一と称するあ
一ツを立てもべ出を方
みしてたの数
○圭梁積とは上へつを
あげるうちをを
○自してとは自数の
異なり
○因とは九ようて乗



を列一平方の梁の術よりて得る数を信し者法
と加入し終る源数は巳限の積とは○||||一○|||
者左して總数を列一是を巳限とし巳て書た
と相消してもの式術の式をはるし
数の術は九九の数より源べるそ相乗の数百
千万ふもるとも無数基数を求むべし

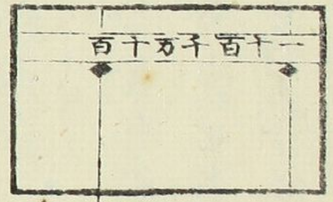
○自然者の法　極数の称を用ひ

○たとへば今初数九百九十九ふをもゆるは是
と自然せんと思ふを数を問
答曰九十九万八千〇〇一し
は術は一千をを自然をもとべふと百万とは乗を
ふ

一信より始て一ようの九をの自然の数一信より九ざる
ゆへは一より九をの自然の和二百八十ふを加る時を
二限の積とは乗巳と二ツより初び無数とは乗初のごと
○又右の九九の無数をんて今まを基数をもし
むるか術を問
其術は曰無数巳十巳限を乗ようて二を初廉とし
九を上廉ようて十を下廉ようて三を源ようて三
然者に巳を用ひば其基数を得る也
○又巳を正術を求る問い天元一を立て基数ようて
○一ツをようて其数を乗て二ツの圭梁積と
巳を○一一巳を自して六因して二十巳限をん
圭梁積ようて○○丁||丁信ふらんて基数

かゝるゝ丸うう上の数
をうけくを乗こゝろ
六間こゝに六ゝびうけ
○罫い罫の罫をゝし
又市の罫も用也○用
数をうけ合せ法をう
うるゝの名し
○位ゝあい位小ゝ重る
をいつゝし
○列をゝい位を寄
といつゝし おくゝゝ
りはじ
○寄たゝい重る数を
左の方へのけゝ重し
○根源ゝい寄たの数
と合をゝくりをいゝ
○根数ゝいはゝはゝ

只の一を除加へ掛ゝく百万の内にて二ゝ引
○又物数九百九十八万自乗ゝ
答九十九万六千〇〇ほし
此術も右の掛小おのゝ〳〵乗法の加へる一をはゝ
一乗法の二千ひくゝをはゝし乗べて是を惟紀べし

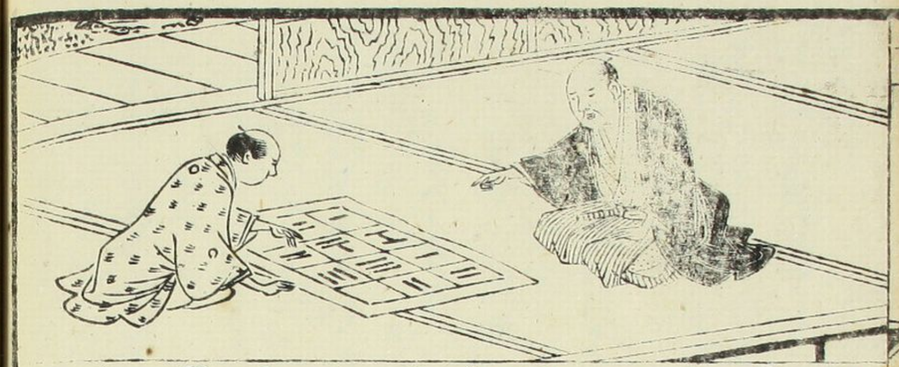


○除法小加法を用ゆる術
○二と三ツゝふゝ成いハを加へ三を三ツゝ割ゝ況ハ七ツを

ゝゝをゝくゝふけ
あゝで双方ちがいゝゝれ
数をうけ合をゝくもを
実乗ゝゝり云
○自乗者ゝい自乗
ゝる時却ゝくゝたゝ
方を用ゆゝゝ俗小
引ゝゝゝ云
○除法ゝいゝゝゝ
加法ゝい加ゝゝし除
法ゝ加法を用ゆゝい
割ゝ寄却ゝく加法ゝて
ゝる術し
○乗法ゝ減法を用ゆ
ゝいゝくゝゝるゝのを却て
引寄を用ゆゝ寄ゝる
事し

如ゝ日を日ツゝ成いゝを加ゝ成ゝをゝゝ
ゝきいゝを加へゝを成ゝゝ割成いはを加ゝ余いを
に懸ド紀ゝべし

○乗法小減法を用ゆる術
○二を二ツ乗ゝべはゝゝを減法ゝてゝ二八を減ド二
を三ツ乗ゝべ九ゝを減けゝて三七ゝ減ぞはを日ツ
乗ゝべ十六ゝを減法ゝて日六ゝ減ぞゝいゝと
くゝべ二十ゝゝを減法ゝくゝゝを減ぞゝゝゝ
六を乗る時いゝ廿六ゝをけ法日六ゝ減ぞ七小七を
かくゝべ日十九ゝをけ法三七を減ぞ八ゝ八をゝく
ゝべ六十日ゝゝ二八を減ぞ九ゝ九を乗ゝべ八十



一と数は法のごとく一九と減ずべし

○けい法加法を用ゆる時たとへば十二万三千四百五十六と七百八十九文と二つを割べ六万五千七百九八貫三百九十四文と一と数しけい時は先実の首位十二ゑ有る二六十二と九て加法の八と六とをおもひて六八四十八と十二ふ加へる時は六と数次に三の所を立て一八を加へ次に四の所を立て七八五十六を加へ次に十六を加へ次に六十四を加へ次に七十二を加へ次に三十二を加へ次に五八四十と六りへ終まで二の所の割と用数し

○概算の時は八を次第に減ずるし出す八四十と六りへ文の内四をゑんで次に四八三十二引て八残る次に八九七十二引て八残る次に三八二十四引く

○除法用加法書法

一除加九　二除加八
三除加七　四除加六
五除加五　六除加四
七除加三　八除加二
九除加一

○割法用減法書法

一割減九　二割減八
三割減七　四割減六
五割減五　六割減四
七割減三　八割減二
九割減一

六のごとく次に一八八六八四十四引て六残る二八十六引一八八引六八四十八引て二残る引終て用数有る三除以上右の加減に準じて考べし

右の術は商実法の理を明らめるせさまは容易なれども実数を移すに法数二つ有るものは実の数は是商二度を加へる時は商十度と有る也者一度と十度と数の表用ゐ用ゐる二度は八度を加へる時は商数おらりくし三除以上も是に準じて考べし又割方減法を用ゆるも商一度は位を進めて十度と為て内八度を減ずる時は商二度残る是二を割しるとは事し三減と上も是を推て考べし

○約術をもちゐてくれの法

廿日分の図

○　○　○　○　○　○
○　○　○　○　○　○
○　○　○　○　○　○
○　○　○　○　○　○
○　○　○　○　○　○

かくのごとく廿日分の六の日数見るべし
もしまた二十分の図をもつて日数
見るならばいかるべし

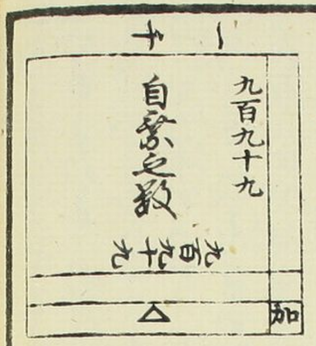
○約術

○算法の達するものは約術をもちゐるべし隨
意費多し先けをたくさんいそぐ千あるも百あるも
廿日よりの時は日十一六と成又是を廿合にまぜ八
十三二と成又百と六つに割ば十六六日と成是ハ
四合にまぜ六分の六と成則廿をば日ふるうるる
ものとは数に極ばば日分の二十とえんようい六分の
六といえんい意簡役にして一或は六十六分の廿
一と約する時は八分の三と成しかくのごとく約と用
ゆる時は重数いまだ見ざるに付左七條の数し
計信数をもつまい右の数を重ねまた減

別て図をもつまい右の数を除けば
約数を得るし計術を用ゆる時は九帰術のごとく天
元術にて演隨式又は招元算法をもつまい
まで隨に費なし是算家第一の法しこれをこと
得る時は年に八算のごとく多くく見一をもつぐる
人のるものなるしたがいて三度ホトに成ホトを掛
合する時は二度ホトを得て七度の一掛に成
ホトを得して廿度の一をとりもつまと見合せく
又七三十又と掛合せ是を日つに割ば八度七ト又重
と知るし万事理を推くもつべし
○又限百目を十六にする時見一を用ひずして計約
術を以別ば先百目を減して又十度に十六とす

自然省法術起

視算一万数一千ノ内減一位也加一千ノ内減一位自之得加下式



視算二万数一千ノ内減二位也加一千ノ内減二位自之得加下式

減して八万十目と八万九千六百弐分ありと知し

○又弐百目を三十人に割て二と三人との法実共に倍して七十目を割ば人七十一匁宛と知

倍して七百目を七十人割ば人七十一匁宛と知

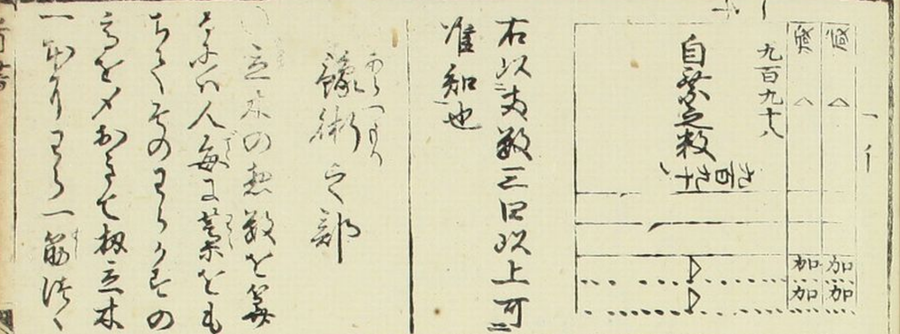
○繪算にて足らざるの術

○足らぬ天元演限算を上理て尚捷径なる足出せしけ事数畳集して足らざる人を求

くも天元和法にて足らざるの要路を求しに仍て

更に天元一二をあげて和法を施す

今物成一万石あり但一石ニ付三本



右以支数三日以上可准知也

繪術の部

三本の和数を每人毎に求るに

ちくさの人毎に求るもの

をメあるて板三本

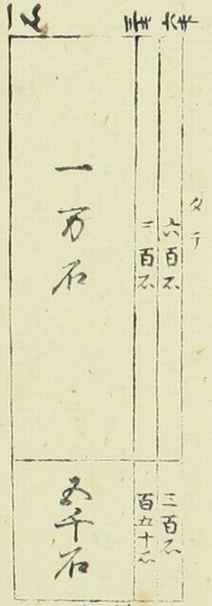
一ツ宛ちくさ一筋宛く

支米六本の残りて有る故に是支米合て六数と

問ふ　答曰一万六千三百五十石

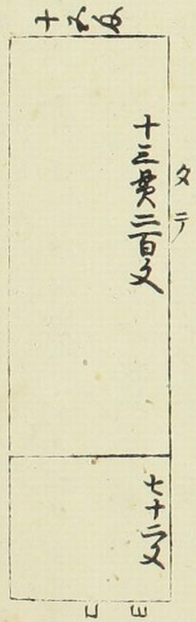
○此術は一万六千石をあて一石ニ九本を求る者

ちまた合数を得るなり



○法十三貫二百七十二文を拵十人に代張を問

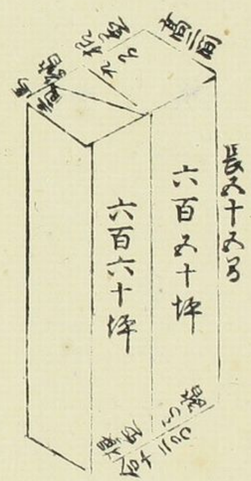
まづ法の数をあて百より下九六を差を約して



付めくりて弱るこの

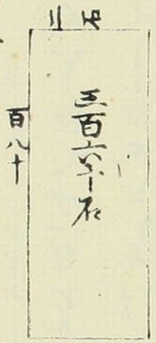
○見沈の用あるこの保
ゆとは拔くこの第の四行及
一人ゆとは云ふの と云るあり
先池の水をこの盛き
所とあの西と定めく
こを長短行あるこを定て源
きあを二つのこのあり

備をんてこを家を代紙を考るし
○又法あり根番九回馬踏三回高二万長五十寸を
び一坪二人の拔切りて此法を築小人夫行程あるこ同
答曰六百六十坪　千三百二十人なり

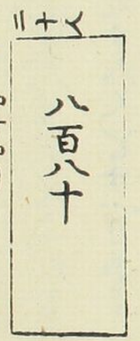


かくのおこく九回を並三回と加へこを二万を家
し長五十五万を家して得る数人夫の数なり
二つのこのこして積を得る図のこ

田の畝一抔行すを積り○第二百六十石あるを十五人へ十二日の間毎日こり
付考るを一人行程と同
答曰　毎日一人の積米二石



十五人は十二をかけ百八十こなを法こ〜第三百六
十石をこを八毎日の積米二石とあるし
○又荷物十六荷を人足廿人して五十五里の所へ
拔行一人荷の里数を問　答曰一人日十四里

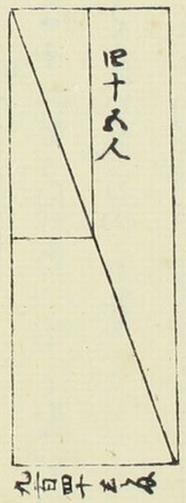


五十五里こを五十六荷をかけ合八百八十こある

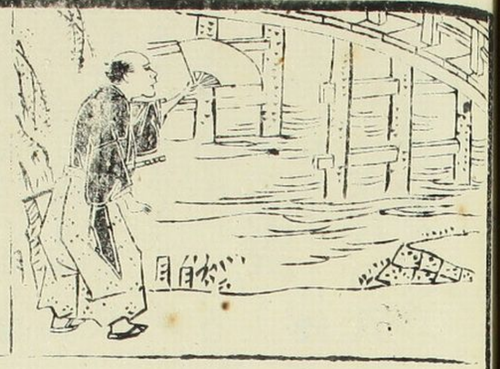
㊀ 板ゆき十ゑ弓梁十一弓新の出張八尺六すたるを一信みて地組のうちゑあるをまゝ新まりふゑゆ地のうへ仙尺とゐるはりりい新の出張八尺六すとうけくまゝ法十・巳をうけく六尺七寸二分ゑ梁をあけてまりるゑをしまゝ
うをい角寸のゑるつ久なくゝをゑゝ
のゝまりりい地より
まゝ人九すのうゑゑ
べーを船をおして
まりゑゝ

を人数の二十人ゑるれば一人巳十巳里し
○又雇人足ゑ人ゑ九日の工料拾合八十一ゑゑりしゑ
今又廿ゑ人を廿一日中ゝいて右の作料の則をんいん
と問

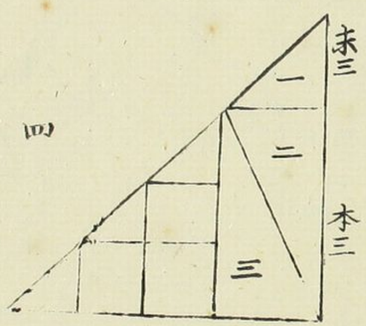
答曰九百巳十ゑゑし



廿ゑ人を並て廿一日をうけ又八十一ゑをうけて実と
又ゑ人ゑ並九日をうけて法ゝて則ち巳十ゑゑし
○又六節ゑ作の木三節ゑ二本二合ゑ夕入ゑ又本の
節ゑ第三本六合入ゑゑ節毎の第の差如何
答 ㊀ 三ゑ本三合ゑ夕 ㊁ 三ゑ本二合



㊂ 三ゑ本〇ゑ夕 ㊃ 九合 ㊄ 七合ゑ夕 ㊅ 六合



○石垣のたるさふのりうぶさあるをゝゝゝ
のべくゝあるゑゑあまるゝゝゝりあ
りたゝゝゝ
あどをゝゝゝ扇
とひろげてゝゝ扇の

本節の三をんて末節の第二本二合ゑ夕ふうけ又
末節の三をゝゝく本節の第三本六合ゑうけ減
て巳本合ゑ夕を差として実とす
㊀ と ㊁ ゑひさ ㊂ を ㊃ ふゑゝ
本節と末節とおゝ繁ーてそまゝ恵六節のま

丈の角と指渚の丈
方と曲尺とあてくゝ見
あらを附ひろげて曲
尺とあへばそれ多し
をゝめくゝあへばはし
と見るそのゝ長短を定めて
そのつくゝ石垣のうゝを除
る法りゝ立こゝまゝ其
あふぎのそう高儀
とうけあをゝの延
をゝ志多べしいゝき
乃のびもこの理り
おるゞくりくい縄
矢弦弧矢弦の理
をゝ考へゝ志りゝ
まゝべし

分三節を祭し九七ゝて実をゝまゝ見茶を合
丈夕を浮るゝ見ハ雅楽の時ゝ本の国ゝ来の国ゝ変し
志ゝまゝてゝまゝ見ハゞ三陵の若し国ゝく知ゝ
ゞ雅楽ゝい雅のゝ紀のごゝくゝとゝりゝ
とゝふなり国ハ地のごゝくゝけゝをゝ云なり

○麻畑方カしゝさ拵の
狩をゝ法りゝるゝい先
ろくゝろ四十石目より
六十石目まで一丁ゝ立
ゝ云見い元考の拵の

○或い立六丁横又丁の一村一日ふる雨の数を積ふ
法を問　答曰世又万千二百○又石或斗也
術ゝ立六丁ゝ間六をゝけ又丁ゝも六をゝけ各ゝけ
合をゝまゝ一万八百坪しゝまゝを別ゝあゝさ扱一尺四方
の箱を以ゝく一日ふる雨をゝ為て見ゝゝ又ゝすなゝ
まゝバ六尺又ゝすゝを自然ゝ雨の法りゝ知ゝ又ゝすかゝく
れゞ立積二十一坪一三又ゝし升の法六四八二七を別バ
まゝ坪へふる雨三石二斗又升一合九夕なり志まゝを
右の一万八百坪へゝけゝく雨数を知るなりたゝへ一
郡一国ゝゝへゞもけ術ゝて准ゞ知るべし

○田畝の高さを平均する法

ふとさ四尺四方ありて
なりを長さ三寸細さ
四寸の考へあるべし
○新草形の仕様
長さを五人へ分ける
ことわかるように先
刻草をおさて
見るに十あり一人
十あつくしようつく十
あの紙幅を仕様
そこへむすびつけて
紙幅切とゆふものの
なべし

○或ハ田七反ありて
地形長さ八尺四寸
来る為かし減して七反平方ニ
差引一尺四反とりけ七反ニなるとき八
寸なるを右の長尺四寸ニて減ずるバのこり
六寸あり是を四反の地面ニなく六寸ニなる三
反へ引なるべしてよし

○只今ハ平数ハ平方ニ根を求る法

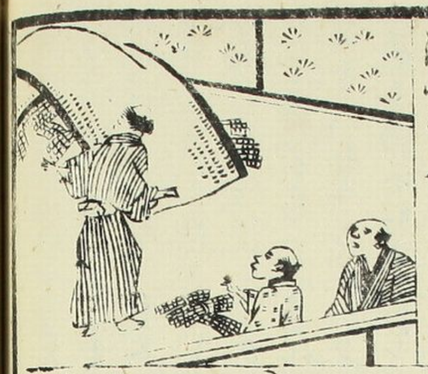
○或ハ銀千百五十貫を五人へ
見せ五人 二男廿二才 三男十九才 四男十六才
五男十三才 なるを来のるなど年一ツ五貫目

○銭配分の時十二貫
ツ分ニバ七貫宛り十
三貫ツ分ニバ八貫不
足ニ成ル人数貫ニて
ニなる始めのあり
と渡の不足と合れ
バ十五なりもるいち
是人数と知るべし
ニ人ニ一方のくん
数とりけく五方の
ニふ足の増減を足
合し貫ニなるなど
○又十五貫ツ分て
五貫あまり十七貫
ツ分く十三貫ふ足
なるバ五と不足也

まして配分ニする時ハ何程ツと問
答曰 足弐百貫目 二男弐百拾五貫目
三男弐百拾貫目 四男弐百四拾五貫目
五男弐百六十貫目也

合せて二度帰りて不足の場減は後にみるべし

○右四十六貫で売れて二貫余り十九貫ゞ有て廿二貫不足あり いま二不足合して三度帰りて不足の場ぐん後小あるべし



此術は兄より二男は三ッちがひ二男より三男は六ッちがひ男は九ッちがひ男は十二ちがひにして遠の分配合此ほか貫目をうけとく百廿十貫目を千百廿十貫目の内にて引残る廿貫目を有ゆゑ別にして武百貫目を先兄の分とし残る百廿十メ武百貫目を三にてわれば一歳廿貫目にあたる

○猥高連なる物数の高下を知る法

○たとへば茶碗三百六十を代猥メ廿四日とのみ送り状にて此茶碗一ッ宛りとの九りとの変りあり 書いくつづゝ

書曰

宛り 武百

九りとの茶碗 百六十

○栗石七百廿十坪あり 高さ廿尺ふしてあり 横つゝ廿尺ひろさ一丈三間ゆ七尺四間ゆ六尺廿間ゆ五尺かくつゝて廿間の五尺を引るゝ七百廿十坪又一坪の積り二百七十四坪六寸二分廿五厘を引て廿間ゆ五尺を引て残る坪数を問

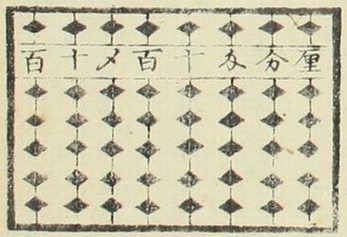
答曰 百六十

此法は縦横を三百六十と かく長ゝ十八と成 是代廿四日下の内にて 廿四日と成を 縦横と九りとの長さを 四日と九りとの長さを 別ゝ九りとの茶碗 百六十と考べし

○位を乱るの術

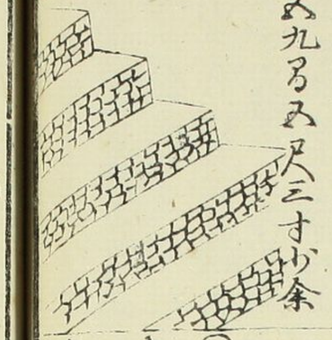
○武い武廿四日下を廿四方 答長ゝいくらどこ向

答曰 百廿四廿四貫目



位のくゝいくる百のくゝいなり

方のくゝ

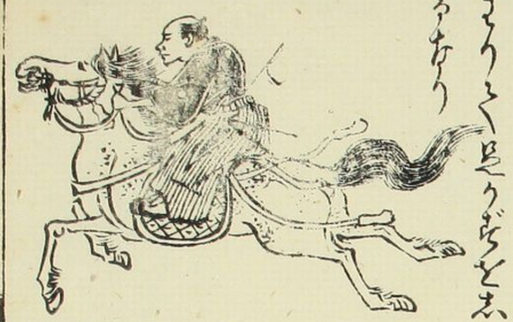


寸坪とも不足あれ
ども丈尺合せるく信しゝ丈尺と
丈ゞんと二業しゝく
開平のごくしてを
まをもうてもるべし
下十万一尺八寸か余
二十万二尺三寸か余
三十三万一尺二寸か余
四十一万二尺三寸か余
五九万五尺三寸か余

○たとへバ三百七十年最年の名とい他の年をとる
計法い三百七十を三百六十引残る十を十日の紙り其
十を引て日ッ指をかくまへバ一二五六と数て是
百世五貫目中ゝ速ゝ志まがとしまま
ける信ゞ分の信しと志長是義家の称ゝ
○或ハ采五十石を五万人へ渡を時ハ一人ゝ行ゞ若日三合
計術も百五十石をみてゝまへ三とい孔ゆまゝ
三本在三合在をゝやゝふ志りゞゝ是い除乃
既の信ゞ多し是も大称なり

○十日の法

○たとへバ三百七十年最年の名とい他の年をとる
計法い三百七十を三百六十引残る十を十日の紙り其
十を引て日ッ指をありて成と知るゝ其仏准じて志るべし



○千里の紙の是ゝを法るみい糸の三
十三間ゝの絵目の矢
うゞの志るを社在
ゝりあゞちまゝのる
をゝゝりの世長さゝ
のべて居の六丁一里
ゝゝゝ是ゝゝを志
ゝゝり

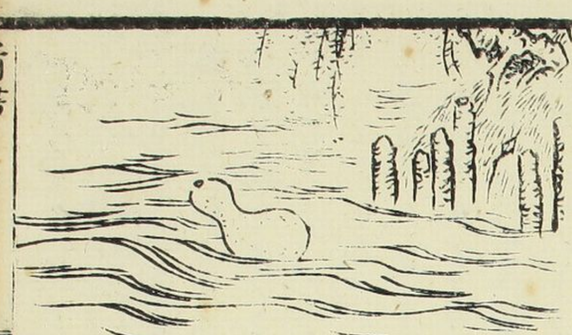
○二ハ掛和の天地一文京ふ和ゝを壁横代下地の恰好と
たゝゞ三ケ一ハ移ゝとゝるゝいゞ是も他紙ゝゝと同

○すゝ平笘盈編の法

かくのごくのすゝ法をて西くのすゝ法と一ゝ是義へバ
絵の和 之弐尺七寸七分一りと三毛横一尺二寸七
上一尺二寸一分二りとゝ毛下六寸三分ゝりと上の中

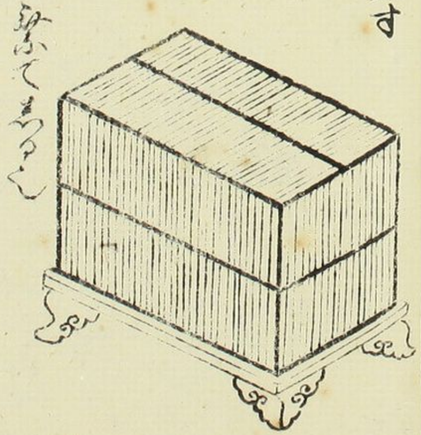
○清水の寺の清水の堂
前又前の石敷地
もつんとい我脈敷さん
清水のみお器さうけて
ゑい涂もべし

○淀川の水是貴大坂
よりうま入樋をもん
ふいいづくもても十町
ばかり上よりうろき器



樋を流し是も自樋
ふあり也て川の水ん
是樋又流るくを見て
川のもぐ潜くとあらし
長樋清源と繁して
もつべし

一尺一寸三分四りと戸三寸
七分八りン是二寸四分
二りと術曰先二寸四分
おき左方是を開い
開法一二六りとなる
是を用の器のすを繁てもつべし

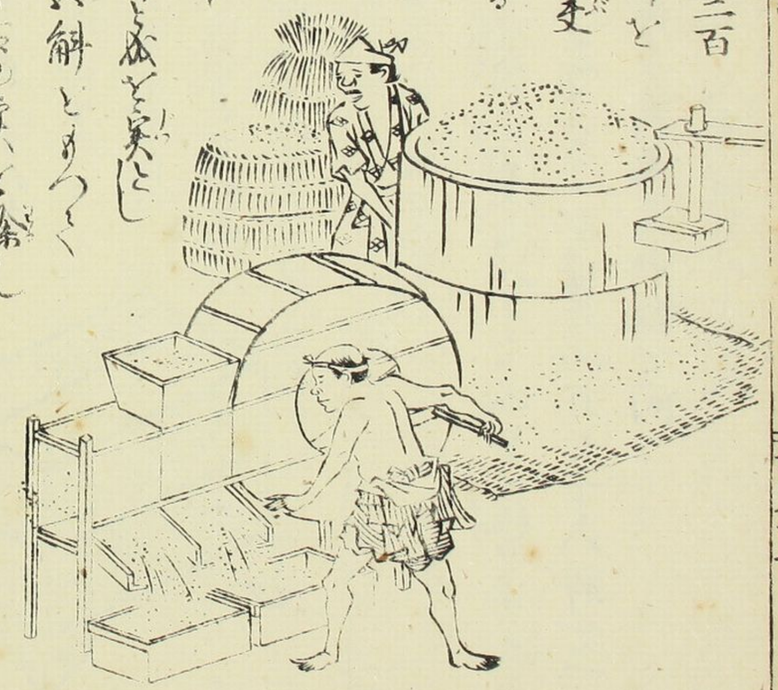


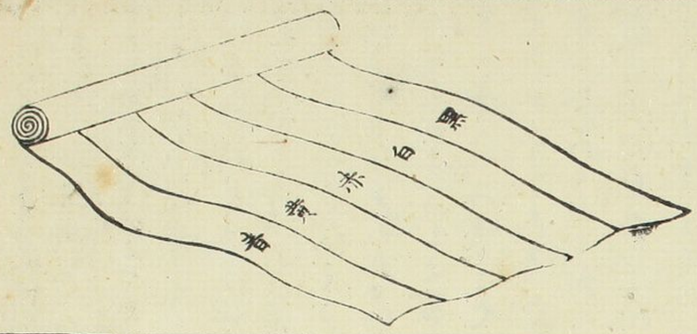
○鼠石敷人力の割法
○あるいい粟と人丈七人して三日と鼠石ゑ二十
又解今りもつるゑ今粟二百七十又斜と一日
ふ廣絵まつ其人丈の数と同
答曰　人丈弐百三十一人

曰寸曰りと一毛下の中二寸八分八りと七毛上の
一丈者一寸四分八りと又毛下の一丈者七寸四分
丈ゑ紀三分四りと六毛ゑ軸九分二りと四毛
右の法い波算記ゑ改乗法を以て出ると計記て
術い曰術ゑ秘しゑ今本術を出ると
先一を重三をんて毛をゑる恰ぬ三分
三系三三三三ゑること毛平方ゑひらけば開法又
分七りと七三又と成し開義元のりけまくす
法ゑ繁まいい二分一のす法を出ると
○又或い名筆ゑる籠ゑて計内ゑて廣一倩ふさ方ゑ
何程ゑ
答曰長一尺三寸八分六りと幅一尺七分二りと

○ろくけ二尺五寸ふ
して　もと三寸五分　末二
ロ二寸七
くのごとくに五色
織あはせ紐ふしろく
仕糸の縫を去くくい
三尺五寸より七五を用
てもとを求め機未一尺
を長くくの人数をけ
ようと二十五をとうけ又
八十をとうけ仕糸の数
ろくに五色のをどろう
て一ろくづく数をけく
色糸を求めるなり
さくくを五くくの如
をとうけ色のをどろう
ろくに五色
あとして紙帷を造

術曰先二百七十五斛を
おろして人夫七人を雇
又日数の三を以て
おろすを
まづ五千七百七斛を米とし
粟二十五斛とをつく
法しくくおの米を除し
人夫二百三十一人と知るべし





ようけをとりて用ける
屏ふうにぬる
七五をとる

○米五百二十石あり一石のあたいを十五分紙
米斗の袋に銀五分石米の内五百石一石の價と
無ことをとる米袋米を問
答曰米五百六十八石　袋米五十二石
術曰先米の五百廿石を袋銀の五分と相
乗して五百六十目を米斗の價
銀五分ゝ袋銀五分ゝ相係つく法しくく実
を除まば袋米五十二石とをる

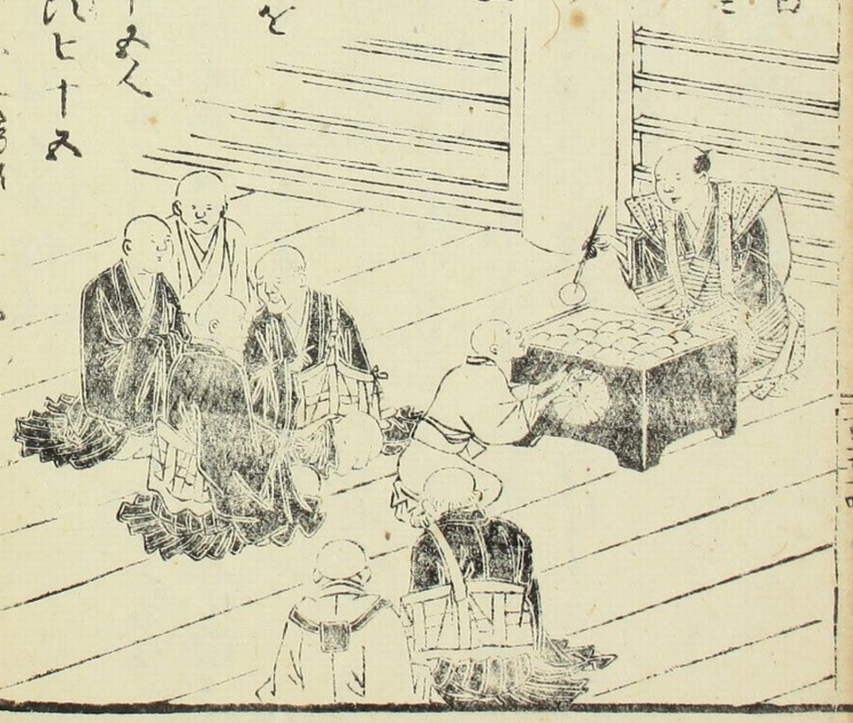
○米袋の除法

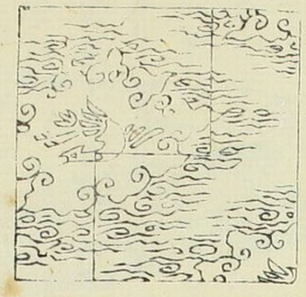
○米五百二十石袋米の除法

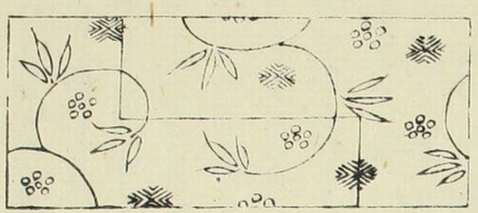
○供養飯の除法

○あるいをまたけ八尺巾三尺ゑすゑ分ある織ものをたちめ一もゝ織ゑゝ
ゑゝゑゝ絲のおゝゝ口
ゑゝなる法をゝ
あゝゝゝを二さゝゝゝ
て二をゝゝまいゑ尺
三すゑ三分三りをゝゝ
まゝ巾を二帰して
ゝゝゝゝゝゝゝゝ尺三
す二分ゑりゝゝゝゝ
織ゝゝいゝゝゝゝ
をゝゝまゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○或ハ傍ハ百を百人の傍ニ
ゝゝゝゝゝ大
傍ハ一人三ロ
ゝゝ小傍ハ三
人ゑ一ロ宛
ゝゝゝゝ大
傍小傍の数を
ゝふ　答曰
大傍二十ゑ人
傍ハ七十ゑ
小傍ハ七十ゑ人傍ハ二十ゑゝ

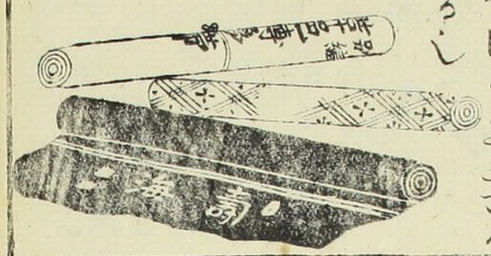






術曰先三を重てゝ一を加へて曰ゝゑを法として
ゝゝゝゝゝ実の一百を除まゝゝ大傍の数ゑゝ人を
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○日巻口壹尺まろ
あるまり紀あとのへを
して長さをもるふい
まろまりの一尺と
二つよ刻ーすのろ乃
ろうと米後よ
しさて右の杉まの
ろうを用ふく三丈六尺
と知るし



高ょ米の利を求るし
又或い銀三貫文百目借て文利三割八分の篆ゑして
一年と一貫三百廿目ゞ文年に お渉附い利足幾程よ高ろ
答曰二ろう六歩八毛七弗小あるろ
術曰毎年利の銀を貫三百三十目を実ろ
元銀三貫文百目を第三減の傷よおき曰 乘
方にあまと開けい利足のろを知るし

○日一倍の急術

○先一を墨て是を信ー第二日の数ろ自乗
して是を信ー第三日めの数を知るなり又
自乗して是を信ーまい第八日めの数を得るし

○京の大佛殿なるふ
ねりと建立ろるよた
と人年数久しくても
多くの費あくてを
入用銀あるひを求ま
どの入目いろ程と積
るよまり所あ居多く
減へらるき所ろく中
る六ふ石の円堂をつ
ぶしあば九百年を
ぶくく建立たるべし
そのふ細い出るの内
ゑ千石の所よ八ろ四方
よ用ゆる木一本て極
おけば一方八ふ三十本
なるべ外後ゑ人数と
ろるを十ケ年ゑて

又自乗して第十ゑ日めの数を知る又自乗
して是を信ー廿日の数を知るし

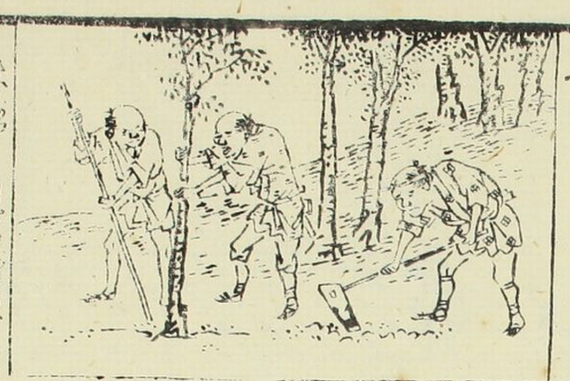
○九減七減の法

○たとへば銀三百ゑ十一ゑと二百七十三ゑと四百八十九ゑ
と合ゑまば一貫百十三ゑと減を遠あきや遠あ中と問
○法よ曰先三百ゑ十三ゑを九を以て累減ー
ゑ二百七十三ゑを九を以て累減ーして三を
余りを又二百八十九ゑを九を以て累減ーして三を余りに
あまりを又四百八十九ゑを日く減ーして三を余りに
前の余りをくて六と成を前の数ろー又後銀一
貫百十三ゑを累減ーまば六あまりと後の数ろーて
前後ともよ日ー六あれば誤りあるべし

三年又三度つくるべき
業をおくれたる年
月或五づゝの均しよ
うりて教るの根と利
是を俵に分あつまるべく
新金一万五千貫目
余あり又るの法り
の原は田地とて年貢
口つ納ふしてもまも
利是アかし分三歩
あつめく米又十万
石余しまと用米の
大きなる百年ゆく
教は二尺より長十るの
法りうしも米は年迄
ようてふるゆ利根
利米のうちて皆速

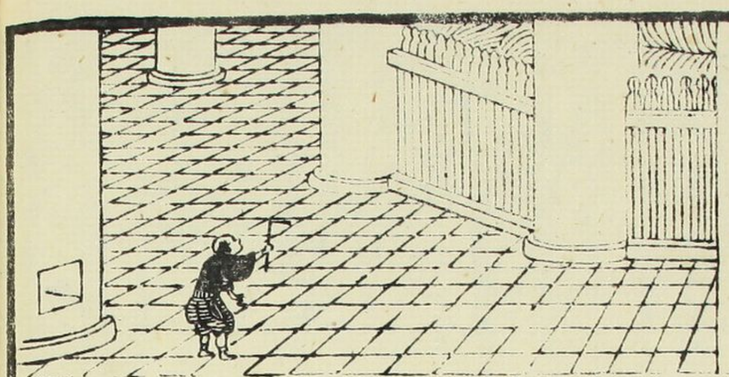
○又七減を以てく位の時は別第法のごとく七を以
累減してあまり四又法根を七をんをく累減
てゆまり四是ようて張りあるとあるし
○又平方面三尺七寸五分五厘又三七五を自乗
ゆまば一千四百○六二五と成は数の合るや合ざる
やと問より其法
□平方面
○問第法のごとく九減を用ゆまば方面は六歩余し自
乗の数ようて九厘をあまりをふるべき第のあまり六
分を以て自乗して三分六厘となる問ようて二分七厘を
減じ九厘を残る其ゆ減して元と成を張るしるん
○七減を用る時は方面口つを残を又自乗の数二
厘を残を第のあまりの口分をうけ合をれば一分六

厘の入用おりひとりを得るべし又七減を用ゆまば二厘を残を
吾あまる数の第しるまば是又張四と知るし
○又方面ようて人三寸九分再乗巾して其数を試
ふ六百八十五寸六分一厘九毛と成を合ざる
と問　再乗巾は一度うけ合る数が巾し
第法のごとく九減を用ゆまば口面ようて口分をあ
まり再乗ふて一毛をあまりを第のあまり口分を
以て又再乗して六厘口毛と成是ゆ再九減を用
ひて一毛を人余を合一毛の余り第しるれば張るしるん
○又七減を用ゆまば方面ようて六分を残を是を再
自乗して六毛を余を第のあまり六分をんて
乗自乗して二分一厘六毛を得る是ゆ再七減を



○大仏の釈迦如来を
人間の教は法りゆ四十
人の曲尺を其子細い法
うけ二十丈を丈尺

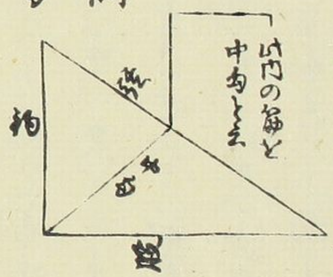
の人ここく帰をまべ四十と数ちくまべ人殺六万四千人と積るし



明らく六もとあまた前後日数し渋りなし

○矯股弦の法 果しても勾又去 ふ書なり

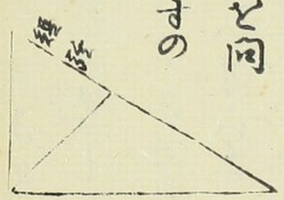
勾三す
又四す
中勾のすと同
答曰二す四分



此術い先勾のす三すを
垂て又の四す乗しうると
実とし弦のすをもとめて
此すを法として実を除が
中勾二す四分と知るし

○短弦の法と同

勾三す 又四すの
短弦と同
答曰一す分



此術い先勾の三すを垂て又四
と自乗し弦のすを求るれば
短弦と知るなり

○二十万石の対代にて
軍役を出せる古法
あい定まりなしいま
是とをく積り見い
雑兵八万の内なれば
をもに細い百石只又
のつもりなり

○長弦と同

勾三す又四す
答曰三す三分

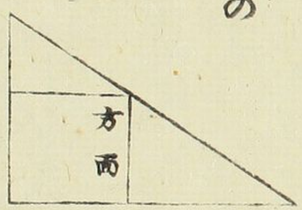
此術い又の四すを自乗し
て弦のすを以て除い長弦の
すを知るなり

○又他しに猪る四百
猪あり殺人の小性共と
又百姓ふして二十万
石をもの帰して去る
なりつ小前殺い悪人
殺と馬殺とあり七十
と帰し八百日十疋と
もつべし他しに猪の
を通よつべし

○紙場の行候又出て

○勾又中の
方面と同

勾三す
又四す



方面と同
答曰一す七分一三なり

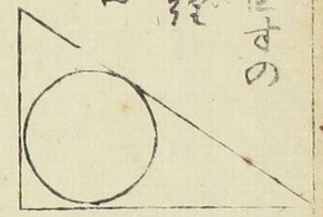
○勾股中の圓径と同

此術い先勾の三すと垂又の
四すを乗しうると実とし
勾又を和しうるを七として
法とし実を除い方面の
すを知るなり

和とい三すと四すと合せ七すと
数を云ふの地名もくるる和数し

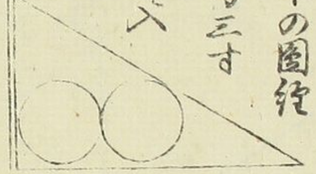
欽の人数をもとるりい
さきに西後へあゝ南
の指ると見あさ南か
わとこれ白と藏見とか
ゝ人西ゝう糸まで
のあるいろさをつゝ
て開合詳又歩三歩繁
のうへゝもあゝ〳〵
○欽味方の弱法ゝ
きのふも試きゝ
うきゝる時人又知
らせゞゝ人ゝゝ拙ゝ
人数をもるゝ弱弱
ゝちゝて又三三三
のゝゝゝ人ゝ後の
上中ゝゝゝ人長まで
人数を常の内ゝ知知

句三寸受巳すの
うちの圓径
と問　答曰
二寸なり



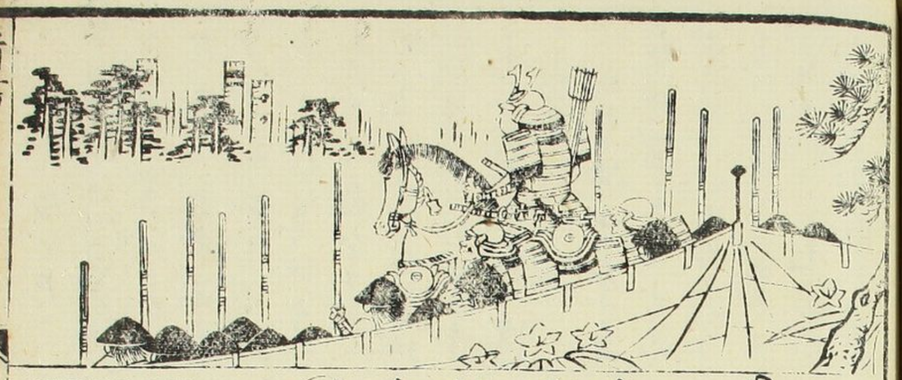
此術は先句の三寸と受の
冪を常ゝこれを倍ゝ
ゝると実ゝゝ句受径二の
すを和合ゝるゝと法ゝゝゝ
実を除ゝ八圓径のすを知ゝ

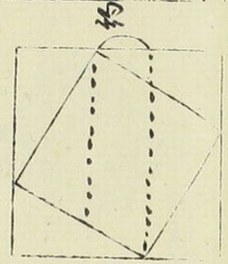
○句受の中の圓径
二寸を問　句三寸
受巳すの中入
九二のすと
問　答曰



此術は受受の巳すを歪乘術の
圓径二寸を常ゝゝゝを実とし
受の巳すふ圓径二寸を和ゝゝる
六を法ゝゝて実ゝゝれ二の
径一寸三分すゝと知ゝし

○方面中ゝ斜方面を答るの問





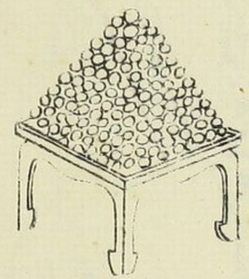
此術は先一尺二寸三分巳方を斜ゝ答ふ
角の行るゝを問
答曰　九寸八分巳りと　七寸三歩ゝり

此術は先一尺二寸三分ゝ八を常ゝ九寸八分巳りと
得ゝ又一尺二寸三分ゝ六を常ゝ七寸三分八りと
得ゝ長短和ゝて斜方面一尺七寸二分二りとゝ知るゝ
きをもるゝゝら約術なり

○寸坪七十二坪六一九二ゝ
竪横合寸法一尺七寸二分二りゝゝ
竪横何径と問
答　竪九寸八分巳りゝ
横七寸三分八りゝ

○押立人数を足く計術い先まづ七す二分二厘を掛まして八す六分一りと自乗し七十四坪一三二一分の内を坪七十二坪七一九二を減し一坪ゑ一二九七を引て残る平法ゑ周さ一す二分三りとを掛る八す六分一りに加へ九す八分四厘又八す六分一りとの内一す二分三りと減じ七す三分八りとを掛るし

○梁積の定例



置の内へかく塩だるのごくつを上ら数るを主梁とし上一番ゑ下一番ゑ上下四方上の面り一ツ数を為

積ゑ万三千九百ゑ十ゑ

計術い先上の面りの一ツを二ツゑ引半とし残を

をゑ十四へ加へゑ十四を半へゑ十四を乗し二千九百四十三ゑ残別ゑゑ十四へ一を加へゑ十ゑを残を二ゑ九百四十三へ乗し十六万千八百六十ゑ積を

法三ゑ除りゑ方三ゑ九百ゑ十ゑし

○又九く図のごとく乗ねるを図算しらふたとへば外の周り数ゑ十四あるを計法ゑ引いんと問　答曰　二百七十一なり

計術い先ゑ十四を重ねゑ六とゑ六へ六十ゑ一ゑ十ゑ又ゑ十四を乗し引ゑを十二ゑ引其上へ中ゑの矢引て一を加へ引ゑし

引ゑ残陽の遠近あるいを決ゑ水をたがいなくよく引ゑ考る数動あり数ゑ

加算の術ゑ数四を

そくふゑ云いたるかの周りを四ゑ引ゑ

一方の数ゑ一ツ残く

見ざる四人外四を

へくゑ四十八ゑ引ゑ

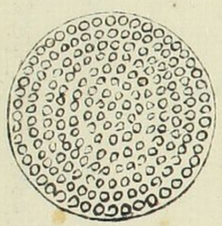
見四双倍の一方の面

ゑの自乗して十六

倍乗七四双倍の四

を自倍して十六倍

なり



○鉄炮の裏星とめくすはしらのうらおしと表の星との号六まふしてあるを問十号なるべく六すを十号をもはしらの号こ乗法目盛の号こ乗しんこ六すてるるものすを矢倉みしてよし

答曰一万五千百八十

○兵粮米麦合して曰万七千七百こあり今籠るところの軍勢ゑ砦番をるゑ米い曰人ゑ三石麦い七人ゑ八石ゆくをゑ米麦の石数并ゑ軍勢の人数を問

答米一万八千九百石
麦二万八千八百石

術ゑ曰米三石ゑ七をうけ又麦八石ゑ曰をうけ和して又十三法なり麦石をゑ七人を乗しゑ上人四人を乗し百三十三万ふ六百石なりなふを石の方ゑ十三ゑ軍勢ゑ三石を乗曰人ゑ米の石数を和ゑ軍勢ゑ八石を乗七人ゑ麦の

軍人二万ゑ千二百人

○又方第一第外の周り曰十曰あゑを入て無数を問

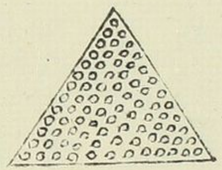
答曰一百曰十曰

術い先四十四を重て曰を添ゑ曰十八ゑ又ふを十六ゑ除るなり

○又三角楼ゆゑ図のごゑ三方の面毎ゑ数曰十曰あゑ無数を問

答曰一万ゑ千百八十

術い一面の数曰十曰を重三を添て曰十七とゑ又曰十曰を乗ゑ二を添又四を除ゑ六を以て約し



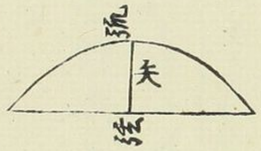
○種矢弦の法

ゑ

矢とゑ

○弦付矢

術い先弦のすを重矢のすを減ゑ二倍其余り八分を以て去ふ乗し又矢のすを二度を乗し円麦法を以て乗ゑ麦を得る



術い矢と弦とを知ふ法ゑ先矢の矢を考へんとおもへば円径を自乗して矢のすを減し余る数を平方ゑ開くゑ又円径を減し余るを二つふ

円径とは丸のすゑ

○又弦を知んとおもふ時い先円径を重矢のすを減し又矢のすを乗円径を倍して平方に開けば弦を得るなり

○又弦付矢

術い先弦のすを重矢のすを減ゑ二倍其余り八分を以て去ふ乗し又矢のすを二度を乗し円麦法を以て乗ゑ麦を得る

中の矢の歩を考るなり

円麦法いろでも七九なり

石数と知らるべし

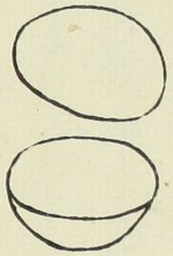
○あるふ人の云一国の大名ゆうしゃ人をあつめ殺因帰滅のみちを志しくしきいんきほつきの人よさかのわかとらへまきとゆうきんよゆうを又多況よさする人殺不是の人殺を計らざるべし国安ゆうこそ又ゆうを殺動さくたぐ是目一殺よりゆうをざ殺しく殺ゆうこそ上を照むゆうよりてい油を以て火を消ちぶぐ利大抵の是

○又法 何す 矢何すの附の弧を問

此術い先矢のすを乗し又弧法の六を以て是を乗し法巾を加へ法巾を除く平方開くし

弧矢法のさのまし

○玉矢法



此法をたとへば中うちろの九さえあるをどこうこそもひきうこうる其是ロさしを以て中の深さを積る術し図のごとし

術曰先さしわるしのすを是て是くをすを以て加へるをば又ふうさのすを以て除てもとを以て法を以て是を乗して空中のあるを以て玉径法を以て是を乗して空中のあるを加て入るの升目と知るべし

土圓方円之積法二曰とりのまし

別ありて以油義を知るべし

大を以て大義

動の名人あるべたと一

九き義の中の意を法りべし

○王経積

経一尺二寸ある玉の中の意入れ積の歩数を問

答曰八百八十五歩六厘

○王周積

一尺二寸の玉の中の経を再自乗して後玉経の法五

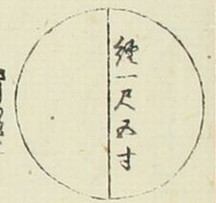
此術いさしわしのすを再自乗して後又六一五を除

一尺五寸の玉の表周の歩の積を問

答曰五百四十八歩七厘八毛

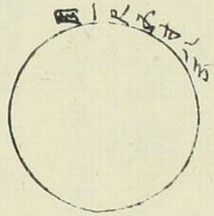
万石の米代まてよりは
積り一四あゝバ米百石と云
なり米一石ゝ百人ゝ分て
減米を以一町人も
分減ゝまゝ成せて此法
也ゝ云おもむきなり
○元来米ゝ米の長米
と米ゝに細米おき長
米ゝ云る○天元ゝゝ大極の
と米と云ゝ云ゝ云おの細
とあいのゝ云ゝ云なる
せゝく云中おなゝ
千ゝ百天極の原理ゝく
石ゝ出おの出米ゝ乃
分あり米ゝあり
右ゝ是○天元術ハ米

圓經積



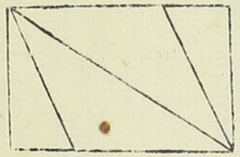
術曰經のすと自乘し
かくの如く周一尺五寸八分の歩を問
答曰十九分七厘二毛余
術曰周のすと自周して後七九二
四を乘ゝし自周ゝハ数を以ゝ
今田の表ゝ縦六歩横三歩
歩の如く斜ゝ池を穿ゝ表形の歩を
問　答曰右三歩七厘
毛勾股法ゝて法ゝ

圓周積



○天元術

表面の歩



かくのゝ如く經一尺五寸ゝ丸の面
の歩乃積ゝ云
答曰百七十七分七厘五毛

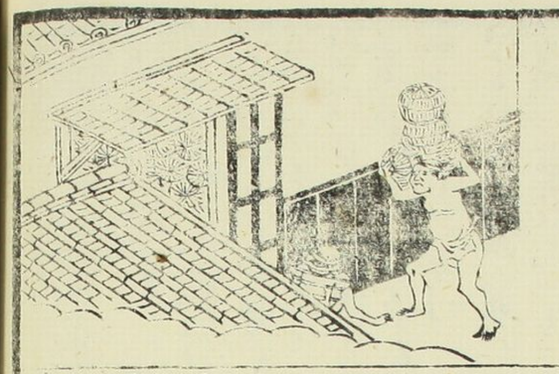
世米ゝの術ゝの是ゝも米
の見乃ゝて米ハ米ゝ
ゝ是ゝゝゝ

一	一位ゝ云
十	十位ゝ云
百	百位ゝ云
千	千位ゝ云
万	万位ゝ云
億	億位ゝ云
兆	兆位ゝ云
京	京位ゝ云
垓	垓位ゝ云
秭	秭位ゝ云
穰	穰位ゝ云
溝	溝位ゝ云
澗	澗位ゝ云
正	正位ゝ云
載	載位ゝ云
極	極位ゝ云
恒河沙	恒河沙位ゝ云
阿僧祇	阿僧祇位ゝ云
那由他	那由他位ゝ云
不可思議	不可思議位ゝ云
無量	無量位ゝ云
大数	大数位ゝ云
一	一位ゝ云
十	十位ゝ云
百	百位ゝ云
千	千位ゝ云
万	万位ゝ云
億	億位ゝ云
兆	兆位ゝ云
京	京位ゝ云
垓	垓位ゝ云
秭	秭位ゝ云
穰	穰位ゝ云
溝	溝位ゝ云
澗	澗位ゝ云
正	正位ゝ云
載	載位ゝ云
極	極位ゝ云
恒河沙	恒河沙位ゝ云
阿僧祇	阿僧祇位ゝ云
那由他	那由他位ゝ云
不可思議	不可思議位ゝ云
無量	無量位ゝ云
大数	大数位ゝ云

右ハ相減の式

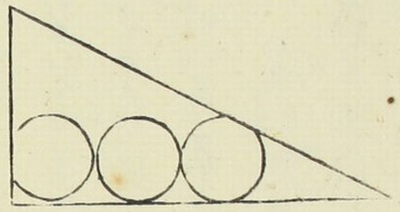
術曰元天元の一をたて表の面とし縦の六歩を以て
減し余るを勾とし是を自乘しゝる小横の三歩を加へ
て元表面の歩とし寄たし掛け表面の数を又
更ゝ右小立て寄たの数と相減して九位式ゝて除なり
○答米貨米のゝ
あるひゝ米二千六百八十八石を舂て白米とゝ
めゝる舂貨一石ゝゝ米を以米の内ゝて
る時ハ舂米貨米いゝ程ゝ問
答曰舂米二万四百六十石　貨米百二十八石
術曰元天元一を立て舂米と
舂貨米と云小舂米を加へ
又更小無米を立て寄たと相減して除式ゝて除ゝ

又勾股弦共本を十とおきて弦の数を減加へ元を求く
内の四千又百を掌
して知る所を以て
弦又弦の数を減ま
弦又弦の数を斜



○勾股中三箇の圓径

勾股中又圓のごとく圓径三ツを容る其圓径のすを問



術曰先天元一を立て小径を以て乗
のすを倍して股の数を減して径
りて法圓のすを乗し　此法のすハ三角
元を股又圓しるを小圓径として寄
たし扨さて右の小径を立て
股のすを以て乗し相消せし

○小圓　法圓　法圓　○　式

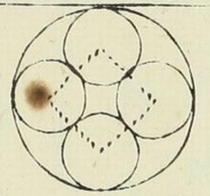
○方斜率法

○半圓径のすを問

径四ツ容るる小径のすを問

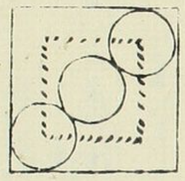
て細茅の数をもとめし
元を題極南部の算
とおく
○商人四人仲間にして
七ケ年にあおより商
せし和合銀二人分
銀ようりゆうざるふ
つき高を倫ずるに
銀の元分ようい元ハ
仲間法の考へあ
りのうて銀ふおーも
出さず二元ハ茅百
石を元入に出し三部
元ハ茅二十石を出し
四部元ハ七ケ年の
あいだの仲間の法ひ
銀を出し又郎元ハ

術曰先天元一を立て小径として方斜
率を以て乗して元を乗し圓径に二倍を加へ
て寄たし扨圓径を以て立相消せ



○小圓　大圓径　方斜率

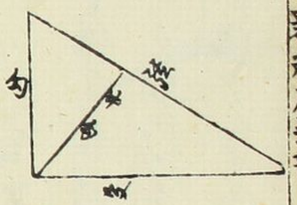
○又圓のごとく方面のすの内へ角に小圓径
三を容る



術に曰先天元一を立て小圓径として方
面のすを減し其あまりを又方斜率
を以て寄たし元と圓径のすを立て元
を倍し相消せ　○　小圓　斜法方面　斜法　○

○又圓のごとく勾股法の元一すを立
勾と中勾との元六分なる立勾を問　答曰三す

發揮ようろくの雅
用一ぢ清り者つ
こと共も元伸間よ
代紙あき有よ伸号の
徳根配分せそ拙し
伸号の代文ろい換徳
どあり刻一ぢくとある
を原理ふりあひたふ
ゆうよせば先又百石の
利足大くん七ヶ年乃
ろをくけく又二十石
ふもは利足をうけ又
七ヶ年まろあひいは
根言を格形のおく
利足引さげ去者そ
ちぐろ組合こまの雑
用入べきこれ一ぢ清



○又虚術曰先天元一を立て股と只云字を加へ
て弦とこれを自乗して寄たる又股のす
ちをちくちを自乗してこれを加へて相消を
○|　|　|
組よ曰勾中の内只云巾を減し余い只云ろう
よる二隅の又く
○術曰先天元一を立て勾と只云字を
減し中勾こん
○勾　|
低よ勾あり中勾あり

○術曰勾中をおさ内只云巾数を減し只云ろよる二隅の
又ろ一勾二隅を以ろくこれを乗し只云ろ小ろる八隅の
勾又美ろて寄たる又勾中を重只云巾を加へ
只云ろよる玄二隅と中勾二隅を以ろ寄たるを相消を
|||巾　|||又云　|||
|||　|||
|||　○
|||
負実　一寸二分　正方　口歩

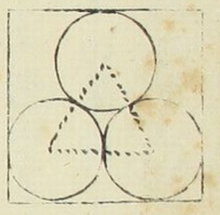
○又図のろく一尺の方面の内又図径三ッを寄る低
下の弟径ちみすうて方面二ッろうし上の図径減
伸径ぢ勾　答曰みす六分二重五毛

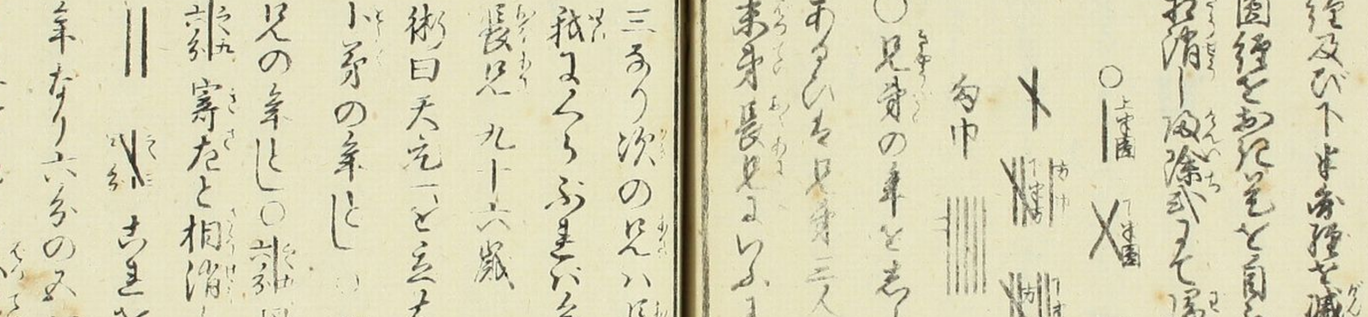
自乗してこれを勾中を加へ相消を
○|　○○　|　|

と法授のうて書分
をも利根を加へ惣
体根の内をそ引をそ
のうるかをみるを剱て
根ををべし

又商人の人高の
或減より私を借為
あるもあるもるかり
中途ふく破換しは
内て為ぬ為ぬ為るあを
あり又ま分ぬるあも
あり又かしも換ざるか
りのもゆを私も時と
換ぜをみふみ人と倫
顧ふき中うとする算
動い光減ふく積る
為ぬと目減ふ為るし

術曰天元一と云く上ま圏径として
下のま圏径と加へ自乗して法巾と
為たし又更に方面の法を重内のま分
径及び下ま分径を減し更としてこまを自乗し又下のま
圏径をあたをを自乗して勾巾と係せて為たと倍又
おを消し除式として帰り上のま分径を法てこまを倍を





○見方の寿を考ぶるを考る法
あるひを見方
未寿長をよ

三あり次のは長はよりふまは六分の又なり
我よりふまは六分多きゆ八歳　答曰
長は九十六歳　次は八十歳　小弟七十二歳
術曰天元一と云大は弟の年と○一四分の三を云く
小弟の年とし○非て為たし又六分の又を取て次
は弟の年とし○非円八歳を減して未弟の年と
寿を相消して式を除く
年なり六分の又を云く次の兄の年とし又曰分
三を云て未弟の年と云也

○暦法大意

此る余せく捨りある
限を帰して滴水穿
の限小
○授時暦とは元の守敬
こしゑの守敬
著述せし暦書
○元代の日系を測る
の足合
人新人
○日系を測る
ふるい
木を立て影を
篇初の後の日系の
影を測り
もとめ
○距星
○九歳なる娘を二十
又の男妻よむ人
絶求して
あるの年ちく
○元代の日系を学ぶ人は暦学のことをいへども其大意を
知らんべし元暦と授時暦を根元は授時暦を以て
元の世元十七年辛巳の年を始とし記す年を始
後の日系を測て術を作く其系の長を元
元の時刻を定むまつく定政元年より元
十七年より流て又百〇九年たりて戊申
根とし又百〇九年の内一篇を減じ又百〇八年
を以距星として古星を以歳実三百六十五万二
子に百分又多
中の積分を
お甲子の
を加へて通積分を

あるべき法をべしと
いふる左算者出く
けれいさつ三るる先
ちくこの年の二十五
ちくく嶋の九歳減して
十六くくを法として
男の年ちくもまいか二
あるうちるえば女方共
七年ちくく婚姻せば始
の親のちくこのおく
年ちがいくあるう
あ是遠慮相ちくの
術なり

○発丈一坪月塗のべ
のす荒ぬりは十坪
ちるの十坪中ぬりは
百十坪ちる百日の十

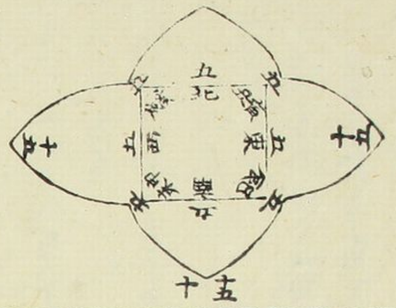
附録 雜〻

○長循先生所伽茶紙筆北二又沒算兵記買物の
術と沒りて濕りを正し彩之変数ふさ銭を出て
若数斗を記し其術は彩之深なるるべしも
減算の車を曉し歌くくんをを案して今茶術
之徹ひく書く術を識を本書の術と係せ乃ち
此男のくく掛数上位の円下位と
減し余二千八百八十九を加数とを
左右が減の数ちく劉一術を以く
除数百十九を以右円しれ減
ちる余二ふ白七十を減ずるを

坪まぐく上ぬりは百五十
坪ちる二百を
右のつり紙しちる
ぐくくをちるぐく
○四方きんちう
たの絵図のごく四面
ちて乃ちくを角を
りつく十ぬつあり計

計式の減余二ふ七百七十五九百
六十を案し二百五十九方二ふを
除して百十九を案して十倍○八千六百
余二百五十を求ふの数とを乗ふ加数二ふ八百八十九を案
し右の二百五十九方二千の内ちて引余減数二ふ七百七十を
以て乗を除ふ六百七十五を除の数とを乗ふの
数二百五十を加て九百六十円を引余廿五を風の数とする

風三十五代百八十九文　風五信の比例
松ふ二百五十代百七十九文　松ふ廿五信の比例
桃六百七十五代六百廿五文　桃七十五信の比例
物数若九百六十



○ 矩中矩の差の捷術

○ 兼書矩中の矩あるさの術あるさまざまなれども其術は遅遠なるゆへ支遊集勾股の比例大小和商乃術と汲く容易差ふ考さ術左のごとし

○ 勾中勾の差い股の小勾と見るべし股弦の差い小弦と見るべし扨小の勾弦あるべく小股を求むる財い大勾と約るゆへ天元術あるべ及べうべし

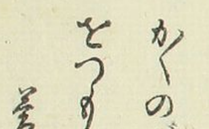
○ 捷術曰兼後の差自乗して相係るを記い小股巾と為るを平方と開き小股と消る色みべく小弦と減るを記い小の股玄の差あり兼後の日除の法あるべく兼後の差和乗して実中へ入るを加へ入るなり又実四ういの中と二ツ乗るべく角一ツ乗る一ツを引次乗ふ四ツ減べく引乗し

○ 兼書物仕四ういの多

紗綾	上十五巻	中三十二 下百七十
綸子	上六十七巻	中八十八 下八十八
縮緬	上二百三巻	中八十三 下八十六
紬子	上九十巻	中三百八 下二百
繻子	上六十五巻	中四十六 下五十
金襴	上三百九巻	中八十 下九十一
羅紗	上五十巻	中二十七 下十六

と小の股弦乃差を以て法として実を除ふと記い事なり大勾を求るなり

三率を以て明則い下の図のごとし



一率	小股弦差	二率	小勾弦差
三率	小弦差	四率	大勾 求得勾

残迫集に曰く大の股弦差と小勾と開く大の股弦差と大勾小と小の股弦の差と勾股の遍商の変化悪く比例を以て記得べし

○ 卵形種類

かくのごとく一尺二尺の卵形の物の奇をつもりていう程を勾

答曰千三百〇一ゆとなる

糧米 上百十三石 下廿六十二 三十六
黄金 五五五五五五五メ九五
小判 五五五五五五五五メ九七
銀 五五五五五五五五メ三十一
銭 五五五五五五五五五五メ四十三
板物 五五五五五五メ二十九
長板 五五五五五五五メ三十
綿 五五五五五五五五メ九五

本帳

術曰置て径の尺の一尺を減し残一尺を再自乗して七九を周しる歩を立おき又径の尺を再自乗して玉径法又百十二又を周しる数を合せる有り

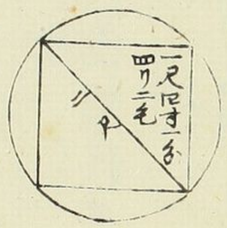
○周周の歩を求るふい

たとへい長き方の周三尺一寸六分短き方のまわり一尺四寸八分の横い　二百二十〇一六と成り

術曰長の方のすと短き方のすを減し残る所残二つを割る残る余さ周のすを自乗して余さを周し地積の〇〇〇〇浪又七九一一日を周しる立おき又短き方のすを再自乗して浪を周法の六一又を以て除る数とあらはしる積なり

中四行四歩
上四行五歩
下四行五歩
畑行五歩
下畑行五歩
中畑行四歩
上四行四歩
下四行三歩
上四行二歩

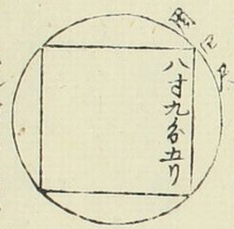
○圓形角



かくのごとく二尺径の日方日ど尺の角又他りく一尺四寸一歩四寸二毛ゑ歩を問

術曰径の二尺を方るおさたる角のすは一日一日二を以て帰る

○日ごく角の周を問



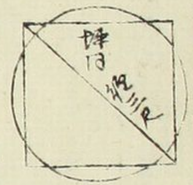
○圓積角

径日尺の圓形を角又他り八寸九分又厘ゑる積りを問

術曰周を日日六九又て帰る

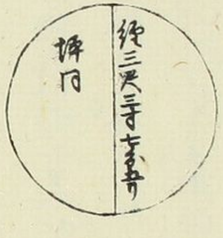
中田行反
下田行反
上畑行反
中畑行反
下畑行反
上田行畝
中田行畝
下田行畝
上田行歩

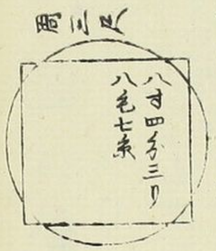
○角積圓徑



かくのごとくの圓の積を求るなり
只八八八八を乘して有るなり

○圓周積角





四角の面三尺其歩五ツ圓みて
徑三尺三寸七分四厘
此術も但八八八八を掛く故
なり但一二三四をかけくも但なり

周り三尺其歩角ヲ作りて八寸四
分三厘八毛七糸
此術周りを三ツ四ツ五ツ

○紙番とある紙帋
番と名くるなり
多くして帳一冊ヨ
対ヒあるを番と名く
を書るを帳のに
より次第ニ名付
ませくを名の上
中下限くを書のせ
たるを目録と数を
のちゝ付ある所
目録尺ヲ出対
おもく

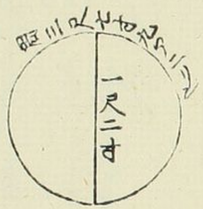
○二寸五ヨあるを五ヨ
せとらふきまいあふ
ヲもて右のごとく
対ヒあるものくを
とより型ゞしく

○角面積圓徑

角面三尺其歩周りみて三尺五
寸五分五厘
此術は三五五を乘して有るし

○徑より周を求る法

徑三尺二寸五分の時周三尺七寸九分二厘
此術徑ヨ三六を乘して有るし
又周より徑を求るは則周三尺七寸
九分二厘を右ヨリ五ツ重ヲ法三一六を立て除る時一三ノ



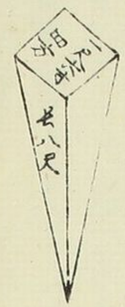
三尺引一二ノ一寸引一六ノ六分引二三ノ六寸引一二ノ三分
引二六ノ一分二厘引徑一尺二寸五分五厘有る也
右圓徑圓周の法の起りは徑一尺より二寸十歩と

紙巻番のごとく帳のにより手せずの度形へ一八二六三三三四八五又八五とり記より也法より五を合せ見るべし

○三番よりあるい巻番とゝふ巻も右のごとくそれ〳〵横帳より帳をうつしけいようちゝ切つあるべしとなるべし

改算記好之部

○楊枝形



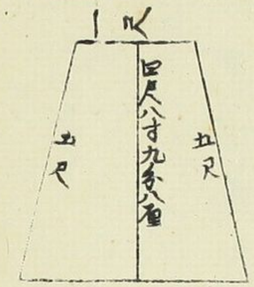
用平より除る時二寸ゝ尺ゝ周り三尺一寸六分二厘こは周りを二度掛て巻尺又寸八分一厘これは巻尺を二度掛て巻七九〇又を求む古法より平圓解の圓七十九まゝとゝいへとも此表の形ある時ハ七十九まゝ〇又ハ為るべし

○平方臺の壁を知る法

○三方又尺上一方ハ一尺ゝ壁四尺八寸九分九厘

法より曰又尺と自乗して五をかけむ又一尺を自乗して五をかけむ

ゝより累減し法二十四ゝ為るを用平ゝ壁ゝ壁をもとめ



此形を方法ともいふて

あつさ一尺六寸中二尺

巻八尺ゝ為るを頭の四方

なる而あつく尺三ゝ又

又坪切ゝ切長い

うちゝ

曰切長二尺〇三ア

七三

術曰長さの八尺を

あつさ三歩二を相乗

乗り又坪二十又坪六を

ゆくゝ用ゝ曰のつゝ

坪と三双帳ゝ十

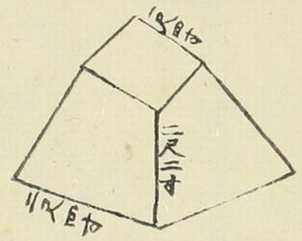
又坪ゝ為るを減ずれば

余り十坪〇六ゝ為る

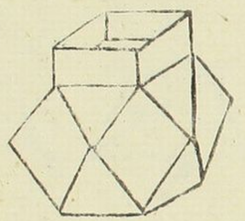
なりゝ為ゝ六十四歩

を相乗ゝ六百七十八

四方臺の法



切籠の法



○方錐形

かくのごとく下二尺四方上一尺四方壁一尺二寸

此積二千八百ゝ

法曰下二尺を倍し上の一尺を加へ下を用し又上を倍し下に加へ上を用し両尺あらはゝ壁を用し六度掛ゝ積を知る

此中の積二千三百又十七

法曰一尺を再自用し後二三

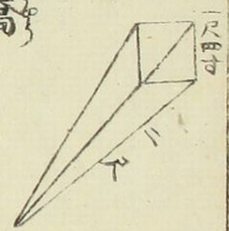
又七ゝ為を

坪にしてある坪を実とし三歩二を除り
相乗とあるとき二百十二坪
平方にしたを用ひ
商る丈九寸六ア二
七とかける長八尺の内
を減じあまるところ
切長二尺〇三分七二を
とるなり

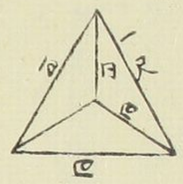
○盥胴の法

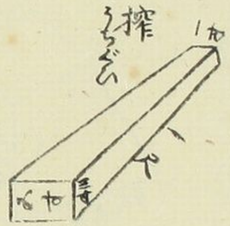
底長天井たさ二寸
ふく厚さ一尺一寸の
桶子径一間径一てを
今らきを径にする内
をサ一寸丈半の木

蕎麦形

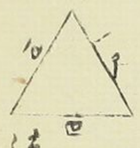


轎形





三角



如厚さの三寸を乗し又壁を乗し後六歩帰る

径積曰十三三三

法曰一尺を自乗し後四三三三を乗し

径中の積六百六十六六六なり

法曰一尺曰方を自乗し又壁を乗
し後三歩帰る

いづれも一尺丈なる径積百十七三〇丈

法曰一尺を再乗して後八丈二丈
を減じて帰る

厚三寸幅丈寸壁一尺歯一寸

径積曰十丈

法曰幅の丈寸を掛し歯の一寸を
乗し又壁を乗し後六歩帰る

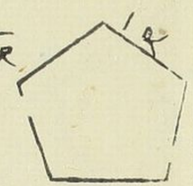
径積曰十三三三

を減じ厚さ八寸二丈
右の径の丈寸を
ゆく百七十丈の径
を加へ径積の
厚さ丈いくばくぞ
答曰十八坪

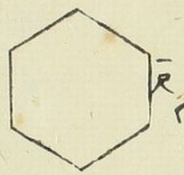
細六尺丈寸一間し

術曰壁厚さ八寸二分
を乗し内へ厚さ寸
丈寸を加へ乗し
九六七分寸を加へ乗し
を自乗して九寸丈
分〇六二丈を減ふ
径積百七十丈を乗
し一百六千六百
三十丈分九三七丈七

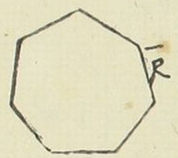
一角



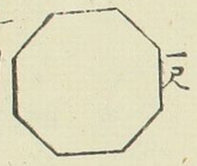
六角



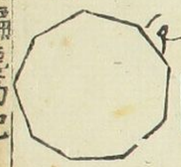
七角



八角



九角



一尺四方の丈角 径積百七十三し

法曰一尺を自乗して後丈七八を乗し

一尺四方の六角 径積二百丈十九七四し

法曰一尺を自乗して後三八丈を乗し

一尺四方の七角 径積三百六十三六三し

法曰一尺を自乗して後二七丈を乗し

一尺四方の八角 径積百八十二八丈し

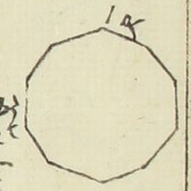
法曰一尺を自乗して後曰八二八丈を乗し

一尺四方の九角 径積六百〇九七丈し

法曰一尺を自乗して一六曰を乗し

なるを実とし別ひろさ一尺一寸の内をサ二寸を加へして一尺三寸を自乗し百六十九歩となる此内四十五歩六二五を減じ残る七十三歩九分三七五を法として実を除き商ふ二十五と知る為り此内へ縦横百七十五を加へ実を除べ日百となる

十角



一尺四の十角は横七百七十五二し

法曰一尺を自乗して除一二九を帰

壁一尺横五寸縦横は横日十七五し

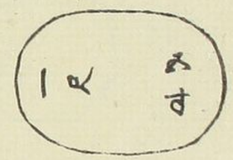
法曰壁の内より五寸減じ残る五寸

横の五寸を乗じ之を考たし又

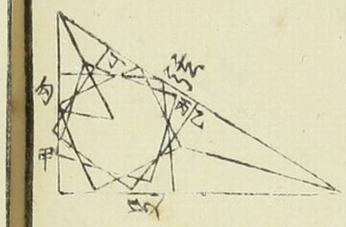
五寸を自乗してこれを七九を乗

じ別歩を加へて横を切るし

擴



○勾股内容の方面

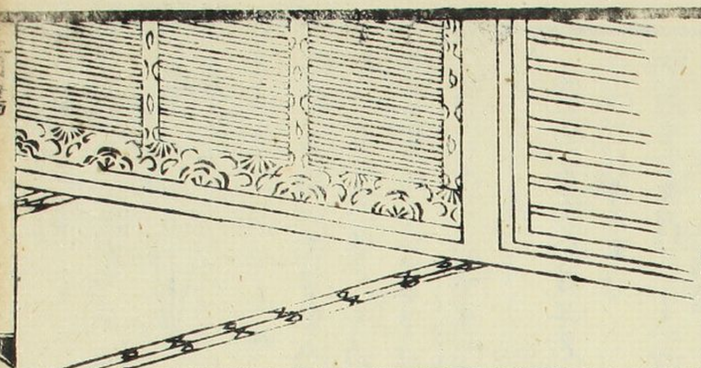


図のごとく勾股の内より日壁の方面を実とし勾三寸股日寸法五寸壁を方面界の日和を求むる

其術其数を問

除き商五十八歩を得る為り

但し三二二五の定法を為る為一間六尺五寸を自乗し二寸を割て考る



術曰図のごとく日壁の考へ日壁の考へ甲乙丙丁をもつて

甲ノ方界　日十九分寸の百日十日

乙ハ　千三百六十九分寸の三千六百

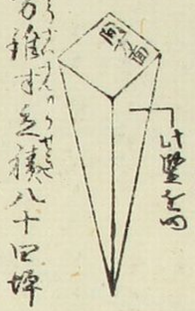
丙ハ　九分寸の二十五

丁ハ　九分寸の二十

右日分母連乗して和合五百日十三万三千五百六十一を法として乗じ一係せる五千七百日十二万日分二百九一を実として法を以て実を除る法を減ずるものハ八十一を以て実を約して無数を約るし

答曰方面界日和十寸六万七分八十一分寸の三万八千百九一方為

○方錐立積



術曰立積八十四坪二しるすをい面すを八分の十二をかくそめすの壁のすい長さをの一すの五厘しい方面壁いくぐらくとる

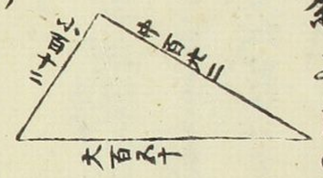
答曰方面五す三分
壁九す

術曰先立積八十四坪二七をかさ定法の二を乘ればを百六十八坪五曰とるを実とし一分の長一すのをり除まば七分とかるを法とし実の坪を乘じ立方すをまを開けば高さ方面五す三分をとる

但し定法の二を和るは此八分を錐法のをを自乘して二十四とるをまを十二をかく除く右定法の二をとるなり

まと定法一五をたるあい姫十二を八をとるくくまい考ふなり

○斜三角の積を求む三段連乘法 見曆書



此図のごとく　大斜百五十
中斜百廿二　小斜百十二

此積の術いまをい若中角を
ゆく法の積を求むるし今文に

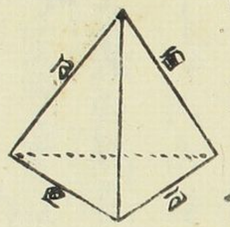
中角をかくてゞ其積をもとむる術を問

答曰積六万七百二十

此術を曰大斜中斜係せく其内をそ小斜を
減し其残りを二つをとりて先甲と名付けくまと
大斜小斜係せくの内をく中斜を減しその
残りを二つをとりてとと名つけ又中斜小斜を
係せくを内大斜を減し二つにをく丙と名付

右甲乙丙の三つを連乘して三斜の和をかけて末
数ををを乘じて四十五万五百八十四ををを
平方を開き三斜の積をゆるし

○蕎麦形の事 術曰各面積を



面各をを

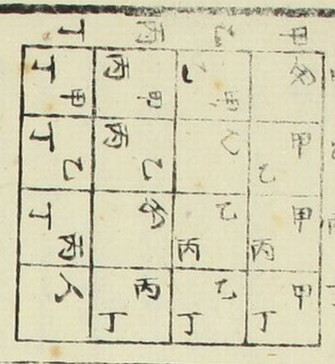
答曰積百十七すあまり五厘

術曰天元一ををく積をを〇一
二段の積界をかをを自乘して其数七十
ををを方面をおくをを五段をを自乘して其数七十
ををを自乘し七十二をを乘じをを考たとを
りふ相消ををを開方式をゆる面〇四平方ふ
をを除まば七分とかるを法とし実の坪を乘じ立方すをまを開けば高さ方面五す三分をとる

但し定法の二を和るは八分を錐法のをを自乘して二十四とるをまを十二をかく除く右定法の二をとるなり

まと定法一五をたるあい姫十二を八をとるくくまい考ふなり

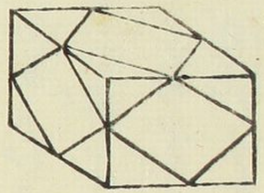
○勾股法の整数を求める法 整数とは四角なるものをあらわしていう数をいふ



右の図のごとく甲と乙とを役け甲乙相あいせしく法とを相減じて勾とする

○甲乙相乗する二隅を役しこと丙相あいせしく相減じて勾とする

○切籠の本術 籠を方形模といふ



方面とする一尺の積を問

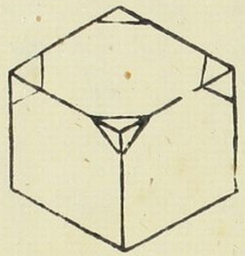
答曰二千三百六十七寸〇二一法

術曰先一尺を自乗して籠を法とすべし二百寸をなる〇再自乗して立方面の積を求めて百寸を実として平方に籠を開き実の積をなる〇は界術自面界を倍して二百寸となる〇籠を平方に開けば一尺曰寸七分曰厘二毛をなるものを立方積とし六ヶのものをもちて切籠の積をなる

○方形角藏

けの解に次丁にあり 紙号をもて給安ゆえなり

○同八角の積を求める本術



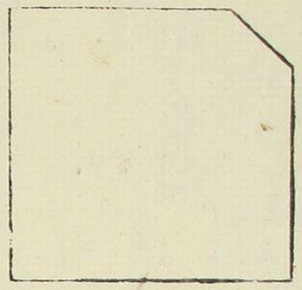
図のごとく八角の切籠は毛尺寸の面の積を問

答曰積一万三千五百九十九寸法

術曰平法を以て立方面の答を求めるべし則ちこれに積を乗ずるなり又天元一を立て積を乗ずるの別法 廛一を立て答を乗ずるの法 撰ってく術を記せば則ち式をなるものごとく

○廛一を立てて答とす○一 再自乗して積六隅とすること是を四倍して答一面の一尺をもて答を倍して一面の一尺をもて自乗して立方面とする 面 ‖ 再

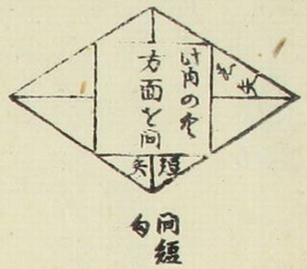
せしく相減じて勾とする丙相乗二隅を役しこと丙丁相乗せしく乗とする相減じて勾とする丙丁を乗二隅と役しこと戊己庚辛隅のごとく面を掌加減を乗しこと古法をもちいるもの古すの日法をもちいて勾股の整数を求めるものをもちいるべし



右図のごとく巳方の一隅を切ふとそこのす平横三百十九歩又分は三方全ごと面すハ和しく巳ハ八すなわちこの角の方面をひいてあるをと図ふ

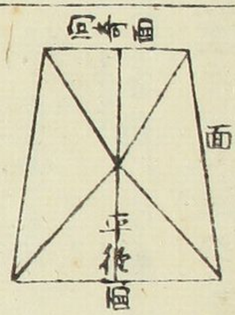
減じ引まりを三段の横と〻横三百九歩を三倍し〻るを高たと相消し〻式をなし

横 面中 面中 面中



図のごとく平菱の円
平円方あり別のの方
まりのすい平積十七
歩六分六厘長矢分
二寸二分○又方別又
短矢のすい円方の
面すい長さ二寸二
分六厘の方面をいく
ばくか

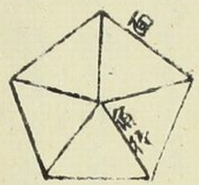
答曰方面巳二分



毛を除て面界を減し其あまりを実とし面を
法とし実法のごとく求る面界
答て曰術に依て寿面三寸六
分二厘整し

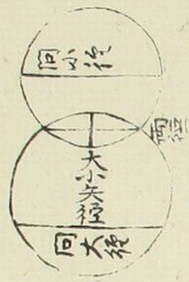
○角術捷径異式

術に曰平径と面と相乗して毛
を除し角径界を平径界求面
界和



○三角円角八角学の人もあるべし八角七角八角
等の術を略し捷径を略術
を以て一二を有を
術に曰寿面を以て先

術曰先径十七歩の六
分六厘をおきあまを
乗実とし別又長二
寸二分を乗法とし
別又長矢二寸二歩○
又を正縦法とし別
又天元一を正廉とし
乗あまを加て若
平方又同さ高又方
面巳寸二分を以て
○図方輪違



図のごとく大小平径

角径を法とし周の数又乗しるを角の
数をんあまを除まば又角一面の背を以るあり
依て法を求め即角面しそれより虚一を立て実
の数と撰べく法○一あまを自乗しく
汲て脊を減しあまりを六段の矢界とし資中六除
○日毛又おいて又虚一を立て矢とし汲て二段
角径を減しあまりに矢を乗しあまを日度
して法界とする○
相消して式をなる者
加上級如下式

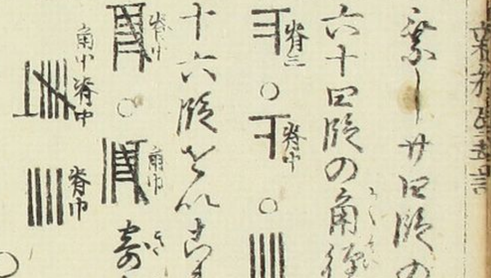
角径
角径
角径

の弦ちくに五弦を大小径ず和して二尺一寸六分大小矢ず和して三寸六分をいくべくも同

大図径一尺二寸六分
大図矢一寸六分
小図径七寸六尺
小図矢二寸

術曰先法の八寸とあるさを自乗して六十四歩とあるを二ツ合して三十二歩をなる別に矢和の三寸六分を自乗して十二歩九六とあるを倍をまハサ又歩九二となるを右の廿二歩と

乗して廿四歩の矢界を加へしを自乗して六十四歩の角径界と図廿六歩の矢界とするを表たと



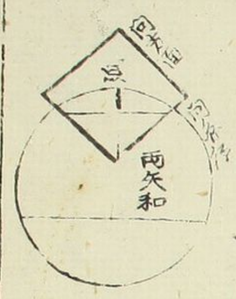
角径界六十四歩をあらし矢界三十六歩をかんさを乗し

表たとおなしして式を設るなり

○ある六角形あり勾三寸股四寸弦五寸とあるを角形を求んと欲を角数表面積の勾股弦の面と角径とを法

表曰角有表 表面積ず三分七厘六毫整

術曰勾股弦を法とあるさを乗し三面

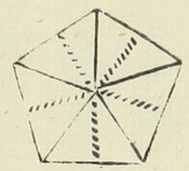


係七寸六分十七歩の九二とあるを和の二尺一寸六分を矢和の三寸六分を自乗して十六分を相乗して七十七歩七六とあるを倍せるを十七分九二円とあるを減してあるを一尺〇八分とあるを法として実を乗ずれば表面積ず太図

○図大図小平方

の斜九寸六分を掛るなりさを自乗して四面界を減し其残りを面をんさを掛るなり三面の斜九寸一分六厘を掛るなりを自乗して其内面界を減しあまりを二面の斜を掛てさを除まべ表す三分七厘六毫となし

表面すなわちあるなりて四角表とは

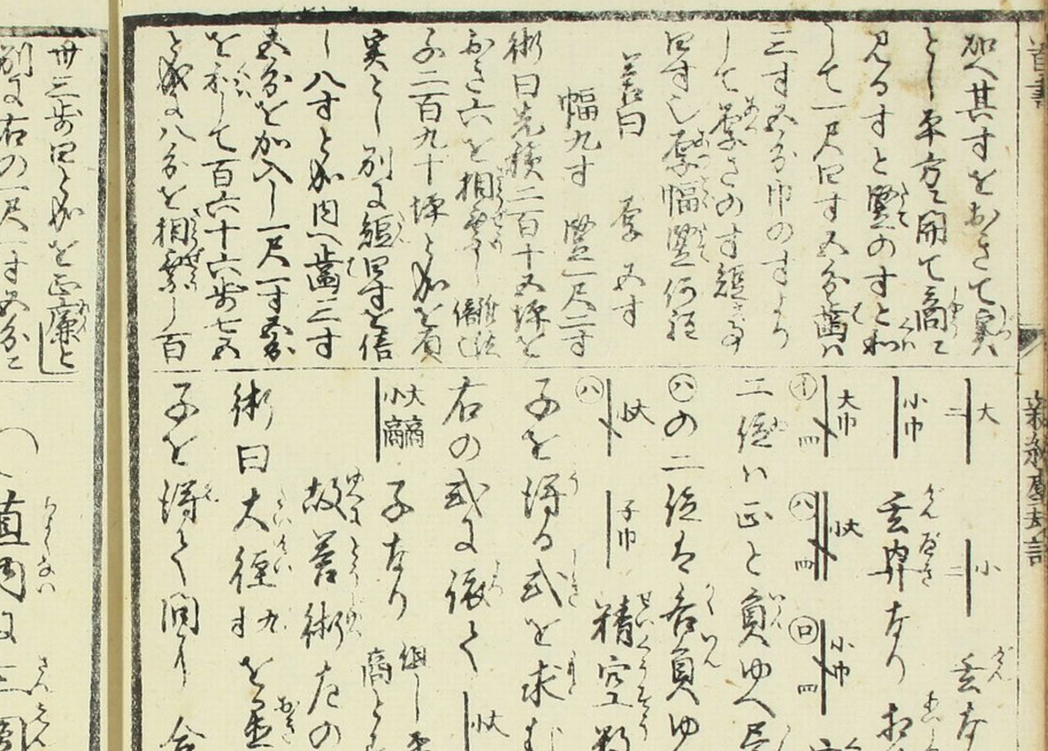


図のごとし

○又角十二等面の稜を求る捷径

面一尺の五稜を求む　七千六百五十九寸強

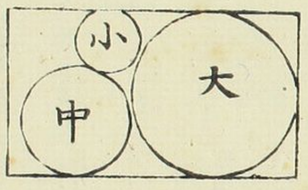
加へ其すをあさて寸八
と〜平方を開て高と
見るすと竪のすとわ
して一尺に寸八分薗八
三すあ分中のすとう
して巻さのすを縦すあ
に寸し巻幅竪に行縦
巻白　巻あす
幅九す　竪二尺二寸
術曰先縦二百十八坪と
あさ六を相乗し偏法
ふ二百九十坪とあを負
実と〜別に縦に寸を倍
し八すとあ内へ薗三す
あ分とかへ一尺一寸巻
をかして百六十六歩七六
と八分を相乗し百



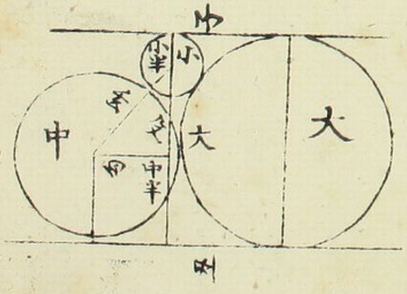
廿三歩に寸を正廉と
別に右の一尺一寸八分と
実法八分を相乗し九
寸二分とあを負廉と
別に和の一尺一寸八分を
法一二八を相乗し一尺八
寸八分六とあを下正隅
と別に天元法一二八を下
下負隅に立て元を若四
実廉法に元を開い商と
二寸八分を得るし元を自
乗して六寸二分とある
八分を相乗して巻さ
あすと知らし
但一定法八分を為るい始の
のうまは天一を加へて玄
とあを法し天元一を為
て知らし又定法天元を為る
あい右八分を倍して為へし

○直円に三円を容る術

○直の内へ景のごく正象を容るあり大径
十二す中円径九すある時い小円の径何程
若白小円径曰す



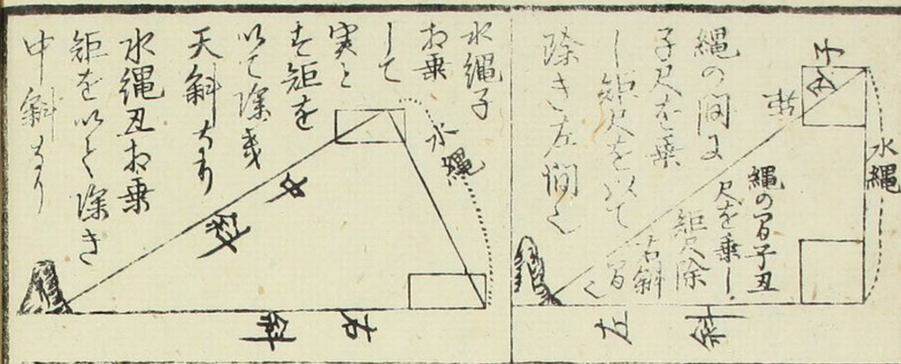
図解

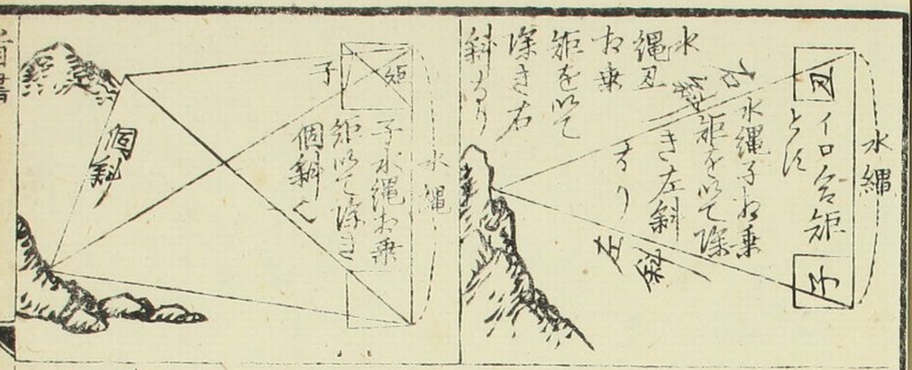


此景の和解い次に記を

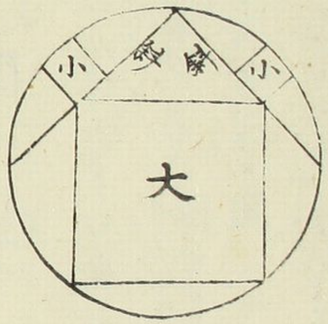
計程 町間術

此法を行ふものなぞ難しいんとるまい元素法術あり〻〻を測る事の元素〻〻〻

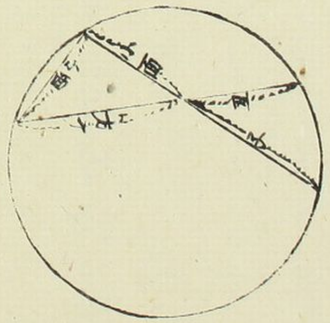




一算を命して大面とし比例を以て小面とし小方斜なり是を以て小面を方面とし以て小方の斜なり右縄小方の斜い大方面と平行し一直線をなすことを見て比例を以て



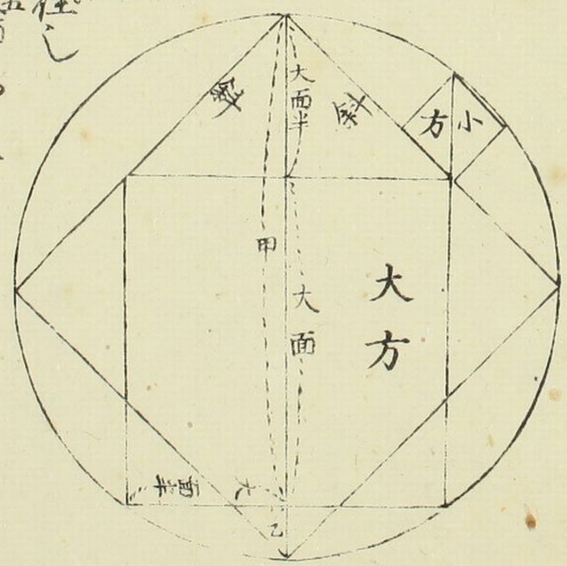
比例式			
	小方斜		小面
	子		丑

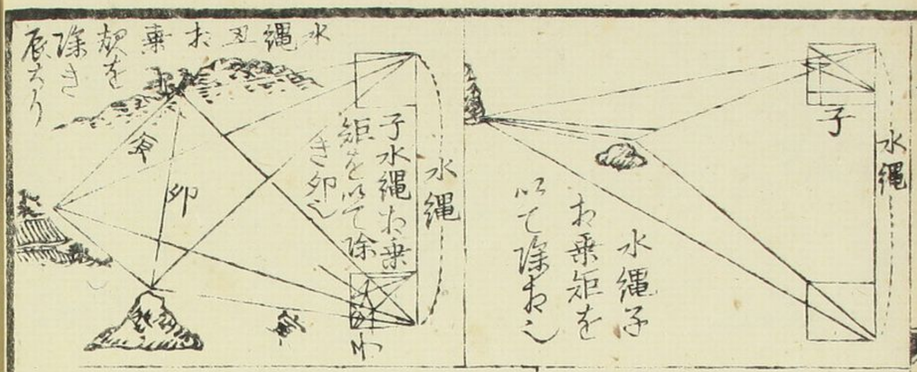


図斜とをもつて

比例式			
	大面	甲	
	乙	二	大面

大面甲なり
比例を以て
大面甲乙なり
甲を斜大面乙し
甲を加へ大面三を和径
通分内子して大面三を和径
なり故に高を外大面三を空殺大
方面を以て或を求む外中法を以て

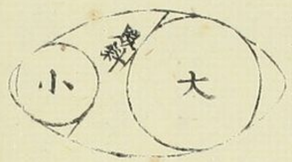


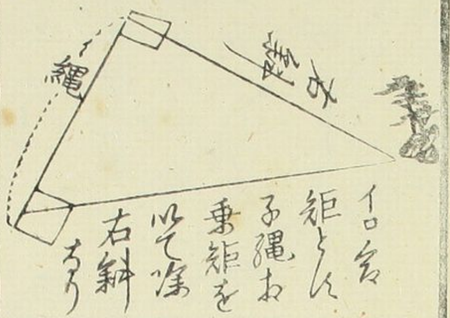


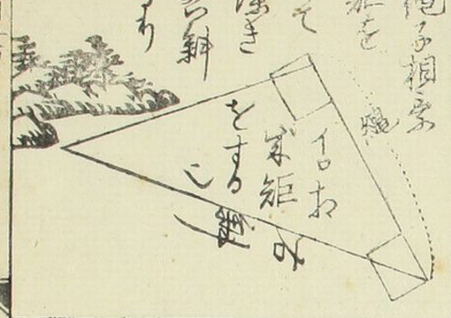
実を刻 外三 内九 大方面なり是を変じて隋
大方面なり是を変じて隋
たのごとく術曰和径を五六分をとりけ大方面を作く
同り合七

○側圏の内へ大小二象を容る事

○是のごとく側圏の内へ斜を落とく大小の二
圏 長径十三寸 小径三寸 長径十三寸短径五寸大径四寸
是円異斜なり







解に曰圏壔の内へ斜を隔く球二個を容く
元を斜に截とれい截面頭景の為をなし

第一図

解り

一図

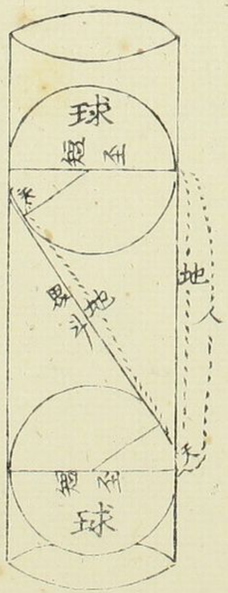
解く

天地和

異斜し又

天地和

人なり有る異斜と人と等き
しを知る按ずるに人い異斜直立の極なり
直立の極と異斜上下球円に切しく圏壔の有ふ上下
内をめぐり斜に系壔のうと平行なるとなり
球円り切しく圏壔と異斜と
人と等しきとれい其異斜と

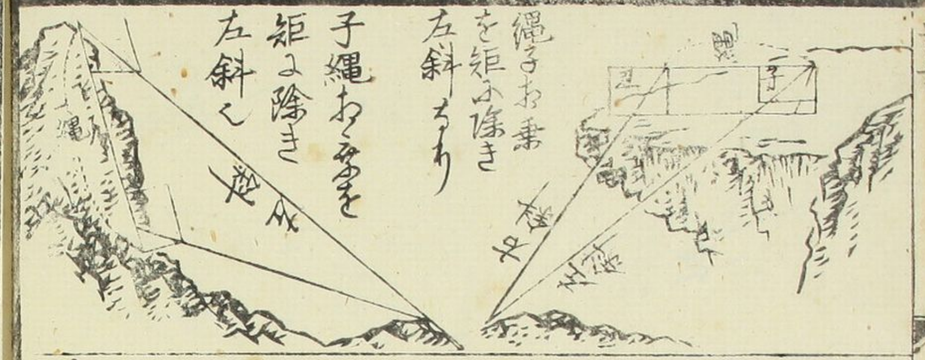


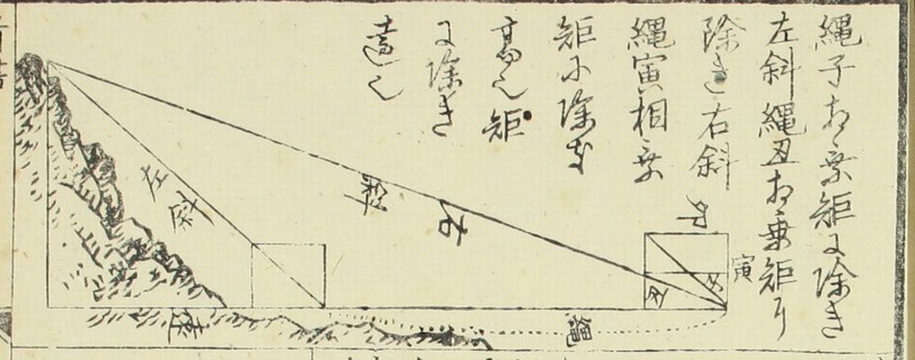
第二図

解に曰

四分一異斜を斜に截る

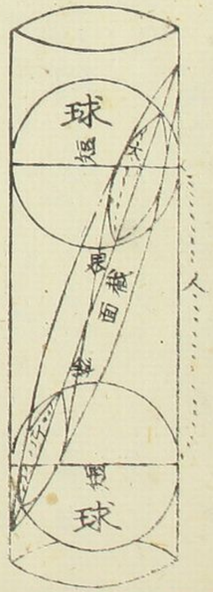
異斜い上下



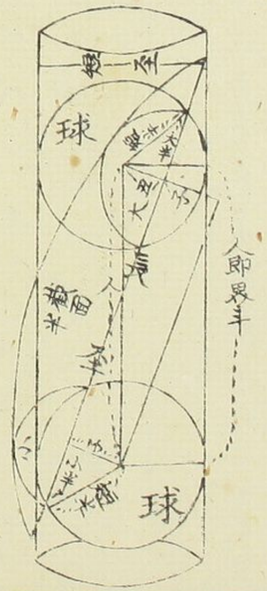


球の截　二図解

周ふ切る
乃上下球周を切るを参考と共に
其截



周即ち大小の周ふ有ふ第三図解ふ



術ふ人を求め其截　三図解

斜ふ乗

短巾四　小巾四

ふ内ち是を指る　短巾四　ふ内ち平方を開き

短巾　ふ内ち是ふ乗しふ長巾　短巾　ふ内ち比例ふ

術く人ち丑和を解　長巾　短巾　人ち

即ち長斜ち是を術く

答術を施ちたのめ

術曰小径を乗を矩径を

則是を乗人合を一個の内

ち引て平方ふ開きたる

大径を乗を矩径を乗を合ふく一個の内

ち引て平方ふ開きたを加（長径を乗を

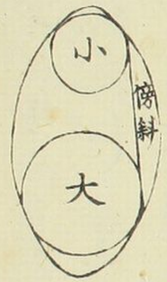
半しく長斜を引く開ふ合を

比例式

短	長
子丑和	人

小巾　短巾　左長
大巾　短巾　右長

○側図の内（傍斜を設て大小二径を寄る法



径のごく側径の内（傍斜を設て大小二径を寄る

▲三乗法の事

実を実級一乗と
三乗実と布い実
級と廉と広実徳を
一十百とおのく三
徳を隅実級徳と
三乗級を逆逆して
商を立
商と三乗級和乗と
隅級加へ
商と隅級和乗して
廉級加へ
商と廉級和乗して
法級加へ
商と法級和乗して
実級加へ

長径十三寸短径五寸大径四寸小径三寸傍
斜行径とも

答曰傍斜九寸一分

此頭を求際の径と全くあるべ帯際解中
最斜上下球周り切しく囲壔の内を巡ぐり
廻りく囲壔の高り親しむとき傍斜
とは解義あるべ精術あるのやし有り
略しく是を流ぞその径かくのごとく此
るる事なるべし

○布の径緯の長を測る奉術

○あるいは布一反濶さ一尺長さ二丈八尺若是後尺

径七百二十緯緯一尺毎に百五十線は径緯合く
線の数長さと問

答曰三里五丁四十三間二尺五寸

術に曰先長さの二丈八尺をおき径の是後尺の一
尺二寸と合尺の長さをるをせば径の二丈八尺が
三丈三尺六寸とかるまき毎の線五十を相乗ふ
して緯の線一百六十八百しく濶さ一尺をおき
は一尺の全さと是後尺をるをせば一尺二寸也
は緯の線一万六千八百を以く相乗して緯の線
の長さ二千〇十六尺を以るし又径の合尺の長さ三
丈三尺六寸をおき径緯七百廿を以く相乗して
径線の長さ二万四百十九丈を以るしそ又緯

商と三乗級おかすと
隅級わかへ
商と隅級おかして
磨級ふかへ
商と磨級おかして
法級ふかへ
商と三乗級おかすと
隅級ふかへ
商と隅級相かして
磨級ふかへ
商と三乗級おかすと
隅級ふかへ
是ゑて商一位ずつ減
なり位ごとに法級々
一位磨級い二位隅級
ハ三位三乗ハ四位又
商と云なし

縁の長さ二千〇十六丈を加へ〇若ゑ長さ二
万四百三十四丈二寸を寄〇〇〇を来間
の里尺の法ゑ四百〇四丈を以て毛を除まゝ三
里とゆるし其あまり二百廿三丈二尺ゑ寸を
町尺の法三十九丈をもてゝゑ町をゆるなり
其あまり廿八丈二尺を間法六尺ゑすを以て除
ハ四十三間をゆるし此あまり二尺ゑすを故令
三里ゑ丁四十三間二尺ゑすと云なし

〇縁絡買今世本術

〇或い千九百七十両にて縁百ゑ十ゑ疋絡四百
ゑ十疋を買しゑ其價一疋ゑ何程と云

▲前段の事
たとへハ貞享元年甲
子より文化二年乙丑と
迄九百年なゝ年なり
殺数ハいくら

答曰百二十二年

術曰支殺二十ゑ千
殺三十六去法六十
と求めて甲子より乙丑
迄すて二年とあき
三十六と乗ずるに丑
ゑ年すなわち二年と乗
二十ゑを乗相係して
去法六十を以加減し
百年殺後をゆる止
なるい是年殺百二
十二年と知るし

答曰縁一疋ハ絡一疋三ゑなし

術曰先縁絡の殺を四方ゑ絡術を以てゑッ
ふるして絡と九十疋とし縁を三十一疋とし毛
盈一の術ふるして殺六十一を以て三百九十ハ
又含るも絡術ゑくゑッふるして三百九十ハ
ゑ〇端殺六十一を以て毛を乗し二万ハ
千〇三十四ゑを以て絡の九十疋を以減
減して四あまるを以て縁の價ハ四ゑと知るなり
さて百ゑ十疋を以て毛を乗し六百二十ゑを
るし以て含るを減ずまゝゑ三百ゑ十ゑ絡
と絡の四百ゑ十疋をもつて毛を除まゝ三と
以て絡の價三ゑと知るし

首書之跋

東隈の君那と求て
近代義士の達人と
[illegible]の編集
[illegible]書籍[illegible]
[illegible]
[illegible]

今の志ある人物理をいくわてハ番も
ハなはだ敷く異なるものを学ぶもれ
よろしく物価相違のときは学ぶのみ
を煙ふれば塵劫乃奥をきわめ
たまふべし

安政二十年四月

吉田光

明治十八年四月二十日出版ニ付御願
同　年五月十五日版権免許　明治廿一年六月
刊成発售

原著者　故人　吉田光由
増補訂正者　故人　吉田長穀
現今相續者　京都府平民　吉田美津
出版者　大阪府平民　岡本仙助
東京北大郎町四丁目壹番屋敷
上京區第十四番五番地二番戸